
ブレイブ・ハート～戦士よ、誇り高くあれ～

煌はじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイブ・ハート〜戦士よ、誇り高くあれ〜

【Nコード】

N3353Q

【作者名】

煌はじめ

【あらすじ】

『大事なものは長く生きる事じゃない。短い人生で、どれだけ多くの証を遺せるかだ』

バダップスリード。サ

ツカーを否定し、円堂守を悪と教えられてきた少年。歴史を変えるべく発動されたプロジェクト。オペレーション・サンダーブレイクに、失敗したオーガ小隊。ヒビキ派の軍部は、オーガを率いたバダップに、重い処分を課す事を決定する。

何が正義か。何が悪か。何を得て何を失うのか。出撃まで、ラス

ト三日。バダップは考え、選ぶ。全ては大切な者達の未来の為に。

一方、八十年後の円堂の世界では、奇妙な事が起こり始める。きっかけは未来からの一本の電話だった。

決意するバダップ。

苦悩するエスカバ。

そして、円堂に憎悪を向けるミストレ。

映画『イナズマイレブン〜最強軍団オーガ襲来〜』。これはある世界で起きた出来事の、悲しくも切ない一つの結末。

はじめに

この作品は、イナズマイレブンの二次創作小説になります。因みに私が連載中の作品『この背中に、白い翼は無いとしても』とは別世界の物語なので、繋がっていません。勿論公式とは一切関係がない非公式作品です。また、以下の点が含まれます。

映画&小説版『イナズマイレブン〜最強軍団オーガ襲来〜』のE D後の物語です。当然ネタバレを含みます。

映画の世界観で書いていますが、サッカーというよりもはや軍事モノに近いかもしれません。

死ネタ要素強し。残酷な拷問描写、暴力描写あり。また間接的に性的暴力や虐待を示唆する表現がある為、R15指定。あくまで映画の世界観の為、アニメ&ゲーム&白翼シリーズとは矛盾する点が多々あります（FFの決勝戦が雷門VS王牙である事など）

また映画の世界観でありながら、あえて映画の設定とも変えている部分があります。

捏造も万歳。（オーガ小隊が前線経験あり、バダップの階級が中尉、など）

あるキャラが相当悲惨な目に遭います。

ハッピーエンドかバッドエンドかは人の解釈次第になりそうです。全体的に暗いですが、序盤はコメディくさいかも。

脇役のオリキャラがちよこつと登場。（ミストレ親衛隊の女の子やちよこつと出るテロリスト連中など）

一応一般向けとして執筆しておりますが、一部女性向けに見える表現があるかもしれません。今回は友情ばかりで恋愛描写はほぼ皆

無になります。

また基本的にダーク。ものすごくダーク。のくせに、オーガが時々コメディちつく。メインはオーガで、あとは雷門メンバーが一部登場する事になります。

それでも大丈夫な方のみ、どうぞ。話数のわりに文字数が多いですが、お付き合いいただければ幸いです。

【序：ラスト・エンジェル】

- 西暦2090年。

誰かが歌う声がする。声変わりを済ませた少年の、しかし大人になりきれない涼やかな音色。耳に心地良い、そう思うのは癪だったが仕方ない。

ミストレはうつすらと瞼を開け、まどろみかけていた意識を覚醒させる。歌声の主が誰かなど、目を開ける前から分かっている。ただ少し、意外だっただけで。

「…バダップ」

ベッドに寝ころんだまま、ミストレはその名を呼んだ。

「君…歌も上手いんだな。初めて聞いた」

こちらに背を向け、隣のベッドに腰掛けていたバダップが振り向く。窓から差し込む朝日が、彼の銀髪をキラキラと飾り立てていた。ああ、不覚にも見惚れてしまいそうである。まったく、頭も能力も容姿に至るまで嫌みなほど欠点のない奴だ。

だが、その性格は難だらけだとミストレは知っていた。無愛想で無口、表情すらも凍りついている。それは見たままでも十二分に見取れることだが――ついでにかなりの天然気質である事が、近くにいるとよく分かるのだ。頭は良いのにあちこち非常識。おかげで自分やサンダユウがいつも苦勞をかけられている。

トモダチの数なら負けないんだぜ、といつも心の中で呟くのだ。

自分は女が途切れた事もないし、独りで時間を潰す必要がまず生じない。唯一ミストレがバダップに勝ると自負する点だった。最も、取り巻き達が本当の意味で“トモダチ”であるかを問われると些か微妙ではあつたけれど。

「起こしたか？」

バダップが歌を止める。

「悪いな。そろそろ狸寝入りだと思っていた」

「……まあそりゃそうでございますけども」

そろそろ起きて当たり前の時間だろう、と暗に告げる言葉。多分、イヤミのつもりすらない。最初は誤解していちいち腹を立てていたものだが。単に言葉が足りない、天然過ぎて空気が読めないのではどうしようもない。

頭の出来は恐ろしく良くせに。バダップはあまりに言葉を持たない少年だった。彼と頻繁に会話するようになるまではまったく気づけなかった事だ。

時刻は、午前七時。自分達の今までの生活習慣を考えれば、少々遅い時間なのは間違いない。夜着は着ていない。風呂には入ったものの、昨夜は制服という名の軍服で眠ったので、着替える必要は無い。

顔を洗って、歯を磨いて。ポットの湯はバダップが沸かしているだろうから後は……そこまで考えて、ミストレは自嘲する。こんな日でも考える事はいつもと同じだった。今までと同じ生活が出来る保証など、何処にもないというのに。

ミストレとバダップ……あともう一人、エスカバの三人は今、この部屋に軟禁状態だった。理由は単純明快、任務に失敗したからである。いや、事実としては単純なのだが……この状況を形作った背景は案外複雑かもしれない。

だってそうだろう。オペレーション・サンダーブレイク……久々

の大きな仕事だった。それをポカしたオーガ小隊の隊長各三人が、
独房にも入れられず自室に軟禁されるだけなんて。

「おかしな事が多すぎて。正直、ぐっすりなんて寝てる場合じゃないよな」

ミストレの言葉を、バダップも無言で肯定する。自分達の現状の理由を問えば、バウゼンからは“処分は追って連絡する”とだけ返ってきた。ヒビキの返答も似たようなもの。つまり、上の決定を待て――だ。

納得していない、訳じゃない。しかしそれでも腑に落ちないのである。処分を決めておく間から懲罰房に入れておいてもおかしくないだろうに。とりあえずとはいえ自室で謹慎だなんてあまりに甘すぎる。

「どうなるんだろうな、俺達は」

窓の外を見つめて、バダップが言う。

「軽くて独房。もしくは降格。オーガの解散や…メンバー見直しも高い確率で有り得るだろうな。最悪の場合…」

そこで彼は言葉を切った。しかしミストレがその先を察するには充分で――つい舌打ちしたくなる。バダップに、ではない。今の状況を理不尽だと感じる自分、理不尽かもしれないと気付いてしまった自分を呪いたかった。

最悪の場合。自分達は、“処刑”される。

無論表立ってされる事ではない。バレたら世論が許さないだろう――実質政権を握る軍部の立場も危うくなる。穏健派や保守派が騒ぎ出すのも間違いない。

しかし。実際はあるのだ。 - そんな事実も。軍に所属し、此処まで上り詰めた自分達は知っている。この場所がどれだけ大人達の陰謀で汚れているかを。

それでも構わないと思っていたのだ。 - 昨日までは。

「バダップ」

ずっと尋ねてみたかった事だった。だからミストレは口にした。

「後悔してる？ ミッションを引き受けた事… 円堂守と会った事」

ぎしり、とベッドのスプリングが鳴った。そのあとに満ちるのは静かな間。バダップが考え込んでいるのは明白だった。悩んでいる訳でも迷っている訳でもない。それは多分、言葉を選ぶ為の、間。やがてゆつくりとバダップが口を開く。

「円堂守。… 国の思想を衰退させ、人々を享楽主義へと逃避させ、その最たる“サッカー”を蔓延した諸悪の根元。… 我々は長い間そう教えこまれ、信じてきた」

そうだな、とミストレは頷く。

確かに“サッカー”はスポーツとして古来より親しまれてきた競技だ。しかしその目的は“勝利者を決める手段”であり、“強者と弱者を明白にする方法”であつた筈だというのに。

紛争。テロリズム。災害。世界的に治安が悪化する中、いつしか広がっていたのは“娯楽としてのスポーツ”だった。つまり - - “楽しむ為のサッカー”。

人々は現実から目を背ける為に楽しみを求め、ちゃらけた風潮に身を任せている。それは実に嘆かわしく、ゆくゆくは権力武力を用いてでも変えていかねばならない - - それが敬愛するヒビキ提督の

口癖だった。そしてその流れの原点が誰であるかという事も。

「そう…信じたままなら。多分俺達が迷う事は無かっただろうな。そして知らないままならばその方が幸せだったかもしれない」

「そうか」

「…でも」

バダップが一つ、息を吐く。哀愁と憐憫と悔恨。そこには複雑な幾多もの感情が込められていた。

「後悔は、しない」

静かに、しかしはっきりと彼は言い切った。

「奴らは何かから逃げる為にサッカーを楽しんでいた訳じゃない。どんな絶望を前にしても諦めない心を…立ち向かう勇気を、ちゃんと持っていた」

ゆっくりと立ち上がり、バダップは勢いよく窓を開いた。バダップのベッドは一番窓際にある。勢いよく流れこんできた風はほんのりと夏の香りを連れてきて、バダップの銀系の髪を揺らした。

「逃げていた者がいたとすればそれは…奴らじゃなく、今の時代を生きる俺達の方だろう」

それは…遠回しながら、自分達の信じてきた思想の殆どを否定する言葉だった。しかしミストレもはや糾弾や反論をするつもりは無い。認めざる負えなかったからだ。間違っていたのは自分達の方であると。

十四歳の円堂守。あの時代から八十年。この国は大きく変わった。あまりにも悲しい事が、悪い夢のような惨劇がたくさん起きた。

徴兵制の復活。憲法第九条の撤廃。そうせざるおえなくなったの

は、積み重なった悲劇と世界的大不況が背景にある。とはいえバダップ達が物心ついた時にはこの現状で、特に世界に疑問を持つ事も無かった。比較対象など有りはしないのだから。

ヒビキ提督の事は今でも尊敬している。だが彼の憎しみはお門違いにして逆恨みも甚だしいものだった。悪いのはサッカーではなく、こんな世界にしてしまった後の世の人間。円堂守に罪があるわけじゃない。きつと心の底で自分達は気付いていながら、知らないフリして目を背けてきたのだろう。

知って。立ち止まったり迷ったりするのが怖かったから。上官という名の大人達の命は時に理不尽だったが、それでも従う事は楽だった。その結果に責任を持つのは自分達では無かったから。

「大切なのは戦う勇氣…か」

ミストレはため息をついてベッドにひっくり返った。

「オレ達も立ち向かっていかなきゃね。…どんなに辛い先が待っていても」

辛い、先。それは自分達の処遇は勿論、今後の世界の行く末を案じての事だった。これから何が起きるかなんて想像もつかない。それでも戦い続けるしかないのだ。

生きる為に。

生きて幸せになる為に。

「そっぴゃバダップ。二つばかり訊きたいんだけど」

「ごろん、と転がりながら問いかける。

「その一。エス力何処行つた？ 謹慎中なのに」

「正確には外出禁止命令だ。寮の中から出てはならないという事で

はない。その辺りをうるいてるんじゃないか」

「ふうん」

まあ、基本的にエスカバはアウトドア派なわけで。自室にじっとしているのは性に合わないのだろう。それに彼は同姓の取り巻き（子分とも言う）が多い。今回の極秘ミッションの内容は小隊メンバー以外に知らされていないが、それでも何らかの重要任務についていた事は皆知っている。心配されている筈だ - - 友人の多い彼なら特に。

ああ見えてエスカバは頭脳明晰で弁も立つ。どれだけ親しい間柄でも機密を漏らすような馬鹿ではない。特に自分達は、まだ士官学校を卒業していないながら部隊に所属し位も持っている。誘導尋問の訓練やマインドコントロールは徹底的に叩き込まれている。

「質問その二。…君がさつき歌ってた歌。なんて曲？聴いた事ないけど」

曲調はゆっくりで、どちらかというと暗めだ。歌詞も明るいとはいえない。しかし何処か耳につく歌だった。バダップの落ち着いたテナーによく合っていたのもある。

「…小さい頃、誰かに訊いた。それからよく歌っている。なんとなく」

誰に訊いたかも覚えていないけど、とバダップは言う。目を細め、まるで過去を慈しむかのように。

「どんな悪夢のような現実でも…必ず朝は来ると。絶望を乗り越えよ、と。そう歌った歌らしい」

彼はどこか遠い場所を見つめる。空の彼方が、あるいはさらにそ

の先を。

「だから…掴み取りたい希望がある時、歌う事にしている。他ならぬ、自分の為に」

ざあ、と強く吹いた風にバダップの髪が靡いた。まるで銀色の雨のよう。自らの美貌にはそれなりの自負とプライドを持つミストレだったが、それでも認めている事があった。

バダップには。自分とは異なる種の美があると。

「ミストにバダップ。どうせ起きてんだろ、入るぞ」

ノックも面倒だと言わんばかりに、エスカバがドアを開けて入ってきた。少し前から近付いて来る軍靴の音は耳に入っていたので驚かない。ただノックは一応してくれよとミストレは思う。

「雑談タイム終了だぜ、お二人さん」

「何だい、仕事話か」

「一応な。幾つか報告来てたし出さなきゃなんねえ書類もあるし」「ついミストレは嫌な顔になる。昨日はバタついていて報告書を出していないのだ。」

「上の方々な、相当落胆してたぜ」

エスカバは苦い笑みを浮かべた。

「曰く……円堂守は絶対的確定要素、なんだそうだ」

【一：パラレル・ワールド】

円堂守が絶対的確定要素？

意味を図りかねて、ミストレは首を傾げる。それが分かったのだろ、エスカバは頭をガシガシ掻きながら、あー、と声を出した。

「つまりだな。…俺達が過去に干渉した事で、多少なりに歴史の变化はあった筈、だろ」

「そりゃあね」

自分達に円堂カノン。八十年後の世界の人間が干渉した時点で、様々な事象が変化している筈だ。例えばフットボールフロンティア。雷門優勝という事実は覆せなかったが、決勝を戦ったのは世宇子ではなく王牙学園である。王牙自体があ時代の時代には存在しない筈なのだからそれだけでもう大きく歴史は改変されている。

世宇子と雷門が戦わなかった事で、本来存在した筈のドラマやイベントが発生しなくなったという事もあるだろう。他にも細々とした変化が随所に見られるに違いない。

「…ねえんだよ」

「え？」

「変わった筈なのに変わってねえんだ。見る！」

ばん、とエスカバが机に叩きつけたのは一つの資料。普段とフォーマットが違う、という事は読後破棄必須。先に目を通したバダッブが眉を顰めた。

「何だこれは…？」

見てみる、と渡されたそれを取り…ミストレは絶句する。

それは八十年前に行われたフットボールフロンティアに関する記録だった。出場校名簿、対戦成績、シュート本数から支配率に至るまで事細かに記載されている。

だが。

自分達が歴史に介入した筈だというのに……記録上の史実が何一つ変わっていない”。出場校名簿に王牙学園の名前はない。決勝を戦ったチームは雷門と世子子のまま。当然雷門に未来からの助っ人が来た痕跡なんてのもない。

つまり。過去に起きた事実そのものに……変化が起きていないのだ。

「そんな……馬鹿な！？オレ達は確かに過去に飛んだ！雷門と戦った！ミツシヨンに失敗したとはいえその事実はあるか！？」

叫ぶミストレの横で、一人思索していたバダップが……やがて苦い表情で口を開いた。

「多次元世界説……いや、平行世界乱立論と言うべきか……」
「なに……？」

平行世界。聞いたことのあるキーワードだ。確か数年前、エルゼス・キラード博士が発表した論文にあった筈。時間の流れに干渉するミツシヨン……オペレーション・サンダーブレイクを実行するにあたって、必須事項として叩き込まれていた。有り得る可能性の一つとして。

「俺達が関わった過去が……俺達の今に繋がらなくなった。パラレルワールドって事だ」

洪面のエスカバ。

多次元世界説……それは自分達の今生きている世界の他に、様々なパラレルワールドが連立・乱立しているという説。例えばミストレが道に迷った時、実際は左を選んだとして。すると右を選んだパターンの世界が、必ず異世界として存在するというのである。

異世界に。自分と同じ顔、同じ名前、同じ魂を持ちながら……違

う人生を歩んだ別の自分がいる。しかし世界ごとに干渉する事はなく、本来はその世界の存在すら気付く事はない - - そんな論文だった。

時間への干渉は基本的タブーとされている。歴史が変われば、生き長らえる筈の人物が早死にしたり、生まれる筈の人間が生まれない可能性も出て来るからだ。実際過去のミツシヨンでは現在に大きな影響が出てしまった事例もあるとかで。今回もその特例中の特例だったのだ。

なのに。何も変わっていない。

それはつまり自分達の関わったあの“八十年前”が、自分達の過去ではなくたってしまった事を意味する。あの“八十年前”の世界は、自分達の今いる未来とは別の未来へ繋がるパラレルワールドになってしまったのだ。一体、何故？

「前例が無い事態だが：論文にあった言葉を借りるなら、これも“円堂守”が絶対的確定要素だからという事で説明がついてしまっただ」

「なるほどね」

ミストレも漸く頭が冷えてきた。しかし同時に、肝も冷えた。あのありきたりに見える少年 - - しかし周囲に多大な影響力を与える才能を持った彼 - - がどれほど特異な存在か理解した為である。

絶対的確定要素。つまり - - 異世界の干渉を受け付けぬ不変の存在。それに関わると、未来から歴史を弄ろうとしても全て無に帰してしまう - - 非常にレアな人物。希に発生するのだという事はキロード博士の論文にもあった事だ。

その人物に干渉した“過去”は全てパラレルワールド化してしまう。その人物の関わった過去は歴史の上で絶対的な要素として存在し、未来への影響を与えない。円堂守がまさしくそれだというのだ。つまりもし、仮に過去の世界で彼を殺害したとしても - - 彼をこの八十年後の世界の歴史から抹消する事はできない。彼が死んだ世界は必ず平行世界になってしまっただから。

「つまり」

ミストレは唸るように言った。認めたくない事だが認めざるおえなかった。

「オペレーション・サンダーブレイクは…最初から無意味な作戦だったって事か」

円堂守に関わる過去は絶対に変える事が出来ない。きっとあのミッションを成功させ、雷門のフットボールフロンティア優勝を阻止したところで…自分達の現在に影響を与える事は無かったのだろう。

「はは…なあんだ。オレ達の努力も…やった事も全部、最初からムダだったわけね」

正直…ショックが大きかった。この作戦に関われると、選ばれたと知って心から喜んだ日を思い出す。嬉しかった。副隊長という立場は不本意だったが、隊長がバダップならば構わないとすら思った。彼は唯一ミストレが自分より上と認めた存在だったからだ。

だから。

毎日血反吐を吐き、傷だらけになり時に深刻な怪我を負いながらも…訓練をこなしてこれたのは。必ずその全てが報われる筈と信じていたからだ。このミッションをこなす事で、必ずや国や友の役に立てる筈だと。

なのに…その全てが前提から無意味だったというなら。自分達は今日まで何のために這いつくばるような努力をしてきたというのだろうか？

「…ムダじゃ、ない」

重苦しい沈黙を破ったのは、バダップだった。

「俺は言ったな、ミストレ。円堂守に出逢った事を後悔していないと。…この事実を知っても変わらない。俺は、無意味な事など一つも無いと思っている」

ミストレが、エスカバが顔を上げる。そして同時に目を見開いた。バダップが - 笑っていた。あの鉄面皮と散々揶揄されてきた男が、微かで儂い笑みがったが - 確かに微笑んでこちらを見ているのだ。「過去は変わらなかったとしても。俺達は…：変われただろう。だったら、ムダなんかじゃない。必ず未来に繋がっていく。…違うか？」

未来に、繋がる。その言葉が緩やかに胸の奥を揺さぶった。ある人はきつと全て無駄だったと言うだろう。他にもそう言う人は大勢いるだろう。でも今は。

バダップのその言葉を信じてみたいと、ミストレは思ったのだ。

「勇気があれば未来さえ変えていける。…そうだね。それが分かったのは円堂守のおかげで…知る事が出来たオレ達は幸せなのかもしれないね」

これから考えていけばいい。考えて考えて、それでも無意味としか思えなかつたらその時はその時だ。

生きている限り考え続ける事が出来る。それは義務であり、同時に権利でもある。

「そういえば…助っ人を連れてきたあの円堂カノンとやら」

思い出した、というようにエスカバが言う。

「円堂の曾孫だとか言ってたけど、ガチらしいな。調べたらするするデータ出てきたぞ。所詮一般人だ」

「一般人とはいえ個人情報簡単に漏れてるようじゃ世も末だな」
「だな」

このご時世、戸籍から企業名簿に至るまで全て政府のマザーコンピュータで管理されている。出生率や死亡率もリアルタイムで把握されている筈だ。

八十年前、高齢者の死亡届けを出さず年金を不正に受け取っていた事例が大量に発覚した時期があったらしい。が、今ではそんな事は有り得ない。一日でも消息不明や周囲に奇妙な動きがあった場合、すぐにモニターされ担当者が出向く。良く言えば管理、悪く言えば監視されているような生活がこの国では当たり前だった。

ただし。そのセキュリティには結構穴がある。ガツチリと守られているのは一部要人のみと言っていい。一般人のデータを覗く事など、ちよつとしたハッキング技術ですぐ出来てしまう事だった。

「円堂カノン…か。確かに円堂守によく似てた」

あの大きな黒目がちの瞳。ついでに声、もつと言えば中身に至るまで。若干カノンより円堂守の方が大人びた印象はあるが…それもまた貫禄なのか。

そういえば彼は一体どのようなようにして過去に飛んだのだろう。時間旅行技術が確立して早十数年。しかし歴史犯罪が増加した事により、民間人のタイムワープは大きく制限されている。今は政府が研究目的に使う事があるくらいだ。自分達のオペレーション・サンダーブレイクも…平たく言えば政府の認可を取っていない犯罪行為である。ミストレがそのまま疑問を口にする、バダップが頷いて言った。

「タイムワープマシンはとんでもなく高額だ。一般人が持てるような代物じゃない。ましてや企業に至るまで、民間規制法が施行された時検査で没収された筈だが」

誰かがタイムワープを行えば必ず計器に異常が出る。つまりこっそり使ったところですからすぐバレる。使わないで持っていたところでただの宝の持ち腐れだ。

「持っているとするれば政府か、政府から特別に認可の下りている一部財閥と研究機関くらいだろう」

が、使用者も相当レベルの技術者だった筈だ、とバダップは告げる。

「連中が軍と同じタイミングでタイムワープを行ったにも関わらずだ。軍は円堂カノンの姿を視認するまで、介入者の存在に気付けなかった。つまり：計器異常を悟られないよう、カモフラージュしてきたわけだ」

「出来るのか、そんな事」

「一人だけ心当たりがある」

資料の上。ある名前を、彼は指差した。ミストレとエスカバは顔を見合わせる。繋がったのだ――全ての疑問が。

「タイムワープマシン開発者、エルゼス・キラード博士。彼が円堂カノンを過去に送った張本人だろう」

なるほど――開発者なら出来るかもしれない。確実に察知される筈の時間の波を偽装する事も、いち早く軍の作戦に気付いて妨害者を用意する事も。

彼がサッカーに関わっているという話は聞いた事がない。だがも

しこの推測が正しければ、彼もまたヒビキ提督の忌む“享乐的サッカー主義者”という事になる。

「報告：した方がいいんじゃないの、これ」

「オレ達より先に、上のお偉方が気付いていそうなもんだけどね…」
面倒な事になった。ミストレがため息をついた時だ。

『王牙学園二年、オーガ小隊隊長バダップ＝スリード中尉。至急、第三会議室へ来られたし。繰り返す…』

バダップを呼び出す放送が入った。このタイミングで彼を呼び出すという事は、三人の間に緊張が走る。

嫌な予感がしてならない。ミストレはバダップを見た。彼は何も言わない。ぢ黙って、頷くに留めた。

【二：オペレーション・シルバーブレッド】

第三会議室 - 名前だけ聞けば古風なようだが、実際はソリットビジョンシステムをフル活用した大会議場である。まるで最高裁判所のような、と例えたのはミストレだっただろうか。

バダツプは表向きこそ平静を保っていたが、内心は気が気でなかった。呼び出された用件は決まりきっている。オペレーション・サnderブレイク - 人類の命運を賭けたともいうべき大事な作戦で失敗したオーガ小隊。その処分がついに決定したのだ。

だが、一つ気にかかる。処罰を受けるならば何故自分だけ呼び出されたのか。隊長の自分が責任を持って隊員に伝えよと、そういう意なのか - 。

「バダツプ＝スリード中尉」

「はっ！」

正面の席に座る上官 - ドレイス＝バウゼン教官。階級は大佐 - 自分の四つ上に当たる。名前を呼ばれ、びしりと背筋を伸ばすバダツプ。

「貴官も既に承知と思う。今日貴官を呼び出したのは他でもない、ミッション失敗によるオーガ小隊の処遇についてだ」

やはり、と。バダツプは心の中だけで渋面を作る。バウゼンの表情は一見すればいつもと変わらない。何を考えているのか読み取る事は出来なかった。

「決定した」と言いたいところだが。会議でも意見が分かれてな。貴官らの優秀な能力は切り捨てるには惜しく、処分は最低限に留めよと言う者。生ぬるいサッカーの毒は断固として排除すべき、毅然とした厳しい対処をすべしという者もいる。…隠し事はするだけ無

意味、この際ハッキリ言わせて貰うが」

パウゼンの眼に、険しい光が宿った。

「我々の断固たる姿勢を見せる為に…小隊メンバー全員を死罪にと
いう意見も上がっている」

バダツプは驚かなかった。想定範疇ではあった事だ。自分達の
犯した失敗の大きさも、結局軍の嫌悪する円堂の主張に魅了されて
しまった事も事実。不穏分子は芽が出る前に排除したいのが本心だ
ろう。

ただ。当たって欲しくない予想であったのも確かだ。死そのもの
が恐怖だとは思っていない。罰は与えられて然るべきとも考えてい
る。しかしそれは - 隊長である自分が率先して負わねばならぬ責
任の筈だ。

仲間達にまで重罰が下るのは避けたい。そう思うくらいには、バ
ダツプは小隊の皆を愛していた。

「そう身構えるな。…これはあくまで一部過激派の意見だ。大半の
上層部の人間は、貴官らの今日までの武功を高く評価し、一度の失
敗で失いたくないと考えている」

先程より少し軟化した口調でパウゼンは続けた。

「しかしだ。そういつた意見を持つ者がいるほど、貴官らのミスは
重大なものと捉えられている事は理解して貰いたい。…分かるな？」

「イエス、サー」

「では本題に入ろう」

パウゼンは机に両肘をつき、冷厳な眼でバダツプを見下ろした。

「それらを踏まえて。貴官らをテストし、今後の処遇を決めようと

「いう事で話が合致した」

テスト。意外な単語の登場にバダップは眼を瞬かせた。

「ただし試すのはスリード中尉、貴官のみ。これから貴官にあるミッションを任せる。数日がかりのミッションになるだろう。その間オーガの他メンバーは軽営倉に入って貰う」

軽営倉。営倉入り処分としては軽い方だ。重営倉なら半ば監禁のように閉じ込められるらしいが、軽営倉ではそんな事もない。精々期間中一部私物が没収されるのがキツいだけだ。時間も数日。

しかし――ネットクは自分のミッション期間中という事。テストだと名言してもいる。バダップの戦績如何で大きく処遇が変わって来るだろう事は目に見えていた。

「自分がミッションに成功すれば…皆の懲罰も軽くなるという事ですか」

「そうだ。貴官がミッションを成功させれば、メンバーはその時点で解放、オーガ小隊も存続。貴官がそれほどまでの逸材だと証明されれば、上の方々も納得するだろう」

ただし、とバウゼンは続ける。

「失敗した時は……覚悟しておけ。チャンスが何度も与えられるほど、軍部が逼迫してはいないと思うな」

暗に“死罪も頭に入れておけ”、と示される。しかしバダップは、先程までよりずっと気が軽くなったのを感じていた。隊長として自分が名誉挽回の機会を与えられている。寧ろ喜ばしいとさえ感じる。要は失敗しなければいいのだ。

ただ一つ気がかりなのは。

「その上で尋ねる。貴官に任務を引き受ける気があるかどうか。これは命令ではない。あくまで要請だ」

バウゼンは・・・ミッションの中身を語る前に自分に返答を求めている。先に中身を教えて下さい、とは言えないパターンだとバダップは経験上学んでいた。そう言えばまた一つ評価が下がる・・・正直不本意だが、それがバウゼンだった。

何かある、のだろう。そして要請と言いながらも自分に選択の余地はない。要請拒否すればすぐ様オーガ小隊の価値は転がり落ちるだろう。保身の為だけに仲間を危険に晒す事など出来ない。プライドも許さない。それがバダップであり、バウゼン達もよく知っている筈だ。

まったく、何故こうも厄介な状況になってしまったのか。考えれば考えるほど気分が沈みそうだったので、バダップはそこで思考を停止した。

どっちみち、選択肢は一つしかない。

「謹んで引き受けさせて頂きます、サー」

「貴官ならそう言ってくれろと信じていた」

バウゼンが初めて笑みを浮かべた。そしてパネルを操作する。バダップの前に小さくホログラム画面が現れ、資料を表示した。

それは任務の詳細を示した文書。読み進めていくうちに・・・さしものバダップも絶句せずにはいられなかった。最後の理性でなんとか驚愕を顔に出さぬよう努めたが。

「オペレーション・シルバードレッド。ターゲットは反政府テロ組織・レッドマリア。人数は千人余りと予想されている」

そんなバダップの心中を知ってか知らずか。バウゼンのはっきりとその旨を告げた。

「貴官の任務はこの組織の壊滅……及び織滅だ」

何時もより心なしか控えめに聞こえるノック。多分エスカバと同じ印象をミストレも受けたのだろう。――ドアを見つめる彼の横顔も堅い。

「入りな」

意を決してエスカバが声を出せば、バダップが無言で入室してくる。いつもながら完璧なまでに礼儀正しい、硬質でさえある所作だった。バダップの顔もいつもと同じ無表情に見える。

だが、エスカバは何故か違和感を覚えた。それは自分達の方が緊張しているせいだろうか。

「どうだったよ。処分、決まったのか」

決まったから呼ばれたんだろうが、とは心の中だけで。案の定、ああ、と肯くバダップ。

「三日後にミッションを命じられた」

「は？」

「因みに俺一人でだ」

「はあ!？」

「数日がかりのミッションになる。その間お前達は営倉入りだ」

「ちょ、ちょっと待って待って」

混乱するエスカバ。淡々と述べるバダツプにミストレがストップをかける。

「オレ達の処分はいいとして、ミッションて何。ちゃんと順追って説明して」

バダツプはいつも必要な事を最低限しか喋らない。それは軍人としては正しい姿かもしれないが、その実バダツプ自身が基本無口なせいもある。

故に偶に - - いや、日常生活に限定すればほぼ頻繁に - - に意思伝達に支障が生じる。必要なところまで省いてしまいがちな為である。彼と友人関係を結ぶに到り、エスカバも嫌というほど実感させられた事だった。

結論すれば、言葉に関して究極的に不器用なのだ。バダツプ「スリードという人間は。」

「説明」

「うん」

「結論はさつき言ったままだが」

「じゃなくて過程を省くなかって言ってるんだけど。この不器用隊長」
ミストレにガミガミ言われ、やや顔をしかめつつもバダツプが話した内容に - - エスカバは溜息をつかざる負えなかった。

重い処分を覚悟していなかったわけじゃない。実際自分達自身得るものがあつたとはいえ、お偉方からすれば無駄に歴史を弄つただけで終わったようなもの。最終的に円堂が絶対的確定要素と分かり、作戦自体最初から無為だったと判明したものの - - オーガ小隊が失敗した事実が消えるわけじゃない。

でもまさか - - 死罪だなんて。そこまで考える者がいただなんて。自分で言うのもアレだがたかが一度のミスではないか。

上層部で何かが起きているのかもしれない。内部の派閥争いが泥沼化しているのは周知の事実だ。

「…まあ、嘗倉入りは妥当な線かもね。問題は君が命じられたミッシヨンだけだ」

話せる？とミストレが尋ねると、エスカバは無言で首を振った。極秘任務につき他言無用という事だ。

しかし何故バダップはさっきからドアの前に突っ立ったままなのだろう。エスカバが尋ねるより先に、ミストレが訊いた。

「色々ツッコミどころはあるんだけどね。どりあえず座れば。なんか気まずいんだけど」

「ああ…うん」

珍しくバダップの返事が煮え切らない。それを見てエスカバは、彼が意図してではなく“なんとなく”棒立ちになっていた事を知った。

上の空というか。あまりにも反応がぼんやりし過ぎている。珍しいなんてものじゃない。最初に感じた違和感が目に見えて濃くなった。

「なあ、バダップ」

不安の雲が、まるで曇天のように胸中に立ち込める。エスカバは意を決して口を開いた。

「お前が受けたミッシヨンって…」

「エスカバ、ミストレ」

エスカバの言葉を封じるようにして…いや、明白に遮ったのだ今…バダップが自分達の名を呼んだ。これまで一度たりとて無かった事を今、彼はした。

「三日ある。俺が発つまで、お前達が嘗倉に入るまで」

その時になつたら少なくとも当面逢えなくなるから、とバダツプは続けた。

「時間は有意義に使わなくてはならない。やりたい事は今のうちにやっておくべきだろう」

「…例えば？」

力技で話題を逸らされたと分かつていながらも、尋ねた。どこか遠くを見るバダツプの顔が、酷く消え入りそうなものに見えたから。

「例えば…今度は戦闘じゃなくて。円堂守の目指していたような…熱意のあるサッカー。“楽しい”サッカー…とかな」

あ、と。横でミストレが小さく声を上げるのが聞こえた。バダツプが一瞬、綺麗な笑みを浮かべたからだ。彼が笑ったところなど今まで殆ど見たことが無かったのに。

恐ろしいくらい、今日は彼に関して“初体験”ばかりしている。普段なら指摘してからかうなり、レアな経験をしたと面白がるなりできるのに。

…バダツプ、お前。お前の受けたミッションって。

訊こうとしたその台詞を、エスカバは口の中で噛み殺した。

…お前が命を賭けなきゃ…出来ないほどのもんなのか。死ぬ気なのか、お前は。

今のバダツプのような眼をした人間を、前線で何度も見ている。だから、言えなかったのだ。ふざけんな。身勝手すぎる。俺達の立場はどうなるんだ。そう怒鳴れたらどんなにか楽になれただろう。知っていたから。

それが護る者の眼であり…同時に、死地に赴く事を覚悟した者

の眼である事を。

【三：フライ・ハイ】

カノンが雷門イレブンの危機を救った、その翌日。思う事あってキラード博士の研究所を訪ねたカノンは、危うく大量の本に埋もれて圧死しかけた。

持ち前の反射神経に、今日ほど感謝したいと思った日はない。だってそうだろう、まさか玄関のドアを開けた途端、本の雪崩が襲ってくるだなんて……一体誰が想像するだろうか。

「ちよつと……キラード博士!？」

呼び鈴と一緒に叫べば、なんですかぁー!という声がやけに遠くから聞こえる。一体博士はどこにいるのやら。広すぎる研究所を心底恨んだ。

「なんですか、じゃないです!これじゃあ中に入れないじゃないですかー!」

「あーすみませんー!どりあえず窓からでもどうぞー」

「……警備システム、ちゃんと解除してあるんでしょーねー!？」

「多分ー大丈夫ですー」

「……」

叫びながらの会話は疲れる。本当に疲れる。カノンは諦めて、入れそうな窓を探した。もしブザーが鳴っても自分は悪くないんだし、警備会社が飛んできてもしキラードのせいだし、と思いつながら。

近場の窓は四つ中三つが開かなかった。これはもう本格的に怒っていいかもしれない。自分も掃除や片付けが得意な方ではないが、それでもキラードに比べたら百倍は綺麗好きと言えるだろう。衛生面で問題ありすぎるこの場所に、堪忍袋の尾も切れかけている。まあ、こんな場所を好き好んで訪れる自分も自分だが。

半ばゴミ屋敷と化した寝室を抜け、廊下で足を黒い物体が通り

過ぎた気がするのを見なかつた事にし、漸く辿り着いた居間。

「おはようございます、カノン君」

ああ、もはや居間ですらなくなっている。

「…お早うって時間でもないですけどね……」

キラード博士の左手に朝食のパン、右手に万年筆、テーブルの上に資料の山。床にはインスタントラーメンの袋にお菓子の包み紙、さらにはジェットーにかけられて細切れになった紙屑やらキャップの吹っ飛んでいるペンやら - - e t c . 。

昨日訪れた時より悪化している気がするのは、気のせいではあるまい。

「博士…散らかした挙げ句昨日もお風呂入らなかったでしょ」

「お風呂どころか寝てません。徹夜です」

「隠す事もなく（実際隠しようもないだろう）どキツパリ言い切るキラード。」

「私生活にかまけてる余裕ゼロだったんで。昨日の騒動のせいで政府も超ゴタゴタなんです」

余裕ゼロじゃなくてもアンタの私生活は変わらないだろ、とカノンは心の中で突っ込む。まったく、不健康人間まっしぐらだ。

「政府も鬼です悪魔です。私を過労死させる気なんです！聴いて下さいよカノン君！！」

「あー、ハイハイ」

呆れ果てているカノンをよそに、キラードはテンションを上げて話を続ける。

「昨日の一件にて、オーガに指示を出していたのはドレイス」バウゼン大佐である事が分かりました。バウゼン大佐はヒビキ提督の直属の部下です。が、残念ながらヒビキ提督が直接関わっていたという物理的証拠が何も上がってません。バウゼン大佐も叩き上げですからね、政府の誘導尋問にも簡単に引つかかってくれないらしくて」

バウゼン大佐 - カノンからすれば“誰それ”な世界だが。大佐、という地位がどれほどのものかはおおよそ想像がつく。確かあと一個昇進すれば將軍職ではなかったか。

叩き上げ - つまり一兵卒などの前線から上がってきた者なら。当然戦場も経験しているし訓練も相応にこなしてきただろう。一筋縄でいかないのも頷ける。

「まあ詳しくは省略しますが。政府の派閥争いは今非常に面倒な事になってまして。証拠を掴んでさつさとヒビキ提督を失脚させたいな〜っていうお偉方もいらっしやる訳です」

「ものすごい端折り方しましたね今」

「だって言っちゃいけないお約束ですもん。第一細かく説明したって君、理解できますか？」

「否定はしませんけど」

「でしょ。で、なんとなく想像つくかとは思いますが。時空位相に現れた異常を解析して始末をつけるよう私に命じたのが、その反ヒビキ派なわけですよ」

そういう事か。カノンは大まかにだが理解する。

タイムワープ技術が浸透して早数十年。一時期多発した歴史犯罪のせいで、政府の権威が地に落ちたのは記憶に新しい。その後の規制や法改正が功を成して、治安と共にある程度の信用も持ち直したものの - - 二度と歴史に絡んだ騒ぎは御免だと誰もが思っていた筈だ。

が、話を聞くにそのヒビキ提督とやらは違うようで。国を良くしていくには歴史介入も辞さないという革新派であるらしい。今の政

府の信用をなんとか保ちたい保守派からすれば邪魔者以外の何者でもない。

「ヒビキ提督が実際関与したかどうかは分かりません。しかし真実がどうであれ、彼が保守派にとって厄介な思想の持ち主である事は事実。本当ならよし、喻え言いがかりだとしてもヒビキ提督の名前に傷がつけば問題なし」

早口に喋りながらも、キラードの手は休まず動いている。こつこつ所は器用なくせに何故家事だけは壊滅的なのか。

それにしても - 大人の世界は面倒で怖い、とカノンは思う。八十年前の世界で、オーガのやろうとした事はあまりに強引だ。曾祖父にサッカーを無理矢理棄てさせて未来を変えようなんて間違っている。あの計画を命じたのがヒビキだというなら、当然カノンが賛同出来る筈もない。

だけど。それがまだ確定した訳でもないのに - 邪魔だからという理由で犯人と決めつけ、政治的に排除しようだなんて。汚すぎやしないか。

そう思うのも自分が子供で、綺麗な世界しか知らないような幸せな人生を送ってきたせいかもしれないけれど。

「騒ぎを大きくしない為に…そしてヒビキ提督を追いやる為に。タイムワープマシンを使用する認可が下りたって訳ですか」

「そういう事です。…私自身は正直、醜い政府の派閥争いに興味はありませんがね。あるべき歴史を無理矢理ねじ曲げようとする輩を放置する訳にはいきませんでしたから」

何より、とキラードは笑って続ける。

「カノン君が消えてしまうような事態には、絶対したくありませんでしたからね」

カノンは思う。自分は成り行きのようにこの研究所に出入りして、キラードと交流を結んでいるだけで。彼の政治的立場も研究者としての正体も知らないし、片付けの下手さといひ強引さといひ人間的には大きく問題のある人物と分かってはいるけれど。

こういふ所があるから。“友達”と認めた相手は子供だろうと対等に向き合い、とことん大切にしようとする人だから。結局嫌になれないし、世話を焼いてしまふのである。

「話を戻しますが、カノン君」

キラードはパソコンを引っ張り出し、電源を入れる。

「政府は昨日の一件、なんとかしてヒビキ提督が黒幕である物理的証拠を掴みたいんです。でもあの人の地位つてはハンパじゃないですから、公に捜査するには限度がありました」

「はあ、と大仰にため息をつく博士。

「ぶつちやけ警察も圧力かけられちゃって身動きとれないんです。だからー私みたいなのにまでお鉢が回ってくる訳ですよ。あちらさんに悟られず歴史を解析できるの、私くらいしかないですし」

「だから徹夜で死にそうになっっているのだーと。長ったらしい説明だったけどここで漸く話が最初に戻ったようだ。

「お疲れ様、とは思ふ。思うけど。だからって不衛生にしている理由にゃならないだろ、とカノンは思う。」

「…ん？」

ふと引っかかりを覚えて、首を傾げるカノン。

「悟られずに解析…て。そういや昨日の件も、向こうに気付かれるまで随分間があった感ありましたけど。博士つてはひょっとして、タイムワープの研究に関して滅茶苦茶凄い人だったりとか…」

「当然だろう。エルゼス…キラードはタイムワープマシンの発明者だぞ。誰より詳しいに決まってる」

「開発者あ！？それってマジですか博士…て…」

突然背後からかけられた第三者の声に、うつかり普通の反応を返してしまい…直後、ぎょっとして振り返った。

「え、ええっ！？ば、バダップ…スリードお！？」

すぐ後ろに。バダップが立っていた。いつもの深緑の軍服を纏い、いつもの無表情で。

カノンは混乱する。此処はキラード博士の研究所で、自分はキラード博士とずっと喋っていて。どうして彼が此処にいるのだ、そもそもいつからそこにいたのか。

よもやキラードが招いたのかと思えば、そのキラードも口をあんぐり開けて固まっている。どうやら自分と同じく、ほんのついさっきまで彼の存在を認知していなかったらしい。悟られなかったバダップが凄いのか、気付かなかった自分達が間抜けなのか、あるいはその両方か。

「捜査やミッション以外で、人様の家に許可なく踏み入る事は避けたかったんだが」

バダップは淡々と、しかし声に呆れを滲ませて言った。

「玄関のドアは開いたまま、本の土砂崩れで埋まっているし」

「う…」

「呼び鈴を連打しても応答は無いし」

「うっ…」

「玄関から入れもしないゆえ困っていたら窓が開いている上防犯装置も解除されていたので」

「うつつ…」

「ゴミ屋敷に好んで入りたくは無かったが、用があったので失礼した」

「ゴミ屋敷…」

ああまったくその通りですが、とうなだれるカノン。キラードは机に突っ伏して死亡している。さしもの彼も反省してくれたと信じたい。

しかも。しかもだ。

「あの…さっきまでの俺達の話、どこまで聞いてた…？」

恐る恐る尋ねるカノンに、バダップはあっさりと言い放った。

「政府が博士を過労死させたいらしい、というところから」

「うわああ全部じゃん!!」

ああ、死亡フラグ。冷や汗だらだらで顔を見合わせるカノンとキラード。ヒビキ提督が真に黒幕かどうかはともかくとしても…バウゼン教官がオーガの直属の部下であった事は間違いないわけで。

ひょっとしたら自分達はよりによって一番まずい人に、とんでもない話を聞かれてしまったのではあるまいか。

パニックになりかけるカノンを見、バダップは一つ溜息をついた。「油断しすぎだ。此処が戦場だったら終わってたぞ。一部始終、上に報告させて貰う…」と、昨日までの俺なら言っただろうがな」

「え?」

目をぱちくりさせるカノンに、バダップは続ける。

「今の俺は…誰の味方でもない。ヒビキ提督やバウゼン教官の事は尊敬しているが、あの方々の考え全てが正しいとも思っていない。

…お前達自身に政治的目的があるわけでもないなら…特に放置して

も問題はあるまい」

目を見開く。カノンは驚いていた――純粹に。語るバダップの眼があまりに穏やかで、静かなものだったから。あの試合の時にあったような、瞳の奥の荒々しい炎は見えない。

まるで何かを悟り、静かな決意を固めたような――そんな眼だった。

「その代わりと言っちゃなんだが。幾つか質問したい事がある。……でもその前に」

足元の缶を蹴り上げて。バダップは心底呆れ果てた顔で言ったのだった。

「このゴミ屋敷をなんとかするのが先だな。気分が悪くなりそうだ」

【四：フレンド・シップ】

バダップという人間を、カノンは事が起こる前から知っていた。一般家庭育ちで軍とも政府とも無関係のカノンが認知するほど、彼は有名人だったのである。

未来の軍部を担う者達を育てる士官学校、王牙学園。その歴史はまだ浅いが、卒業生は皆優秀で、多くが一流の軍人として輩出されている。

その王牙学園の中でもずば抜けた天才児――バダップ・スリード。本来ならば訓練期間中の士官学校生が前線に立つ事はない。よほど大きな戦争やテロが起きて人手が足りなくなった場合はその限りでも無いらしいが――今はちまちまとした紛争やテロに悩まされているくらいだ（いや、それとてここ数十年で治安が悪化した結果ではあるのだが）。

バダップはその、例外中の例外だった。軍事に明るくないカノンですら分かる。士官学校生にも関わらず、その年で前線に出され、尚且つ中尉という地位も与えられ。おまけのおまけには小隊長まで任された少年兵。

そのルックスもあって――世界を救う英雄、だなんて持て囃す連中中にはいる。本人からすれば迷惑極まりない事だろうが。

――TVに出てきた事もあったけど。いつもお堅い口調で……るくに表情も変えなくて。完璧ってこういう奴を言うんだらうなって、思ってた。

実際彼はその成績、武功、共に完璧と呼んで差し支えないものだった。少なくともカノンにはそう見えたものだ。強いて言うなら――表現が悪いのは承知しているが――鉄面皮。感情の無い人形に見えてしまうのが欠点と言えなくも無かった。持て囃す連中がいる――

方、戦闘人形だと揶揄する連中がいるのも事実だった。

あの一件が無ければ、一生話す機会も無かっただろう。特別憧れていた訳でもない。しかし別世界の人間だったのは間違いない。それが面と向かって話す機会を得るなんて - - 人生分らないものだと思う。

「円堂カノン、その本はこっちに入れる」

「え、何で」

「アルファベット順を無視するのは気持ち悪い」
「なるほど」

今、カノンはバダップと共に書庫にいた。半ば成り行きで、ゴミ屋敷と化したキラード博士の研究所を隅々まで掃除する事になってしまったせいである。

この惨状はあまりに耐え難い、片付けるぞ - - と。バダップに言われた時は本気で気が遠くなったものである。確かにカノンも必要性は感じていたが、この広い屋敷を片付けるのに一体どれほどかかるのか。

第一。突然訪問してきて無断で侵入してきて（まあこちらにも非はあったにせよ）、あまりに不躰すぎやしないか。一体何の用件だったのやら。

と、最初はやや不機嫌になっていたカノンだったが。掃除を進めるうちに見方を改めた。バダップは掃除のスピードすら神業的だったのである。早い、というより素晴らしく手際が良いのだ。予想よりずっと早くゴールは見えてきていた。

「ば、バダップ君！これ分別とか絶対無ry」

「今まで放置していた貴方が悪い」

「ふぐっ！」

遠くで絶叫したキラード博士は、バダップにばっさり切られて声を詰まらせる。自業自得だ。博士には良い薬になるだろう、とカノンも助ける気はゼロである。

棚の埃を払いつつ、要領よく積み上げた本を並べていくバダップ。

完璧な人は家事をやらせても完璧なんだなあ、とやや場違いな感想を抱いてしまう。

「ところで…バダップ」

紙屑をまとめたゴミ袋を縛りつつ、カノンは尋ねる。

「何で俺の事、フルネームで呼ぶのさ？」

さりげなく気になっていた。周りの家族や友達の多くは自分を“カノン”か“円堂”と呼ぶ。偶に変なアダ名をつけてくる奴はいるがまあ、それは置いといて。

わざわざ長ったらしく、フルネームで自分を呼ぶ人間をカノンは他に知らない。嫌なわけではないけれど - - 正直、バリバリに違和感がある。

バダップは少しばかり手を止めて、考えこむ仕草をした。

「…深い意味があるわけじゃない、ただ」

「ただ？」

「…不適切、というだけだ」

不適切？何が？カノンは頭の上にクエスチョンマークを浮かべる。さっきまでの会話で段々とバダップの性格を把握しつつあった。

試合の時は闘争心をたぎらせていたから分からなかったが - - この少年は基本的に無口、なのだ。必要最低限しか喋らない。寧ろ時として必要最低限の事も足りない。そのせいか天然、とすら呼べるような奇妙な発言が偶にある。

今の言葉ならまず“何が”不適切だと思うか、主語が必要不可欠ではないか。よもや省いてしまっている自覚もないのだろうか。

「えっと…何が？」

こんな事、普通は訊かれるまでもなく分かるだろうに。一瞬きよ
とんとした顔になったバダップを、不覚にも可愛いと思ってしまう
た。

まったく、そんな顔をしていたらとても一騎当千の兵士には見え
ない。

「何がって…呼び名の話だろう。名字で呼ぶのも名前で呼ぶのも相
応しくないとと思うゆえ、消去法でフルネームにしているだけだ」

「何で相応しくないの」

「…お前は疑問ばかりだな」

「興味津々なお年頃なもんでー。…ってかお前に訊きたい事がたく
さんあるんだもん。いいじゃんか別に」

「……」

沈黙するバダップ。多分カノンの言葉の意味を彼なりに吟味して
いるんだろつなあ、と思う。こんなに誰かに、真正面から…敵意
ではない感情を向けられた事は無いのかもしれない。いや、彼ほど
の有名人なら好意も多々受けてきただろうが。それが好意だと、気
付く事も出来ずに生きてきたのだとしたら。

そう思つて…悲しくなった。 齢十四歳の中尉。特殊部隊・オ
ガ小隊長。人の死を、血を、叫びを、間近で見えてきた少年。その
人生が如何様なものであつたかなど、カノンには想像すらつかない。
想像するにはあまりに自分は幸せすぎた。

「… 円堂、と名字で呼ぶと」

やがてバダップの手が再び動き始める。 本の場所を入れ替え、確
認しながら答える。

「思い出すのはお前じゃない。お前の曾祖父… 円堂守の方だ。それ
ほどまで円堂の名を聴かされ続けてきた。憎むべき、倒すべき敵だ
と」

倒すべき、敵。カノンはあの試合の様子を思い出ししていた。大人達に刷り込まれるまま、植え付けられるまま - 憎悪の眼で円堂を見ていたバダップ。そして、オーガのメンバー達。

あの試合を得て、彼の認識がどう変わったかは分からないけれど。今のバダップの瞳からは、あの時満ち満ちていた黒い感情は読み取れなかった。

「だが下の名前も駄目だ。：親しくもない相手を名前で呼び捨てるなど非常識でマナー違反だろう。だから自分が呼び捨てられるのは構わないが：他人を呼ぶ時は気をつけている」

カノンはバダップを見た。相変わらず、何の色も浮かんでいない横顔。淡々とした声、動き。だから、思った。

彼は感情を持たないのではなくて。敢えて殺してきたのではないかと。

「：構わないと思うなあ、俺は」

だからカノンは努めて明るく言った。そうでなければ悲しくて声が震えてしまいそうだったから。

「俺は全然、構わないよ。だって」

親しくない、とバダップは言ったけど。昨日までは自分もそう思っていたけど。

今は。今なら言ってもいいじゃないか。だって。

「俺達もう、友達じゃん！」

バダップは目を見開いて自分を見た。意外すぎて何を言っているか分からない、そんな顔だった。やっぱり哀しい、とカノンは思ったが傷つく事は無かった。十分に予想の範疇だったから。

「ひいじいちゃんのノートにさ、書いてあったんだ。サッカー好きな奴に悪い奴はいない。最初は敵同士でも、全力で試合やって、ぶつかって…終わったらみんな友達なんだって」

勝って笑って、負けて泣いて。時にはみんなで勝って泣こうぜ。

そうやってみんな友達に、仲間に、兄弟になる。みんなで幸せになれる。みんなを幸せに出来る。

だから - - サッカーは楽しい。サッカーは素晴らしいのだと。

「サッカーやろうぜ！」ってさ。悪魔の呪文だってお前言っただろ」

「…ああ」

呪いの言葉。円堂守は悪魔だと - - そう恐れなくなる気持ちが、実はカノンにも分からないではない。カノンはサッカーが大好きで、曾祖父を心から尊敬しているけれど。その上で - - あまりのかの人の影響力の強さに空恐ろしいと感じた事も事実だった。

それほどまでに円堂守の言葉には力があつた。光があつた。誰も魅了され、引き上げられるものがあつた。まるで魔法のように。

「ひいじいちゃんは凄いや。怖いくらい、凄いや。でもそれは…その言葉は。聴く人間によって百も二百も姿を変えるものだと思う」

呪いだ、そう決めつけて聴けば全ては黒き魔法に塗りつぶされ

てしまうだろう。でも、誰かを救う為のものだと信じて聴けば、世界は180°姿を変える。

「俺、思うんだ。ひいじいちゃんの“サッカーやるうぜ”、は…みんなトモダチになって、みんなで幸せになろうぜって意味なんだって。だからその為に幸せなサッカーをやりたいって願ってるから…みんながひいじいちゃんのサッカーに惹かれたんじゃないかなって」

八十年前の彼を見て思ったのだ。自分もあなりたい。円堂の名を継ぐ者として恥じない存在に、皆を幸せにできるサッカーをする人間に、なりたいと。

だから自分は、円堂守を信じる。円堂の信じたものを、信じる。

「俺達は自分のゼンブをぶつけて戦ったんだ。本気のサッカーをやって決着をつけたんだ。だからもう…友達。そうだろ？」

ニカツと笑ってみせるカノン。バダップは眼を丸くして、まじまじとそんな自分を見ていた。

届けばいい。血と硝煙の匂いの中で凍てついた彼の心にも響けばいい。今は自分の一方的な友情でも構わない。自分達はあの試合を通して、全てではなくとも何かは分かり合えた筈だ。ならばそれで充分ではないか。

少なくとも自分は彼を友達だと思っている。大事なサッカー仲間の人だと認めている。ならばこれ以上の真実はあるまい。

「友達…か」

よく分からない、とバダップは言った。戸惑っているのだろう。しかしそれはカノンを拒絶する言葉では無かった。

「今は考えとけばいいじゃん。…ま、そんな訳で。友達が親しくな

い相手なわけじゃないでしょ。だから名前で呼んでよ。カノンって、呼び捨てでいいから！その代わりバダップの事もバダップって呼ぶし！！」

「名前……」

バダップは顎に手を当てて少しばかり迷い……やがて少し小さな声で、それを呟いた。

「……カノン」

「そうそう！それでいいって！」

ただ名前を呼んで貰えただけだ。しかしそれでもカノンは嬉しかった。目に見えて近づく距離が嬉しい。ああ、オーガの他面子もここにいれば良かったのに。

「……まあ……悪くないか」

やがてバダップが少し照れたように笑った。ああ、彼にもこんな顔が出来るのか。今日は素敵な発見がいっぱいだ。

「よし！さっさと片付けようぜ！」

何故だろう。嫌でたまらなかった掃除さえ、いつの間にか楽しくて仕方なくなっている自分がある。

【五：リアル・メシア】

最初の惨状を思えば、片付けだけで三日三晩は費やすだろうと思われた。しかしバダップのおかげで、研究所の大掃除はなんとその日の夕方に終了する事が出来た。

「スツキリー！」

わーい！とカノンは嬉しくなって叫ぶ。ゴミが散乱しブラックGの巣窟となっていた居間はきちんと整理され、床も壁もピカピカに磨き上げられている。

ああこの研究所の窓に、きちんと顔が映る日が来るだなんて。今までの凄まじさを知るからこそ、感動もひとしおだった。

「やー、整理整頓がきっちりされてるの、こんなにも空気が美味しいもんなんですねぇ」

深呼吸しながらしみじみ言うキラード。その彼に、やや意地悪な笑みを浮かべてカノンが返す。

「でしょ。だから日頃から片付けすべきって言うてるんです。これからはこの状態を限りなく保てるように頑張ってください」

「あははー…多分無理です」

「努力くらいして下さい。ってか、しろ」

「かかかカノン君眼が笑ってません…！」

まあ、あんまり期待はしてないのだから。確かに広くて管理の難しい屋敷なのは間違いないので、せめてハウスキーパーを呼べばいいのではないか。まあ、雇ったハウスキーパーにあつという間に逃げられなければの話だが。

遊びにきた筈が、掃除だけで半日を費やしてしまった。しかし、

これも悪くなかったかな、と思うカノンである。バダップと話すいきっかけになった。これも運命の巡り合わせと言っべきか。

「…と、そうそうバダップ君」

ピカピカになった居間でお茶をしつつ。カノンの言及から逃げるように、バダップに話題を振るキラード。

「君、何か用があつて尋ねてきたんじゃないありませんでしたっけ？まさか片付けが目的じゃないでしょう」

そういえば、とカノンも思い出す。バダップは一番最初に、幾つか質問があると言っていたっけ、と。その内容は予想がつくようではない。十中八九例の一件に絡んだ事だろうが。

「…幾つか確認したかっただけだ」

口を開いたバダップに、居住まいを正すカノン。これから語られるだろう話は自分にとつても少なからず重要に違いない。きちんと拾わなければと、そう思ったのだ。

「まず一つ。…先日の一件にて。八十年前の世界に円堂カノンを送つたのはキラード博士、貴方だな？」

一応疑問文の形はとっているが、それはほぼ最終確認に近いものだった。キラードは答えない。しかしバダップは気を悪くした様子もなく、続ける。

「何の為にあんな事をした？誰に頼まれた？」

緊張が走る。少し前までのキラードとの会話を思い出したのだ。オーガを率いたバウゼン大佐。そして大佐に指示を出したと推測されているヒビキ提督について。

ヒビキが関わったという物理的証拠は無い。しかしヒビキの思想を敵視する政府の一部が、今回の件を使ってヒビキを失墜させようとしている。キラード博士はその反ヒビキ派に依頼されて、物証を見つけよう徹夜作業をしていたのだ。この事実、ヒビキ派（と推測される）バダツプには一番聴かれてまずい話題だったのではないか。

「誰に依頼された…か」

キラードは、先程までの間抜けた様から一変、済ました顔で紅茶を啜った。

「残念無念。…答えられると思います？そんなこと」

博士が正式には誰に依頼されたのか。それはカノンも知らされていない事だった。守秘義務、という奴だろう。そもそも下手に口にするれば命にさえ関わりかねない情報。いくら友達でも自分には語れなかったのだ、と今更ながら理解する。

「なるほど、答えられないというならつまり」

済まし顔の博士。それに対し小さく…ほんの小さくだが、バダツプが挑戦的な笑みを浮かべた。

「守秘義務が発生している。貴方の独断ではなく依頼された結果である事は間違いない。…そうなるな」

「お見それします。さすがは中尉殿」

キラードは肩を竦める。実際、これくらいならバシてもいいか、くらいには思っていたらしい。余裕の笑みは崩していない…お互

いに。

「ま。でもこれだけは言わせていただきますよ」

冷静に、ごく物静かに。キラードは告げる。

「例え政府の認可が下りずとも。…私は独断で首を突っ込んでいたでしょうね。…カノン君を消さない為に」

バタフライ効果。過去の時間軸に僅かでもズレが生じれば、まるでドミノを倒すがごとく未来にまで影響が出る。オーガ出撃はその結果に期待したものであり、実際彼らのミッションが功を成していれば、影響が出たのはカノンやサッカーに限ったものでも無かった筈だ。

だがそれでも、カノンは嬉しかった。自分の為だと言うキラード博士の言葉を、押し付けがましいとも思わなかった。自分の為に一生懸命に尽くしてくれる人がいる。それが嬉しくない筈はない。

「その事だ。もう一つ疑問がある」

珈琲カップを手に取り、バダップが続ける。

「今朝上から報告があった。…円堂守が絶対的確定要素である事が明確になったとな。…貴方はそれを知っているか？或いは最初から知っていたのか？」

「…最初から知っていたのなら、あんな面倒な真似したと思います？」

「だろうな」

「ちよ、ちよつと待つて待つて！」

勝手に話を進める二人に、慌ててストップをかけるカノン。カノンからすれば絶対的確定要素って何じゃほら？である。

「俺の分かんない話で盛り上がらないでよ！こっちは一般人なんだから！」

一人だけ蚊帳の外にされて面白い筈がない。寧ろムカつく。

円堂カノン。可愛い顔して実は超腹黒キャラ疑惑あり……とか周りに噂されているのはここだけの話。

バダップは頬を膨らませるカノンを目を丸くして見た後、暫し沈黙、やがて合点がいった様子で口を開いた。

「絶対的確定要素というのは」

「うん」

「歴史上稀に存在する、確実に軸から外れない者を言う。絶対的確定要素に関わった全ての事象は時間軸上げて揺らぐず、外部から時空の流れに介入した場合それが顕在化する。つまり、いかに歴史への侵入者が書き換えを行おうとも、絶対的確定要素に関わってしまえば全て平行世界化し、侵入者の時間軸への影響を相殺してしまふんだ。ここまでは理解したか？」

「……ごつめん、無理」

頼むから難しい言い回しは無しにして欲しい。カノンに説明する気が無いのか、単に天然なのか。

今までの言動や行動からして……多分後者なんだろうなあ、と思ふ。

「まあ簡単に説明しますとね」

ヘルプを求めるカノンの視線に苦笑しつつ、キラードが言う。

「円堂守。君のひいおじいさんは、歴史の上でも特異な存在なんです。彼の存在に関わった過去は、我々未来の人間がいかにいじくり回そうと変える事が出来ないんですよ」

キラードは、バダップと比べ遙かに簡単な言葉で説明してくれた。我々が過去に飛べば、何もせずともそれだけで必ず時間に揺らぎが出る。多かれ少なかれ歴史に変化が出る。だからタイムワープの技術に規制がかかったのだ。

しかし。

オーガが過去に介入した事で変わった筈の歴史が - - 何故か記録上まったく変わっていないのだという。八十年前のフットボールフロンティア決勝は、史実通り雷門VS世宇子のみまだ。では何故こんな事になったのか？

「円堂君が特殊な存在：絶対的確定要素だったからです。故に、我々が関わった時間軸が、我々の過去ではなくなってしまった」

平行世界、というものについて、カノンはここで初めて知った。そもそも自分達の生きる世界の他にも世界がある、そんな考え方が体が新鮮なものだった。

要は。自分が助っ人を率いて円堂守を助けに行ったあの過去は -
- パラレルワールドになっちゃってしまい、自分達とは別の世界の過去になってしまったのである。こんな事は誰にとっても予想外だった
- - 無論、オーガを送り込んだ者達にとっても。

「可能性の一つとして、頭になかった訳じゃないですがね」

絶対的確定要素の人間なんてめったにいるもんじゃないんですよ、とキラード。

「昨日、影響を調査し直して：驚きましたよ。まさかと思いましたね。ぶっちゃけ、私達の過去が変わらないと分かっていたら、カノン君に動いて貰う必要も無かった訳ですから」

なるほど。カノンも漸く理解が追い付いた。仮にもしあの世界で雷門がオーガに負けていたとしても。自分達の世界で雷門が優勝した事実は揺らがなかったのである。

早い話が無駄足だったのだ。自分達がやった事も、オーガがやった事も。ややガツカリして、カノンは俯く。

けれどそんな思考を読んだかのように、バダップが告げた。

「全てが無に帰した。…だが俺は、あの出来事が無駄だったとは思わない」

カノンは顔を上げてバダップを見た。バダップは真っ直ぐに…未来を見つめる者の眼をしている。

茶色の瞳に映り込んだ夕焼け空が、綺麗だと思った。

「過去に責任転嫁して、現状を諦めていた俺達こそ変わるべきだったんだ。奴らは俺達にそれを気付かせてくれた。見失っていたモノを取り戻させてくれた」

あの試合の時にいた、殺意にも似た憎悪をたぎらせ、大人達の強いたルールを走っていた彼はもう…いない。

「だから、無駄じゃない。そして後悔しない。これから先…どんな未来が待つとしても」

一瞬よぎったその表情に、カノンははっとさせられる。まるで痛みを堪えるような、あまりにも悲痛な覚悟を決めたような…そんな顔。

これから先、どんな未来が待つとしても。

その言葉がカノンを不安にさせた。

「…ねえ、バダップ」

そうだ。自分も訊かなければ。机に手をついた拍子に、カチャンとマグカップが音を立てた。壊れもののような音が、胸の中の暗雲に拍車をかける。

「ミッションに失敗したんでしょ。…オーガは、どうなるの？」

軍部や王牙学園の厳しさは半端じゃないと訊く。体罰も茶飯事と専ら噂だ。だからずっと気になっていた。見たところバダップに変化はないが、今大丈夫だからといってこれからも大丈夫とは限らない。

バダップは笑った。それは微かだが、優しく、何かを慈しむような笑みだった。

「…カノン」

そしてフルネームじゃなく…カノンの名を呼んだ。

「もしかしたらまた…俺の大事な誰かに、危機が迫る時があるかもしれない。もしかしたらそれはお前の大事な誰かでもあるかもしれない。…お前が俺を友達だと思ってるなら、頼みを聴いてくれるか」

穏やかな声。なのにどうしてこんなにも。

「いつか、その時が来たら」

こんなにも、胸を締め付けられるのだろう。

「助けてくれるか。例えそれが、この世界のお前の曾祖父でなくと

も。お前のかつての敵だとしても」

黄昏時。オレンジの光に照らされた少年兵の顔は美しかった。残酷なほどに。

「バダップ君。貴方、もしかして…」

キラードが何かを言いかけて、口ごもる。もうバダップは何も言わなかった。ただ静かに微笑んでカノンを見ていた。

【六：ピフォア・クライシス】

なんとなく予想はしていたが。目の前の惨状に、エスカバは頭を抱えたくなつた。

「エスカバ…助けて…」

サンダユウの部屋は、戦場と化していた。部屋の主は中央の机で屍と化し、ブボーとゲボーの双子は折り重なってひっくり返っている。ザゴメルは大柄な身体を小さく丸めてオドロ線を背負い、イツカスはしゃがんでひたすらのの字を書いている。

一体何がどうしてこうなつたのか？すべては部屋中に散乱したレポート用紙が物語っていた。

「…俺らさあ…任務の為にサッカーの訓練にかなり時間つき込んだらろ」

サンダユウがゾンビ化寸前の顔で言った。

「その間授業休みまくつたじゃん。おまけに任務は失敗だしよ。クラスによつちや…一部の教官から山のように代替課題出されちまつたんだよな…」

「…ご愁傷様」

苦笑いする他ない。現在部屋に転がっているメンバーは皆、頭を動かすより体を動かす方が得意な者ばかりだった。サンダユウの場合にはパソコン作業は得意でも、アナログになつた途端からきしという性分である。

コピペや使い回しを防ぐ為、全員直筆で紙のレポート提出を要求されたそうだ。確かに、面倒なのは間違いない。

「ちつくしよーこのご時世に紙レポとかマジ腐ってるぜ！」

「紙じゃ誤魔化しきかないもんな。まあ頑張れ」

「ちよ、何そのいかにも他人事！」

ちなみにレポート課題はエスカバも出されていた。が、こちらら頭を使う作業は本業、伊達にバダップの副官は務めていない。出されて一時間も経たずに片付けた。途中で呼び出しをくらわなければもっと早く終わっただろう。

念のため部屋を隅々まで探す。途中うつかりゲボーを蹴飛ばしたが無視する。そんな場所で転がってるのが悪い。

「…やっぱりいねえ、か」

エスカバか探していたのはバダップだった。昼前にふらりといなくなつて以来、姿が見えないのである。図書室や資料室にいる事が多いが今日はどちらも外れた。誰かの部屋に上がり込んでいるのかと思つて来てみたがここにもいないようだ。

一体何処に消えたというのだろう。寮からの外出はシステムでチェックされている。今謹慎中のオーガ小隊に外出許可が降りるとも思えない。抜け道が無いわけではないが相当面倒くさい筈だ。

「…何だよ、誰か捜してんのか。隊長？副隊長？」

「隊長の方。副隊長の女王サマは今風呂だ」

くたばっていたザゴメルが少しばかり復活して言う。

「俺達今日一日この部屋にカンヅメだけだよ、隊長は来てないぜ。出かけてる…はねえか。一応謹慎中だし」

彼にも心当たりは無いようだった。エスカバは困り果てて頭を掻く。どうしても早く訊きたいことがあったのだ。そう…彼が行うであろうミッションについて。

他言無用と念を押されているのだろう。だから誰にも言わない。増してやあのバダップだ、やすやすと落とせるとは到底思えない。

だが、それでもエスカバは尋ねたくて仕方なかった。本音は尋問にかけてても真相を知りたかった。あまりにも、不自然に事が動きすぎている。

ぐう。

その時、やや間抜けた音が聞こえ、一瞬にして全員が沈黙した。次の瞬間素早くアイコンタクトをかわし（こんな素早い連携では訓練でも実戦でもお目にかかった事がない）犯人探しをする。

「……ごめん、オレ」

ブボーが顔を真っ赤にして、おずおずと手を上げる。お前かよ！とゲボーがツツコミを入れるが - 次にはゲボーの腹の虫が鳴いていた。

「そういや、俺ら昼飯抜きだったんだよな…。課題終わるまで食わせねエとかマジ鬼だわ」

げっそりとした顔でイツカスが呟く。同時にゾンビ化していた全員がエスカバを見た。いかにも訴えています、な目線で。

「…俺に作れってか？」

エスカバは顔をひきつらせる。

「分かってんだろーエスカバ！この面子見るよ、家事の出来そうな奴は一人もいねえ！」

「ああそうだな、特にザゴメルに作らせた日にゃキッチンが地獄絵図になるな…ってんな開き直って言うなアホ！俺は嫌だぞ！！」

「なんと！バメル准尉は瀕死の小官達を見捨てて敵前逃亡でござい

ますか!!」

「やかましいっ!」

ふざけて軍人口調を発動させるサンダグウを思い切り蹴飛ばす。彼はけして不器用ではないのだ。やる気さえあれば料理の一つくらい覚えられるだろうに、そのやる気がナイ。エスカバからすれば腹立たしい事この上無かった。

「何を騒いでるんだ」

煩くなつた空間に、突然呆れ果てた声が届き――全員が反射的にピタリと動きを止めていた。

悲しいかな、軍人の性である。隊長の言葉に反応してしまうのは。

「バダツプ…!お前何処行ってたんだよ!!…って」

開け放たれたドアの前に立つ探し人の姿を見て、エスカバは固まった。文句の一つも言ってやろうと思っていたのに、台詞の全てが明後日の方向にすっ飛んでいった。

無理もない。バダツプは普段の軍服姿で――しかしその両手には大きなスーパ―の袋を握っていたのだから。

「お前：ガチで外行っちゃったの?謹慎中に?」

「C棟三階の右から二番目の窓はロックが甘い。防犯カメラにも死角があるし、少し弄れば簡単に誤魔化せる」

しれっとした顔でバダツプは言う。エスカバは目眩がしそうだった。謹慎中にこっそり外出、をやる生徒は少なくない。そして少しできる生徒ならば、どこがセキュリティの穴か探し当てるのは造作もない。

しかし。だがしかし。

このド真面目を絵に描いたようなエリートが。僅か十四歳で中尉にまで登りつめたこの天才児が。そのような真似をしようだなんて、

一体誰が予想出来るだろうか。
しかも。

「野暮用のついでに食材を買ってきた。どうせお前達、昼食も取ってないんだろっ？」

暗に、今から作ってやるよ、と意志表示。サンダユウ達は飛び上がって喜んだが、エスカバは驚いたなんてものではなかった。あの天然魔人がどうい風風の吹き回しだ。これは明日辺り季節外れの雷でも降るんじゃないだろうか。それともハリケーンでも吹き荒れるのか。

一人ぐるぐるし始めたエスカバを放置して、バダツプはスタスタとキッチンに歩いていく。床に転がる様々な障害物を避けるか蹴り飛ばすかしながら。その後ろからついていくのがサンダユウだ。

「作ってくれるのは有り難いだがよ、お前さんはいつからそこに居たんだ」

「何回もドアはノックしたぞ。気付かないくらい騒いでいた上、口ツクを掛け忘れてたのが悪い」

「うえ、最後に部屋入ったの誰だ！…ってエスカバじゃん。でもエスカバもそっぴや鍵開けないで入ってきたって事はその前の奴が…
ってうっわ犯人俺だったわ」

「不用心過ぎる。気をつける」

「いえっさー」

基本無口なバダツプにこれだけ喋らせる事が出来る人間はそうそういないだろう。基本誰とでも打ち解け、気安さが嫌みにならないサンダユウだからこそ成せる技だった。自分も友人の数こそ多いが、なかなか同じ事は出来ないと思う。

けれど。それでも尚、いつにも増して喋るバダツプに違和感が拭えないでいる。エスカバは今朝聞いた話を思い出していた。今度のミッションで、バダツプがどれだけの覚悟を決めているか、その片

鱗も見た。

だから、見れば見るほど不安になるのだ。まるでバダップが…最期の思い出作りに勤しんでいるかのようで。

彼に限って有り得ない。そうは思う、思うのだけど。

「ごはん ごはん」

「な〜にかな、な〜にかな〜」

さっきまで屍と化していたくせに、ご飯と聞いていつの間にか復活しているゲボーとブボー。きゃっきゃきゃっきゃとはしゃぎながら走り回る姿はまるで幼稚園児だ。まあ、それが微笑ましいの間違いない。

王牙学園の食堂は、健康バランスはピカイチなもの、イマイチ味気ないと誰もが言っていた。多分、味覚に関しては考慮してないのだろう。実際戦場では現地調達やら食料不足やらに見舞われ、贅沢を言っているどころでない場面もしばしばある。もしかしたらその為の訓練の一環かもしれない。

反面、部隊内でさりげなく評判だったのが、隊長のお手製料理だった。エスカバとミストレも上手いがバダップには届かない。しかも派手で豪華な料理のみならず、庶民の家庭で出て来る定番メニューも作れる事が評価を上げている。何から何まで器用な事だ。

…俺としても、助かるんだけどよ…。

キッチンはいいから机を片付けろ、とバダップに追い出されるサンダユウを見ながら思う。

自分が料理をしなくていいのは助かるし、バダップの料理は美味いから自分としても嬉しいけども。時間が経つにつれエスカバの不安は色濃く首をもたげてくる。

そもそも、買い物は“野暮用のついで”だと言っていた。このド真面目な隊長様が、校則と軍規をまとめて破ってまで外出したかった用事とは一体何だろう。

「うわお」

しまった、まだ鍵が開いたままだった。部屋の入口に立つダイツコとジニスキーを見て、エスカバは思う。いや別に彼らに非があるわけではないのだが、人が増えれば増えるほどバダツプを問い詰めることになるのは事実なので。

二人は辺りの惨状を見回し（彼らもその手にレポート用紙と筆記用具を抱えている）、次いでキツチンを見る。

「レポート助けて貰おうと思って来たら…やっぱり！」

「何がやっぱりなんだダイツコ」

お前らもかいな、とうんざりするエスカバ。

「サンダゴウの部屋で隊長の手料理が食べそうな気がしたんだ！」

「どんだけ具体的な予感だよ！！しかもドンピシャりだし！！」

ああ悲しいかな、身体が反射的にツツコミに走ってしまう。さすがオーガの食い意地No.1のダイツコだ。

そんなやり取りをしているうちに、ジニスキーはずかずかと上がりこみキツチンに侵入している。

「よっしゃ餃子確定！」

餃子の皮でもあったのか歓喜の声が届く。

「なんかさりげなく小隊メンバー集合しちまってんな。あといないのはドラツへとミストレか」

イツカスの言う通り、いつの間にかオーガメンバーのうち九人までが集合している。狭い部屋はだいぶ窮屈だが、まだ余裕が無いわけではない。誰かの部屋で総員で書類や課題退治、もままある事だ。そのまま、せっかくだからあと二人も呼んでみんなでご飯にしよう

うという話になる。エスカバはミストレの現状を思い出していた。あの女王様は風呂に入ってから部屋から外に出たがらない。声をかけても大丈夫だろうか。

ブキチレた彼の恐ろしさは、同室の自分が一番よく分かっている。想像して、思わず身震いした。

「俺は呼んでも構わないが」

そんな中、さらにバダツプのレア中のレアな発言が。

「偶には賑やかなのも悪くない」

「おお！」

マジでか。今日のアンタは一体どうしちゃったんだ。もはやエスカバは言葉も無い。

しかしそんな疑問は、不機嫌に現れたミストレと巻きぞえを食ったドラツヘが現れ。やんややんやと大騒ぎをしているうちに、頭の隅に追いやられていったのだった。

【七：パーティー・ナイト】

ミストレは、エスカバが予想していたほど不機嫌ではなかった。無論風呂上がり以外出（彼にとつては部屋から出るのも外出だ）を請われていい気分では無かっただろうが。その理由を聞いて驚きと興味が勝つたらしい。

「あのバダップが自分から？何それ、明日はスコールでも降るんじゃないの」

奇しくも自分とほぼ同じ感想に、エスカバは苦笑する他無かった。ミストレと、部屋でやはりレポートを前にゾンビ化してたドラッグへ連れ、エスカバはサンダユウの部屋へと戻った。この時ミストレがやれ髪を乾かすだのセットし直すだの化粧してないだの騒ぎ、多少時間がかかってしまったのは事実だが。

自分達が戻った時には既に、バダップの料理は完成していたのだ。つた。

「俺さー実は豪華なフルコースよりも普通の家庭料理のがずっと好きでさー」

「はいはい。ま、フルコースは味が濃かったり油っぽいのも多いからね。：サンダユウ、喋りながら手動かさいとなくなるよ」

「おつといけね。：まあとにかくだ、有難えんだよなあこついうの」
「確かに。意外と飽きないしね」

サンダユウとミストレは喋りながら、盛り付けられた料理を自分の皿にキープしていく。

どうやらバダップは中華の気分だったらしい。春巻きにチマキ、餃子にラーメン、チャーハンに麻婆豆腐。ついでにポテトサラダ。けて難易度の高い料理ではないがこれだけの量をこんな短時間で作ってしまうとは。しかもどれも、オーソドックスながら中学生男

子の人気メニューばかりだ。

- - 相変わらず…何につけても完璧だなオイ。

エスカバも自分の分をよそいながら思う。そのまま餃子をラー油入りの醤油につけてパクリ。

- - …マジで美味えし。

自分とミストレは、早々に課題を終わらせたので昼食は抜いていない。しかしいつもながらの不味い食堂だったのは間違いなく、時間的にも空腹を覚えていたのは確かだった。

思うところがなければ普通に感激していただろう。バダツプの手料理など滅多に食べられものではない。

「なあ…バダツプよ、その…」

「エスカバ」

ミッシュンについてなんだが、と言いかけて。またしても本人に遮られる。またかよ、とうんざりしつつ、何だと返事をするエスカバ。

「俺は今…認めたくはないが二つばかり大きなミスをした気がしている」

「ミスだあ？お前がかよ」

一体何の話やら。じつと皆の様子を見つめるバダツプの横顔は相変わらずのポーカーフェイスであり、口調は至って真面目だ。

「ミスその一。…料理の量が圧倒的に足りない予感がしている」

「うわあああっダイツコてめえ!!」

気がついたエスカバは叫んでいた。いつの間にか目の前からラーメンが消えている。見ればダイツコが大きな器からそのまま汁を啜っていた。それもムカつくほど幸せそうな顔で。

少し油断しただけですぐこれだ。まだ一杯しか食べてなかったの

にちくしょー！と内心かなり悔しがる。

「ミスその二」

ちらり、とバダップは呆れた目でテーブルの向こう側を見る。

「一人一人の分を均等に、予め皿に盛り分けておくべきだった。そうすればこの惨状は免れられたと推測される」

ああ、確かに。エスカバも頭を抱えなくなった。テーブルの反対側がいつの間にか戦場になっている。皿を盾に箸を武器に残った最後の餃子を奪い合うのは、王牙学園最強の特殊部隊、チーム・オーガ――の面影も無い面々。

「だからコレは俺がキープしてたんだってば！」

「んなの誰が決めたよ、早い者勝ちだろが！！」

「ってか俺まだ一個も食べてねえっ」

「知るかそんなの！！隙ありっ！！」

「うわああジニスキーこのヤロー！！」

「イタイイタイイタイ髪引っ張んな！」

「ぎゃあっ箸がっ箸がっ！！」

「俺まだ食べたらない」

「どんだけ食う気だよ、少しは遠慮とか自重とか知りやがれっ」

「そんなもんあったら俺のアイデンティティに関わるっ」

「どんなアイデンティティだよ！ああオレの皿から盗みやがったコイツ！！」

「足踏むな手引っ張るな必殺技出すなー！！ぎゃあああっ！！」

どたんばたんどつたん。

たかがごはん、されどごはん。誰も彼もが血眼になって餃子を取り合いバトルを繰り広げている。ああ、まさかミストレまで便乗するだなんて思ってた。確かに彼は華奢な見た目に反しかなり

大食いな部類だが（なのに太る気配がないとかどんな体質だ）。

「下手な戦場より最前線だなオイ…隣から苦情来る前にやめとけて」

一応言ってみるが誰も聞いていない。さらにはバダップが、多分もう遅いと思う、と呟いて。

ばったん。

ドアが勢い良く開け放たれた。

「コラアア！！うっせえぞサンダユウ！！静かにしやがれっ！！」

青筋を立てた先輩登場。ああ、結局鍵閉めてないや、とエスカバは既に現実逃避を始めている。名指しされたサンダユウはスライディング土下座で平謝りだ。

「つてか何で俺！？何で俺が代表みたく叱られてんの！？」

先輩が帰った後、涙目で訴えるサンダユウ。しかしミストレの反応は冷たい。

「だってここ君の部屋じゃない」

「そうだけど！理不尽！！」

「じゃ、代わりにバダップに謝れって？隊長だから謝れって？」

「いやすみませんそうは言ってませんミストレーネ様怖いですって

分かってるけど何か凄く切ねえっ!!」

そうこうしている間に、餃子の最後の一個はドラッへに食われていた。気付いたブボーとゲボーがあー!と八モった叫びを上げる。

「先輩の言う通りだな、お前達はもう少し静かにするべきだ」

やがて場を収束させるようにバダツプが言う。

「これ以上騒いだら騒いだ者から順に部屋から放り出すぞ」

「え、ここ俺の部屋であつてバダツプの部屋じゃないんだけど俺も追い出されちゃうの?」

「サンダユウ…悪い事言わないからお前もう黙ってた方がいいわ」
見かねてエスカバはストツプをかける。頭どころか胃痛までしてきた。ツッコミ気質に生まれた事を恨みたくなる。

バダツプの言葉もあり、さつきよりは比較的…あくまで会社比的な意味だが…静かに食事が再開された。エスカバもさつきまでの教訓を生かし、せめて春巻きとチャーハンだけでも皿にキープしていく。

「因みに食べ終わって片付けたら課題の続きをやるぞ。終わらない限り眠れないと思え」

「うへえ…やめてくれ、せっかく美味しい飯なんだからー」

バダツプの言に、げんなりした顔でイツカスが言う。ふとエスカバは気になってバダツプの手元を見た。仲間達の殆どが山盛りに料理をキープしているのに対し、バダツプ自身は少しばかりしかよそつていない。

「お前、ちゃんと食ってるか?早く取らねえとなくなっちまうぞ」

元々バダツプはかなりの小食だ。だから痩せたままなんじゃないかというも思うが、どうやら少し食べるともう胃が受けつけなくなるらしい。

しかしそれにしたって今日は少なすぎやしないか。

「必要量は摂取している。問題はない」

それに、とバダツプは続ける。

「皆が食べているのを見ている方が、楽しい」

楽しい、なんて。バダツプの口からは滅多に出ない言葉に、エスカバはまじまじと彼を見てしまう。

その横顔は穏やかだった。まるで嵐が来る前の海のように。

食事後のレポート退治は、思ったよりずっと早く終わった。自分達スリートップが揃って皆に教えて回ったのもあるが。一番はやはり、バダツプの力によるところが大きいと思う。

悔しいが彼は天才型だ。それも、努力を怠らない天才。思い上がりらず卑屈にもなりすぎない理想的な天才だ。だから偶に出る天然発言を棚上げすれば、人に教えるのも下手ではない。寧ろ、上手い。

ミストレは事あることに湧き上がる己の劣等感と、全力で戦わなければならなかった。かつてはバダツプを恨んでいたが、今は自分を恨んでいる。いちいち醜い感情を思い出す自分の弱さが恨めしくて仕方なかった。

バダツプはメンバーの性格も性質も、ゼロコンマレベルで把握している。その上で出す指示はいつもの確で、抜かりが無かった。レ

ポート課題に関してもそれは変わらない。

- オレだって才能が無いわけじゃない。自惚れじゃくて客観的に見てもそう思う。

だけど、と。ミストレは小さく唇を噛み締める。

- オレは…バダップほど努力出来ない。努力する天才には、どうやって勝てばいいんだろうな…。

散らばった紙やシャーペンの芯を片付けながら、思う。これ以上考えこんではいけないと分かっていた。考えれば考えるほどドツボにハマる、抜け出せなくなる。それは決して良い事ではない。

「そういえば」

ふと思い出したようにジニスキーが口を開く。

「久々に都庁前で花火大会やるらしいな今日。すっげえ久々だったクラスの奴が騒いでた」

花火。五十年くらい前までは頻繁に行われていたらしいと聞いた事がある。政府の要人が巻き込まれる大きな事故が起きて、一時から殆ど実施されなくなったのだ。だから稀に見れる花火を楽しむにすら国民は多い。

ミストレも、花火は嫌いじゃない。寧ろ好きだった。綺麗なものを嫌う理由がどこにあるだろう。

「都庁の花火つてもはや伝説レベルっしょ。ミツ　I型とかもバンバン上がるらしいし」

「うあゝ見に行きてえなあ」

「無理。俺ら謹慎中」

「そーでした。ちくしょ、タイミング悪いぜ」

悔しげにサングラスとダイヤコが喋る。一人二人なら、バダップと同じ手で抜け出せなくもないだろう。しかしこの大人数では少々厳しい。

「見れなくはないぞ」

移動させた机を戻しながらバダップが言う。

「屋上だ。平日なら鍵もかかってないだろう。多少距離はあるが問題ない筈だ」

なるほど、と一同は顔を見合わせる。休日祝日は鍵のかかっている屋上も、平日の今日なら開いている。同じ事を考える生徒も多そうだが、高さは申し分ない。王牙学園の建物は十階建てだ。

「八時開始だろ。天気大丈夫か」

ザゴメルの言葉に、ブボーとゲボーが同時に窓に走る。そして、微妙だ、微妙だな、と言い合っている。ミストレもさりげなく外を覗けば、空はどんよりと曇っていた。

朝見た、今日の天気予報を思い出す。一日を通して晴れ時々曇り。夜は所により雨になるでしょう、だったような。降水確率、50%。

「文字通り、運を天に任す…だなあ」

「いや、そこで上手い事言われても」

ミストレの呟きを拾って、イツカスが苦笑いする。内容もそうだが、感情がそのまま声に現れていたせいだろう。せつかくの花火が中止になったらガツカリするのはミストレも同じだ。

「雨が降ったら無理だが」

バダップが目を細め、外を眺める。

「もし降らなかったら…みんなで見に行くのも悪くないな」

その声が少し、ほんの少し切なげで…ミストレは胸が痛くなつた。知らない者と知った者。置いていく者と待つ者。果たして本当に不幸なのはどちらだったのだろうか。

【ハ：ビューティフル・ワールド】

天気は良い方に転がってくれたようだ。少なくとも曇りだろうと予想していた面々は、思わぬ快晴に顔を綻ばせている。ミストレも例外ではない。

世界を代表する先進国。その中でもさらに大都会と呼ばれるこの街は、眠らない事でも有名である。オフィスビルの殆どが深夜でも明かりがついたままで、歓楽街に至っては人が絶える事がない。

常に明かりの消えない都会では、星を探すのも困難だった。田舎の天然プラネタリウムには感激した。月も星も、ミストレの好む“美しいもの”の基準に充分当てはまるもの。だから少々残念なのだ、この街で星があまり見えない事は。

だが今日は。よほど空気が澄んでいるのか、いつもよりハッキリと星空を拝む事が出来た。滅多にない事 - ああ今日は、滅多にない事だらけだ。

「やっぱ混み混みだなあ……」

八時ちょっと前。屋上は生徒でごった返していた。謹慎処分をくらってる生徒などオーガを含め僅かなものだろうが、やはり手近な場所から見たいのが心理だろう。

男子生徒に女子生徒、さらには教員までもが集まってきている。

これでは星はよく見えても肝心の花火は怪しい。

「ザゴメル」

「ザゴメルってばー」

「あーはいはい、言うと思ったぞこのチビどもが」

ザゴメルが呆れ半分苦笑半分で、せがむブポーとゲポーを両肩に乗つけてやる。好位置をキープした二人はまるで幼子のようにしゃいだ。

「うわぁズリーの」

「諦める、子供の特権だ」

「いや、あれで俺らと年変わんねーから。子供っつーよりチビの特権だな」

悔しげながらも、喋るイツカスとドラツへはどこか楽しげだ。まるで小さな子供を見守るかのような微笑まじさを彼らも感じているのだろう。

優秀ながらも年よりずっと幼い双子は、殺伐としがちな小隊の癒しになっていた。

「人垣すげー。どうするよコレ」

意見を求めるようにこちらを見てくるエスカバに、ミストレはニヤリと笑ってみせた。実はこっそり、秘策があったりするのである。

「任せてみ。…カリナ、サザン」

ミストレはちょいちょいっと近くにいた女の子に手招きした。彼女達はミストレに呼ばれるやいなや、喜色満面で走り寄ってきた。

EクラスのカリナとBクラスのサザン。どちらもそれなりに優秀な士官候補生だが、中身はミーハーな民間人の女子と変わらないイケメンとオシャレとハヤリが命。気がつくといつもミストレについて回っている。追っかけ、あるいは親衛隊といったもののリーダー各だった。

「ミストレ様、あたくし達に何かご用意ですか？」

派手に着飾ったお嬢様のカリナに、ミストレは微笑んでみせる。彼女達が黄色い声を上げ、大人達が天使だと誉め讃える笑みだ。自分の容姿レベルの高さもまた、ミストレの計算内だった。

予想通り、カリナは真っ赤になって気を失いかけている。

「君達に頼みがあるんだけど、いいかな？」

「あ、あたし達に出来る事なら何でもっ！」

カリナを押しつけるようにして叫んだのは、学生らしからぬバツチリメイクのサザンだ。あまりに少女漫画のような“恋する乙女の必死”さを見せる彼女に、毒吐きなミストレも失笑したくなる。

追っかけとストーリーカーは紙一重だ。対象が迷惑を被るんならどっちも変わらない、というのがミストレの考えである。勝手に自分に憧れて騒ぎ立てつきまとう彼女達が、ミストレは正直うざったくて仕方なかった。しかし、利用価値が無いかといえれば決してそんな事は無く。

「オーガのみんなで花火見たいんだけど。この人混みだからね、ちよっと困ってたんだ」

最低男と言いたければ言え。これもれっきとした策略だ。ミストレは心中で開き直る。

「何とか、見れるようにしてくれないかな。君達になら、出来るよね？」

トドメスマイル、炸裂。少女二人は頭から湯気が出そうなほど真っ赤になって、はい！と裏返った声を上げた。そのまま回れ右をして。

「ミストレ様親衛隊の諸君、出番ですわよ！」

「ミストレ様とオーガの皆様が花火をご所望よ！！道を開けさせて頂戴！！」

彼女達が声を張り上げた途端、何人もの女子達が反応し、敬礼した。

「イエス、サー!!!」

もはやこれは一小隊レベルの統率力・連携力だろうといつ見ても思う。カリナとサザンの声に完璧に答えた少女達（中には明らかに大人とか男とかも混じっているが見なかつた事にしよう）は、力技で人垣をどかし始めた。

中には“道開けないとぶっ殺す”オーラを振り撒いている者達もいて――一部の生徒や教師が真っ青になって逃げていく。騒ぎはほんの数分だった。

「さあ、どうぞミスト様っ!」

やがて屋上にはオーガメンバー分の特等席ががっぽり開き――エスカバとサンダユウが引きつった顔を見合わせた。

「なんつーか…親衛隊って怖え。女ってマジ怖え。寧ろ俺はお前が怖え」

「でしょ。だから敵に回さない事を全力で勧めるよ」

「……ああ」

凄絶に微笑んでやれば、エスカバはげっそりとした顔になる。ちよつと悪戯が過ぎただろうか。これくらい軽く流せばいいのに、相変わらずの真面目っぷりだ。

ちなみに、オーガは小隊自体で人気が高い。こっそりファンクラブがあるのも知っている。

また、表沙汰にはなっていないが、個人個人の親衛隊もある。ミストレの親衛隊は過激ゆえ目立つが、目立たずとも彼らはひっそりと存在するのである。エスカバも例外ではないのだ。

因みに一番規模が大きいのは隊長のバダップである。リーダーが教師らしいと専ら噂で、活動人数は四桁に上るとかなんとか。まったく恐ろしい話だ。

エスカバにも教えてやろうか、と少々意地悪な事を思う。彼はま

さか自分にファンクラブがあるなんて想像もしていない。ましてや男も結構混じってます、なんて言ったらまず卒倒するだろう。

「いつの間にか場所が空いたな」

「バダップお前、今の見てなかったのか？それとも天然でスルーしてんのか？」

「エスカバ、バダップにそういうツッコミはするだけ無駄だから。」

その天然馬鹿は脳内構造からおかしいもの」

「これで花火が見れそうだ」

「そしてオレ達の言葉をまとめて無視、と」

「…よく分かったよミストレ…」

いつの間にか漫才のような会話になっている自分とエスカバ。誰かさんが素晴らしいボケをかましてくれるせいと、エスカバが見た目によらず生真面目にツッコミに走るせいだ。いやまあ、これが平常と言えばそれまでだけでも。

腕時計を確認する。このハイテクなご時世に、電波式じゃない古い型の腕時計をミストレは好んでいた。デザイン上の好みもあるし、わざと時間を進めておきたいのもある。今つけているこの青い時計も、五分ばかり進めてあった。

時計はそろそろ八時五分を指す。実際の時間はマイナス五分だから、もうそろそろ始まる筈…。

「あー！」

ブオーが目を輝かせて夜空を指差した。パァン！と一つ、景気良く上がった大きな花火。それが始まりの合図。次々と赤、青、黄、緑、ピンク、紫…色とりどりの華が夜空に咲いて、散っていく。

「あー…そうだ」

ミストレはある事を思い出して、残念な声を上げた。

「しまった。花火と言えば昔懐かし浴衣じゃん。前の花火の時、次こそ絶対浴衣来てやるって思ったのに！」

前の時 - - ずっと昔の事だ。まだ幼いミストレは両親に手を引かれて花火を見に行った。絵になるからおさがりの浴衣を着せられ、最初は嫌がっていたものの - - 誉められ続けるうち満更でもなくなつた。

ああ、あの時からだっけ。自分がこんなにも顔に、美しさに固執するようになったのは。

- - 美しいモノは、好き。大好きだ。

だけど、と。心の中で呟く。

- - 今は、知ってる。本当の美しさは - - 見た目で決まるものじゃない。

力ではない。武器でも権力でも、ましてや暴力などではけして築き上げられぬもの。

本当の意味での、強さ。心の強さを、絶望を前にして尚立ち向かう勇気を持つ者こそが、真の美を誇る事が出来るのだ。

それこそが今のミストレの最終目標だった。完璧になつてやる。ただでさえ容姿に恵まれた自分が中身まで磨き上げられたら、もう非のうちどころが無いではないか。

その為にはもう何一つ驕るまい。思い上がるまい。努力だつて怠るまい。

- - いつか君に - - バダップに追いつく為に。追い越す為にね。

「浴衣か…」

そんなミストレの視線に気付いてか気付かずか、バダップが思いを馳せるように呟く。

「八十年前までは祭で頻繁に見られたらしいが。七十年前には相当減っていたとデータにあったな」

「あの十年がこの国の最初の転機だったらしいからな。ホーリーロードの支配、必殺技の戦闘特化研究…」

資料を思い出したのだろう、エスカバが苦い顔になる。

「多分、あの頃あたりからなんだろうな。サッカーが…勇気ってヤツを忘れて、変わっちゃまったのは」

三回連続で、パタパタと火薬が鳴った。空に打ち上げられた華は、かのミツーマウスの形になって開く。ザゴメルの肩の上で、双子が歓声を上げた。

「…確かに。俺達も、この国も…大事な事を見失って、変わってしまったんだろう」

よく通るバダップの音が、空間を静かに統べる。気付けば耳を傾けてしまう魔力。それがミストレが唯一認めた存在だった。

「だが。変わってしまったなら…もう一度変えられる。何度だって変えられる。俺達に、勇気さえあるのなら」

「…そうだね」

どんな値打ちがあるかも分からない世界だけど。ほんの一握り、護りたいモノがあるから誰もが此処にいる。必死でこの国の、皆の、自分の未来を考えている。

もう一回。もう一回。また駄目かもしれないと恐れながらも、明

日に手を伸ばす。素敵な明日を願っている。幸せになる為に。幸せにする為に。

「これからやる事はたくさんある。でもそれもまた…幸せな事だ。そうだろう？ミストレ、エスカバ」

夜空を飾る黄色の花火。まるで蒲公英のようだった。黄色は幸せの色だと、誰かが言っていたのを思い出す。そしてバダップの言葉を噛み締める。

やる事はたくさんある。それはつまり自分達にならやれる事があるという事。

必要とされて、幸せでない筈がない。

「…永遠なんか、いらない。命も、若さも、幸せさえも」

だからミストレは口を開いた。彼らにどうしても伝えなかったのだ…この感情を。想いを。

「だつてさ。捕まえられないくらい短くて、儂いからこそ美しいんじゃないか。花火も…人生も」

やるべき事は多いけれど。限られた時間で成し遂げるからこそ意味があるのだ。

「そつだ、ミストレ」

後になってミストレは思うのである。花火の彩る夜空の下。本当に“美しかった”バダップを、彼の言葉を。自分は一生忘れる事は無いのだろう、と。

「大事なものは長く生きる事じゃない。短い人生で、どれだけ多くの証を遺せるかだ」

バダップは微笑んでいた。

自分達は、笑っていた。

【九：ファイナル・ヘブン】

バダップは考える。一台の電話を前にして。

何が正しいのかなんて今でも分からない事だった。今まで、当たり前のように信じてきたモノが間違っていたかも知なんて・・・思ってもみなかったから。

だから今、考えている。時間が許す限り、そして生きている限り。少しでも人生に悔いを残さない為に、自分についてきてくれた仲間達に報いる為に。

・・・結論は、出ない。

バダップは心の中で呟く。

・・・だがこれは...誰に指図されたわけでもなく、俺の意志で決めた事だ。

オペレーション・サンダーブレイクを妨害し。過去にカノンを送ったのがキラード博士である事はもはや間違いない。しかしバダップはそれを、上の誰にも報告しなかった。無論ヒビキにもバウゼンにもだ。

正解など誰にも分からない。もしかしたら誰もが正しくて、同時に間違っているかもしれない。でも。

もし・・・もしも。本当に未来の為になるのがどちらかと言われたならば・・・きつとキラードのした事は、正しかったのだろう。

ならば。

その力を、潰す必要はない。寧ろ潰してはならない。いつかこの国を背負って立つのが自分ではないとしても。

「バダツプ君」

電話 - - という名にしては巨大な機械の横。忙しなくキーボードを叩いていた指を止めて、キラードが顔を上げる。

「お待たせしました。セッティング、完了です」

「恩に着る」

「いいえ。お気になさらず」

バダツプは今、再びキラード博士の研究所にいる。よもや自分が二度までも学園を脱走する事になるうとは思ってもみなかった事だ。

本当の事を。本当の彼らを知りたくて、キラードとカノンに会いに来た。それはもしかしたら - - もしかしたら残りの人生が僅かばかりかもしれない自分が、気持ちに整理をつける意味もあったかもしれない。

そして、決断を。

未来を繋ぐ為の - - 護る為の。

「繋げる時間はそう長くありません」

キラードはモニターを覗いて告げる。

「長くて十分。短ければ三分。急に通話が切れる可能性もありますので、ご容赦下さいね」

今日バダツプが此処に来た理由。それは、電話を借りる為であった。勿論、普通の電話ではない。時間を越えて繋ぐ事の出来る、いわば開発者のキラード博士の専売特許的代物であった。

未来の人間を直接過去に飛ばすのではなく、声だけを過去の電話線に繋ぐ。タイムワープに比べれば干渉度は低く、第三者に気付かれにくいのが強みだそうだ。ましてや、話が出るのが精々十分程度であれば。

- 最期になるかもしれない。もう二度と逢う事もあるまい。…だつたら。

せめて今の自分の素直な考えを、彼に伝えておきたいと思ったのだ。そう、自分が出逢った円堂守 - 今やこの世界に繋がらぬ、パラレルワールドの世界の住人となってしまった彼に。

既にあの円堂は、自分達の過去の人ではない。しかしキラード博士ならば、円堂カノンを飛ばしたあの日の記録を照合し、波形を辿る事で、あの円堂とコンタクトを取る事が可能なのである。まったく恐れ入った技術だ。

- 謝る事は出来ない。例えまた出逢えたとしても、それはきつくない。

あの日のバダップが信じていたもの。確かに正義だと考えていたこと。結果としてそれが過ちだったとしても、そう信じて戦った己を否定する事は出来ない。何故ならそれは己を信じてくれた仲間達をも否定する事になるからだ。

だから、謝罪は出来ない。それはただ身勝手なだけ。自分が楽になりたいだけの行為だ。少なからず罪の意識を感じるならば、そこからの解放など望んではならない。

- でも。礼を言う事は…出来る。

あの日引き裂かれた時間。言えなかった事を、今度こそ言えるように。

もう二度と、後悔しない為に。

「接続、開始します」

キラードの声と共に、機械が音を立てて動き出した。設定された周波数、ナンバリングされた一つの世界に向けて、発信される電波バダップにとってはつい一昨日の事でも、彼らは今や時間を越えてさえも巡り会えない存在だ。その壁を今、電波がどこまでも越えていく。

不意に気配を感じて振り向く。昨日整理したばかりの、まだ綺麗な研究室。その、廊下に行く茶色のドアの向こう。

多分、カノンだろう。現役軍人の自分を相手に盗み聞きがバレないとも思ったのか。息を殺し、どぎまぎしながらこちらを窺っているのが手に取るように分かる。いつそ微笑ましいほどに。

だが、バダップは特に声をかける事も、彼を追い出す事もしなかった。分かっていたからだ。彼がそんな真似をしているのも、全ては自分を心配してゆえがという事を。

受話器の向こうの音が変わった。ぐわん、と一瞬大きく耳なりがしたかと思うと、昔懐かしい呼び出しのコール音が響き始める。

目を閉じて、バダップは相手が出るのを待った。少しだけ、ほんの少しだけ、柄にもなく緊張している自分がいる。

『…もしもし?』

相手が出た。繋いだ時間軸はフットボールフロンティアの翌日、その午後十時。この時間ならば、家人は円堂本人と母親だけであり、母親は家事で忙しいので本人が出る確率が極めて高い。

また、フットボールフロンティア決勝から数日間は、円堂の周囲も平穏だ。

円堂守を語る上で欠かせない大きな出来事。その一つがエイリア学園の連続中学校破壊事件、後に語られる吉良事変である。この事件が起こるタイミングが不確定であり、ある平行世界では決勝当日に発生するというデータもあるが、少なくともバダップの世界に

おいては、五日ほどの間があった筈である。
余裕を持って話をするなら、これ以上無いタイミングだ。

「……円堂守、か？」

念の為確認を取る。相手が一瞬、息を呑む気配があった。自分と円堂が出逢ったのはたった一度。直接会話を交わしたのは試合中と試合後に数えるばかり。

名乗らなければ、きっと向こうは分からないだろうと思っていた。だけど。

『……………バダップ？』

長い間の後。疑問符つきとはいえ、相手 - 円堂が自分の名を呼んだ。

『え、ええ！？バダップだよな！？一体どうやって電話…えー！？』

その明らかな驚きぶりに、分かりやすい反応について苦笑してしまふ。まったく彼らしい、しかし当たり前前の反応だ。

「詳しくは割愛するが。円堂カノンが使用したシステムを借りて通話している。こちらには時間を越えて会話が可能な電話も発明されているんだ。お前達の時代には無かっただろうがな」

喋ってから、少々言葉を選び間違えたかなと思った。雷門中は極めて偏差値の高い私立校だが、円堂守自身の成績は超低空飛行だったとあった筈だ。難しい単語は通じないのではないか。

しかしそれは杞憂だったらしい。話は通じたようで、未来って凄えのなー！と感心して返される。

「今日は…礼を言いたくて、電話した」

本当は直接言いたかったけれど。

それはきつともう、無理だから。

「もう二度と逢う事も無いだろう。だから…せめて」

せめて。伝えておきたい事だけでも。

『もう二度と逢えないって…どうしてだよ？また時間飛んでこればいいじゃんか』

円堂が困惑して言う。まったく簡単に言ってくれる。未来人がタイムワープする事により起きるバタフライ効果、その危険性をまったく分かっていないのか。あるいはそもそも知らないのか。

まあ円堂に関わってしまったえば、全ての効果が打ち消されてしまうのだけ。

「時間を越えれば、僅かでも必ず歴史が変わる。本来ならばそれタブーだ。我々のミッションは特例中の特例、実際政府の認可が降りた行為でもない」

『そうなのか…』

「それに」

言うべきかわざるべきか。少しだけ悩んで、バダップは続ける。

「我々は…ミッションに失敗した罰で、現在謹慎処分中だ。チームは近く営倉入りが決まっている。この電話も学園を抜け出して秘密裏にかけているんだ」

嘘は吐いていない、と思う。ただ“営倉入り”が自分以外のオ

ガメンバーだというだけ。

『ミッシヨン失敗って…試合に負けただけじゃないか』

「それが我々の軍の方針。第一、軍規違反を犯した者が罰されるのは当然だろう」

口にしてから、本当は少し違うけれど、と心の中で訂正を入れる。ミッシヨン失敗は軍規違反とは違う。ただ一つ、暗黙の了解に反した事は間違いないのだ。

つまり。提督が厭うサッカーを - - 楽しむなかれ。円堂守の悪しき呪文に掛かるなかれ。軍の方針を疑うなかれ。

これらも正確に文面で規定されている事ではない。だがもはやヒビキ派からすれば書くまでもない常識であり絶対的命題であった筈。自分達はその全てを破ってしまった。そういう意味では、罰を受けてもおかしくない。

実際円堂に出会って実感した。彼の言葉には力がある。魔法と呼んでも差し支えない。彼の祖父が“希望の魔術師”と裏で呼ばれていたように、孫の彼も紛れもない“浄罪の魔術師”であった。自分達もまたその魔法に囚われてしまったのかもしれない。

でも今。それでも構わないと思っている。彼は代わりに、別の魔法から自分達を解放してくれたのだから。

「円堂。あの時俺は、任務という使命感だけでサッカーだけでした。サッカーとは、敵の戦意を殺ぎ潰す為の、スポーツの形をとった戦闘だ」と

サッカーは楽しいものだという円堂。しかしバダップはサッカーが楽しいだなんて思った事は一度も無かった。ただ淡々と敵の心を殺せばいい、戦闘不能に追い込めばいい。それが自分に課せられた役目だと、そう思っていた。

それなのに。

あの試合で - - 気付けば熱中していた。任務ではなく、円堂の心

を折ろうと意地になった。己は間違っているかもしれない、そんな予感に抵抗する自分がいた。

「あの試合も、楽しいものではなかった。でも…お前達と戦って、思った。いつか」

自分はとても不幸だったかもしれないなんて。気付いた時は衝撃的で、恐怖で。

しかし。己の世界にかかっていた黒い霧が晴れたのを、確かに感じたのだ。

「いつかお前達と、楽しいサッカーがしたい、と」

それはけして、叶わない願いだけど。

『…じゃあ、すればいいじゃないか』

円堂は言った。事情を理解して尚あっさりど。

『お前も色々大変みたいだけどさ。願ひ続ければ可能性はゼロじゃないだろ』

だから、と彼は続ける。

『サッカー、やろうぜ！どんな世界だって、最後に勝つのは諦めない奴なんだからさ！』

そうだな、とバダップは思う。諦めない事が力になる。可能性を引き寄せる。彼らは身を以て証明してみせた。

「ありがとう…：田堂守」

勇気があれば未来さえ変えられる。絶望さえ打ち碎ける。田堂は
そう教えてくれたから。

自分も諦めまい。生きる事を、未来を。

「また、サッカーをしよう」

田堂が笑ったのが電話越しでも分かった。だから。

『ああ！約束だ！！』

バダップも、笑った。

【十：アヴェ・マリア】

最初から立ち聞きするつもりだった訳じゃないんだ、と。カノンは自分自身に対し、必死で言い訳する。そんな事をして誰が聞くわけでもないし、意味があるとも思えないのに。

いつものようにキラード博士の研究所に遊びにきて。最近聞いたばかりの声が研究室から漏れてきたので――つい、ドアの隙間を開けて覗き込んでしまったのだ。

時間を超えられる電話がある。それもキラード博士しか持っていない貴重なもの。それは知っていたが、カノンは使おうと思った事はないし、そもそもキラードに使用禁止だと言われていた。だから電話をバダップが使い、キラードが許可を出した事に純粹に驚いた。過去で、バダップが話すような人物といえ、一人くらいしか思い当たらない。そう思ったら余計下世話な興味が湧いてきて、歯止めがきかなくなった。

「今日は…礼を言いたくて、電話した」

会話の全てが聞こえた訳ではないし、きっとバダップもカノンの立ち聞きに気付いていただろう。

「もう二度と逢う事も無いだろう。だから…せめて」

だが、聞くべきでは無かったのかもしれない。カノンは後悔して、しかし足は凍りついたように動かなかつた。

『もしかしたらまた…俺の大事な誰かに、危機が迫る時があるかもしれない。もしかしたらそれはお前の大事な誰かでもあるかもしれない。…お前が俺を友達だと思ってるなら、頼みを聴いてくれるか』

思い出したのは、昨日のバダップの言葉。ミッションに失敗したオーガは大丈夫なのかとカノンは尋ねた。しかし彼はその問いには答えてくれなかった。

『いつか、その時が来たら』

彼もまた自分を友達だと認めてくれたのかもしれない。そうだとしたら嬉しい。嬉しいけれど。

『助けてくれるか。例えそれが、この世界のお前の曾祖父でなくとも。お前のかつての敵だとしても』

いつかって、その時って？あの時点でそう訊きたかった。彼がこの先にどんな未来を予見しているのか、何を描いているのかが全く見えない。なのにそんな頼まれ事など――一体どうしろというのだ。不安が明確な形になってカノンにのしかかる。

ミッションに失敗した事で彼は、彼らは何かの罰を受けたのだろうか？あるいはこれから受けるのだろうか？それは誰にも話したくない――あるいは話してはならないものだとでも？

こんな時思い知らされる。自分が凡人で、軍人でも何でもない一般人に過ぎない事を。

それは幸せな事だと分かっている。だけでももう少しだけでも彼らに近い場所にいたら、せめてその身に起きている事を想像するくらいは出来ただろうに。

「バダップ君、時間です。接続を終了します」

キラードの声に我に返った。どうやら電話が終わったらしい。「短い時間でしたが…話したい事は話せましたか？」

「ああ」

「なら良かったです。いろいろやった甲斐ありましたよ」

二人の声はどちらも穏やかなものだった。不意にカノンは思う。キラードは一体何処まで知っているのだろうか、と。カノンには使うなど言った電話まで貸して、自分達が出逢った“円堂守”の平行世界をわざわざ探し当てて。

自分には知らない事も、博士は知っているのかもしれない。あるいは悟っているのだろうか。バダップがどんな覚悟を決めてそこにいるのかを。

「時に……そこに隠れている円堂カノン。いつまでそこに突っ立っている気なんだ？」

急に名前を呼ばれ、思わずぎくりとする。バシているのは百も承知だったが、なんとなく出ていくタイミングを逃していたのも確かだった。

「ご、ごめんバダップ。なんか出て行き辛くてさ。…ところで」

もういい、どうせ立ち聞きが知られているなら開き直って訊いてしまえ。そう決めたらカノンは早かった。

「さっきの電話の相手って、ひいじいちゃんだよね？どうして電話したの？」

「どうして、とは？」

「あー…」

しまった、この尋ね方はよろしく無かったか。

この短期間でバダップのポケつぶりと対処方を把握し始めているカノンである。

「どうしてひいじいちゃんに電話したくなったの？それに曾倉入り

って本当？」

バダツプは沈黙する。彼のこの間は、言うか言うまいかより言葉を選んでの間だろう。なまじ頭が良いから、何につけても最良の選択ばかり考えてしまう。そのくせ他人からすれば適切とは言い難いものであったりする。これも昨日今日で分かった事だ。

まだまだ距離は遠いけれど。本当はまだまだ友達と呼べる間柄ではないだろうと第三者が見れば言うかもしれないけれど。

カノンは思うのである。バダツプは自分の友達だ。サッカーをやって彼とも友達になれたのだ。自分がそう思うのだから友達に決まってる。誰にも文句は言わせない。

だから。その友達を心配して何が悪いのか。それはきっと当たり前前の事だ。

「…そうだな」

じつ、とカノンの眼を見据えて、バダツプは口を開く。

「悔いを残したくなかったのかもしれない。万が一、なんて。今まで考えた事も無かったが」

万が一？と。つい鸚鵡返しに訊いたカノンに、バダツプは肯く。

「最期になるかもしれないから。だから…約束が欲しかったのかもしれない。そうすれば、帰って来れる気がして」

最期。最期って…何？

その不吉な言葉に凍りつくカノン。するとそれを見越してか、バダツプが小さく笑みを浮かべて近くのソファァーを指さした。座ったらどうだ、の意だろう。お言葉に甘える事にする。

正直、奇妙な畏れが全身を巡って、今にも膝から力が抜けてしま
いそうだったから。

「オーガは罰を受けて…営倉に入るんだよな？」

営倉・・・というのが軍隊の牢屋みたいなものらしい、という話は
聞いた事がある。

「それが何で…これから死ぬみたいな話になるんだ？」

これは己の直感に近い推測。バダツプは嘘を吐いていないのかも
しれない。だが、何もかも語っているかと思えば違う気がする。

元々言葉の少ない、足りないが目立つ彼だけ。円堂に語る際は、
意図的に言葉を減らしたように見えたのだ。根拠は無かった。しか
し今、バダツプが言った一言で不安は色濃いものとなった。

最期、なんて。それではまるで・・・これから生還の望みの無い戦
場に赴くようではないか。

「……やはり、似ているな」

「え？」

沈黙の後、バダツプは小さく息を吐いて言った。

「似ている、というより…同じだ。お前と、円堂守は。お前達の前
では、何かを偽れる自信がない」

どんな嘘を吐いても見破られてしまう、というより。嘘を吐く事
そのものが罪深いように思えてしまう。バダツプはそう続ける。

曾祖父と、同じ。その言葉はカノンにとって静かな驚きだった。

確かに八十年前の曾祖父を見れば、いかに顔立ちがそっくりは見
て取れるだろう。だが、バダツプがそういう意味で語っていないの
はカノンにも分かる。

形にはならない、何か。ある者はそれを信念と呼び、ある者は魂と呼ぶのだろう。きつとバダップにもうまく説明出来ないものなのだ。

驚きにかき消されつつ、確かな歡喜が胸の奥に満ちる。円堂守の強さは、カノンには遙か雲の上のものだった。伝説に等しいかの人と自分では、比較する事もおこがましいと思っていたのに。

自分はおかの人に少しでも近付けているのか。少なくともバダップがかの人と自分に同じものを感じてくれる程度には。だとしたら - 嬉しくない筈が、ない。

「俺は、嘘は吐いていない。オーガ小隊は一定期間営倉入りになる。これは本当だ。ただし…」

「ただし？」

「その期間やその後の処遇は…俺の働き次第になると言っている」
「どういう意味だろう。カノンは無意識にキラードを見て - 彼がサングラスごしでも分かるほど、苦々しい表情を浮かべている事に気付く。」

彼は、悟ったのか。バダップの言う処罰の意味が、彼の言葉が。

「明後日から、俺は僻地に発つ。単独のミッションだ。詳しい内容は機密ゆえ語れないが……安全な仕事とは、言い難いな」

多分、言葉を選びを選んでそう言ったのだろう。選び間違えればカノンにどれだけ負い目を背負わせるか、心配をかけるか分かっていたから。

だが。もしそうならその試みは失敗している、とカノンは思う。理解してしまったから。安全ではない - - なんて、そんな次元の話ではないのだ。きつと命に関わるような、危険極まりないミッション。少なくともバダップが“最期”かもしれないと思うくらいには。

「俺、が…」

やっと絞り出した声は、掠れきっていて。

「俺が、君達の作戦を邪魔したから……？だから、そんな目に遭わなくちゃいけないようになったの……？」

情けないなあと、心の中でもう一人の自分が嗤った。

何故一番最初の段階で予想出来なかったのか。仮に分かっていたところで自分は同じ道を選んだのだらうけど。

それでも……腹を括る事は出来た筈だ。自分のした結果に責任を持つ覚悟くらい、決められた筈なのに。

薄々勘づいた後も、目を逸らしていた。きっと大丈夫だろうと信じるフリして、考えないようにしていた。逃げていたのだ。

間接的とはいえ自分が……誰かの未来を壊したかもしれない。そう考えるだけで怖くて、恐ろしくて。なんて酷い人間だろう。

「……結果としてはそうだが……カノン」

バダツプは事実を否定しなかった。その上で。

「お前のやった事は、間違っていない。寧ろ誇るべき事だ。何故なら」

カノンの行いを、肯定した。

「お前のやった事で、救われた者が確かにいる。少なくともあの世界の円堂守は救われた。そして……俺達も」

カノンは無意識に俯いていた顔を、上げる。目があった先。バダツプはとても優しい顔をしていた。一見すればいつもと変わらぬ無

表情なのだけど……全体に纏う雰囲気、柔らかいものになった。

ああ、そうか、と思う。彼も何かを吹っ切って、乗り越えて此処にいるのかと。

「この世界に絶対的な正義も悪も無い。誰かが正しいと思う事が、別の誰かにとっては悪かもしれない。それがぶつかり合う事で人は争い、傷つけあう」

「……うん」

「けれどそれもまた、意味ある事だと思う。いつか分かり合い、より良い未来を築いていく為ならば」

己が正しいと信じてやった事で、涙を流した人がいたかもしれない。自分達はそれを覚悟して生きていくべきなのだろう。

「サッカーと……一緒だなあ」

「そういう事だ」

試合が終わればみんな仲間だ。そして勝者は敗者の傷を背負って上に行く。

同じだと、カノンは思った。

「あ……なんかサッカーしなくなっちゃった！」

ソファーにひっくり返って足をばたばた。やっぱり自分はサッカー中毒でサッカー馬鹿だ。子供だな、とバダップに苦笑される。

「何なら皆を誘ってもいいが」

「マジ!?!」

終わりの見えた世界。それでも輝いていた一瞬があった。

自分達は確かに繋がっていたのだ。

サッカーという名の、絆で。

【十一：ワールズ・エンド】

出撃命令が出てから、三日。あつという間の三日間だった。それはバダップが必死で僅かな時間にやりたい事全てを詰め込んだのが大きいだろう。最期にしたいくない、でも最期になるかもしれないから。目に映る全てに別れを告げてきた――悔いを残す事の無いように。

仲間達には結局殆ど何も告げていない。汚名返上の為の極秘ミッションだと言っただけだ。嘘ではない。しかし例え極秘任務で無かったとしても、自分は語らなかつただろうなと思う。

反政府テロ組織・レッドマリア。構成人数およそ千人。本拠地がない、世界各地に散らばっているであろうサブメンバーを含めれば、さらに数百人上乘せされると予想されている。

バダップの任務はこの本拠地を壊滅させ、機密を盗むか、無理でも廃棄してくる事。つまり、たった一人で少なくとも千人以上を戦滅しなければならぬのである。

命の保証などある筈もなく、生きて帰れたところで五体満足で戻れるとは到底思えない。捕まったら死ぬより惨い拷問にかけられ、延々となぶられ続けるかもしれない。

成功確率は客観的に見て5パーセント。それでもバダップは任務を受けると決めた――仲間達を、オーガを護る為に。

――今頃あいつらは営倉か…。

レッドマリアの本拠地近く。施設を一望できる丘の上に身を潜めながら、バダップは思いを馳せる。

――営倉から見る空も、きつと同じ色なんだろう。

見上げた空は青く、澄み渡っている。この色を、忘れないように目に焼き付けておこうと思った。全てが終わった時、この瞳はもう光を映していないかもしれないから。

事前の情報に基づき、予め作戦は決めてある。レッドマリアのボス、アルフレッド・シユタール。鍛え上げられた剛腕と、米軍時代に築いた人脈・情報網を使つてのし上がった元・陸軍小佐。粗暴な見た目と裏腹に切れ者で仲間内の信頼も厚いという。

だがこの男にも弱点はある。一つは自信過剰になりやすく、一度見下した相手に油断しがちな傾向にある事。もう一つは・・・子供に對する歪んだ趣向。男女問わず子供をいたぶり、慰みものにするのが好きだというサディストらしい。

いくらバダップといえど、武装した千人余りに真正面から挑んでいても勝ち目は薄い。ならばアルフレッドが持つこれらの弱点をうまく利用して、一網打尽にする他ない。

・・・この身体が壊れても...心が砕けても。俺は、諦めない。

トン、と。胸に手を当てて、バダップは一人誓いを立てた。

・・・戦う勇気があれば。未来だって、変えていける。

諦めない。絶対に諦めるものか。円堂守なら、円堂カノンならきつとそう言うから。

・・・絶望を、打ち破る。

バダップはすつと立ち上がり、兵器用として開発されたサッカーボールを取り出した。そして大きく足を振り上げ・・・。

「デス・スピアー!!!」

思い切り渾身の一撃を叩き込んだ。眼下にあるレッドマリアの本拠地に向けて。

“ 「幸せになる方法が分からない」

そう言つて君は悲しく微笑んだ

「死にたくないけど生きるのが辛い」

そう言つて彼は瞳を閉じた”

「何だ、その歌？」

営倉の壁ごしに聞こえた歌声。すぐにミストレだと分かり、エスカバは声をかけた。

コンクリートの無機質な牢。いくら軽営倉とはいえ、些かこの場所は問題がありすぎだと思つ。私物も一部を除き持ち込み可、ボロボロとはいえ風呂もトイレもベッドも一部屋に一つずつあり、テレビも一部ながら映る。おまけに壁が薄くて隣の話が筒抜けだ。これで罰になっているのだろうか。

「やっぱり丸聞こえみたいだね、此処」

同じ事をミストレも思つたのだろう、ため息混じりに返される。

「まあ…これもバダップが戻つて来るまでの仮の処置だからなんだろうけど」

「だな。…戻つて来なかつたら、どうなるんだろうな」

「それは言つちや駄目だよ、エスカバ」

「……悪イ」

バダツプが生きて帰ってくる保証は何処にもない。自分達は詳細を何も知らないけれど、任務を成功させる確率だつてきつと高い。高い。

それでも、今自分達に出来る事は信じて待つ、それだけなのだ。彼が生還する事を、少しでも傷が浅く済んでいる事を。同時にそうでなかった場合の覚悟も、決めておかなくてはならないけれど。

「さっきの歌ね。…バダツプに教わったんだ」

ミストレが身じろぐ気配。顔は見えないが、今彼がどんな眼をしているか想像できる気がした。

「悲しい曲調に聞こえるけど。本当は…絶望に立ち向かっていく歌なんだつて。どんな残酷な世界でも、カミサマなんかいないって分かっていても…生きて戦うと決めた時、歌うんだつて」

悲しくて、怖くて、不安で。それでもミストレは今、気丈に未来を見つめているのだらう。バダツプがそうだったように。

「…そうか」

エスカバは考える。冷たい床の上に座り込んで、鉄格子の狭い窓から青空を見上げて。

自分は結局知りたい事を知れなかったけれど。結局バダツプの運命も自分の運命も変える事が出来なかったけれど。

これも試練だというなら…考えたい。今此処に在る意味と、乗り越える方法を。

ミストレがまた歌い出すのが聞こえて、エスカバは一人眼を閉じた。ボーイソプラノの綺麗な歌声が、石の天井に染みていった。

“世界はとても残酷なのでしょう
積み重ねては 崩れていく

おやすみ どうか優しい夢を
現をまた歩き出せるように
おはよう 目を醒ました時には
きつと明日が来ている事を 祈って”

オーガのメンバーには、それぞれ得意な武器や戦術がある。サツ
カーでも戦場でもそれは同じ。

例えばエスカバはアーミーナイフや仕込み刃などでの接近戦を得
意とする。同じく接近特化なのがミストレだったが、彼は華奢な見
た目と裏腹にナックルを装備しての肉弾戦を好んでいた。

そしてバダツプはといえば。得意なのは銃。他の武器が使えない
わけではないが、殊に銃関係のエキスパートと言つていい。自分で
語るのも何だが、ポケットピストルからライフルに至るまで何でも
ござれである。近距離〜遠距離まで幅広く戦える己の特性を、バダ
ツプは充分に理解していた。

「敵襲だ！」
「地獄の射手^{ヘル・ガンナー}…バダツプ…スリードか！」
「殺せ！！」

テロリスト達が喚く。その端から、次々頭から血飛沫を上げて倒
れていく。バダツプの操る銃の名はヘル・ブレイズ？型。銃の中で
も小型だが一度に十二発も装弾でき、小回りがきき跳弾も狙いやす
い優れものだ。国産のこの銃は、バダツプが幼少時から愛用してい

るものの一つだった。

次々湧いてくる、こいつらは下っ端。しかしいかせん数が多い。よって一人に一発使っていては勿体無い。

目の前の男の心臓を撃ち抜いた弾は貫通して、向こう側の男の頭蓋を砕いた。さらに反対の手で撃った弾は狭い通路を跳ね回り、数人の男達の頸動脈を抉り裂いた。

反政府の者達はバダップをこう呼ぶ。地獄の射手、ヘル・ガンナ。国の英雄にして具現化した恐怖。幼き大量殺戮者だと。

畏れる者達の血で真っ赤に染まった廊下を、バダップは悠然と歩く。銃に次の弾を込めながら、無意識にあの歌を口ずさみながら。

“神様なんていない

だって私達は平等なんかじゃない
悩みながら 迷いながら 誰もが
それでも生きようとするんだろう”

「最近考え事が多いですね、カノン君は」

研究所の窓辺。ぼんやりとソファーに座り、外を見ていたら博士
その声をかけられた。カノンは苦笑して肩を竦める。物思いに耽る
時間の長さ。自覚が無かった訳ではない。

「バダップ君達の事ですか？」

「んー…それもあるけど」

差し出されたマグカップを受け取り、カノンは答える。

「もうちょっと、哲学的な事…かな」

「昨日、バダップと話してからずっと考えているのである。正しい事とは、間違っている事とは一体何なんだろうと。」

「人の善悪の基準なんて、人の数ほどあるのに。そんな事にもずつと気付かなかったんですよね…俺」

小さな頃大好きだった戦隊ヒーロー。もしくは近所の女の子が好きだった美少女戦士。テレビの中で彼ら彼女らは当たり前のように自らを正義と自称していて、自分達も当たり前のように受け入れていた。彼らの正義は万人の正義であり、彼らと敵対した悪は万人にとっての悪だと思い込んでいたのだ。

つまり。悪い事をしている奴らは、自分達が悪だと自覚した上で行っているに違いない。だから倒されて然るべきなのだ。と。

だけど。実際の世界はそんな単純で甘いものではない。

戦争はどちらも自らこそ正義であり相手が悪だと主張する。もし善悪の概念が本当に画一的ならば、既にそこに矛盾が発生してしまう。何故そんな事が起きるか？当然だ、絶対的な正義なんてものは幻で、実際その概念は人の数に等しく存在するのだから。

自分にとって正しい事が、誰かにとっては間違いかもしれない。カノンが間違っていると信じているオーガの黒幕達も、きっと自らこそ正しいと信じていただろうし、邪魔をしたカノンこそ悪だと考えた事だろう。

必要なのは。そういつた考えの違いを認めて、受け入れた上で、互いの為になる最良の道を探す事ではないか。自らが正義だなんて驕らず、相手を悪だなどと決めつけて最初から排除しようとせず、無論それは綺麗事で理想論だ。通じない場面は山ほどあるし、奪い奪われてを繰り返す戦場においては語りようのない理屈と分かっている。

だが。それでも自分は。

「俺が正しいと信じてやった事で、バダップ達が傷つく事になった。これも一つの現実で…俺はその結果にちゃんと責任を持たなくちゃいけないんだなって」

後悔ばかりでは前に進めない。しかし後悔があつてこそ人は大きくなつていける。進化していける。円堂守がそうであつたように。

「…難しく考えすぎてもいけないと思いますよ、カノン君」

穏やかに、諭すようにキラードは言い、カノンの隣に腰掛けた。
「私達は誰かからは悪だと糾弾されるでしょう。憎まれるでしょう。確かにその事実を否定してはなりません…自分が過去正しいと信じた気持ちまでもを否定してもいけません。そこで揺らいだら、彼らが何の為に傷を受けたか、分からなくなつてしまいますから」
「……………うん」

空が青い。今頃バダップは戦場で、オーガの他メンバー達は営倉だろう。どんな場所からでも、見える空の色は同じだろうか。
願わくば自分達皆の願いが、叶いますように。悲しいばかりの未来でありませぬように。カノンは祈るように手を握りしめた。

“ おやすみ どうか優しい夢を
現をまた歩き出せるように
おはよう 目を覚ました時には
きつと夜明けが輝いてる事を祈つて

おやすみ 流れ星に願おう
今度はこの手を離さないから

おはよう 悪い夢は終わるよ
きっと僕等の幸せな明日が 来るから”

挿入歌『End of world』（前書き）

こちらは、作中に出てきた曲『End of world』の歌詞になります。煌はじめが“はじめアキラP”名義で作成しニコ動にアップしたものです（よって歌詞の著作権は煌にあります）。

本来はイナズマをイメージしたものではありませんが、合うかな〜と思って引用してみました。

曲を聞いてみたいな〜という奇特な方は、ニコニコ動画より、異説テナでオリジナル曲『End of world』 <http://www.nicovideo.jp/watch/nm13525934> に飛んで聞いてやって下さいませ。煌が飛び上がって喜びます（笑）

挿入歌『End of world』

End of world

作詞作編曲：煌はじめ（はじめアキラ）

歌唱：緑音

「幸せになる方法が分からない」

そう言って君は悲しく微笑んだ

「死にたくないけど生きるのが辛い」

そう言って彼は瞳を閉じた

世界はとても残酷なのでしょう

積み重ねては崩れていく

おやすみ どうか優しい夢を

現をまた歩き出せるように

おはよう 目を覚ました時には

きつと夜明けが来ている事を祈って

「神様なんていない

だって 私達は平等なんかじゃない」

嘆きながら 迷いながら 誰もが

それでも 生きようとするんだろう

おやすみ どうか優しい歌を

希望を信じ続けられるように

おはよう 目を開いた先には

きつと朝日が輝いてる事を祈って

おやすみ 流れ星に願おう
今度はこの手を離さないから
おはよう 怖い夢は終わるよ
きつと僕等の幸せな明日が 来るから

(出展：ニコニコ動画 異説ティナでオリジナル曲『End of
world』 [http://www.nicovideo.jp/
p/watch/nm13525934](http://www.nicovideo.jp/watch/nm13525934))

【十二：レッド・シグナル】

そして時は遡り、雷門がフットボールフロンティアで優勝した翌日に戻る。

- - 西暦2010年。

胸の奥が妙にもやもやする。うまく表現できないが、例えるならば苦い綿菓子のようなものが気管支に詰まって、息は出来るけど違和感を覚えているような。円堂守はしきりに首を傾げては、その正体を探ろうとした。

- - やっぱりそうだ。バダップから…電話があつてから。

もう二度と会えないと思っていた相手と、電話だけでも出来た。サッカーをしようとも約束した。嬉しかったのは間違いない。なのに。

- - なんだろう…この感じ。

覚えの無い感覚だった。何がこんなに、胸の奥をもやつかせるのだろう。

「どつした、円堂？」

声をかけられて我に返る。目の前には訝しげな表情の染岡がいた。

「らしくねえな。サッカーバカのお前が大好きなサッカー中に考え事かよ」

そう、円堂達は今河川敷にいた。フットボールフロンティアの翌日である今日は日曜日。部活も休みで学校も休みな為、休養日に当てるようにと響木には言われていたのだが。

もはやサッカーをしていないと落ち着かないのが円堂である。そんな円堂に影響されてすっかりサッカー中毒なのが雷門イレブンである。誰ともなく河川敷に集まりサッカーを始めてしまった次第であった。

「それともアレか。また新しい必殺技考えてるとか？」

「それならあり得るな」

一之瀬と土門がニヤリと笑う。円堂も笑うしかない。自分が悩むとしたらまずサッカーの事かサッカーに絡む何かだと思われるであろうだ。まあ、外れてはいないのだから仕方ない。

「今はいいと思うんだけどなあ。オメガ・ザ・ハンドで止められないシュートがあるか？」

「あー…それなんだけど土門」

円堂は頭を掻きながら言う。昨日の決戦の後、特訓で何度か試して分かった事があるのだ。

「オメガ・ザ・ハンドはさ、いい技なんだけど…まだ使いこなせてないんだよな」

土壇場で創作したにしてはいい出来映えだったと思う。やっと完全したマジン・ザ・ハンドですらあっさり破られて、よくへこまずに頑張ったなあ和我ながら感心する。

だが、まだまだ大味で荒削りなのは確かなのだ。パワーはあるが、

スピードとコントロールに難がある。オーガの技がスピードで翻弄するタイプではなく、パワーで押してくるタイプだったから止められたようなものだ。

オメガ・ザ・ハンドは溜が長すぎる。ついでに調整に気を抜けば、キャッチしたボールをすぐ零してしまったり、弾いたボールが明後日の方向に飛んでいってしまうだろう。正直、扱いきれてないのが現状だった。

「もしかしたら…もう少しスピードタイプの技が必要になってくるかもって思う。まだ構想も出来てないんだけどさ」

「なる。必殺技は奥が深いねえ」

わざと爺臭く言う土門に、周りの一年生達が吹き出した。その一年を一之瀬や染岡がからかいながらつつき、さらに笑いが大きくなる。

ちよつとした事でみんなが笑顔になれる。楽しい気分になれる。だから自分はこの場所が好きなんだよな、と円堂は思う。サッカーが大好きだ。雷門の仲間達は最高だ。世界で自分ほど幸せなキャプテンはいまい。

フットボールフロンティアの決勝戦。波瀾万丈な一戦だった。怪我人は続出するわ、危うく自分達のサッカーが出来ないまま大敗するところだったわ、未来からの助っ人なんてものまで現れるわで。

だが結果的に悲願の優勝も叶い、負傷した面々も思いの外軽い怪我で済んでいた事が分かり（実際はもう少し安静にしているとかわれたメンバーもいるのだが、どいつもこいつもじつとしてるのが苦手な者ばかりだった）。こうしてまたサッカーができています。本当に幸せな事だ。これ以上ないくらいに。

「…話、逸れたけど」

話すべきか話さざるべきか。一瞬迷って…円堂は前者を選択する。

「今考えてたのは、必殺技の事じゃないんだ」

「うん？」

「バダップのこと」

円堂は皆に話した。今朝未来からかかってきた電話の事を。

八十年後の未来から、一般回線で電話がかかってくるのかどんな状況だと思う。有り得ない。だから信じない。そう言って否定してしまうのは簡単だ。

しかし世の中は実際、一筋縄ではいかなくて。有り得ない事は有り得ないと、雷門の誰もが今知ってしまったている。オーガ襲来がその最たるものであり、ならば電話くらい可能ではないかと思ってしまう。

「大した話、したわけじゃなかったけど。あいつ様子がおかしくて」

任務失敗の責任を取らされ、オーガのメンバーが営倉入りになる事を話せば、仲間達は一様に眉を顰めた。

「失敗なんて、誰にでもあるじゃないか。ましてや戦争してるわけでも何でもない、試合に負けただけなのに」

「それが軍隊つてヤツなのかもしれないよ」

苦い表情の風丸に、マックスが言う。

「僕達は戦争を知る世代じゃないし、徴兵制もないから軍なんて場所と無関係でいられる。幸運にもね。だから想像がつかないだけで、案外他の国じゃ当たり前の事なのかも。一人のミスが全員を危険に晒す事もあるだろうし」

一理あるな、と円堂は思う。自分達は平穏な世界に生き、平和を当たり前のように享受できる世代だ。それが今のこの国だ。いくら年輩者の経験談に耳を傾けようと、想像には限界がある。所詮遠い出来事でしかない。

だから軍とひとくくりで言っても形態は様々だろうし、例えば北
あの国のような場所ではもつと悲惨な現実もあるかもしれないと
- 推測する他ない。マックスの考えが正しいかも確かめようがな
い。

「心配するのは分かるが円堂。…俺達に何かが出来るとは思えない」

腕組みをして鬼道が言う。そういえば彼は腕組みをしている事が
多いな、と不意に思う。特に難しい顔で、現実を語る時には。

「あいつらは未来…八十年後の存在だ。もはや異世界の存在と言っ
てもいい。俺達からコンタクトをとる手段は無い…向こうが何かア
プローチをかけてこない限りは」

「…うん。わかって…る」

自分達は無力だ。時間を越える科学もなければ、世界を架ける魔
法もない。まさしく正論だった。いくら悩んだところで何も出来な
いばかりか、彼らのその後を知る事さえ叶わない。

「それでも…考えちゃうんだよな。俺に出来る事は、本当に何も無
いのかって」

そんな自分を、子供だと人は嗤うだろうか。理想ばかり見て何に
なるのだと嘲るだろうか。

「円堂は…それでいいんじゃないか」

そう言ったのは豪炎寺だった。彼は小さく笑みを浮かべていたが、
それはけして円堂を見下したものでは無かった。

「理想を見て走るのはお前の役目。現実を見て考えるのが俺や鬼道
の役目だ。今までも…これからも」

それでバランスが取れてるんだから丁度いいさ、と笑う。そういうもののかなあ、と首を傾げる円堂。分析型と行動型。既にその思考の差そのものが役割分担の現れだとは気付かない。

その時、不意に半田が明後日の方向を向いた。何度も橋の方を眺めては首を捻っている。

「どうしたよ中途半田？」

「ちょっと待てその呼び方！ってかやめてマジやめて本気でへこむから！！」

「はいはい。で、どうしたのハンパ」

「ちがーう！！」

お約束でからかいの言葉を投げるマックスに、半ば涙目の半田。そこで張り合うからますますマックスを面白がらせてるんだよな、と円堂は思う。

「さっきあそこの橋から、誰かがこっちを見てたんだよ、じーっと！！」

その言葉に全員が揃って同じ場所を見る。が。

「誰もいないぞ？」

橋の上に立ち止まっている人間はいない。目に映るのは走り去る自動車やトラック、音楽を聞きながら歩いていく学生や自転車の少女達くらいだ。

でも確かに誰かいたんだよ！と半田はいつになく意地になって主張する。

「ただ見てたってだけなら俺だってそんな気にしないさ。でも……なんかスゴく、怖い眼で見られてた気がして」

「怖い眼？」

「ああ。…まるで…親の仇でも見るみたいな…」

思わず隣の豪炎寺と顔を見合わせる円堂。親の仇 - 憎悪？しかし自分達は普通の中学生なわけで - 誰かに殺意を向けられるほど恨まれる覚えはない。

だが、どうやら若干心当たりのある人物もいたらしい。鬼道の顔色が変わった事に円堂は気付く。

「…残念ながら、恨まれる心当たりが多すぎてどれだか分からんな。…帝国のやってきた事を考えれば」

それはお前のせいじゃないだろ、と円堂は思う。悪いのは帝国にそんなサッカーをさせ、裏であくどい手ばかり使っていた影山ではないか。それで鬼道が恨みを買うなんて絶対におかしい。

だがその口にする事はしなかった。言ったところで鬼道が納得するとも思えなかったし、プライドの高い彼をますます惨めにさせてしまうかもしれないからだ。すぐ思ったままを口にしてしまいがちな円堂だったが、最近は少しだけ勉強してきたつもりである。

「男？女？」

「あ…いや…はっきり見た訳じゃないからさ…」

「信憑性無いなあ。やっぱり中途半田は中途半田か」

「だからそれヤメテってばー！」

ぎゃいぎゃいと騒ぎ始めたマックスと半田に、つい苦笑しなくなる。場の硬質化した空気を読んで、わざとふざけているのが分かったからだ。元々鬼道を疎んじていた半田が、今は彼を気遣っている。その変化がキャプテンとして嬉しくない筈がない。

「まあ…気にするほどの事でもないだろうけど。一応気をつけた方がいいのかもな」

「…ああ」

よくよく考えてみれば。自分達はフットボールフロンティアで優勝したわけで - もしかしたらだが、負けたチームの関係者から逆

恨みされている可能性もないではない。

また、影山も結局釈放されてそれきりだ。雷門に憎しみを向けてくる事も考えられなくはないだろう。

その後、メンバーは一时间ばかりサッカーに興じて解散になった。栗松と目金がライブに行くからと言って抜けたり、豪炎寺が病院に行く予定があつたりした為である。多少は休みもとらなきゃ、と誰とはなく言い出したのも大きい。

「じゃあなー風丸！」

「ああ、またな」

帰り道。一番家の近い風丸と別れたのは住宅街に入ってからだ。

ここまで来れば家まですぐである。円堂は荷物を背負いなおして、突然、勢いよく背後を振り返った。

「……!？」

何だ……今のは。

視線の先。電柱の影には誰もいない。誰もいないのに……円堂の背中、冷や汗で冷たくなっていた。

……間違い、ない。今確かに誰か……。

誰かがいた。そして円堂の精神を……その凄まじい殺気で切り刻んでいった。まるで辻切りのように。

初めて受ける感覚だった。ほんの一瞬憎悪の目を向けられただけ。それなのにこんなにも心臓が痛い。恐怖が体中を縛り上げられている。

さっきの半田の話。恨みを買ったとしたら鬼道か、雷門そのものだと誰もが思った。だが。

……怨まれるのは……俺？

逢魔が時。 答えを返す者は、いなかった。

【十三：レッド・カード】

暗雲は、時間を追うごとに大きくなっていく。バダップと電話をした翌日。部活の為にグラウンドに出ようと、自らの下駄箱を開けて――円堂はため息をついた。

「悪趣味すぎるだろ…マジで」

下駄箱の中が、刃物でズタズタにされていた。買ったばかりのホワイトシューズの無惨な有り様に、もはや頭痛すら起きない。

妙な事が始まったのは昨日からだった。昨日家に帰ると、郵便受けの中身が全て破かれていた。幸い重要な書類などは入っていないかったが、夕刊や友達からの手紙までビリビリにされてしまっていたのには怒りを感じた。

その後はツイてないことのオンパレードである。翌朝の通学路では、頭上からペットボトルが落ちてきて危うく当たるところだったし、下駄箱には血のついた花がいっぱいに入れられていた。

授業中は何も起こらなかったが、休み時間に外に出れば、校舎裏で木材が倒れかかってきて潰されかけ、九死に一生。そして今がこの現状である。

――やっぱり俺…誰かに怨まれてんのか？

嫌がらせの中身よりも、その事実の方が円堂はショックだった。今まで自分は自分なりに正しいと信じたことをしてきたつもりだし、そもそもそこまでの憎悪を買うほど大きな事にも関わっていない。確かに影山の一件があるにはあるが――もはや終わった事だと油断していた自分が確かにいる。

「!?!?円堂、それは…」

「あ、鬼道」

そこに、鬼道が通りかかった。彼は日直なので遅れていたのである。円堂の手に行っているシューズの有様に、目を見開いているのがゴーストでも分かった。

「悪いんだけどさ、鬼道。予備の靴あったら貸してくんないかな。これじゃ帰れないし」

「それは構わないが…」

鬼道は迷わずバッグの中からもう一足を出してくれた。万が一の為に必ず予備を持ち歩くあたり、彼の几帳面さが伺える。

あるいはこういった事は経験済みなのかもしれない。帝国の元主将である、彼は。

「いくらなんでも悪質だし、何故お前なんだ？俺も他のメンバーは何ともないのに」

鬼道には、今朝までに起きた事も全て話してあった。ゆえにこの発言だ。無論シューズを切り刻まれた時点で嫌がらせの域は超えているが、ペットボトルを落としたり木材を倒すだなんて一歩間違えば大怪我だ。当たり前どころが悪ければ死んでいたかもしれない。

もし起きたのがペットボトルだけならば単なる事故で片付けられただろう。だがその前後の事を思えば偶然とは考えにくい。

「俺が雷門のキャプテンだから…とか？」

「もしそれが理由なら、他チーム関係者の逆恨みが濃厚だが」

鬼道も自分の下駄箱から靴を出す。予想通り、彼のところに嫌がらせはいってないらしい。円堂だけなのだ、これは。

「度を過ぎていて。これではまるでお前を精神的に追い詰めたり…殺すのが目的みたいじゃないか」

そんなまさかあ、と円堂は明るく返そうとした。しかし、出来な

かったのだ。昨日自分の後をつけてきた何者かの――あまりにも明白な殺意に満ちた視線を思い出したからだ。

そういえばあの後も、何度も誰かに見られている気がして背後を振り返った円堂。学校でも家でもついて回るその視線。その度に誰もいないのを確認して安堵の溜め息をついていたが――。

姿は見えなくても。本当は誰かがいたのかもしれない。矛盾した表現と分かっているが、どうにもそんな気がしてならない。

「今朝お前の下駄箱に入れられていた植物だが」

鬼道は苦い表情で言う。

「糸杉と弟切草。そして彼岸花。見ての通りどれも縁起が悪いぞ」

彼いわく。糸杉の花言葉は“死”。弟切草は“復讐”。彼岸花は“悲しい思い出”だそうだ。その時点で既にありありと殺意が滲み出ているではないか。

しかし、最後の彼岸花は少々引つかかる。悲しい思い出――という事はひょっとして、自分も知っている相手なのだろうか。あちらが単独犯か複数犯かも分からないが。

「残る可能性……。やっぱり影山……なのかな」

円堂が呟くとすぐに鬼道は、違うと思う、と否定した。

「あの人が絡んで来るなら……俺に何の実害もないとは思えない」

「そりゃ、お前は元々あいつの下にいたけど……」

「違っ」

首を振る鬼道。

「そうじゃないんだ……円堂」

何に對しての否定か、すぐには分からなかった。やがて、円堂は自らが言った“理由”が違っているのだと理解する。

鬼道の横顔は苦悩にまみれていた――見ている側が苦しくなるほど。

「お前は理解出来なくていい。寧ろ理解出来ちゃいけない。俺と影山の関係がどんなものだったかなんて」

暗く、悔恨に満ちた声に、円堂は何も言えなくなる。

「あいつと俺は：永遠に“歪んだ親子”のままなんだ。あいつが死んでも、俺が死んでも：逃げられない。だから……分かる。あいつは確かに“円堂”の名を憎んでいるが」

もしかして自分はとんでもない地雷を踏んでしまったのかもしれない。だが円堂がフリーズから溶けた時は既に鬼道は背を向けて歩き出していた。

細い背中に、罪と哀愁を背負って。

「それを俺に：当てつけない筈がない。脅さない訳もない」

これ以上訊くな、とその背が語っていた。だから円堂も、少なくとも今は訊かない事にした。彼らの闇を伺い知るにはあまりに円堂は潔癖で、幸福すぎた。

いつか彼が話していいと思った時、その気持ちの整理がついた時、聴けばいい。深く突き入れるべき日が来るとしてもそれは今ではない。

心なしに早足の彼を追うようにして、円堂は部室に向かう。未だに雷門の部室はグラウンドの隅にこじんまり存在している。改築す

べきではという話もあったが、メンバーの愛着もあってそのままになっっている。

その部室が - - 妙に慌ただしい。窓が割れているのに気付き、円堂と鬼道は顔を見合わせた。まさか、と。同じ事を思った筈だ。

「キャプテン！鬼道さん！」

二人の姿を見つけて、小林が叫ぶ。血相を変えて走ってきた彼に、何があったんだと尋ねる円堂。

「説明するより見て貰った方が早いです！」

「ちよ、おい少林！」

いつも先輩に対し礼儀正しい彼らしからぬ強引さで腕を引っ張られる。よほど焦っているようだ。そのままドアが開け放たれた部室の前に立たされて - - 絶句した。

「なっ…！」

部室の中は - - 滅茶苦茶だった。ロッカーは倒されて中の本や私物が散らばり、ファイルや日誌はズタズタに引き裂かれて紙屑の山となっている。壁には山のように刃物の傷がつけられ、蹴り飛ばされたのか棚はへこんで、板の一部が外れていた。

机も椅子も床も。折れ曲がっているか傷だらけになっているか、とでも原型を留めていない。洗濯機や乾燥機もパネルが壊されており、もはや使えそうになかった。

「さっき来てみたらこんな有様で…朝まで何とも無かったのに」

秋が涙を浮かべて言う。その隣では鼻を吸いながらも、目金と春奈が懸命に片付けをしていた。

「酷い…酷いよ。誰がこんなこと…」

円堂の顔から血の気が引いていく。同一犯、という単語が頭の中をよぎっていった。考えたくない。考えたくはないが、でも。

「倉庫の方も滅茶苦茶だぜ。無傷なのはサッカーボールだけだな」

倉庫から顔を出したのは、忌々しさを隠しもしない染岡。その隣には苦い顔の豪炎寺と影野がいる。

「この学校…グラウンドまでは部外者も入って来れるのよね。迂闊だったわ」

なんとかまだ使えそうなファイルを抱えた夏未が、溜め息を吐きながら言う。彼女はどうかやら部外者だと決め込んでいるらしい。まあこんな真似をする人間が雷門の生徒だとは考えたくないのも確かだが。

「何故か金品の類に手はつけられていないけど…電化製品も私物も壊されてる。悪戯じゃ済まないわよ。防犯カメラで確認して、警察に届ける事にするわ。幸いフットボールフロンティアも終わったし」「防犯カメラあ？そんなもん何処に…」

「あら、知らなかったの？小型だけど校舎中に設置されてるわよ？」思わず脱力。セキュリティに甘さがあったとはいえさすが私立、さすが雷門財閥と言うべきか。うっかり盗聴器も一緒に盗んで怖い。

「ちょっと確認してくるわ、と夏未はそのまま校舎の方へ歩いていた。」

「警察沙汰…マジかよ」

半田がうんざり顔で言う。そういえば前に、警察が苦手だと話していた事があったような。堅物で、気を使わなければならないイメージで嫌なのだ、とも。

だがここまで来ると、自分達だけで解決とはいかないだろう。自分も腹を括るしかない。

「実は…俺、みんなに話さなきゃいけない事があってさ」

円堂は、昨日からの出来事を皆に話した。途端にメンバーに広がる動揺。この騒ぎが円堂を狙ったの事かもしれない。…そう分かっても、誰も円堂を責める者はいなかった。

「いいいい…一体誰がこんななな」

「壁山、落ち着け」

「おおお落ち着いてられる訳ないツすよ！トイレ行って来るツす。…！」

ビビりまくった壁山は、いつもの鈍足もなんのその、凄まじいスピードで校舎の方へ駆けていった。あれが火事場の馬鹿力というヤツか、とどこか現実逃避気味に思う。

「みんなの財布や時計が無事…って事は、物取りの犯行じゃないな」

床に落ちていた小さな赤い小銭入れを拾い上げて、豪炎寺が言う。それは彼が万が一の為にロッカーに入れていたものだ。金額は精々千円程度しか入っていないが、明らかに財布と分かるものである。いくら額が少ないとはいえ、残していくのは不自然だ。

それにこの、まるで嵐が吹き荒れたかのような惨状。物色したのではない、最初から壊して、傷つけて、使えなくするのが目的のような。

「私怨でしょ…どう見ても」

「だよな。力任せに大暴れしたって感じだ」

マックスと半田が指差したのはドアだ。開け放たれているように見えたそれは、歪んで閉まらなくなった、が正しかったと気付く。掛け金が弾け飛び、真ん中が大きくへこんでいた。力任せに鍵のかけたドアを破ったのだと知り、ぞつとさせられる。

円堂は想像した。怒りのままドアを破壊し、ガラスを割って回り、部屋の中を無作為に斬りつける加害者の姿を。きつと鬼のような形相で罵りの言葉を吐き散らかしていた事だろう。だが、その顔がまったく浮かんでこない。

そこまで憎まれる覚えがない。恨みなんていつの間にか買っているものかもしれないが - - それでも。

）
）

その時、場違いに明るいメロディーが流れ出してきた。円堂の携帯の着信音だ。ディスプレイには“雷門夏未”の文字が。

『円堂君。みんなまだ、部室にいるわね？』

円堂が出ると、夏未は開口一番にそう言った。心なし堅い声で。

『大至急、理事長室まで来て頂戴。いい？大至急よ』

「ど、どうしたんだよ夏未」

防犯カメラに、一体何が映っていたというのか。頭の中で警鐘が、煩いまでに鳴っている。夏未が言った。

『警察に連絡する訳にはいかなかったわ』

【十四：リベンジャー・エム】

理事長室には、夏未と理事長の二人だけだった。最初は全員を伴って行こうとしていた円堂だったが、人数が多いのと片付けが終わってないので、一部だけを連れてきていた。円堂以外のメンバーは秋、豪炎寺、鬼道、染岡である。

「夏未：警察に言えないって、何でだ？」

理事長机の上にはパソコン。理事長が座ってそれを操作し、画面を覗きこんでいた夏未は顔を上げないまま答える。

「防犯カメラに映っていたのよ…見覚えがある人物がね」

「雷門の生徒か？」
「違うわ」

カチカチとマウスを操作する音。ディスプレイを目で追っていた夏未は、やっぱり見間違いないわ、と溜め息をついた。

「見て。貴方達全員、知っている人間の筈よ」

くるり、とこちら側に向けられた画面。そこに表示された窓の中には、クローズアップされた防犯カメラの画像が映っている。部屋の入口からでは遠くてよく見えない。元よりカメラの画質は良くないのだ。

近付いて目を凝らした円堂は - - 驚愕した。

「こ、こいつ…オーガの…！？」

映像は部室の外に設置された防犯カメラのものだった。部室から出てくる、一つの人影が映っている。

濃い緑色の軍服。左右に結った紺色の髪。少女めいた顔立ちの、華奢な少年。

間違いない。なんせ一昨日戦ったばかりだ。バダップともう一人と、スリートップを組んでいたFW。まさか、どうして彼が現代に？しかも雷門の部室に？

理事長がパソコンを操作する。窓が開かれ、映像が再生された。

「フットボールフロンティアの登録名簿に、名前だけが記録が残っていた。王牙学園のFW、ミストレーネ・カルス。通称ミストレ…とは彼らと試合した者の証言だが」

理事長の言葉を聞きながら、円堂は画面を凝視する。映像は、ミストレが部室のドアを蹴り壊すところから始まっていた。彼は周囲を見回し、ナツクルを装着して部室に入っていく。

直後、中からガラスが割られたのが見えた。破片が派手に外まで飛んでいく。

「中の様子を映した映像もあるが…見ない事を勧める」

「何で…ですか」

「見たらトラウマになるぞ。…それくらい、部室を破壊して回る彼の姿は鬼気迫るものがあつた」

ごくり、と唾を飲み込んだのは自分だったか他の誰かだったか。

「…少なくとも彼が部室を荒らしたのは確定的だわ。そして高い確率で、円堂君への嫌がらせもね」

夏末が目で合図すると、理事長も黙って頷いた。メディアプレーヤーを呼び出し、音声を再生する。

パソコンから流れてきたのは…耳を塞ぎたくなるような罵声と破壊音だった。声変わり前の、まだ高い少年の声。紛れもなくミストレのもの。彼はひたすら叫び、喚きながら破壊活動を繰り返して

いるのだ。

その中で、拾ったいくつかの言葉。

『殺してやる…殺してやる殺してやる殺してやるッ！お前さえ…お前らさえいなければバダッは…あいつはぁッ！…！』

憎悪。もはや黒とすら呼べないほど暗く、深く、淀みきった闇。殺意に満ちたその声に円堂は戦慄し…胸の奥を締め上げられるような感覚を覚えた。

昔ドラマで見た愛憎劇。役者が演じる憎しみに満ちた女の声、殺意を叫ぶ男の声。だがそのどれもがミストレのこの声とは比べものにならないほどチンケで、安っぽいものだったのだと気付く。

想像もしていなかった。人間が、こんな声を出せるだなんて。

「あいつ…暴走しているようだが、見るとこは見てるな。防犯カメラも盗聴機にも気付いていて、あえて残してる」

「…ああ」

画面の中、ミストレが部屋から出てきた。よく見るとその右手の甲が切れて血が伝っている。フェードアウト直前、ミストレは明らかにカメラの方を向いて…。

『…』

何事かを呟き、立ち去った。

「今の言葉も、盗聴機が拾ってるわ」

夏未が言うより早く、理事長の手が動いていた。雑音混じりの声が、部屋いっぱい広がる。

『もうどうなるかと構うもんか…。殺してやるよ、円堂守』

先程のような激しい声ではなかった。しかし冷たく、重たい憎悪の声。ミストレは本気で自分を憎んでいるのだ。円堂の背筋が冷たくなっていく。

「マジで盗聴機まで仕掛けてたとはよ…いいのか夏末お嬢様？」

「あら、特権でしょ？公にバレなきゃいいのよ。それに今回はそのおかげで助かったんじゃないか？」

染岡の言葉に、しれっと返す夏末。相手が悪いと悟ってか、染岡もこれ以上の事は言わなかった。

ともかくだ。確かにこれでは、警察に言うわけにもいくまい。相手はミストレ、未来の人間だ。到底信じて貰えるとは思えないし、信じて貰えたところで捕まえようがない。こちらには時間を渡る手段などありはしないのだから。

「問題は…どうしてミストレが殺したいほど円堂を憎んでるのかな」

豪炎寺の言葉に、全員が唸る。

唯一のヒントはミストレが口走った言葉のみ。『お前らさえないなければバダップは…』と、残念ながらそれ以上の事は分かりそうにない。お前、が指すものが円堂であり、お前ら、が雷門イレブンであるという予想は立つが。

「奴らが自在に時間を渡れるとすれば…」

やがて鬼道が口を開く。

「こちらの感覚とあちらの経過した時間が大きく異なっている可能性がある」

「どついう意味だ、鬼道？」

経過した時間？意味が分からず説明を求める円堂。

「フットボールフロンティア決勝から、俺達は二日しか経っていない。だがこのミストレは、一週間とか一年とか…それくらい後の時間軸から飛んできている可能性がある」

つまりだ、と鬼道は続ける。

「その一週間ないし一年のタイムラグの間に…奴らに何か起きたのかも知れない。いや、そもそもバダツプの電話の件があるから、フットボールフロンティア決勝直後でもおかしくはない」

残念ながら円堂の理解の範疇を超えていたが…これだけは分かった。オーガに、バダツプに、何かがあった。それが円堂のせいだと思つて…ミストレは自分を恨んでいる。

ではこの“何か”とは何か。

「バダツプは…電話で言つてた。任務失敗の責を負つてオーガのメンバーは皆倉入りになつたつて」

何かあつたとしたらその処罰に絡む事ではないだろうか。あのミストレがいつの時間から来たか分からない以上、名言は出来ないが…。

最悪の想定が脳裏をよぎる。もしかしたらバダツプは、もう。

この世にいないのではないかと。

「…皆倉入り、と一言で言つても…それが全てじゃ無かつたかもし

れないな」

苦々しい顔の豪炎寺に、鬼道も頷く。

「いずれにせよ…憶測だけでモノを言っても解決しないし、何よりこのままにしておく訳にはいかない。ミストレを捕まえて訊き出すしかないだろう」

「マジかよ」

「この様子だと、近いうち奴は本気で円堂を殺しに来る。そして警察がアテに出来ないなら、俺達だけでなんとかする他ない」

しん、と。冷たく重い沈黙。

誰もが今置かれていた状況のまずさを把握し、青ざめている。円堂も例外ではない - - 寧ろ皆より蒼白になっていくかもしれない。相手は一人。それも自分達と同じ年くらいの子供。とはいえ、軍人。武力のエキスパートだ。ただの一般人である自分達に勝ち目があるのか。

- - :いや。勝ち目、なんて。らしくない事考えるなよ、俺。

パン、と突然両手で頬を叩いた円堂を、皆が目を丸くして見つめる。

「やるしかないんだ、腹括ろうぜ！」

そうだ。いつも自分は、自分達は負ける事など考えなかった。どんなに勝ち目の薄い試合だと揶揄されようと全力で立ち向かい、打ち勝ってきた。そうだ、サッカーと同じだと思えばいい。負けるかもしれないと気持ちが悪くなった時、運命は決まってしまうのだから。「あいつは俺を狙ってくるんだろ？ だったらおびき寄せるのは簡単だ」

「困になる気!？」

危なすぎるよ！と叫ぶ秋に、円堂は二カツと笑ってみせる。

「大丈夫！あんな凄いサッカーが出来るんだ…あいつだって本当はサッカーが好きな筈なんだ」

サッカーを否定していたオーガ。憎しみに溺れているミストレ。しかしその彼は何故か、サッカーボールだけは傷つけていなかった。きつとそこに、鍵がある筈だ。

「話せば通じるさ。サッカー好きな奴に、悪い奴はいない！」

怖くないと言えば嘘になる。だが信念を口に出して宣言した途端、胸の奥につかえていたモノが抜けていくのを感じた。きつと何とかなる、何故か自信を持ってそう言える。

それに、何より知りたいと思ったのだ。彼の本心を。真実を。そうでなくしてはどうして彼らを救えるだろう。

「最初は敵同士でも、全力で試合やって、ぶつかって…終わったらみんな友達だ。だからバダップもミストレも、もう俺達の友達だろ！」

あのフィールドの上。撤退の光に照らされた、バダップの最後の顔を思い出す。ポーカーフェイスの彼はその瞬間まで、笑顔らしい笑顔を見せてはくれなかったけれど。

『俺達はお前の言う勇気を見失っていたのかも…』

きつと通じ合えたものがあつた筈だ。だって彼は円堂の差し出した手を握ろうとした。結局届かなかつた手だつたけれど、心と心で確かに自分達は繋がれた。

『円堂守よ、未来は…俺達が進むべき未来は…』

お前達の勇気で、きつと見つかるさ。あの日円堂はそう返した。あの後彼らにどんな運命が待ち受けていたにせよ…見つかったものだってあつた筈。自分はそう、信じたい。

「…そうだな。俺達のキャプテンはそういう奴だ」

「楽天的だよなあ、相手は軍人だつてのによ」

豪炎寺と染岡が苦笑する。呆れた顔はしているが、それが了解の意であるのは明白だった。

「相手は一人。そして円堂への憎しみで、冷静さを欠く可能性がある。…突ける隙があるとすればそこだな」

そして鬼道まで話に乗ってしまったえば、秋も夏末もなんだかんだで止められなくなる。それが雷門イレブンの平時だった。

「これも王牙学園と戦った他選手の情報だが。ミストレーネは随分とフェミニストらしい」

「女の子が相手なら甘くなるかもって事だね？」

「お、おいおい、秋。お前も参戦する気か？」

「勿論」

理事長の言葉に、即座に反応する秋。慌てる円堂をよそに、彼女はすっぱりと言い切った。

「私だって雷門の一員だよ。仲間のピンチはみんなで切り抜ける。そうでしょ？」

まったく恐れ入る。可愛い顔してなんとまあ肝が据わっている事。とんでもない女の子だとつくづく思う円堂である。

「部室に戻るぞ。さっさと作戦会議だ。実行するなら出来る限り早

い方が良い。相手も気長じゃなさそうだからな」

「そうね」

夏未がテキパキとパソコンと資料を纏める。手を出す気なのは秋だけではないらしい。やがて鬼道が皆を見回して言った。

「さあ、ミーティングを始めるか」

異論がある者などいよう筈もない。イエッサ!と円堂は見よう見まねで敬礼した。

【十五：トラジック・ソルジャーズ】

円堂達がミストレ対策を講じている頃。未来でも一つ、動きがあった。

- - 西暦2090年。

何故こんな事になってしまったのか？考えもキリが無い事は、エスカバ自身が一番よく分かっている。誰一人悪くなかったとも言えるし、誰もが悪かったとも言える。確かなのは既に、状況が余談を赦さぬところまで来ているという事だ。

「随分とまあ…穏やかじゃないですね」

デスクチェアに腰掛けたキラード博士は、ため息混じりに言った。

「とりあえず落ち着いて下さい。でないと、YESともNOとも答えられません」

楽天的ですらあるその態度に、エスカバは心底イラつかせられた。分かっている。こんな風に感情を揺らしたって何も解決しない事は、だがキラードの方にも問題はあるだろう。ドアの前で固まっているカノンは顔面蒼白だ。あちらの方が余程普通の反応ではないか。少なくとも今の博士は、後頭部に銃口を押し当てられて、脅されている人間には見えない。

「あんたの方こそ、落ち着きすぎじゃねえの？このまま俺が引き金引きゃ、一発で終わっちまうぜ？」

「そうでしょうね。ま、残念ながら恨まれるのは慣れてますし」
恨まれるのは慣れている。その言葉に、エスカバはこの男の生い立ちを思い出した。資料にあつた筈だ。この男の先祖が - 影山零治が何をしたか。

正確には、影山に子供はなく、キラードがそのまま影山の血統であるわけではない。しかし影山が死んでから八十年近く経つた今でも恨みを募らせる者がおり、遠縁だというだけで彼がいわれのない差別や憎しみを受けてきたのは事実だった。

「それに、君は本気で撃つ気はないでしょう」

ちらり、と横目でエスカバの手元を見るキラード。

「ヘル・ブレイズ四型。確かバダップ君は五型愛用でしたな。四型は五型比べ一発の威力は大きく貫通性に優れています、口径が大きくて反動が凄く、さらに五型の半分しか装填できません」

につ、と口の端を持ち上げる男。

「四型を片手で撃つのは自殺行為。小柄な貴方ではまず反動で吹っ飛ばでしょうし、手首の脱臼は免れられません。オーガの副官である貴方がそんな初歩知識を知らないとも思えません。本当に撃つ気なら、最初から両手であつちり構えてますよ」

「…流石だな」

予想以上の切り返しに、素直に感嘆の意を示した。どうやら自分が相手にしているこの男は、データ以上の大物らしい。試す意味も含めて、わざわざ扱いにくいヘル・ブレイズ四型を持ってきた甲斐あつたという事だ。

エスカバが銃を下ろすと、向こうでカノンが安堵のため息を漏らした。この空間で一番プレッシャーを感じていたのが彼だったのは

間違いない。

「まだるっこしいのは苦手だ。いきなりだが本題に入らせて貰う」

今日。エスカバがキラードを訪ねたのは他でもない、緊急でタイムワープを行う必要が出た為だ。

「場合によっては…今度は本気であんた達を脅さなくちゃならねえ」

そして軍のマシンは使えない。今から自分がしようとしている事は、軍の意向に反する事だからだ。奴らを言いくるめて軍から許可を出させたミストレには脱帽としか言いようがない。

「俺がしようとしている事も、ミストレがしようとしている事も。実際は誰の得にもならねえ自己満足だ」

「ミストレ君…？彼が何か…」

「あいつは」

話せば彼らはどんな顔をするか。分かるような気もしたし分からない気もした。だがエスカバは既に、手段を選ばない決意をしていた。

「あいつは…ミストレは。円堂守を殺す気だ」

例え誰が反対しても、これは自分がやらねばならない事。

ミストレを、止める。

そうでなければ自分達も - 誰よりバダップが浮かばれない。

「ひいじいちゃんを…!? な、何で!？」

思わず飛んできたカノンに、エスカバは険しい目線を送る。

「憎いから。それ以外に理由はねえよ」

ミストレが殺したいのは、自分達の本来の過去の円堂守ではない。今やパラレルワールドの住人となった…自分達が戦った、あの円堂守だ。

「ミストレは…思っちまっただらうよ。全部全部、円堂守のせいだと。奴に出逢わなきゃ、奴と試合しなけりゃこんな事にはならなかったってな」

その気持ちが、分からない訳じゃない。エスカバとて理不尽さを感じている。あらゆる全てに憤りを投げつけた瞬間が確かにある。しかし、それでも。

円堂守を憎むのはお門違いで…それによって結局傷つくのは他でもない、ミストレ自身だという事も分かっている。

「ミストレを、止めたい。力を貸せ、キラード博士に円堂カノン」

もうたくさんだ。これ以上…血が流れるのも、涙が流れるのも。悲劇は、終わらせなければならぬ。

この世界が彼らにとって、悲しいだけの未来とならないように。

再び、時は現代へ還る。

エスカバの危惧が現実のものとなる、その瞬間へ。

- - 西暦2010年。

今まで考えた事も無かったな、と思う。その考えた事も無かった事を今、必死で考えようとしている。

- - 誰かを殺したいほど憎む気持ち…かあ。

雷門中の校舎裏。既に殆どの部活が終わった時間帯、人影もまばらで声も少ない。そんな場所に今、円堂はたった一人でいる。らしくもない思索に耽りながら。

- - そんなの…テレビの中とか、非現実の中の事だと思ってた。

ミストレは自分を憎んでいると言う。文字通り殺したいほどに。その感情をそのまま具現化したのが、部室のあの有り様だった。

犯行の様子は全て防犯カメラに収められていた。あの惨状が凶器によるものではなく…全て素手と蹴りのみで行われたという事もあの少女のように細い身体の何処に、そんなパワーがあったのだろうか。円堂は想像した。あの優しい顔立ちが修羅に染まり、次々部室を殴り、蹴り壊していく様を。だがそのビジョンさえ臆気にしか浮かんでこない。全てはあまりにも円堂の想像を超えた出来事だ

った。

金具が弾け飛んだ鉄のドア。

大きく歪みんだロッカー。

ズタズタになった資料やファイル。

へこんだ壁に床、叩き折られていた机に椅子。

そして粉々になった窓ガラス。

- 僅かだけ血がついてた。脅迫状代わりに、俺の下駄箱に入れられてた花にも。

血塗れになつても、その痛みを忘れるほどの激情。まるで地獄に燃え盛る炎のよう。どれほどの憎しみに堕ちれば、人は本当の“鬼”になれるのだろうか。彼の所属する部隊の名の通り - ミストレもそうなつてしまつたのだろうか。

下駄箱の中の花、その意味を今一度考えてみる。

糸杉は“死”。弟切草は“復讐”。ここまではいい。だが彼岸花の“悲しい思い出”というのがどうにも引っかかる。彼はは何を指して、その花を選んだのか。一体何を悲しんでいるのだろうか。

「…これ以上は本人に訊くしかない…か」

腹を括り、円堂は - キツと前を見据えた。

「いるんだろ…ミストレ。出てこいよ」

ざわり、と空気が動いた。あるいは密度を増したというべきか。それほどまでに、少年兵の存在感は大きなものだった。

「へえ…怯えて逃げ回るのを見て、嗤ってやるつもりだったのに。意外に腹が据わってるんだね。ちよつとだけ見直したよ」

木陰から姿を現したミストレは、カメラで見たのと同じ濃い緑の軍服姿だった。フットボールフロントティア決勝戦で、最初に姿を現した時の服。ひょっとしてあれが王牙学園の制服だったりするのだろうか。

だとしたら - - 趣味が悪いとしか言いようがない。まだ幼い彼らに、戦闘マシーンであれと、暗示をかけているかのようで。

「それとも…真正面から戦って、俺に勝てると思ってる？ 困りなっ
て出てきたところを捕まえてやれば終わりになる…とか？」

唾を飲む音が聞こえてしまいそうだ。ゆっくり歩いてくるミストレに、円堂は気圧されないよう必死で自制しなければならなかった。彼の言った事の半分が凶星だったからではない。

- - なんて…プレッシャーだ…！

とんでもない威圧感。あの試合の時には感じなかった事だ。少女のように愛らしい顔が、華奢な身体が、まるで巨大な怪物か何かのように思える。ただ立っているだけで、歩いてくるだけで膝をついてしまいそうな、凄まじい殺気。

これが軍人。幾多もの戦場を戦い、血で血を洗う死線を潜り抜けてきた者のオーラなのか。 - - いや、遠回しな表現はよそう。彼が子供とはいえ、兵士である以上紛れもない事だ。

円堂は恐怖した。その恐怖をギリギリのところまで押し殺していた。初めて対峙する、“人殺し”の眼に。

「…教えてくれないか、ミストレ」

気圧されたら、その時点で敗北が決まる。そしてこの場合の敗北

は、高い確率での死。

「俺はあの試合で…お前達とは少しでも分かり合えた筈だって信じてる。そしてあの時のお前達は任務の為だけにサッカーをして…個人の感情で俺を恨んでた訳じゃない。そうだろう？」

ミストレは沈黙している。それを肯定と受け取り、円堂は続けた。

「それが…どうして。どうして俺を殺そうとするんだ。未来に還った後、お前達に何があった？バダップは…どうなったんだ？」

長い間があった。ひよつとしたらそれはほんの数秒の事だったかもしれないが、円堂には凄まじく長く感じられた。

それは、不意に。

「ふふっ…」

凍った微笑を浮かべていたミストレの口の端が僅かに持ち上がり
- - 次の瞬間嗤いとなって場を支配した。

「ふふふっ…あはははははっ…！」

高々と嗤い声を上げるミストレ。狂った嘲笑。音が木々の葉を揺らし、風に成り、空を揺らし、地面を鳴らす。円堂は耳を塞ぎたい衝動を必死で抑えなければならなかった。それほどまでに彼の声は悲しく、畏ろしいものだった。

「あははあっ… そんなに知りたいたんだ？」

やがて声を収めたミストレは、凄絶なまでに美しい笑みを浮かべた。

「じゃあ… 教えてアゲナイ。 訳も分からないままあの世に墮ちるといいよ」

チャキン、と鉄で布を切るような音がした。 ミストレが軍用ナイフのカバーを外した音だ。 磨き上げられた刃物に夕焼けが反射して光る。 円堂の頬を冷や汗が伝った。

「安心した？ サイレンサー付きの銃なんていくらでもあるけどさ、俺はあんま射撃の成績良くなって。 因みに銃のエキスパートなのはバダップ。 ナイフはエスカバ。 俺は肉弾戦が一番得意だけど… まあ、こっちのが早いから」

ペラペラと喋りながらも、彼は一切の隙を見せない。 最初から逃げるつもりも無かったが… もう円堂は此処から逃げられないだろう。 彼も間違いなく、ケリをつける気だ。

円堂は身構える。 殺される訳にはいかない。 だからこそ自分はこうして、彼と対峙する事を選んだのだから。

「楽に死ぬると思わないでね。 浄罪の魔術師… 円堂、守！！」

その声が、合図。 ミストレは素早く大地を蹴り、円堂に踊りかかってきた。

【十六：ブラインド・ジャステイス】

円堂は思った。死にたくない、と。

しかしそれ以上に願った。知りたい、と。

ミストレは何も語ってはくれなかった。ただその憎悪の深さだけを見せつけてきた。知りたければ力づくで吐かせると、そういう事なのだろう。尋問のプロであろう少年兵相手に、まったくもって難易度の高いミッションだったが。

ミストレのナイフは真つ直ぐ円堂の手を狙っていた。楽に死なせない、と言った彼。GKの命たる手に傷をつける事で、さらなる絶望を味あわせてやろうという算段だったのだろう。

だが円堂とて、この展開を予期していなかった訳じゃない。寧ろこうなる事を見越した上でこの場所に立っている。ミストレを捕まえ、止める為に。

「ファイアートルネード！」

ミストレが大地を蹴った瞬間、焰を纏ったシュートが二人の間に割って入った。余波で雑草が燃え散り、熱風が周囲を揺らす。直前に攻撃に気付いたミストレは素早く後ろに跳んでいた。無論円堂にも当たる筈はない。

そしてミストレがバックステップした直後に第二激。気配に振り向いた彼の目前に、吠える青い竜が迫っていた。

「ドラゴンクラッシュ！」

とつさに地面に伏せるミストレ。これも避けられた。だがそれすらもこちらの計算のうちだ。

「竜巻旋風！！！」

「！！！」

伏せた彼の足元から巻き起こる風。草むらに潜んでいた小林だ。さすがに反応が間に合わず、華奢な身体が宙に巻き上げられる。そこにさらなる一撃が。

「ツインブースト！」

屋上で待機していた鬼道と一之瀬が、階下に向けて必殺技を放つ。空中ではいくらミストレといえど回避出来る筈もない。とつさに両腕をクロスさせて防いだものの、ガードした体制のまま彼は地面に叩きつけられた。

「ぐあつ…！」

そこに、踊り出たのは…秋。

「ゴッドハンド！」

具現化せる、金色。巨大な神の手が、地面にミストレを縫い止めた。ミストレはもがくが、思いの外秋の力が強いのかはたまた女の子相手であるからか、抜け出す事が出来ないようだ。

「くそつ…放せ！」

「お願い、落ち着いて！私達はただ貴方と話したいだけなの…！」
暴れるミストレに叫ぶ秋。そこまできて漸く、円堂は安堵のため息を漏らした。

「や…やった。なんとかうまくいった…！」

思わず地面に座り込む。そこに、木陰に隠れていた染岡と豪炎寺、草むらにいた小林が走り寄ってくる。

「情けねーぞ円堂！まだ終わってないからな？」

「あ、ははは…ごめん。腰抜けた」

「さすが鬼道だな。ここまで計算通りとは」

染岡と豪炎寺に支えられ、なんとか立ち上がり円堂は苦笑する。

そう、全ては鬼道の作戦だった。百戦錬磨のミストレを相手にするには数による奇襲、波状攻撃で攪乱する他無い。

さらには自分達には彼らのような武器もなく、下手に刃物を持ち出せば奪われた時のリスクが高い。自分達が唯一彼と対等に渡り合えるとすれば…サッカー。それを置いて他に無かった。

よってサッカーの技を駆使して止める事にしたのだ。また、マネージャーと認識されているであろう秋が出て来るのは、ミストレにとっても計算外である筈。それがより隙を広げるのではという狙いもあった。

「チェックメイトだ、ミストレ。今度こそ話してくれ」

豪炎寺が口を開く。屋上から降りてきた鬼道と一之瀬が走ってくるのが見えた。

「俺達は軍人じゃない。ましてや一度試合したお前と…サッカー以外で争いたいとは思わないんだ。お前が話してくれない事には対処のしようがない」

仰向けのまま地面に抑えつけられているミストレは、目だけを動かして豪炎寺を見、再び円堂を見た。

「…：オペレーション・サンダーブレイクの企画段階でさ」

「…？」

「ヒビキ提督が一番最初に考えた事って、何だと思っ？」

まったく予想外の話の始めたミストレに、円堂は眉を寄せる。

「提督はさ…円堂守、君を殺して歴史から抹消する事を考えてたんだ。てっとり早いだろ？でも…試算してみたら、君が死んだ事による未来への悪影響が無視出来ないと分かったんだ。それほどまで君という存在は巨大なものだったのさ」

だから出来なかつたんだ、とミストレは言う。

「でも今は違う。だって君はもう…“俺達の世界の円堂守じゃない”」

ぴしり、と嫌な音がした。何の音だ、と円堂が思うのと秋が呻くのが同時だった。

まさか。

顔から血の気が引いていく。それはミストレを押さえ込むゴッドハンドに、罫が入る音。

「分かる？この世界はもう…俺達の過去じゃない。だからこの世界で何をしても、俺達の世界を変える事は出来ないけれど」

ミストレは…微笑んでいた。優しげとすら見える笑み。しかし悪魔的な美しさを称えた笑みで。

「君を殺す事も…赦される。俺がまた過去に来れた事そのものが…証拠！」

ピシリ、と一際大きな音がした。円堂は気付く。ミストレはただ押さえ込まれていた訳でなかった。ナイフを持った片手を突き出す形で、ゴッドハンドをガードしていたのだ。押さえ込まれれば押さえ込まれるほどナイフは神の手に深く突き刺さっていた…ミストレの計算した通りに。

「くっ…う…」

「君は雷門のマネージャーだね。君まで戦えるなんて…そこはさすがに予想して無かったな。喧しいだけの女共にはウンザリしてきたけど…君みたいないない強い子は嫌いじゃないよ」

呻く秋に、にっこりと微笑んでみせるミストレ。

「けど残念だな。せつかくわざと捕まっただけなのに…結局、この程度か」

次の瞬間。ゴッドハンドは粉々に砕け散り、秋は悲鳴を上げて吹っ飛ばされていた。ああ、と円堂は声を漏らす。確かにやけにあつさりとなが運びすぎたようには見えただけ…まさか必殺技も使わずにゴッドハンドを破るだなんて。

けして秋が弱い訳じゃない。ただミストレの力が予想以上だったというだけ。

「くっ…キラーライド！」

こんな事もあるのかと、念の為姿を現さずにいた土門が草陰から飛び出す。しかしミストレは土門のスライディングを軽々飛び越え、そのままのモーションで染岡に跳び蹴りをくらわした。

「染岡！」

頭を思い切り蹴り飛ばされた仲間を見て、豪炎寺に隙が出来る。それをミストレが見逃す筈もなく、素早く足を払われて転倒させら

れた。

少年兵は止まらない。再びツインブーストの構えをとっていた鬼道の胸を思い切り蹴り飛ばし、吹っ飛ばしたその身体を一之瀬にぶつける。地面を転がる鬼道と一之瀬。

「くそっ…ナイフだけでも…！」

木の上から様子を見ていた風丸が降りてきて攻撃を仕掛ける。

「疾風ダツシュ！」

素早い動きで翻弄し、刃物を奪おうとしたのだろう。だがそれ以上にもストレは早かった。円堂に見えたのは風丸の肩に掌底が決まる瞬間のみ。木に叩きつけられ、ズルズルと落ちていく風丸。

「たかだか普通の中学生ごときが…俺達前線の兵士に勝てるんでも？」

校舎影に隠れていた栗松の彗星シユートを軽くかわしてボールを蹴り返す。一撃で伸びた栗松をミストレが鼻で笑う。

そして、豪炎寺達が使ったボールを一つ拾い上げて。

「デススピアー」

思い切り…蹴りつけた。それは赤い光を放つ大きな槍。必殺シユートが雷門イレブン目掛けて放たれる。辛うじて直撃は免れた円堂だったが…地面に突き刺さった途端、それは爆風となって一同を襲った。

「うわあああっ！」

まだ無事だった円堂と、土門と小林が、余波で纏めて吹き飛ばされた。突風――いや、もはやハリケーンか。吹き荒れる風がかまいたちのようにイレブンの身体に傷をつけ、ダメージを蓄積させる。嵐が収まった時立っていたのは、ミストレただ一人だった。

「これで邪魔者はもう、いない」

少年はゆっくりと、倒れ伏す円堂の前に歩み寄ってくる。

「円堂守。君は此処で、死ぬ。俺の手で、殺される」

くるくるとナイフを弄びながら、いつそ爽やかなほどの笑みを浮かべて。

「ふふっ…たまんないね、その怯えきつた顔。死ぬのが怖いかい？絶望したかい？自分の運命を呪うかい？」

駄目だ、立ち上がらなければ。立ち上がって――戦わなければ。そう思うのに、円堂の手足はずしりと重く、動く気配も無い。身体の傷は大した事無かった。ただ風にまかれ、振り回された為に目眩と脳震盪でやられている。

動け、動け、動いてくれ。そう念じるのに――手足にまるつきり力が入らない。

「…でもね。君が今感じているよりずっと大きな絶望を、バダップは見たんだ。君達よりずっとずっと怖くて、痛かった筈なんだ」

絶望――一体何の話なのか。バダップはどうなったのか。

円堂には何が何だかさっぱり話が見えない。

「本当はもつともつと怖い目に遭わせてやろうと思ったけど…もういいや。これ以上君の顔を見ているのも嫌だし」

ミストレは円堂の前に屈むと、頬にナイフを押し当てた。キラリ、と光る刃には嗤うミストレとひきつった円堂の眼が映る。

秋が悲鳴に近い声で自分を呼んだ。

鬼道が動かない身体に鞭打ってこちらに這ってこようとするのが見えた。

しかし全ては絶望的に遠い距離…そう、絶望なのだ。自分はこんな訳も分からないまま、何も出来ないまま死ぬしかないのか。

恐怖はある。それでもこんな瀬戸際ですら、円堂の心を締めつめたのは、恐怖以上の悔しさだった。諦めたくない。諦めてたまるものか。そんな感情を込めて相手を睨みつける。

「こんな時ですら…諦めないんだ？その精神には敬服するけど」

きつとあの試合の時の事を思い出したのだろう。彼は少しだけ眼を丸くする。

「だけでもう…全部お終い。大人しく…死んでね」

ナイフが振り上げられる。その瞬間ですら円堂は考え続けていた。何か無いのか。この状況を打破する方法は。せめて第一撃で急所を外す事だけでも出来れば…。

カキーン！！

その時だった。高い金属音と共に、ミストレが小さく悲鳴を上げ…次の瞬間パツと後ろに飛んでいた。一気に円堂と距離が開く。

「…な、何だ？何が起きたんだ？」

段々とダメージも回復してきた。円堂はどうにか身を起こして、
- 気付く。ミストレが持っていたアーミーナイフが地面に飛ばされ
ている。そのすぐ側にはもう一本ナイフが。

理解が追いつく。何者かが、ナイフを投げつけてミストレが持っ
ていたその刃に当て、弾き飛ばしたのだ。

「どっいつつもりだ…っ」

低く、唸るようにミストレが言う。

「何故お前が邪魔をする…エスカ！」

いつからそこに居たのだろう。木陰から姿を現したエスカバが、
両手にナイフを数本ずつ構えて立っていた。憤りと、悲哀を滲ませ
た顔で。

「…当たり前だろ」

彼はゆっくりと周囲を見回し、やがて悲しげな眼でミストレを見
た。

「てめえのやろうとしてる事は…見当違いなんだからよ」

静かに風が渡る。小さくも、苛烈な争いを見せたこの戦場に。

【十七：ロスト・スマイル】

大人達の思惑が交錯する。
悲しい未来と、屍の上の世界で。

- - 西暦2090年

「平行世界乱立論」

会議室に、ヒビキの重い声が響く。

「数年前にエルゼス・キラード博士が提唱したものだ。当時は誰もが夢物語だと笑った。私も含めてな」

広い会議室には今、ヒビキの他にバウゼンしかいない。ヒビキの場所からはバウゼンの表情はよく見えなかったが、きっと普段通りのポーカーフェイスなのだろうと思う。

彼が何を思つて、自らの部下を死地に送ったかは分からない。何も思わなかった筈はあるまい。それでも感情を表に出さず忠実に上官の命を守ったのは素直に賞賛すべきと思う。まさに軍人の鑑だ。

「しかし皮肉にも、今回実行したオペレーション・サンダーブレイクによって証明されてしまった。平行世界は存在し、また円堂守は絶対的確定要素であると」

円堂守に関わった出来事は全てパラレルワールドになってしまっ
よって彼と彼の周りの歴史は決して変える事が出来ない。最初から
オペレーションそのものが無意味だったのである。

「我々の世界から円堂の影響力を排除する事は出来ない。だが。キ
ラードの理論が正しければ、もう一つ可能性が出てくる」

「鏡面夢…ですか？」

「さすがだなバウゼン大佐。その通りだ」

察しの良いバウゼンに笑みが零れる。

鏡面夢 - - これもキラードが提唱した平行世界乱立論の中にあっ
た単語だ。

異なるパラレルワールド同士は基本的に干渉し合う事がない。し
かし、通常の異世界と違うのは、元は同じ人間と同じ世界であった
事である。これを、魂が同じ存在、とキラードは表現していた。

魂が同じ存在は、パラレルワールドにいても根つこの部分で繋が
っているという。だからもし、別の平行世界で何か大きな変事があ
った場合、稀に他の平行世界の人間に影響が出るのだそうだ。

その一つが、鏡面夢。

例えばAという人物の世界のパラレルワールドの存在、A'が、
何かの事故で死んだとする。すると平穏無事に生活している筈のA
が、夢でその光景を見る事があるのだという。

「ミストレーネ・カルス小尉を、オーガが戦った“円堂守”の世界
に送る許可を出したのは…その為だ」

オペレーション・サンダーブレイクの前段階で、ヒビキが最初に
考えたのが円堂守の殺害だった。だが後々の悪影響があまりに無視
出来ないレベルとの試算結果が出た為中止されたのだ。そこまで円
堂の存在は世界に深く根を張っていたのである。

しかし皮肉にも。円堂が絶対的確定要素と分かり、自分達本来の
過去はけして操作できないと分かってしまった。裏を返せばあの円

堂守が死んだところで、歴史にはなんの悪影響も出なくなったのである。

ならば。円堂を殺しても無意味か？ - 否。

あれほど強大な存在だ。パラレルワールドの円堂が齡十四で歴史から姿を消したとなれば - 自分達の世界にもなんらかの影響を与える事が出来るのではないか？

だからヒビキはミストレの提案を呑み、軍の機材で彼をタイムワープさせたのだ。復讐心からミストレが円堂を殺害し、パラレルワールドを掻き回してくれる事を期待して。

「…もしかやヒビキ提督は」

少し考えこんで、バウゼンが口を開く。

「ここまで計算した上で…バダップ＝スリード大尉にオペレーション・シルバールブレッドを任せたのですか？」

オペレーション・シルバールブレッド - テロ組織のレッド・マリア織滅任務。確かにあれはヒビキが提案し、バウゼンから実行役をバダップに任命するよう命じたものだった。

「いや。予想はしていたが、ここまで狙っていたわけじゃない。お前も薄々気付いていただろうが…バダップが生きて帰って来た事がまず奇跡的なのだ」

「…そうですね」

バダップなら、可能性はゼロではないと思っていた。しかしまさか本当にたった一人でレッド・マリアを壊滅させてくるとは。どうやらその為の相当、彼らしからぬ手段を使ったようだ。

正直なところ。あの任務は、バダップ及びオーガを処分する口実として与えたようなものだった。少なくともヒビキ以外の上層部はそうだった筈だ。それほどまでに彼らは円堂守の影響力を畏れた。

円堂の呪いにかかったバダップ達がいつ反旗を翻すかと怯えていたのである。

バダップが任務に失敗して死ねば、そのままオーガの他メンバーを処分する大義名分が立つ。無論公に始末する訳にはいかないが、バダップと同じように無茶なミッションに放り込んでやれば済む事だ。

それが――まさかのまさかでバダップが生還し。上層部は大荒れになった。これで当分、オーガの処分を先送りする羽目になったのだから。まあ、結果的にミストレの復讐心という、意外な効果はあったのだけど。

それに、生きて帰ったとはいえ、その代償はあまりに大きなものだった。バダップはもう、軍の脅威にはなるまい。あれほどの逸材が使いものにならなくなったのが残念ではあるが。

「我々はひとまず見守ればいい。我々を愚弄したあの円堂守の無惨な最期を……な」

円堂を憎んでいるのは――何もミストレだけではない。方向性は違えどヒビキも同じだった。

己の曾祖父と祖父。円堂の為に力を尽くした者の末路を、父から嫌というほど聞かされてきた。円堂の名を冠する者は悉く自分達に恩を仇で返してきた。卑怯者で、呪わしい存在。特に――始まりの人である円堂大介と円堂守は。

――思い知るがいい、円堂守。

ヒビキはぐつと膝の上で手を握りしめる。確かに円堂には力があつただろう。魔法があつただろう。しかし――彼はあまりに周囲を巻き込みすぎた。その絶大すぎる影響力で。

- お前のサッカーで、不幸になった人間もいるのだ。

思い知って、無様に死ねばいい。

所詮サッカーなどで、誰かを幸せにする事などできやしないのだから。

そして時間は、再び現代へ。

- - 西暦2010年

ギリギリ、と。奥歯を噛み締める音が聞こえてしまいそうだった。それでもミストレは力を弱める事が出来なかった。

悔しくて悔しくて、肉らしくて憎らしくて。感情が飽和して、目の前が真っ赤に点滅している。まるでシグナルのように。

「見当違い…だって？」

目の前に立つエスカバを、射殺さんばかりに睨みつける。この時ばかりは地面に転がる雷門イレブンも、さっきまでトドメを刺さんとしていた円堂守さえ見えていなかった。

ただエスカバだけを、見ていた。

「言ってみるよエスカバ。何が間違ってるって？え？俺のしようとしてる事がどう違ってるって言うんだ？」

鉄臭い味が広がる。うっかり唇を噛みきったようで、顎下を生ぬるいものが伝うのが分かった。

それでもミストレは止まらなかった。

「こいつらさえ… 円堂守さえいなけりゃ！あんな試合なんかしなければ！！バダップがあんな… あんな風に壊される事なんて無かったのに…！！」

壊される。その単語に、徐々にダメージから立ち直りつつある雷門イレブンが息を呑むのが分かった。

「…再三になるが、ミストレ、エスカバ」

ふらつきながらも立ち上がり、豪炎寺が訊いてきた。

「お前達に… 一体何があったんだ。バダップはどうなったんだ」

沈黙が、落ちる。そもそもミストレに答える気は無かったが、エスカバはどうやら違ったようだ。血の気が引いた顔で俯き、唇を噛みしめている。何度か言葉を発しかけるも、音にならないようだった。額には脂汗さえ浮かんでいる。

きつと。思い出してしまったのだ… あの時見たバダップの姿を。そうなる原因を作ったあのおぞましい映像を。軍人として鍛えられている筈の自分達でさえトラウマになるほど酷いものだった。深すぎる、傷。刻まれたのはバダップ本人だけではない… あれを見て

しまったオーガのメンバー全員だ。

「それは、俺から話すよ…豪炎寺さん」

そこに、新たに現れた少年 - 円堂カノン。ミストレは舌打ちし、同時に理解する。こいつがエスカバをこの時代に送ってきたのだ。こいつと、キラードが。

まったく余計な真似をしてくれる。

「俺は…実際の様子は見てない。話を聞いただけ。だから…話す事も、出来る」

「どういう意味なんだ、カノン」

「…俺もね、初めて知った事なんだ」

尋ねる円堂を見、カノンは悲しげに眼を伏せた。

「本当に深い心の傷は…口にするだけで死にそうになるんだって。……俺に話してくれた時のエスカバの姿を見て…そう思ったよ」

そしてカノンは語り出す。ミストレが知るより、遙かに簡略した言葉で。

「ミッション失敗の責任を負って、オーガは営倉入りになった。ここまでではひいじいちゃんも知ってると思う。でもこの話には続きがあるんだ」

それでもミストレが全てを思い出すには充分で、うっかり吐きそうになり、口元を押さえる。

「正確には、営倉入りになったのはバダップ以外のオーガメンバー。バダップはみんなが収容されている間、単独ミッションを任されたんだ。結果次第で今後のオーガの扱いが変わってくる…そんなミッション。中にはオーガ全員を処刑しろなんて過激な意見もあったみ

「ただだから」

「しよ、処刑！？殺すつて事かよ…一回失敗しただけじゃねえか！
！」

「それが普通の感覚だよ。俺もそう思う」

「だけど軍の人達はそうじゃなかったんだ、とカノン。」

「だからバダップは…どんなに無茶な任務でも受けるしか無かったんだと思う。そうじゃなければ、仲間を守れないから」

オペレーション・シルバードレッド。その名の通り銀の弾丸…半ば特攻のような、無謀極まりない作戦だった。しかしミストレはその作戦名すら、全てが終わるまで知らなくて。

「任務内容は…あるテロ組織を壊滅させ、必要な資料を持ち帰ること。バダップはそのテロ組織…およそ千人をたった一人で織滅させた。任務を成功させたんだ」

千人を一人で殺し尽くしたバダップ。まさしく一騎当千の強さを持つ彼だからこそ出来た事なのだろう。

「だけど…その代償は大きかった。バダップは生きて帰ってきたけど…“それだけ”だったんだ。身体も心もボロボロに壊されていた。一度捕虜になつて酷い拷問されて…そのせいで」

拷問。言葉にしてしまえばたった漢字二文字だ。カノンがどこまで知っているか分からないが、多分エスカバも詳しいところまでは語れなかっただろう。

ミストレは、知っている。バダップは失敗して捕虜になつたのではない。そうしなければ完遂できない任務だったからわざと捕まったのだ。

それで自分がどんな目に遭わされるか、分からなかった筈がないのに。

「バダップは恥も誇りも捨てて戦ったんだ…俺達を、守る為に…ッ！」

血を吐くような声でエスカバが言う。

「もうバダップは…歩く事も喋る事も出来なくなっちゃった…!!」
ミストレの記憶の中。振り払い、忘れようと努めたが…無理だった。

バダップが笑っている。

もう二度と、見れない笑顔で。

【十八：ペインフル・フラジール】

あの日の事を……ミストレは一生忘れられないだろう。

バダップがどんな姿で生還したか、正確にはミストレは見えていない。ただ帰投した時の凄まじさを、バウゼンから聞いたのみだ。

服はズタズタで、剥き出しの太ももや腕は血が幾筋も伝っていた。目は濁り、折れた右足を引きずり、ふらつきながらも、愛銃と荷物を握りしめて歩いてきたという。歩く度に血の川ができて、近付くだけで凄まじい血の匂いがしたそう。血と、腐臭と、死臭が。

営倉から出されてすぐ、ミストレは仲間達と共にバダップが収容された病院に飛んでいった。彼はまだ集中治療室から出られる状態になかったが、ガラス越しにその姿を見る事は出来たのである。

そして……愕然とした。

包帯や衣服に覆われていないのは顔だけだ。ぽっかりと開かれたままの瞳は何も映していない。呼吸器から聞こえる音がなければ、死んでいるも同然の姿。

さらには……バダップの、左肩から下がなくなっていた。シヨック死しなかったのが不思議だよと医師は言っていたらしい。

左腕の切断。十三カ所の骨折。一部内蔵破裂に筋断裂。身体右肩や腹には、撃たれた弾丸が貫通せず埋まったままになっていた。地獄の苦しみだった筈だ。そんな身体で任務を成功させてきたなんて、もはや才能云々のレベルではない。

瀕死の傷だが。今の技術ならば、左腕以外はなんとか治せるだろうと医師は言う。しかし彼いわく、本当に恐ろしいのは怪我そのものではないそうだ。

『拷問に尋問。だが……それだけじゃない。バダップ君の身体の中におぞましいモノがたくさん入ったままになってたし、痕跡も嫌と

『いっほど残っていた』

後で知らされた情報を元に、ミストレなりに調べてみたのである。バダップが相手にしたテロ組織、レッド・マリア。そのボスであるアルフレッド・シユタール。その巨漢と剛腕、軍人時代に築いた人脈が武器であるその男は、身の毛もよだつ悪趣味があった。

幼い子供をいたぶり、慰みものにし、悲鳴を何よりも愉しむ。時には取り巻きの化学者達に命じて、獲物の身体を好き勝手改造する事もあるという。資料には、両足を切断されて魚のような尾をくつつけられた少年や、身体の半分が植物になってしまった少女の写真があった。

バダップは、そんな男の捕虜になってしまったのである。彼の實力ならば、捕まる事なく逃げ切るくらいは出来ただろう。

だが任務の内容はレッド・マリアの壊滅と資料の回収。失敗は許されない。千人もの武装勢力を相手にそれを遂行する為には、どうしても捕虜になって相手を油断させ、探りを入れるしか無かったのだ。バダップの身体には麻酔もされずメスを入れられた後や、アルフレッドの趣味に合わせて腹の中や胸の中をいじくり回された痕跡が山ほどあった。資料の子供達に比べて見た目はさほど変わらなかつたものの、バダップの身体が遣伝子レベルで両性化させられていると聞かされた時は本気で吐き気がしたものである。それだけで男がバダップを何に使ったかが見えるようだった。

『…スリード大尉が…ああ、失礼、バダップが今回の功績から一階級昇格になったのは知っているな？彼が持ち帰った資料の中には、施設の防犯カメラの記録を入れたメモリーカードもあった。見てみるか？』

極秘任務だった筈だ。それを何故バウゼンがわざわざ自分達に見せたのか。今から考えると、自分達の精神的揺さぶりが目的だった

としか思えない。オーガは既に邪魔な存在だったのだろう。自分達の戦意を挫く為に使ったに違いない。隊長の、あまりにも無惨な姿を。

そこにはバダップがアルフレッド達に拷問され、陵辱され、実験道具にされる一部始終が記録されていた。映像の中、泣き叫ぶバダップ。それはアルフレッドを喜ばせ、油断させる為の演技だっただろうが。結果を知っている自分達の胸を抉るには充分だった。

映像を見せられたその日、ミストレは自室で強かに吐いた。髪を掻き毟り、泣き叫び、醜いのを承知で罵りの言葉を吐き散らした。胃の中身が空になっても、胸につかえたものが消える事はない。悲しくて苦しくて恐ろしくて理不尽で。ああ、もしかしたら壊されたのはミストレも同じだったのだろうか。

それから数日は食事も喉を通らず、夜は眠れない日々が続いた。眠れば必ず、あの映像が夢に出てくるのだ。血だらけで泣き叫ぶバダップと、好き勝手にバダップをいたぶる男達。夢の中でバダップが自分の名を呼び助けを求めて。そこでいつも飛び起きるミストレ。その繰り返しだ。

それでもどうにか少しは落ち着いてきて。一般病棟に移されたバダップに逢いに行った。左腕のなくなったバダップは包帯だらけで横たわり、相変わらずぼっかりと宙を見つめていた。声をかけても、反応が返ってくる事は無かった。

- - 何で、こいつがこんな目に遭わなきゃいけない？

バダップの右手を握りしめ、ミストレは泣いた。

- - こんな惨い真似されなきゃならないほどの罪が。こいつの何処にあったって言うんだよ。

戦場でたくさん、人を殺した。それは間違っていない。自分達は

きつと地獄に墮ちる。それも分かっていたつもりだ。だけど。

この任務を命じられるきつかけになったのは――あの日の、あの試合。バダップはサッカーをした。試合に負けた。それだけではないか。彼はただ、仲間と共に在る未来を願っていただけではないか。

――ああ……今更だ。

今更、ミストレは気付く。自分はずっと、バダップが嫌いだと思っていた。認めているのは間違いない。だが自分からトップを奪う、憎たらしい相手だと常に思っていた筈である。

そうではなかったのだ。

自分はこんなにも彼を頼りにしていた。彼の作った料理は美味しかった。彼の作戦はいつも皆が生き残れるように最善を尽くしたものだ。書類の完璧さには舌をまいた。からかうと天然な反応ばかり返ってきて、そんな彼に呆れる時間が、自分は嫌いじゃなかった。

そして、稀に見せてくれる笑った顔が綺麗で――大好きだった。

――馬鹿だオレ。なんで今更、気付くのかな。

才能と容姿ゆえ。自分の周りには人が集まった。しかしミストレは、上辺だけで近付いてくる連中を誰一人信用していなかった。友達の多さが唯一バダップに勝てる点だなんて思っていたけれど――なんてことはない、集団の中にもミストレはずっと独りだったのである。寂しいことすら気付けないままに。

変わったのは、オーガ小隊が出来てから。

対等に話せる連中。無意識に信頼出来る仲間。特にバダップとエスカバは、当たり前のように隣に在る存在だった。そうだ、バダップは――ミストレが生まれて初めて出来た、親友と呼べる存在だっ

たのである。

- - いつも、ありがとうつて。そう言っただけで良かった。オレ達がいるから、一人で背負ったりしなくていいよって。

最後に作ってくれた料理、特に餃子は絶品だったよ。

花火に誘ってくれて嬉しかったよ。

それから - - 最後に、みんなで作ったサッカー。凄く凄く、楽しかったよ。

- - ごめんね。何一つ…言っていないよね。

大事なこと、何一つ伝えていない。

君は自分にとって最高の親友で、誇れる隊長で。

いつも嫌いだとか馬鹿だとか言っちゃったけど、本当は好きだったんだよ。自分だけじゃない、みんなみんな、君が大好きだったんだよ。

言えなかった言葉が胸を苛む。後悔だけで死んでしまいそうだった。バダップの命を繋ぐ点滴や呼吸器のコードが、抱きしめる腕の邪魔をした。

- - 赦せない。

嵐のような悲しみと嘆きの後。ミストレを支配したのはその感情。

- - バダップを壊した奴らも、バダップにこんな真似をさせた奴らも…そのきっかけになった奴らも、全部。

憎悪。殺意。憤怒。それらがミストレの脳髓を真っ赤に塗りつぶし、染め上げていく。

自分達は無知で無力な子供だったかもしれない。軍人とはいえ、あまりに知らないことが多すぎたのかもしれない。

だが今でこそ分かる。それでもずっと、自分達は幸せだったのだ。少なくとも自分は。戦場に出て、今日死ぬか明日死ぬかも分からない場所について尚――長く生きる事より一瞬の日常が貴かった。独りではなかったから。笑い合える仲間と、居場所があったから。

それが壊れたのは何時だ。

――あの、オペレーション・サンダーブレイクに失敗してからだ。

失敗したのは何故だ。

――円堂守が、邪魔したからだ。

バダップが八十年前の生ぬるいサッカーと、軍の忌み嫌う呪いにかけてしまったのは何故だ。

――全部、全部、円堂守のせいだ。

全ての始まりは、円堂守。

出逢わなければ良かった。彼と試合などしなければ、オペレーションに参加しなければこんな事にはならなかった。自分達はずっと、平凡な日常の中で生きて死ねた筈なのに。

――殺してやる。

場違いだと。復讐は何も生まないと、理性的なもう一人の自分が言う。バダップだって言っていたではないか。あの試合で得たものがあったと。そんな彼がこんな事望みはしないと分かっているのに。どこかにぶつけなければ、想いの持っていきようがなかった。き

つともう既に自分は狂っているのだろうが、このまま放置すればさらに見る影も無いほど壊れてしまいそうだった。

「…お前らに、何が分かる？」

カノンの話を聞いて。呆然と立ち尽くすばかりの雷門イレブンに、ミストレは吐き捨てる。

「ボロボロにされて、人としての尊厳も根こそぎ奪われて…！バダツプがどんなに痛かったかお前らに分かるのかよ？その姿を見てオレ達がどんな想いだっただか…お前らに分かるってのかよ、ええっ！？」

円堂守を殺す。そして、バダツプをあんなになるまで追い詰めた軍の連中も、提督も教官も皆殺しにしてやる。バダツプを弄んだ直接の実行犯は既にこの世にいないだろうが、レッド・マリアにはまだ残党がいた筈。そいつらも殺してやる。

「死ねよ…死んじまえよ全員！全部全部全部呪われちまえ！滅んじまえ！お前らの世界もオレ達の世界もっ！！！」

どうせ救いなんかありはしない。神様がいないなんて分かりきっていたけれど。今はいもしない筈の神様とやらさえ憎くて憎くて堪らない。

「もう、バダツプは戻らない…オレ達もいつか同じように使い捨てられるだけなんだ！！だったらもう、何も要らないっ！！！」

どうせ、もう彼は救われないなら。

どうせ、壊されるだけの未来なら。

「だから…そいつを殺して、みんなみんな殺して…オレも死んでやるっ、人として!!」

叫んだ、その時だった。

「…諦めるのか」

沈黙していた円堂が - - 泥とかすり傷にまみれた顔を上げて、ミストレを見た。

「ふざけんな！何でそんな簡単に諦めちゃうんだよ！そんなの…悲しすぎるだけじゃないか!!」

一瞬、ミストレでさえ気圧された。

先程殺されかけた筈なのに。円堂の眼に、絶望は欠片も無かった。

【十九：ゴッド・ハンド】

恐らく、カノンが語った事は大筋に過ぎず、全てではないのだから。血の気が引いたミストレとエスカバの顔を見れば分かる。細かい事までカノンに教えるにはあまりに――彼らの傷は、深い。

「多分：カノンが言った事以上の事が起きたんだらうって、思う」

円堂は真っ直ぐミストレを見据えて言った。

「俺は実際にバダップの姿を見た訳じゃないし……。当たり前たく一般人として生きてこれた俺には、想像もつかないくらい酷い事があつたんだと思う」

分からない事が、知れない事がこんなに辛いなんて。胸の奥をじくじく苛む痛みにも、円堂は歯を食いしばって耐えねばならなかった。

分からない方がいい事、知るべきでない事もたくさんあるのだから。だけど今は。今だけは。彼らの痛みを共有出来ない事こそが痛みだった。

「それに俺は……俺だから。バダップにもミストレにもエスカバにもなれないから。気持ちが分かるなんて軽々しく言えない」

慰めでよくある言葉。お前の気持ちがよく分かるよ、とか。昔はその罪深さに気付かなかった。同情して、知ったかぶりして、余計傷つけかねない言葉だなんて。

今は少しだけ、そうだった事も見えるようになったから。分かるだなんて言わない。その代わり素直に自分の気持ちを伝える事が大

事だ、と円堂は思うのである。

自分の気持ち。

彼らの痛みを少しでも知りたい――彼らを救いたいという、気持ち。

「ただ。分からないからこそ……知りたいって願ってる。だからさ、恨み言かもしれないけど……ミストレ達の本音、聴けて良かったよ」

漸く知れた、想い。ミストレが自分をこんなにも憎んだ理由。人はそれを逆恨みだと言うだろう。それは間違いではない。円堂自身も、謝るべき事ではないと思う。

しかし。自分が正しいと信じてやった事が、結果として悲劇を招いたのも事実であり。それを想定していなかった事だけは反省しなくてはなるまい。

予想していたら何かが出来たという訳でもないかもしれないが、それでも。

「その上で……俺、思うんだ。諦めちゃいけないって」

ミストレの、憎しみに染まった眼を見る。悲しい眼だった。悲しくて悲しくて、ホントウ真実の事が見えなくなってしまうている眼だった。

「俺は誰かを殺したいほど憎いつて思った事はない。でもさ……復讐は良くないとか、そんな事しても誰も報われないとかよく言うけど、それは綺麗事に過ぎないんじゃないかな。本気で誰かを憎んで堕ちた事のない人間に……そんな事言う資格はないって」

だから自分は……ミストレが自分を殺しに来るならば全力で抵抗するけれど。その行為自体を、感情そのものを否定する事はしない。それは誰でも持ち得る、当たり前前心だと思っから。

「だから…うまく言えないけど。ミストレがどうしても復讐したいなら、それを止めちゃいけないって思う。勿論俺も死にたくないから全力で逃げるけどさ」

「円堂…」

「ただ、さあ」

何だろう。なんと説明するのが正しいのだろう。こんな時回らない自分の頭が恨めしくて仕方ない。

「ただ…それって幸せな事なのかなって、思っちゃうんだよ」

円堂は拳を握りしめる。

初めて聞いた - - 世界を、運命を、全てを呪う声。

『死ねよ…死んじまえよ全員！全部全部全部呪われちまえ！滅んじまえ！お前らの世界もオレ達の世界もっ！！』

激情を吐き散らかしたミストレは嗤ってさえた。しかし円堂には彼がずっとずっと、泣いていたようにしか見えなかった。声もなく、涙もなく。

「何もかも呪ったまま…全部壊して、死んで。それで誰かが報われるのかな」

『もう、バダップは戻らない…オレ達もいつか同じように使い捨てられるだけなんだ！！だったらもう、何も要らないっ！！』

「何も要らないわけ、無いじゃん。大事なモノがあったから…守りたくて、でも守れないモノがあったから絶望してるんだろ？悲しくて壊れちゃいそうなんだろ？」

「だから…そいつを殺して、みんなみんな殺して…オレも死んでやるっ、人として!!」

「死ぬのだって権利だ。それでお前が逃げただなんて俺は思わないし、エスカバ達も思わないと思う。でも…でもさ」

このままでいい訳がない。

見失ってはいけない…一番大切な事を。

「お前がこんなに苦しんで苦しんで、不幸になつたまま死んだら。それを知ったバダップが一番傷つくんじゃないのか…!？」

ハツとしたようにミストレの眼が見開かれる。円堂はさらにたたみかけた。

「負けるなよ。俺達の…ミストレの。人生って名前の試合は終わっちゃいないだろ…!まだホイッスルは鳴ってない。逆転出来る可能性だつてあるじゃないか…!」

サッカーの試合と、同じだと思った。試合においてならば円堂もまた絶望を知っている。足掻いても足掻いても埋まらない力の差、圧倒的な壁。帝国や世宇子といった相手に何度絶望したかしかない。だが。どんなにそれが巨象と蟻の戦いだったとしても。可能性は限り無くゼロなのであって、完全なゼロでは無かった。人の想う力は強い。その力一つで、その極僅かな可能性をも引き上げられると自分達は知っていた。

そうやって起こした奇跡。王牙との試合もそう。自分達は奇跡を起こして、零を百に変えてみせた。勝利を掴んでみせたではないか。

「諦めんなよ!自分達はもう不幸になるしかないなんて…未来には

絶望しかないなんて。バダップがもう戻って来れないなんて諦めるな！！」

あの試合を通して、彼にも何か伝わった筈。自分はそう、信じている。

絶対に、諦めない。その心が奇跡を起こす。諦めた時に絶望が人を殺すのだ。

「忘れんなよ…だって俺達みんな…生きてる。まだ生きて此処にいるんだよ！！」

綺麗事かもしれない。必ず出来るなんて保証は無いし、願えば叶うだなんて事は神様だって約束してくれない。

それでも、自分は何度だって言う。

生きていれば必ず、逆転のチャンスはある。どれだけ確率が低くとも、ゼロなんかじゃないと。

「…バダップもさ、きつと頑張ってるんじゃないのかな」

ミストレの眼に映る円堂は、泣いていた。そこで漸く円堂は己の頬を伝う滴に気付いた。

円堂だけではない。エスカバも、カノンも。みんな泣いていた。

「でさ。頑張ったバダップが…もし帰って来れた時にさ。お帰りって…お前達が迎えてやんなきゃ、駄目じゃんか」

そして。ミストレの瞳の中の円堂が揺れて、溶けて、光になって流れた。ミストレも涙を流していた。そこに先程までの、阿修羅のような形相は無い。

「う…るさい。煩いっ…煩いよ円堂守っ…！」

俯き、片手で顔の半分を押さえてミストレは呻く。

「分かってる…分かってんだよそんな事…。だけど、だけどどうしたらいいか…オレは、どうすればいいってんだよ…！」

場違いな感情だと思うが。はらはらと涙を流すその姿は、可憐な少女にしか見えなかった。仲間の為に泣く彼は、罪深いほどに綺麗だった。

「憎いんだ…悲しくて壊れそうなんだ…！眼を閉じるとすぐあの映像を思い出す。血だらけで泣き叫ぶバダップが夢に出て来る…！その度にオレは…生きていていいのかさえ分からなくなるんだ…！！」

「……ミストレ」

ずっと沈黙していたエスカバが口を開いた。

「一人で、背負うなよ。同じモノを見たのも思ったのも…お前一人じゃねえんだ」

映像、とミストレは言った。カノンはただバダップがボロボロにされたと言い、エスカバは彼が喋る事も歩く事も出来なくなったと言った。多分…これは推測だが。バダップがそうなった原因が、映像として記録されており、ミストレ達はそれを見てしまったのではなからうか。

血だらけで泣き叫ぶバダップ、なんて。円堂にはどんなに頑張っても想像しようがない。だって自分達にとってはつい先日の事なのだ。気丈にフィールドに立ち、冷静に試合を指揮する彼を見たのは。もしかしたらミストレもそうだったのかもしれない。想像さえも出来なかった悲劇と、親友のあまりに無惨な姿を見せつけられて。故により一層ショックが大きかったのかもしれない。

円堂も考える。もし自分にとつての親友達 - 豪炎寺や、風丸や、鬼道が同じ目に遭ったら。どこまで平静さを保てるだろうか。

「…無理に、憎しみを忘れるなんて言わねえ。思うのは自由なんだ。ただ…お前が本当に憎むべき相手は円堂じゃねえ。殺せたところで虚しいだけ。お前の手がまた汚れるだけだろが」

「分かつてる…分かつて、る…！」

「辛いだろうけど。もうちょい楽に生きる。…円堂の言う通りだ。簡単に諦めたら、後で死ぬほど後悔するぜ」

後悔。ああ確かに、と円堂は思う。自分がいつも諦めなかった訳。諦められなかった本当の訳は。

後の後悔が死ぬほど怖くて仕方なかったから - それも、紛れもない理由の一つだ。

「生きていていいか、わかんないなら」

カノンが口を開く。彼は涙さえ無かったが、その顔は泣き出しそうに歪んでいた。

「生きていて、いいんだって。そう思える事をすればいいよ。自分の為の理由を作ったって誰も咎めない。今生きてるってだけで…君が頑張ってるって、みんな分かつてるよ」

「…そうだな」

そのカノンの言葉に、鬼道が同意する。

「バダップを信じて待つこと。どうにか助ける方法を考え続けること。それがお前自身の救いになるんじゃないのか」

それは - 長い間影山の下にいて、数多の闇を見てきた鬼道だからこそその言葉だった。彼もまた救いを求めてさ迷っていた一人だった。今やっと、少しずつ前に進めるようになってきた、そんな段階に違いない。

「お前の生を赦せないのは他でもないお前自身。お前が本当に憎み
たかったのもお前自身。…早く赦してやれ。お前がバダップを待っ
ているように、お前を待つ者もいるのだから」

そうだ。ミストレは、愛されている。きっとバダップもエスカバ
もそう。だってエスカバがこの時代まできてミストレを止めようと
したのは、どう見たってミストレの為でしか有り得ないではないか。
忘れてはならない。最後の一線を踏み越える前に、気づいて振り
向くべきなのだ。愛してくれる、たくさんの人達を。その人達の笑
顔が何によって成り立っているのかを。

「う…う…」

ポロポロ。ポロポロ。

ミストレの大きな眼にいつぱいの滴が溢れて、溢れた端から地面
に零れ落ちていく。それはさながら春に降る温かな雨のように。

「うわあああああつ！！」

そしてミストレはエスカバに抱きつき、声を上げて泣きじゃくっ
た。まるで幼い子供のように叫び続けた。全ての想いを解き放つか
のように。

「…カノン」

「何…ひいじいちゃん」

「頼みがあるんだ」

円堂は自らの顔を乱暴に拭い、カノンと向き合った。カノンも自
分とそっくりな動作で、袖口で目元を擦っている。円堂は一つ息を
吐いて、告げた。

「俺達を、未来に連れて行ってくれないか」

【二十：ラスト・エデン】

時代はまた未来へと。

この世界で一つ、大きな変革が起きようとしている事をまだ誰も知らない――。

――西暦2090年。

あてられては駄目だ、とバウゼンは思った。

円堂守という名の光を、見つめすぎてはならない。彼は断罪の魔術師であり浄罪の魔術師。そう呼ばれるほど言葉に力を持っている。自分達ですら惹きつけられそうになるほどに。

かのギリシヤ神話。太陽に焦がれすぎたイカロスは翼を溶かされて大地に堕ちた。円堂守も同じ。彼に近付きすぎればやがてその光に焼き尽くされて惨めに消えるだけだ。

それは、恐怖。

その言葉に耳を傾けてはならない。さすれば疑ってしまう。己の正義を、己のしてきた全てを。間違っているかもしれないなんて――そう思ってしまう。

それは赦されぬ事だ。今更迷ったら、何の為に苦肉の決断をしたか分からなくなってしまう。何の為に部下を死地に送ったか分からなくなってしまう。

もはや後戻りなど出来はしない。だったらもう、信じて突き進むしか道は無い。

「カルス小尉は…失敗したようだな」

暗い会議室。モニターに映し出されたのは、泣きじゃくるミスト
レと彼を抱きしめるエスカバ。周りを囲む雷門イレブンが映ってい
る。

「普通に闘えば…いくらバメル准尉の妨害があったとして負ける事
など無かった筈」

ヒビキは淡々と事実を告げる。そう、エスカバがミストレを止め
に来る事は計算外だった。しかしあのままいけばエスカバを振り切
つてもミストレは円堂を殺せた筈である。

それが出来なくなっただのは。

「円堂守。浄罪の魔術師たる奴の声に耳を貸してしまったからだ。
力たる言葉を放ち、他者に呪いをかける…魔術師の言葉を聴いては
ならぬと、口を酸っぱくして教えたというのに」

円堂守は武力という意味では限り無く無力な存在だ。いや、正確
には曲がりなりサッカーを嗜むゆえ、普通の喧嘩ならば強いかもし
れないが - 武力を持った軍人相手に通用するとは思えない。

しかし彼は代わりにとつともない武器を持っている。それが、言
葉。本人も気付かぬ魔術師としての才。現代の魔法とは箒で空を飛
ぶ事でも黒猫と話す事でもない、力ある言葉で他者を扇動し操る者
を言うのだ。

その言葉で、魔法で。限り無く人を魅了し、同胞を増やしていく。
どんな強大な敵すらも言葉の力で無力化させてしまふ。あまりにも
畏ろしい力だ。

「当初はバダップスリードだけを“処分”すれば、オーガの他メ

ンバーはどうかかなると思っていた。スリード大尉は生還したものの既に無力化しており、カルス小尉も円堂への憎しみをたぎらせてくれたのは良い兆候だった。しかし……」

その次のヒビキの言葉は容易く想定できた。だからバウゼンは先んじて口を開いた。

「どうやらカルス小尉とバメル准尉も処理対象。そしてこの二人が円堂に引きずられたとなればもはや他メンバーも時間の問題……そういう事ですな」

「その通りだ、バウゼン大佐」

オーガ全員を、何らかの形で処分せざる負えなくなった。理解したバウゼンは、益々暗い気持ちになる。

彼らは本当に優秀な、王牙学園の誇りと言っても過言でない生徒達だった。軍人としても数々の武功を上げ、多くの民間人や同胞を救い。バウゼンなりに可愛がってきたつもりであり、愛しくない筈も無かった。

それがまさか……こんな結末になるだなんて。

円堂守さえいなければ。いや、オペレーション・サンダーブレイクに彼らを使ったりしなければ。こんな結果にはならなかっただろうに。

「だが……上層部も私も、やや考えを変え始めているのだ、バウゼン大佐」

「……え？」

だからヒビキのそんな言葉は、予想だにしていなかったものだった。てつきりメンバー全員をバダップと同じように生還の望みのない戦地に送って、処分してしまうのかと思っていたのに。

「オーガの力は、完全に失ってしまうには惜しい。奴らに再びサツカーと円堂守を否定し憎悪させる事が出来れば……奴らを完全に処分する必要もなくなる」

ヒビキは机の前で腕を組み、じっとバウゼンの眼を見た。

「どうやら奴らはこの時代に飛んでくるつもりらしい。無力化したスリード大尉が思わぬ餌になったな」

餌。その表現に、湧き上がる嫌悪感を抑えるバウゼン。バダツプに直接任務を言い渡したのは確かに自分だ。だがそれはけして望んだ事では、なかった。

意に反する命だとしても、上官に逆らってはならない。ヒビキがこの国の行く末を案じてやっている事だと分かっているから余計にだ。容易く反抗心を見せるには、あまりにバウゼンは長く軍人として生きすぎていた。

「この時代にやってきた雷門と円堂カノン、カルス小尉とバメル准尉。奴らには徹底的に絶望を味わって貰うとしよう。それで奴らがサッカーを否定すれば、少なくともオーガ全員を処刑せずにはすむ」と…すると」

「イービル・ダイス…奴らを使う」
はっとしてバウゼンはヒビキを見る。イービル・ダイス…悪の賽子。その名が示すモノが何なのか、バウゼンはよく知っていた。
なんせ彼らを探し当てたのは自分なのだから。

「平行世界は乱立する。それが確かめられてから、私はお前達に命じた。我々以外の世界に干渉し、あらゆる可能性を調査せよと」

平行世界は、一人一人の選択ごとに無数存在する。そして人の運命は賽子のようなもの。仮に一の目を最悪の不幸、六の目を最高の幸福としよう。振って一の目を引いた世界と六の目を引いた世界では、その後の運命も大きく変わるに違いない。

中には運良く六の目ばかり引き続けた世界もあれば、一ばかりの

世界もあるだろう。

そんな数多の可能性の中。とんでもなく低い確率で生まれる、極めて希有な世界。四苦八苦の末バウゼンはその世界を発見し、そして――彼らを、スカウトした。

王牙学園とこの世界を守る、切り札の一つとして。

「奴等是我々にとって奇跡に等しい存在だ。扱い易くはないが望みは一致している。サッカーに絶望し、サッカーを破壊の道具とし、サッカーでサッカーを否定できる悪の子供達……。雷門にぶつけるには打ってつけだと思わないか？」

「…確かに」

円堂やミストレ達にサッカーを否定させるのに、これほど相応しい相手はいまい。そしてうまくいけば、自分はミストレ達を処分せず済む。

反対する理由があるう筈もない。

「私も覚悟を決めよう。…この試合を、全国ネットで流す」

ヒビキは立ち上がり、ひしと前を見据えた。バウゼンは驚愕のあまり声も出ない。イービル・ダイスの素性などすぐ知れる。軍が禁止されたタイムワープを乱用している事も明るみに出てしまう。

それは、即ち。

「ヒビキ提督…貴方は自らの失脚も覚悟の上で…!？」

自分の地位も名誉も全て捨てる覚悟で。雷門とイービル・ダイスに試合をさせるといふのか。

「それが…この国の為になる」

ヒビキは言い切った。何の躊躇いもなく、ハッキリと。

「今でも尚円堂の名を神聖化する者は多い。エレメンタルサッカーを嗜む者達の大半にとって円堂守は伝説の存在。その円堂が絶望し、サッカーを否定する様を見れば…必ずや今の子供達の目を覚ます事が出来る」

バウゼンは跪いていた。なんとという男だ。今まで理不尽に思う事も多々あったが…今、彼について来て良かったと心から思う。

自分が思っていたより遙かに彼は偉大だった。彼は必ず世界を変えてくれるだろう。雄々しく、猛々しく、力に満ちた素晴らしい国へと。

「サー、イエス、サー！」

何者にも彼の覇道を阻ませてはならない。ならば自分も全力を尽くそう。いつかヒビキと共に、全てを失う事になっても。

初めて見る未来の世界に、円堂は感激しっぱなしだった。

「すっげえ…マジすっげえ！」

「さっきからそればっかだなおい」

目をきらきらさせて叫ぶ円堂に、染岡の苦笑混じりの声が飛ぶ。だがそんな彼も、あまりにハイテクな未来都市に興味津々のようだった。

ソリットビジョンを最大限に活用した立体広告。

屋外でさえ例外なく動くストリートの床。

そして太陽エネルギーをフル活用したソーラーカーに、最新のセキュリティーを搭載したオフィスビル群……。人々が扱う携帯電話らしき物体も明らかに小さくなり、デザインが一新されている。

たった八十年。しかしされど八十年である事を実感させられる。主にコスト面が課題だったソーラーエネルギーの有効活用が進んでいる。何もかもが3Dになっている液晶画面。ざっと気付いただけでこれなのだ。もっと凄いモノがたくさんあるに違いない……。そう思えば落ち着いていられる筈も無かった。

バダツプを助ける為に、自分にも出来る事を探したい。だから自分達を未来へ飛ばして欲しい。円堂の願いを、カノンは快く聞き入れてくれた。ただし、人数と時間の制限付きだが。

円堂と鬼道と風丸。豪炎寺と染岡と壁山。雷門からはこの六人が未来への渡航を許可された。本当は全員が志願したかったに違いないが、あちらもあちらでやる事があるし、致し方ない事である。

「タイムワープを勝手にやった事がバレたらマズいんだ。今回は政府の認可なしでやっちゃってるから」

増してや過去の人間を連れてくるなんて問題外だろうし、とカノンは言う。

「だから絶対、自分達が八十年前の人間だってバレないようにしてね。それに時間も…日没までが限界だと思っというて」

「分かったよ」

本当は一日かけて観光していきたいが、遊びにきたわけではないし、本来なら知る由もない事に手を出そうとしているのだ。これくらいの制約は仕方ない。

「…とりあえず…だ。お前らをバダツプに逢わせる」

エスカバが堅い面持ちで言う。

「今のあいつの姿を見て…それでも何とかできるかどうか。さっきと同じ台詞が言えるかどうか。それをまず…教えて欲しい」

自分達は試されているのだろう。彼らの知りたがっている答え -
- 幸せを諦めずに済むか否か、バダツプをまだ救えるか否か。それが出来るならばどんな方法であるのか。それらをバダツプの惨状を見て尚、揺るがない精神力で言えるかどうか。

少しだけ背筋が寒くなつた。今とりあえずは停戦状態とはいえ、いつミストレが考えを変えて円堂を殺しにかかるかはわからない。けして嘘やその場凌ぎのことを言つたつもりはないが、そのあたりは心得ておかなくてはならない。

そのミストレは俯いて、半ばエスカバに引っぱられる形で歩いている。泣きはらした眼が痛々しい。まだ何か考えこんでいるのかもしれない。

「ユニフォームは過去で着替えて貰つたけど…ここから先は帽子と眼鏡もつけて」

カノンに帽子を手渡される。凡に風丸は髪を解き、鬼道はゴーグルを外させられていた。

「あそこが病院。…政府のお偉方も使うところだから」

彼が指差した先には、白い建物が見えた。“病院”の外観はそう変わらないんだな、と円堂はやや場違いに思った。

【二十一：ティア・ドロップ】

ミストレの中から。円堂守を憎む気持ちだが、消えた訳ではない。ただ、それ以上に強い気持ちを出してしまっただけだ。そう。もう一度――皆で笑いあえる日々を取り戻したい。バダップが戻ってくるのを――諦めたくないという気持ちを。

――お前のせいだよ、円堂守。

ミストレは心の中で、すぐ後ろに立つ人物を罵る。

――お前が余計な事を言わなけりゃ……大人しく殺されてくれれば。思い出さずに済んだのに。

全てを恨んで、憎んで、壊して。それで楽になれた筈だ。諦められた筈なのに。

目を背けていた自分の本音に、気づいてしまった。そう、自分が本当に耳を貸してしまったのは円堂の声ではない。皆で幸せになる事を諦めたくないのだという、自分自身の声だ。

こんな世界に、現実に。もう何も期待するものかと思った。最初から諦めてしまえば裏切られずに済む。結局駄目だったとしてもシヨックを受けずに済むからだ。

なのに。自分は円堂を殺せず。また、期待を持ち始めてしまっている。彼ならばもしかしたらと思っただけだ。諦めた筈のものを望んでしまっている。

『……ムダじゃ、ない』

――馬鹿だよ……バダップ。

『俺は言ったな、ミストレ。円堂守に出逢った事を後悔していないと。…この事実を知っても変わらない。俺は、無意味な事など一つも無いと思っている』

- - 馬鹿だよね…オレ。

『過去は変わらなかったとしても。俺達は……変われただろう。だったら、ムダなんかじゃない。必ず未来に繋がっていく。…違うか？』

- - こんな事になっても君は…良い事もあるって、そう言えるって
いうの？

まだ自分達は幸せになれると。

悲しいばかりの運命も変えられると、そう言うの？

- - お願い…答えてよ、バダップ。

白い病室。バダップは最後に見た時の姿のままだ。失われた左腕。右腕には点滴。首と頭には包帯。意識はある筈なのに、誰の姿も見えていない眼。

「リハビリは必要だけだよ…怪我は殆ど、治ってるんだ。切断され
ちまった左腕はどうしようもないけどよ」

息を呑んだ雷門イレブンに、エスカバが淡々と告げる。

「だが…こいつは心を、遠い場所に置き去りにしてきちまった。話
しかけても返事もしねえ。それどころか何の反応もねえ」

それは - 訓練で無理矢理感情を押さえ込んだ声だった。青ざめた顔が示している。本当は口にするだけでエスカバも辛い筈である。

「バダップ。今日はお客さん…連れてきたよ」

ミストレはベッドの横で屈み、バダップに話しかける。

「円堂と…雷門の奴等。お前の事が心配なんだってさ」

心配 - - そう、こいつらは心配している。たった一度試合しただけ、しかも彼らのサッカーを否定する為に現れた敵将を。なんてお人好しなんだろう。

昨日の敵は今日の友、なんて昔の言葉があるけれど。実際はそんな甘いものじゃない。寧ろ今日の友は明日の敵になるかもしれない、それが現実ではないか。ミストレは弱冠十四歳ながらそれを嫌というほど思い知ってきた。

今日は仲間でも明日も仲間。ミストレに当たり前のように信じられる存在が出来たのも - - オーガ小隊が出来てからで。

「甘いつたらないよね。誰も君の事、恨んでないって言うんだから」

本当に、甘い。さすがは八十年前の平和ボケした世界だ。戦争なんて誰も知らない、徴兵制だってない。生ぬるく、楽しいだけのサッカーをしていればいいような連中。

だけど - - ああ、だけど。彼らは戦う心を忘れた訳じゃあなかった。立ち向かう勇気を捨てた訳でも無かった。そうだ、本当は自分だって分かっている。円堂に殺意を向けるのはお門違いだと。彼らの持っていた勇気を忘れてしまったのは、殺伐とした今の時代に生きる自分達だと。

「なんとか言いなよ…君はみんなに心配かけて、こんな情けない姿晒してるんだ。みっともないとか、申し訳ないとか思わないの？」

それでも。それでも何かにぶつけるしか無かった。諦められないのに、未来が怖くて諦めようと必死になった。だから円堂に憎しみを向けたのだ。

だけでもう、その円堂のおかげで殺意が鈍り始めている。バダツプが目覚めるかもしれないなんて、絶望的な希望を抱き始めてしまっている。

もしこのまま彼が目覚め無かったら…自分はきつともう、立ち上がれなくなってしまうだろう。

「早く…早く起きてよ…！そんで一発殴らせるよ隊長…！」

握りしめたバダツプの右手があまりに細くて。握り返す力もまったくなくて。益々胸が苦しくなって…ぼたり、と滴が落ちた。

「お願いだから…戻ってきてよ…っ…！」

ミストレの声は、届かない。沈黙した病室に、規則的な電子音だけが延々と響くばかりだ。

「ミストレ…！」

「円堂、守っ！」

近寄ってきた円堂を振り返り、両手で半ば胸倉を掴むような形で縋りついた。そう…自分は、縋ったのだ。ほんのついさっき殺そうとした相手に。

「オレもバダツプも生きてるから…まだ生きてるんだから！諦めなきゃ可能性はあるってお前は言ったな…！！！」

綺麗事だ。理想論だ。本当にそう思う。

だけどそれは魔術師の、力ある言葉だった。耳を貸してしまった時点で負けたのは自分の方。揺らされて戦意を喪失した。まだ諦めたくなかった自分に気付かされてしまった。

「だったら！助けるよ…こいつを帰してみせろよ！！なんとか出来るっていうなら…なんとかかしてみせろっ！！」

円堂の顔が泣き出しそうに歪む。ミストレは止まらない。言えば言うほど自らの傷を抉ると分かりながらも。

「方法があるってんなら教えてくれよ…奇跡が起きるってなら起こしてみせろよ！！」

そんな方法ありはしない。なのに、それを認められずにいる愚かな自分。バダップの、小さく笑った顔がちらついて離れない。忘れてしまえたらと思うのに、忘れられない。

「駄目、なんだ…」

ズルズルと手が滑り落ち、ミストレはしゃがみこんでいた。

「オレ達じゃ…オレ達の声じゃもう、届かないんだ…」

バダップが集中治療室から出てきて、面会謝絶が解けて。自分達は毎日彼に会いに来た。その手を握り、声をかけ続けた。

でも…駄目だったのだ。今日の今日まで、彼はなんの反応も示さないまま。体の傷は治っても心は深く抉られたまま。眼に何も映さず、耳に何の音も拾わぬまま。

「助けて……お願い……」

ああ、一番みつともないのは自分だ。まるで少女のように啜り泣く己を、ミストレは心中で盛大に嘲る。

どんなに勉学を学んでも武力を磨いても、結局自分は一人の子供にしかねない。本当に憎かったものは他の何者でもなく自分自身。自分の無力さこそもっとも恨めしいものに違いなかった。

「…神様は」

やがて円堂が、静かに口を開く。

「神様は、乗り越えられる試練しか与えないって…前に父ちゃんが言ってた。俺も前はそう信じてた」

座り込んだミストレに視線を合わせるよう、円堂も片膝をつく。

「けど…さ。乗り越えようのない試練だつてあるんだ。だつて都合のいい神様なんて、いないじゃん。いるんだつたらあまりに…不公平だ。お前達が何でこんな目に遭わなきゃいけないかつたのかサツパリ分らないし」

それは、ミストレが思ったのと同じ事。こんな不平等な神なんかいていい筈がない。バダップばかりが何故こんな悲劇に見舞われなければなかつたのだと…。

だから驚いた。平和な時代に生きる筈の彼が、自分と同じ思考を辿った事に。

「でも。頑張っても頑張っても乗り越えようの無かつた試練を…乗

り越えられる試練に変えるモノがあるとしたら。それは、一人で背負うか、誰かと一緒に背負うかだと思っただ」

円堂はそのまま、ミストレに手を差し出してきた。ミストレは目を見開いてその手を見た。

「一人で無理ならみんな考えて、試してみようぜ。一人で十個アイディアが出たら、二人で二十個、十人で百個だ。それを全部試して…諦めるのはそれからいいだろ」

「…君は」

一人で追い込んでいたつもりは無かった。でも、一人で円堂を殺しに行った時点で…無意識のうちに全てを背負いこんでいたのかもしれない。

「君は何か…手があるの…？」

自分を一番追い詰めていたのは。ミストレーネ・カルス、自分自身であったのかもしれない。

「俺は馬鹿だから…今思いつくのは一個だけだなあ」

円堂は苦笑いして言った。

「バダップに…俺達のサッカーを見て貰いたいんだ。俺が今一番信じてるモノは、やっぱりサッカーの中にあるから」

『本当に強くならなきゃいけないのは、心ココロじゃないのか？』

「俺達が一番伝えたいもの、言葉以上に伝えられるものは、一つだ」

『大切なことは戦うことじゃない…戦う勇気を持っていることだろ』

「？」

「サッカー、やろっぜ！そうしたらきつとバダップも思い出してくれる。あの日の試合で見つけた、大切な事をさ！！」

『「勇気」があれば、未来だって変えられる！！仲間と一緒にもつと強くなることだってできる！！』

今の円堂の言葉と、あの日の円堂の言葉が重なる。あの日円堂は試合を通して自分達に伝えた。戦う事が大切なのではない。戦乱を知らぬ平和な世、争う機会のない時代であったとしても――愛するモノを守る為に戦う勇気、立ち向かう心こそ大切なのだと。

あの時彼が自分達に伝えた真実を、もう一度バダップに伝える。そうすればきつと届く筈だと円堂は言っているのである。

「…本当に、君って」

ミストレは思わず――失笑していた。オペレーション・サンダーブレイクの前。資料で確認した記述を思い出したのだ。

「宇宙一のサッカーバカ、だねえ」

差し出された円堂の手を握る。立ち上がる。

「何でもかんでもサッカーで解決出来ると思ったら、大間違いだよ？」

円堂の言葉は魔術師の言葉であり。円堂のサッカーは魔法のサッカーである。彼を怖れた者も崇拜した者も皆そう言う。その理由がミストレにも分かった気がする。

彼のサッカーには、人を闇から引き上げる何かが、ある。

「だけど…悪くないかも、ね」

僅かな、本当に僅かな可能性かもしれないけれど。

円堂の“魔法”なら出来るかもしれない。悲しい“呪い”に囚われてしまったバダップを…そして自分達でさえも、光の側に引き戻す事が。

「…うまく練習場、見つけて来ねえとな。あとバダップの外出許可貰わねえと」

仕方ねえな、といった様子でエスカバが笑う。どうやら彼も賛成らしい。

「後はチームのみんなに声かけないとな。あとは他の雷門の連中も…」

エスカバの言葉が中途半端に途切れた。訝しんだミストレは振り向き…すぐにその理由を知り、青ざめる。

「…興味深い話をしているな」

いつからそこにいたのだろうか。バウゼンが薄笑いを浮かべて、ドアの前に立っていた。

「協力してやるんじゃないか。お前達に…試合の申し込みだ」

【二十二：ホーリー・ランド】

どういっつもりなのだ。

バウゼンの提案に、エスカバは混乱の一步手前だった。だが、軍人として訓練されてきた経験が、冷静さをつなぎ止めていた。

「バウゼン教官：試合の申し込み、とはどういう事でしょうか」

隣にいるミストレは、異様なまでに無表情だ。しかし溢れ出す殺気が、彼の心情を物語っている。彼はバダップを死地へ送ったバウゼンの事を当然恨んでいる筈。それを無理矢理押し殺そうとしているのだらう。押し殺しきれていないが。

「貴方は：ヒビキ提督と同じ、サッカーを危険思想と判断されていいたではないですか。だからオペレーション・サンダーブレイクを提案した。なのに…」

「そのヒビキ提督の考えなのだ」

バウゼンは淡々とした口調で言った。

「カルス小尉が円堂守殺害に失敗した場合のもう一つの手段。それは再び円堂自らにサッカーを否定させる事。しかも今回の舞台は、八十年前の世界ではなく現代だ」

お前ならその意味が分かるな？とバウゼン。エスカバは頭をフル回転させ。理解する。

「まさか：試合を全国ネットで流すおつもりですか」

円堂守に関わる過去は変えられない。ましてやここにいる円堂は既に自分達の過去の円堂ではないのだ。彼がサッカーを否定したと

ところで歴史は何一つ変わりはない――だが。

それはあくまで、八十年前の世界で試合をした場合だ。今でも円堂守の名を神聖視したり、伝説化して怖れる者は少なくない。そんな者達が――円堂の絶望的な試合を見せられたらどうなるだろう？ サッカーを否定する言葉を聞いたら何を思うだろう？

多分――現在のエレメンタルサッカーに絶望するだろう。恐怖を抱くだろう。世界の構図が大きく変わってくる筈だ――もはや過去に介入する必要もない。

「タイムワープが禁止されているこのご時世。でも今……円堂守をこの世界に連れてきたのはあんた達じゃない……。だからあんたや提督の名に傷はつかない。そういう事か」

ミストレが呻くように言う。今回円堂を連れてきたのはカノンとキラード。中継でそれを明るみに出す事で、軍にとって邪魔であるう二人を社会的に抹殺するつもりなのか。

「そこは勘違いしないで貰いたいな、カルス小尉」

相変わらず読めない顔でバウゼンは告げる。

「我々も……失脚は覚悟の上だ。お前達の対戦相手……イービル・ダイスのメンバーを見れば分かるだろう」

「イービル・ダイス……？」

聞いた事のないチーム名だ。王牙学園のメンバーだろうか。

いや――違う。その正体を晒す事で、バウゼンやヒビキの名声に傷がつく可能性があるとしたら――。

「全てはより良き未来の為。多少の犠牲は仕方ない。痛みなくして革命は有り得ない。我々の挑戦、受けてくれるな？ 円堂守よ」

ぎり、とミストレが拳を握りしめるのが見えた。犠牲は仕方ない？ならばバダツプがああなったのも仕方ない事だったというのか、と。エスカバとて同じ気持ちだった。自分はミストレほどの憎悪は抱いていなかったが、さすがに今は彼を憎いと思った。

上司として。教官として。彼を信頼し忠実に従ってきたつもりだ。だがバウゼンにとつて自分達は駒でしかなかったのだろうか。バダツプがあんな風になっても - 何とも思っていないのか。

「分かっているだろうが、君達に拒否権はない。断れば…お互いに不幸な状況が生まれるだろうな」

「……」

どんな罰が下るか分かったものではない、そういう事だ。恐らく王牙学園の生徒も軍も全てオーガの敵に回るだろう。カノンやキラードも秘密裏に“処理”される可能性が、高い。

「…いい機会なんじゃないか、エスカバ」

「円堂？」

口を開いたのは、渦中の円堂守その人であった。

「俺は…サッカーが大好きだ。だからサッカーを否定する人達にもさ…出来れば好きになって貰いたいって思う」

それにさ、と彼は続ける。

「これはチャンスかもしれないぞ。この世界を…変える為のさ。お前達の勇気をみんなに見て貰えるチャンスじゃないか」

「そうだな」

そこに風丸が同意する。

「絶望なんかじゃない。勇気をなくしたわけでもない。サッカーは希望なんだって…教えてやろうぜ。こいつらにも、世界中の人達にも！」

なんてポジティブなのか。だがそんな発想の転換もまた、彼らの強さの秘密かもしれない。

エスカバは考える。自分達に拒否権はないと言う。さらには試合を承諾する事はバウゼン達の策略の内に違いない。でも。

その策略を逆手にとって利用してやる事が、自分達にとって最も正攻法でルールにのっとった仇討ちなのではないか。バダップの想いに報いて、彼を救い、自分達の答えを出す為に最良の手段なのではないか。

「…ミストレ」

エスカバはミストレを見る。自分の心は決まった。だが小隊の正式な立场上、そして階級上はミストレの許可が必要になる。バダップがいない今、オーガの指揮権は副隊長の彼にあるのだ。

「…いいでしょう。…その挑戦、受けて立ちます」

頷き、ミストレが決断を口にした。この瞬間、運命の試合が組まれる事が決定した。バウゼンが満足そうに笑う。

「あまり雷門メンバーを長く拘束する訳にもいくまい。試合は三時間後、オーガの地下修練場で執り行う。言うまでもないが時間厳守だ」

「イエス…サー」

そのまま立ち去っていくバウゼンに、エスカバはミストレと共に返事と敬礼をした。そして思ったのだ。

ひよつとしたら…いや、恐らくは。自分達が彼に敬礼するのは、これが最後になるのだろうか、と。

「イービル・ディスクか…」

染岡がぼつりと呟く。

「一体どんなチームなんだろうな？」

悪の賽子。何をもってその名をつけたのだろう。エスカバは、かつてヒビキが言っていた言葉を思い出していた。

『人の運命は賽子のようなものだ。…一が出るか六が出るかで、その後の運命が大きく変わってしまうのだからな』

願わくば、自分の予感が外れていきますように。もし予想通りであるとしたら雷門は…史上最悪の相手と戦う羽目になる。

かつん。

かつん。

かつん。

先程から部屋には、小さな堅い音が断続的に響いている。灰色のロツカーと白い壁。黒いベンチ。小さな丸いテーブルにパイプイスが一つ。殺風景な控え室だ。

そのたった一つのパイプイスに腰掛け、少年はひたすら黒炭の賽子を指で弾いていた。机の上で、ただひたすらに。

彼はイービル・ダイスのキャプテンとして、過去から召喚された者だった。チームのメンバーが皆そうであるように、彼もまた黒いローブを着込みフードを被っている。まるで顔を隠すかのよう。

…まさかこんな日が来るなんて…な。

ローブの下。黒いユニフォームの袖につけられたキャプテンマークに、そっと触れる。

- 雷門と戦う、なんて。普通なら絶対起きない事が、起きた。

いや。有り得ないなんて事は - 有り得ない。それは自分が誰より知っている事だと少年は思う。なんせ今回以外にも山ほど、有り得ないような事が身近に起きてきたのだから。

そもそも。あれほどサッカーが大好きで仕方なかった自分が、サッカーを憎むようになるだなんて - 一体どうして想像できただろう。あの頃の自分が今の自分を見たら嗤うだろうか、それとも嘆くだろうか。

- きつと俺は弱い。凄く凄く…弱い人間なんだろうな。

サッカーを憎みながらも、結局サッカーから逃げられずにいた少年。ボールを見る度辛くて辛くて悲しくて悲しくて、それでもサッカーを続けていたのは。ひとえに、そこに仲間の面影を見たからだ。なんで彼らがあんな死に方をしなければならなかったか、今でも分からない。まだ十四歳。まだまだたくさんやりたい事があった筈だ。未来があった筈だ。どんなに不遇な環境にあつとしても、彼らとやるサッカーは本当に楽しかった。

だが。

自分から彼らを奪ったのもまた、サッカーだった。

- サッカーが悪いなんて、最初は思いたくなくたってけどさ。

サッカーを続ければ続けるほど、関われば関わるほど不幸に見舞われた。新たな犠牲者が出た。真っ直ぐだった気持ちはやがて歪ん

で捻れて――いつしか憎悪へと姿を変えていった。

サッカーに出逢わなければ。きっと自分は何一つ失わずにすんだ。仲間達が命を落とす事も無かった筈だ――と。

――弱くて、情けない人間だと。嗤えばいいよ、円堂守。

未来の世界がどうなるうが、もはや自分には関係のない事だった。そもそも彼らは自分達の直接の未来の存在ではないのだから。

だから。自分がバウゼン達に従っている理由は二つだけ。

一つは、あのお気楽で苛つく連中を思い切り叩きのめし、サッカーを存分に否定できる事。爽快ではないか。今まで何をしても晴れる事のなかったこの鬱々とした気分も、少しはマシになるかもしれない。

そしてもう一つは――喪ってしまった友人達を、“生き返らせてくれるとバウゼンが約束してくれた事”だった。八十年後の未来の技術、その何たる素晴らしい事か。実際に愛する彼らは“還ってきた”。自分の元に。死んだ時と寸違わぬ姿で。

――バウゼンとヒビキ。奴等の言う通りにすれば、俺の願いも叶うんだ。

ならば躊躇う必要はない。全力で潰す。今までと同じように、容赦も情の欠片もなく。

そして自分達が雷門に負ける理由は何処にも無かった。彼らのやってきた時間軸は、フットボールフロンティア優勝直後。運良くオーガに勝ったものの、まだエイリア学園とは戦っていないし、ましてや世界大会優勝もしていない。遙かに格下の相手だ。

たった一つ気掛かりなのは、雷門だけでなくオーガとの混成チームになるであろう事。彼らのデータもバウゼンから受け取っている。正直、何故雷門などに負けたかサッパリ分からない。

・・・スタメンにオーガメンバーが何人組まれるか。そこが鍵、だな。裏を返せば、奴等さえ抑えこんでしまえば勝ったも同然。後はうちの参謀に任せてしまえばいい。きっと素敵な殺戮劇を演出してくれる事だろう。

「キャプテン」

がちやり、とドアが開いた。顔を出したのはイービル・ダイスのメンバーの一人。少年の親友と呼んでも差し支えない人物の一人でもある。

「そろそろ、時間だよ。僕達も行かないと。一応、ミーティングもあるし」

「ミーティング、かあ」

やる意味あるのかな、と言うと。親友は暗い眼で笑った。

「そんな事言ったら怒られちゃうよ。それに：100%の事なんて何一つない。：そうでしょ？」

「それもそうだな」

間違いない事だった。少年は苦い笑みで返す。思い出したのだ。バウゼンと出会った時に言われた事を。

1%の、そのまた1%に満たない確率で自分達は存在している。

悪の齎子・・・その名に相応しく。悲劇の1の目ばかりを奇跡的に繰り返してしまった、あまりに悲運の子供達として。

「行こうか：：フブキ」

さあ、甘い幻想を、終わらせよう。

【二十三：カレイド・スコープ】

自分は円堂ほど、バダップに感情移入しているわけではない。風丸はそう思う。円堂にしたってここまで必死になったのは、バダップの電話によるところが大きいだろう。

バダップもオーガも敵だった。自分達にとっては脅威以外の何者でも無かったのだ。それが変わったのは試合をしたから。試合をして、分かり合えたと感じた瞬間があったから。

- フットボールフロンティアだってそうだった。汚い手段で勝とうとしてきた奴らもいたし…接戦続きだったけど。

試合をして、終われば心が通じ合っていた。中には試合後に相手チームとアドレス交換していた奴もいたし、鬼道が転校してくるなんて事になったのもそこに生まれた信頼があったからこそ。

幼なじみとして。長い間円堂を見てきたけれど。最近漸く彼と、彼のサッカーの凄さを実感したように思うのである。

優勝したとはいえ、実力的にはまだまだなのだろう。フットボールフロンティアに出てこなかった影の強豪校もあるらしいし、世界へ出ればさらに上の上があるに違いない。だから彼の凄さとは、単なる能力で推し量れるものではないのだ。

- 円堂の言葉と、円堂のサッカーは…まるで魔法みたいなんだ。

触れた者を皆惹きつける。堕ちた闇からも強引に、光の側に引き上げられる。嵌ったな、と気付いた時には既に虜になっている。彼ともっとサッカーがしたくなっている。自分もそうだし、きっとオーガの者達もそうだったのだろう。

だから - 風丸にも分かる気がするのだ。何故未来の者達が総じ

て円堂を畏れ、排除しようとするのかも。

あの試合で。円堂の言葉は“呪い”だとバダップは言った。

今日円堂を殺しにきたミストレは。円堂を“浄罪の魔術師”と呼んで襲ってきた。

- 魔法は。使う者と受ける者によって…きっと百万通りにも色を変えるんだろうな…。

呪いだと、そう決めつけてしまえばそれ以上のモノにはならないのだ。力ある者を畏れるのは正しい。しかし、畏れて悪だと決めつけ、否定するのは全く違う。

少し見方を変えれば、いくらでも幸せな魔法に出来るのに…人の心とは厄介なものだ。敢えて自分を追い込んでしまっているのも気付けない。

「…円堂の言葉をさ」

「ん」

「呪いだって思ってる奴も。この時代にはたくさんいるのかもしれないな」

偶々側にいた一之瀬に、風丸はそう零す。

「だけど…そんな人達にも。円堂のサッカーはもつと…みんなで幸せになれる魔法だって、気付いて欲しい。その為にも全力で勝たないとな」

オーガを救う為だけじゃない。この世界の幸せの為だけでもない。これは自分達自身の為の戦いだ。自分達のサッカーが正しいのだと証明する為の、自らの誇りの為の。

「当たり前だよ、風丸」

一之瀬が笑う。

「これは…俺達の信じるサッカーを、守る為の試合。サッカーの未来を護る為の戦いなんだ。絶対に負けられない。そうだろ？」

この間の試合は、自分達の現在を守る戦いだった。これから守ろうとしているのは、未来という、さらに不確かで不確定なもの。しかも正確には試合の観戦者達は、ミストレやカノン達も含めて自分達の直接の未来の存在ではないという。オーガが襲来した時点で、全てはパラレルワールドになってしまったのだから。

それでも、無意味などではない。風丸は強くそう、信じている。少なくとも自分達のしたことで、何処かの誰かは救われると言うならば。

「どんな相手だとして…負けるもんか」

オーガの地下修煉場。やけにだだっ広く暗い色彩のその場所に今、雷門イレブンとオーガのメンバー、カノンとキラードはいた。

あの後、結局現在に残ったメンバーも未来に呼ぶことになり、マネージャーと監督も含めた全員が王牙学園に集合することになったのである。

「不気味だよな…敵チームの奴ら」

染岡が舌打ちする。

「フードで顔隠してコソコソしゃがって。気に入らねえ」

敵チーム…イービル・ダイスのメンバーは既に逆サイドのベンチに集合している。全員が全員、黒いローブを着込んだ異様な風体

だ。側には今回の責任者である二人の軍人――バウゼン大佐とヒビキ提督がおり、キャプテンらしき少年に何かを指示している。

「あのヒビキ提督って人が、オーガを現代に送り込んだ黒幕なんですよね……」

春奈が苦い顔で言う。

「どう見たって響木監督そっくりじゃないですか。あの人が監督の子孫なら、どうしてあんなにもサッカーを憎むようになったんでしょう?」

「……」

当の響木は何も言わない。サングラス越しでは、その表情を伺い知ることは叶わなかった。

「とりあえず……作戦を立てるぞ。一部メンバーは向こうから指定されているが、残りの編成は自由だそうだ」

鬼道が、ヒビキ側から指定されたルールを告げる。いわく、雷門は必ずスタメンに円堂、エスカバ、ミストレを組み込む事。またこの三名は不測の事態が起きない限り、交代させない事。

代わりに、雷門は何人控えを用意してもよし、何人交代させてもよし。逆にイービル・ダイス側は公式通り控えは五名まで、交代は四名までと制限される。

「その上で、今回の作戦を考えてみた。スターティングメンバー及びフォーメーションは以下の通りだ」

エスカバ ミストレ

M F 鬼道

風丸 一之瀬

サンダユウ

D F 土門 壁山 ジニスキー

G K 円堂

フォーメーション名、ボー&アロー。シュートは打たせて取る、速攻に強い4 - 3 - 2 - 1の陣型だ。

「中央の厚みを強くする。最終ラインに土門とジニスキーがいればサイドからもそうそう抜かれない。カウンターと速攻でなるべく早く流れを掴みたい」

「相手は完璧未知数だもんな……」

王牙学園の生徒だろうか。だとしたらエスカバやミストレなら心当たりがあるかもしれない。

「エスカバ。あいつらについて……何か知らないのか？」

風丸はそう尋ねて……気付く。イービル・ダイス側のベンチを見るエスカバが、心なし青ざめている事に。

「……風丸」

ちらり、と彼は風丸を見て。

「気をつける。もし俺の予想が正しけりゃ連中は……お前らにとって史上最悪の相手だ」

「何？」

どういう意味だ。史上最悪？

しかしそれを訊き返すより先に、号令がかかってしまった。審判に呼ばれ、フィールドにメンバー全員が整列する。

「お、おい！」

円堂が声をかけるより先に、イービル・ダイスのキャプテンはくると背を向けて走り去ってしまった。円堂と同じくらいの背丈。顔が見えないので男か女かも定かでないが、ついたポジションから察するにGKであるらしい。

なんかカンジ悪、と後ろで松野が呟いた。

・・・何だ…この感じ。

全国生放送、しかも軍部要人であるヒビキが主催するこの試合。注目度も高いのだろう、実況のアナウンサーが声を張り上げている。しかし風丸の耳に、その音は届かない。胸の奥から湧き上がるような暗雲・・・それが気になって、耳に入らなかったというのが正しい。

・・・嫌な予感が、する。

全員がポジションにつく。ピイイ！と甲高いホイッスルが鳴った。雷門のキックオフで試合開始だ。ドリブルでエスカバが上がっている。

・・・向こうのフォーメーションはベーシック…いつも雷門が使うのと同じだな。どう出てくる？

風丸がそう思った、次の瞬間だ。エスカバを止めに、相手側のF Wが攻撃をしかけてきた。

「分身ディフェンス」

相手の姿が三つに分裂し、三人がかりでボールを取りにきたのである。不意をつかれたミストレはボールを奪われてしまった。その瞬間、相手の姿は再び一つに戻る。

「なっ…!?!」

ボールを取られたミストレも、見ていた風丸も硬直していた。それは相手の必殺技があまりにスピーディーであった事だけではない。

「…い、今の…声…」。

まさか。そんな馬鹿な事があつてたまるか。

風丸は完全にフリーズする。その横をさっきのFWは悠々と走り抜けていく。一瞬。ほんの一瞬だが、フードの隙間から長い髪が見えた。その色が予想を外れたもので無かった為に、風丸は益々混乱する。

「ちょ…何棒立ちしてんだ!止めろって!!!」

ぎょつとしたようにサンダユウが叫び、件のFWに向かっていく。すると相手も逃げる事なく真っ直ぐ走ってきた。一対一の勝負を、正々堂々受けて立つと言わんばかりに。

そして軍配が上がったのは。

「風神の舞」

細い体が竜巻を作りながら、踊るように跳ねてサンダユウを翻弄した。自分達と同じ事に気付いたのだろう。固まったサンダユウはなすすべなく風に巻き上げられ、吹き飛ばされた。

その様を見て・・・FWの少年が高々と嗤う。

「はははっ…史上最強と言われたオーガもこの程度か！傑作だな！」

その声は全員に届いた筈だ。瞬間、魔法にかけられたように誰も彼もが動きを止めてしまう。風丸が思い出したのは、かの尾刈戸の必殺タクティクス、ゴーストロックだ。まるでアレを見ているかのよう。

誰もが見えない手に縛られた。少年の声と、言葉によって。

「決める！」

少年は、別のFWへとパスを出した。受け取った少年を止めるべく、なんとかフリーズを振り切った壁山が立ちはだかる。

「い、行かせるわけにはいかないっす…！ザ・ウォール！」

「…邪魔だ」

せり上がった大きな岩壁。それを一瞥し、少年は冷たく言い放った。さっきのFWより低く、落ち着いた声。

だが恐ろしい事に・・・その声もまた、聞き覚えのあるもので。

「ヒートタツクル・改」

炎を纏い、壁に思い切り体当たりされた。壁山が動揺したせいで、

さらに強度は下がっていたのだろう。一撃で岩壁には亀裂が入り、粉々に砕け散る。仰向けに倒れた壁山を見向きもせず、少年は走った。もはやゴールは目前だ。

「円堂！」

マズい、と思い、その名を呼ぶ。だが混乱していたのは円堂も同じ。とっさに反応が遅れてしまう。

少年は高々と回転しながらジャンプして、高々と足を振り上げた。

「真・ファイアトルネード」

炎のシュートは、円堂の頭のすぐ横を通過した。ゴール。だが円堂はボールの行方を追うのも忘れ、目を見開いて、着地した少年を見ている。

シュートの反動で、正体を隠していたフードが外れた。少年の顔を。

「う、豪炎寺…！？」

そう。円堂の目の前に立っていた彼は、豪炎寺と、瓜二つの顔をしていた。

「イービル・ダイス。俺達のもう一つの呼び名を教えてやる」

『ゴウエンジ』は。冷えきった眼差しで円堂を見た。

「裏・雷門。…バウゼンが平行世界を渡り歩いて探し当てた、パラレルワールドのお前達。それが俺達だ」

『ゴウエンジ』にパスを出したFWの少年もフードを取る。やはり、と思ったがけして直視したく無かった現実があった。

「さあ、サッカーやるうぜ」

風丸とまったく同じ顔が、そこにいた。

【二十四：イービル・ダイス】

人の運命とは、賽子のようなものである。岐路に立った時、1を出るか6が出るかは誰にも選べない。そして偶然出た目のせいで後の運命が大きく変わってしまう。神の悪戯と言わんばかりに。

バウゼンが探し出したそのパラレルワールドという名の欠片は -
- 一千万飛んで二千八百五十三分の1という、あまりにも低い確率で生まれる世界だった。

「雷門イレブンよ。お前達は偶然にも、あまりにも幸せすぎる人生を歩んでくれた。何故ならば運命の賽子は極めて平等にその目を示したからだ」

雷門の連中にも分かるように、バウゼンは説明してやる。奴らには完璧に理解して貰わなければ意味がないのだ。自分達の敵が、どれほど絶望に満ちた存在であるのかを。

「だがイービル・ダイスの奴らは違う。賽子を振れども振れども1の目ばかりに巡り合う。絵に描いたような悲劇ばかりに見舞われる。私はそんな世界を探し出し、最後の切り札としてスカウトした」

事実は小説より奇なり。バウゼンとて、実際に目にするまでは信じがたかったのだ。それほどまでに彼らの人生は、自分達の知る円堂や豪炎寺とかけ離れていたのだから。

「例えば…その『ゴウエンジ』」

「！」

誰もが一斉に『ゴウエンジ』を見る。

「そいつの過去のデータだ。見るがいい」

パウゼンは画面に、彼のプロフィールデータを表示する。

『豪炎寺修也』

雷門中二年男子。元・木戸川清修在籍。母は幼少時に死亡。父は多忙な医師であり、近年は殆ど顔を合わせていない。

木戸川時代、ほぼ豪炎寺頼みのチームであった為、学校全体のプレッシャーが非常に大きかった。FWにも関わらずチームが失点したりミスをしたり、ましてや練習試合でも敗北すれば全て豪炎寺の責任になった。

よって影で凄惨ないじめに遭う。一年の頃には投石により頭蓋骨骨折の瀕死の重傷を負っている。唯一の味方は二階堂監督だったが、止めようとした彼は割られたガラスが原因で失血死した。

妹、夕香が事故で昏睡状態になったのを契機に、雷門に転校し、戒めとして一度サッカーをやめる。しかし円堂守と出逢い、再びストライカーとしてフィールドに舞い戻った。

帝国との試合で影山の起こした鉄骨落下事件により、雷門の一部メンバーが死亡。それを乗り越えてフットボールフロンティアに優勝するも、エイリア学園襲来により雷門中は崩壊。校舎の下敷きになり、さらに仲間を失う。

また豪炎寺自身も、事件が始まってすぐエイリア学園のエージェントに拉致。まだ昏睡状態であった夕香を人質に、二週間に渡って監禁、暴行を受ける。最終的に自力で脱出するも、人質にされていた妹は拉致された段階で殺害されていた事が発覚。

エイリア学園事件、FF世界大会をえて今に至る。

「な…何だよ、これ…!？」

土門が呆然と呟く。当然の反応だろう。そこに表示された『ゴウエンジ』の人生は、あまりに悲惨極まりないものだった。特に豪炎寺の顔色が悪い。一步何かが違えば自分もそうになっていたのか…とでも思っているのかもしれない。

「サッカーは、俺達を不幸にただけだった」

『ゴウエンジ』が、無感動な声で言う。

「サッカーに関わらなければ。俺は何一つ…誰一人喪わずに済んだのに」

円堂の顔が、くしゃりと歪む。目の前にいるのは豪炎寺であつて豪炎寺ではない。平行世界に生きる、同じ魂を持った全く別の存在だ。

だが理性では分かっている。聞きたい言葉ではなかったに違いない。

「俺はサッカーを憎む。なんの悲劇も知らずのうのうと生きてきたお前達を、憎む」

サッカーを否定する、『ゴウエンジ』の言葉なんて。

「そんな…嘘だ…」

呆然と円堂が呟く。

「豪炎寺がサッカーを否定する訳ない！だって豪炎寺はサッカーが大好きで…なのに夕香ちゃんのためにやめて…！」

「ああ、そうだな。俺も最初はそうだった」

色の無い瞳を、『ゴウエンジ』は円堂に向ける。

「だがそれはお前の知る豪炎寺修也の物語であって、俺の物語じゃない」

少年はくるりと背を向けてポジションに戻っていく。そこまできて漸く雷門は、自分達が失点した事と、試合再開の為に早く位置につかなければならない事を思い出したようだ。誰もが戸惑いながらも戻っていく。

『ゴウエンジ』の、暗く沈んだ声を聞きながら。

「サッカーは俺の全てを壊した。だから俺も…破壊する。サッカーを愛する者、全ての幻想を」

そう、それでいい。バウゼンはベンチで笑む。

呪いには呪いで返してやれ。言葉という凶器で奴らの心を抉り、サッカーが絶望であると教えてやれ。

そうすれば救われるのだ。

自分達の教え子達は…オーガのメンバーは。そして世界は。

豪炎寺は動揺を押し殺しながら、目の前の存在を見た。サッカーへの憎悪を口にした、『ゴウエンジ』を。

- 平行世界の…俺。

彼の資料にあった、エイリア学園というものが何なのかは分からない。だがそれ以前の出来事がどのようなものであったかは、想像つかないわけでもなかった。

自分の母も、幼少時に亡くなっている。医師の父が多忙である事も同じだ。だが機会が少ないとはいえ、軋轢があるとはいえ、父と顔を合わせる機会が無いわけではない。

そして木戸川時代のこと。チームは自分に頼っていたが、仲間達にも相応の実力はあった。ただ若干メンタルに問題があったただけだ。ブレッシャーはあったがイジメなんて陰湿な事をする生徒は一人もいなかった。

影山の起こした鉄骨落下事件。事件そのものは起きたものの、鬼道のおかげでメンバーは無傷で済んだし。妹の夕香は先日意識が回復し、快方に向かっている。

『ゴウエンジ』の世界より遙かに幸運に運命が動いた世界。それは間違っていないだろう。しかし、一步違えば自分達も同じルートを辿っていただろう事は想像に堅くない。その可能性をまざまざと見せつけられたようで、心中とても穏やかではいらなかった。

だが。

- 間違ってる。…己の不幸を全部…サッカーのせいにするだなんて。

同じ顔、同じ魂を持つ者だからこそ。豪炎寺にはそれが許し難いように思えた。

…それとも…本当の悲劇を知らない俺には、そんな綺麗事を言う資格もないのか…？

もしそう言われてしまえば、反論の余地がないのも確かだった。どんなに『ゴウエンジ』の悲惨な過去を想像したところで、それはあくまで彼の物語。自分はただ予想する事しか叶わない。

…いや…考えるな、そんな事。

駄目だ、と豪炎寺は思った。このままではいけない。このまま呑み込まれてしまったら、バウゼン達の思う壺だ。

「…予想外だった。いい技、持ってるじゃないか」

あえて平然と…挑発的でさえある様を装って言う。余裕があると思ひ込まなければ、崩れ落ちてしまいそうだった。

「…お前がFWをやるとはな」

豪炎寺の言葉に、『カゼマル』はニヤリと嘲りに満ちた笑みを浮かべた。なまじ容姿が整っているだけに、背筋が凍るような笑顔だ。この平行世界の風丸も、きつと『ゴウエンジ』と同じように、悲惨極まりない人生を送ってきたのだろう。

『カゼマル』が正体を明かすと同時に、他のメンバーも次々とフードをとった。ベンチにいたカノンが驚愕の声を上げる。

「そ、そんな…！」

そこには、彼がああ試合で助っ人として呼んだ五人もいたのである。

雪原の皇子、『フブキ』。
幼き天才児、『トラマル』。
蹴りのトビーこと、『トビタカ』。
流星のストライカー、『ヒロト』。
そしてイタリアの白き流星、『フィディオ』……。

「あの試合で。こいつらはお前達にとって希望に等しい存在だった筈だ」

だからスカウトは必然だ、とヒビキは言う。

「楽しい趣向だろうか？お前達の希望だったこいつらが、今度はお前達の絶望になるのだから」

悪趣味な。らしくもなく舌打ちしたくなる。どうやら彼らは自分達にとことん精神的ダメージを与えたいらしい。

……狼狽えるな。どんな相手だろうと俺達は勝つ。勝って証明するんだ……俺達のサッカーは間違っていないと！

試合再開のホイッスルが鳴る。豪炎寺は素早く相手の位置を確認した。フォーメーションはベーシック。雷門からすれば見慣れたものだが、風丸がFWにいるなど、新たな要素が身受けられる。

……ざつとこんな感じ……か。

FW 『豪炎寺』 『風丸』

MF 『ヒロト』 『染岡』

『鬼道』

『ファイデオ』

DF 『虎丸』

『松野』

『鳶鷹』

『吹雪』

GK

『円堂』

「メンバー的にも、超攻撃重視だな。『トラマル』ですらDFに持ってきているとなれば……。全体的に守備が甘い可能性がある。」

「得点された雷門からキックオフだ。豪炎寺はドリブルで上がりながらも思考は止めない。」

「……『トビタカ』と『フブキ』さえ気をつければ、ディフェンスを破るのは難しく無いかもしれない。」

「まずは中盤を突破して……。そう思った時だ。」

「スピニングカット」

「気付いた時には目の前に『キドウ』がいた。ゴーグルをしていない、真っ赤な瞳に射抜かれる。足下から吹き上がる青い焰。豪炎寺はギリギリのところまで避けたものの……。ボールを死守するには至らなかった。」

「豪炎寺。今、お前が何を考えているか当ててやろうか」

「くっ、と唇の端を持ち上げる『キドウ』。」

「オフセンス本領の選手が多く超攻撃的な戦略が予想される。なら

「ば守備は脆いかもしれない…違うか？」

凶星をつかれて、押し黙る。豪炎寺は感情があまり面に出ない質だと自覚していたが、どうやら『キドウ』には伝わってしまったらしい。

「やはり甘いな…ぬるま湯に浸かった“雷門”は」

『キドウ』がパスを出した先、走っていたのは『フィディオ』だ。不味い、と豪炎寺は冷や汗をかく。あのオーディンソードを、オメガ・ザ・ハンドが未完成な円堂に止めきれるかどうか…。

幸い、オーディンソードはロングレンジではない。なんとかシート可能圏内までドリブルさせなければならぬかな。

「一之瀬！」

豪炎寺が叫ぶより先に彼は動いていた。地面に手を突き、焰を纏った足を回転させる。

「フレイム・ダンス！」

まさに間一髪。一之瀬がボールを奪い返す事に成功した。だが、ボールを取られたにも関わらず、『フィディオ』も『キドウ』も余裕綽々で笑っている。

「そうそう。そうこなくつちゃ、面白くないよ」

につこり。あまりにも無邪気な…それゆえこの場においては異質な…笑みを浮かべて『フィディオ』は言う。

「だって…ねえ？最初から絶望に沈むよりも…希望や期待が残った方が。うまくいかなかった時のダメージも大きいもんね」

その瞳には、暗い憎悪の焰を宿して。

【二十五：ドッベル・ゲンガー】

なんて残酷な真似をするのだろう、響木は思う。それはバウゼン達が召喚したイービル・ダイスに対してでもあり、バダップを含めたオーガの面々に対してでもあった。

ちらり、とベンチを見る。車椅子に座ったまま、光の無い瞳でフィールドを見つめ続ける彼を。首と頭に真っ白な包帯が映える、隻腕になってしまった少年を。

・・・こいつもまだ円堂と同じ… たった十四の子供じゃないか。

自分も今年で齢五十四。我ながら随分年をとったものだと思うが、それでも戦争を知る世代ではない。戦時中の話は父や祖父から耳にタコが出来るほど聞かされたものだが、己の実体験でない以上想像には限界があった。

自分でさえ遠い出来事。戦争。テロ。徴兵。その過酷な世界で、彼らは幼いながらも渦中に晒されている。明日どこか今日生きていられる保証さえない、そんな場所に投げ込まれている。

彼らが自ら望んだのだろうか。それとも親の意向だろうか。それは本人達に直接訊いてみない事にはどうしようもないけれど。

・・・こんな目に、遭わなきゃならん理由は。何処にもなかったらどうに。

生まれた時代さえ違ったら。バダップもきつと、戦場など知らず、普通の人として生きてこれただろうに。もしかしたら円堂と同じように、フィールドを走り回っていたかもしれない。年相応に無邪気に笑っていたかもしれないのに。

本当に、神というものがいるとしたら・・・残酷な真似をする。

…そしてイービル・ダイス…奴らもそうだ。

彼らのあまりに荒んだ人生もそうだが。彼らを連れてきて円堂達と引き合わせた連中の、なんと情けない事だと思ふ。バウゼン達はあるまで、円堂達への拷問のつもりで彼らをスカウトしたのだから。だが結果的には、イービル・ダイスのメンバーへの拷問でもある事に、彼らは気付いているのだろうか。

…イービル・ダイスが“悲劇の可能性”なら。雷門の連中は“幸福の可能性”だ。

幸せになれたかもしれない可能性。しかし自分達には掴み取れなかった可能性をまざまざと見せつけられて。彼らはどれほど辛い思いをしている事か。彼らが嫉妬と羨望に狂えば狂うほど、雷門の勝機にはなるけれど…。

円堂はそれを望まないだろう。彼が見せたいのはあくまで楽しいサッカー、希望としてのサッカーだからだ。相手が異世界の自分達だろうと関係ない、寧ろ異世界の自分達だからこそ願うだろう。

「愛情と憎悪は裏返し…ってよく言いますよね」

「ん？」

考えこむ響木に話しかけてきたのは、キラードだった。

「愛すれば愛するほど想いに縛られて、抜け出せなくなる。裏切られたと感じた瞬間に、それは容易く憎悪に変わるものです」

あの子達もきつとそうだったんでしょね、と。寂しげに笑うキラードの横顔を、思わずじっと観察してしまう。

最初に見た時に驚いたが。やはり見れば見るほど似ている、と思ふ。

サッカーを憎む事でしか愛せなかった、あの男に。

「お察しの通りですよ、響木さん」

するとそんな思考を読まれてか、先に返事を返された。

「私は：影山零治の遠縁にあたります。影山は子供を残さなかったので、直接の祖先ではないですがね」

「そして俺の未来の子孫があのヒビキ…という訳か」
「ええ」

話している間にも試合は進む。一之瀬は奪ったボールを鬼道にパスした。しかしそこに、素早く『ヒロト』が立ちはだかりコースを塞ぐ。

必殺技、フォトンフラッシュ炸裂。眩い光に硬直した鬼道から『ヒロト』はボールを奪って走り出す。

「影山と貴方。私とヒビキ。…根本的には同じなんです。サッカーが大好きで大好きでたまらないのは」

確かにそうだな、と響木は思う。影山はサッカーを愛していた。だから憎んだ。本人は気付いてなかったかもしれないけれど。

「それが何の因果か運命の悪戯か：未来において立場が逆転した。だけど、あのヒビキ提督も同じなんですよ。サッカーを愛していたからこそ憎み、否定しようとしている。…提督がそうだった原因の一端はね、響木さん。貴方にあるんですよ」

「…どういう意味だ？」

「ヒビキはサッカーのせいで…祖先の貴方が不幸になったと思っている。その不幸が始まりで、自分もまた不幸になったと。…まあこれ以上は貴方の未来の話になってくるので、語れませんがね」

『ヒロト』からパスを受け取り、『トラマル』が上がっていく。その様を見ながら、キラードは言う。

「…彼は今、何を思っているのでしょうか。雷門の監督を勤め、それを疑う事もない貴方を見て」

響木は沈黙する。するしかなかった。自分のせいで彼がサッカーを憎むようになった？まったく意味が分からない。仮にだ。今、このフィールドで事故が起きて自分が酷い怪我を事になったとしても…それでサッカーを憎むようになるとは考え難い。

キラードはきつと、これから先響木や雷門の身に起きる事を知っているのだろう。知りたい気もするし、知りたくない気もした。どちらにせよ彼はこれ以上を語ってくれないだろうが。

「グラディウス・アーチ」

そうこうしているうちに、フィールドの上では『トラマル』がシュートを放っていた。オーバーラップしたわけではない。どうやらあの必殺技はロングレンジ対応だったらしい。

幾多の剣がボールと共に空を切り、円堂の方へ向かう。まともに食らったら怪我ではすまない、殺人シュートだ。唯一救いなのはゴールまで相当距離があること。威力は落ちるし、シュートブロックもしやすくなる。

「行かせるか…！ボルケイノ・カット…！」

ジニスキーの脚が弧を描く。噴き上がる焔の壁に、刃をまとったシュートが突き刺さった。

「ぐああっ！」

「ジニスキー！」

前線のミストレが悲鳴に近い声を上げる。防ぎ切れない。焔を切り裂いた刃がジニスキーの体をも抉る。ギリギリのところ腕をク

口ささせて体を丸め、ガード体制に入ったあたりは流石軍人というべきか。急所は外れたが、切り裂かれた腕から血が飛沫を上げた。刃の数は半減したもののまだ止まっていない。恐ろしいシュートに恐怖を張り付かせながらも、壁山がディフェンスに入る。全ては、勝つ為。そして敬愛するキャプテンを守る為に。

「ザ・ウォール！」

せり上がる岩の壁とぶつかるシュート。力は互角になっていた。刃は岩壁に突き刺さり、相殺されて粉々に砕ける。しかしそれは壁の方も同じだった。勢い余って壁山が後ろに転がる。

「ぎゃっ！」

シュートブロック成功。だが、二人がかりですらシュートを完全に止める事は叶わず、コースを変えるだけで精一杯だった。ボールはラインを割って外に出る。コーナーキックにこそならなかったものの、ゴールに近い、面倒な位置だ。

「壁山！大丈夫か！？」

「お、俺はなんとか…かすり傷です。でもジニスキーさんが…」

駆け寄った円堂に、壁山が起き上がりながら答える。その視線の先には腕を押さえるジニスキー。その両腕はパツクリと切り裂かれ、だらだらと血が流れている。

あの出欠の仕方からして動脈には至ってないだろうが、やや出血が多い。

「交代だ！ジニスキー、下がれ。代わりにダイツコを入れる！！」

響木の決断は早い。応急処置をすればなんとかなるだろうが、普通の試合ならまず審判からストップがかかるレベルだ。万が一の事

があつてからでは遅い。

「イエス、サー」

ジンスキーは悔しげに下を向いたが、すぐに返事を返した。これはサッカーの試合だが、指揮官に当たるのが誰かと言われれば響木にあたる。上官の命令は絶対遵守。そう徹底的に教育されているのが目に見えて――感嘆と同時に、複雑な心境になった。

自分達の時代。日本は戦争放棄を憲法で唱い、戦力を持たない事を誓っている。自衛隊が既に違憲ではないかという声もあるが、少なくとも自衛隊は自ら志願してなるものであつて徴兵制ではない。幼いうちから兵になる為に教育される機関がある訳でもない。

何か一つ。事あるごとに響木は思い知らされる。自分達の世界が、時代が、いかに平穏であるのかを。突きつけられて、酷い罪悪感と惨めさに見舞われる。それは無意味であると同時に、いわれないものだと分かつてはいるのだけでも。

「なあんだ。もう交代しちゃうんですか？つまらないなあ」

ダイツコに後を託して立ち去るジンスキーに、これみよがしに言う『トラマル』。

「確かにそつちは人数制限ありませんけど。その程度で交代していたら、いくら人がいても足りませんよ？地獄は、これからなんですから」

安い挑発だった。ジンスキーも『トラマル』を振り返り、一瞥するに留める。『トラマル』もさほど効果は期待してなかったのだろう。笑顔のまま肩を竦めた。

『宇都宮虎丸』

稲妻小六年男子。父母共に身体が弱く、父は昨年病死。治らない病気では無かったが、手術費用を払う金銭的余裕が彼の家には無かった。

以来、母と二人で料理店を切り盛りしてどうにか生計を成り立たせるも、生活は極貧。原因は母の薬代と医者代。また、長年店を手伝ってくれていた弁当屋の辻本乃々美が、男に貢ぐ為に店の金を持ち逃げして行方をくらましてしまったのも大きい。

サッカーの才能には恵まれたが、ボールとシューズは担任教諭が自費で買ってくれたものが一つだけ。服はいつもボロボロで、サッカークラブの経費は滞納し、店の為休みがちになる始末。にも関わらず試合では一人で活躍してしまう為、チームメイトに嫌われ孤立して育つ。

さらに彼がサッカーを憎む、というより嫌悪するきっかけになったのが、愛媛で起きた事件である。エイリア学園襲来と同時期。影山は真帝国を設立するにあたり、地域のサッカー少年少女を洗脳して回っていた。貯めに貯めた金で母と旅行に来ていた虎丸も巻き込まれ、殺人シュート開発に手を貸してしまう。

その最中、練習中の事故で、真帝国学園のキャプテン候補だった不動明王を、そのシュートで殺害してしまう。影山の洗脳の後遺症もあり、以来虎丸は他者を傷つけるサッカーをするようになった。

後に日本代表として世界大会に出るが。彼のシュートで、同じく死傷した選手は後を絶たない。

「ヒビキは愉しげに『トラマル』の過去を暴露する。

「間違ってる…相手を殺すようなサッカーが楽しいのか!？」

「愉しいに決まってるじゃないですか」

激怒する円堂に、けらけら笑いながら『トラマル』は言う。

「このシュートがあれば、仕返しできるんだ…！俺を爪弾きにしたガキどもにも、裏切ったあの女にも！！これが愉しくないわけないでしょお？」

狂っている…彼自身も、彼らの運命も。

響木は膝の上でぎゅっと拳を握りしめていた。過去のせいで歪みきってしまった彼らに、本当のサッカーを教えてやるだなんて不可能なのだろうか。

諦めたら負けだと知っている。知っているのだけれど。

【二十六：ライアー・ゲーム】

考えなければ。『トラマル』の過去を聞き、円堂は思っていた。考えなければ。この試合に勝つだけじゃない。本当のサッカーを彼らに教えて――救う為の方法を。もはや理屈ではなかった。このまま、暗い瞳のままサッカーを続ける彼らを見て耐えられなくなったのだ――絶対に違う、と。

「いけっ！」

『キドウ』のスローイング。ボールは『フブキ』に渡る。あちら側は『トビタカ』と『エンドウ』を残し全員が上がってきていた。一気に畳みかける気だ。

この場合大切なのはマークの徹底。数的有利に立って相手を翻弄消耗させ支配権を奪うかにかかっている。パスを予測し、素早く『フブキ』の周りのメンバーを抑えにかかる雷門イレブン。セコいと言われそうだが、審判の目を欺いてユニフォームを引っ張るなりの牽制をする事も度胸であり戦略である。

孤立する『フブキ』に、ついに土門が仕掛けた。

「キラースライド！」

『フブキ』はにつこりと――穏やかでさえある笑みを浮かべた。ふわり、と舞い上がる肢体。軽やかに土門のスライディングをかわした彼は、そのまま必殺技の体勢に。

「魅せてあげる…オーロラドリブル」

空中で両手を広げた『フブキ』。銀の髪と白いマフラーが靡いた。

その背中の方こうに輝いたのはオーロラ。冷やかな虹色の光が魔法のように土門達を魅了し、捕縛する。まるで魔法のように。

「し、しまった！」

気付いた時、『フブキ』は囲みを突破していた。さらにマークが甘くなった隙を逃さず、『フィディオ』が最前線に走り出る。

「駄目だな、そんなんじゃ」

ふわふわとした、何処か大人びてさえ見える笑みを浮かべて『フブキ』は言う。

「それでは、完璧には程遠い」

円堂は違和感を覚える。あの試合で自分が吹雪と話したのはほんの僅かだ。しかし、あの吹雪は、穏やかながらももつと幼くて……喋り方も柔らかかった筈。

この『フブキ』は何かが違う。静かな声は少年というより大人の男性のよう。あまりに年不相応に落ち着き払っている。まるで、別の人間が乗り移ったように。

「お前は…誰だ？」

それは無意識に、円堂の口を着いて出た。『フブキ』は振り返り、この殺伐とした場にはあまりに不似合いなほど優しい笑みを浮かべた。

瞳に緑色の光をちらつかせながら。

「僕は吹雪士郎…だよ。ただし、三人目になるけれどね…」

『吹雪士郎』

白恋中二年男子。父と母と弟。幼少期は優しい家族と裕福な家庭に恵まれて育つ。早くからサッカーの実力に頭角を表し、ディフェンダーとして将来を有望視されていた。

しかし七歳の時に、試合の帰りに雪崩の事故に巻き込まれてから、坂を転がり落ちるように転落していく。父母と弟が事故で死亡。吹雪自身も大きな後遺症、PTSDと解離性同一傷害を負った。

生まれた弟、“アツヤ”の人格。試合の度に切り替わり、プレースタイルも性格も変わる様は、異様の一言に尽きる。明らかな精神障害者としての様に周囲は彼を持って余し、遠ざけ、吹雪は孤立の一端を辿った。

彼を気味悪がったのは親戚も同じである。事故後すぐは叔父夫婦の下に身を寄せていたものの、それもすぐに破綻。長い間親戚中を盪回しにされ、最終的には中学生にして一人暮らしを余儀無くされる。

やがて現れたのが三人目の人格である“カナデ”。それは“士郎”と“敦也”の父である“奏手”を模倣した人格だった。“カナデ”は二人を守る父として生まれた。完璧な存在となつて息子達を護る。普段は穏やかだが、二人を傷つける者には容赦なく制裁を下した。- - 全てのきっかけになった、サッカーによって。

やがてエイリア学園襲来の折、吹雪はイナズマキャラバンにスカウトされる。そこで得た友人達は皆、同じような心の傷を持つ者ばかり。特にある“親友”に吹雪は心を開いていった。

しかし。詳しくは後述するが、その“親友”は試合中の事故で、吹雪の目の前で死亡。それをきっかけに吹雪の精神は崩壊、“カナ

デ”は更なる暴走を始める。

彼は信じているのである。完璧な勝利を捧げ続ければ愛する者を守れると。亡くした人さえも帰ってくる。

- - - - -

『フブキ』のパスは『フィディオ』の元へ。気付いた仲間達が一齐に奪いに走るが間に合う筈もない。もはやシュート圏内。たった数メートルが絶望的な距離だった。

「円堂守。君は言ったそうだね？一人では乗り越えようのない試練も…仲間とならば乗り越えられるかもしれない。まだ人生という試合のホイッスルが鳴っていないなら、諦めるには早い…」と

『フィディオ』は円堂を見つめて、小さく笑みを浮かべる。

「だけどね。やっぱり、無理なものは無理なんだ。俺達みんな、そう。生きていくけれど…最初から終わってる試合をやっているようなものだから」

胸の締め付けられる笑み。それは期待して期待して、頑張つて頑張つて、その果てに諦めるしかなかった者の笑みだった。その笑みこそが絶望で、悲しい魔法だった。

「乗り越えようのない絶望もあるって…教えてあげるよ。それがせめてもの手向けだ」

『フィディオ』は脚を振り上げる。彼の足元に、金色に輝く魔法陣が出現して…。

「オーデイン・ソード」

放たれた。破壊の為の、シュートが。

『フィディオ・アルデナ』

イタリア代表オルフェウス所属、十四歳男子。父の名はシズマ・アルデナ。祖母が日本人であり、その実フィディオは日本人クォーターである。

シズマはかつて、フィディオにとって自慢の父であった。往年の名プレイヤー。イタリア黄金期を築いたとされるエースストライカーだった。それは長い栄光では無かったが。

有名になればなるほど、アンチも増えるし嫌がらせをするファンも出る。その事件は、シズマの所属チームと同じリーグ内のチームのファンが仕掛けた、些細な嫌がらせが原因で起きてしまった。洗剤を撒かれた階段で転倒したシズマは重傷を追い、最終的にはその怪我が元で戦力外通告を受ける事になったのである。

シズマにとってサッカーは全てであった。父は酒に溺れ、家庭内暴力を繰り返した。病弱だった母は入院しがちであり、その暴力の殆どは幼いフィディオに向いたのである。

しまいには父は覚醒剤にまで手を出し。週刊誌にすっぱ抜かれ、サッカーファンの嫌がらせは自宅にまで及び。家庭内は陰惨を極めた。

最終的に、母は病死。父親は自殺。父の首吊り死体を発見したのもフィディオであった。

父譲りの才能に恵まれたフィディオ。フィディオにとってもサッ

カーは全てであったが、全てを壊したのもまたサッカーであった。憎悪は日々募り続けるばかりであろう。世界大会の代表に選ばれてなお、サッカーを汚した男の息子であるからと、フィディオに嫌がらせをする人間は後を絶たないのだから。

- - - - -

見せつけられる悲劇の歴史。円堂は耐えた。歯を食いしばって耐えねばならなかった。本当に辛いのも苦しいのも自分ではないと分かっている。泣けない彼らの代わりに泣こうだなんて。傲慢にも甚だしい。

「マジン・ザ・ハンド…改!」

オメガ・ザ・ハンドは間に合わなかった。とっさに、進化させたマジン・ザ・ハンドで対応する。突き出した掌にボールが食い込む。凄まじいシュートの威力に手首が悲鳴を上げる。

これは『フィディオ』の、心の痛みだと思った。血を流して、痛い事を痛いとも言えない少年の叫び、その重さに等しいと。

「こんな凄い、シュートが打てるのに…」

ずっと、と身体が押し出される。後ろ足が引きずられるように後退していく。

「サッカーを…憎むしかできないなんて…楽しめないなんて」

指先が麻痺していく。力が、抜けていく。

「そんなの…悲しすぎるよ…!!」

パン！と。まるで風船のように魔神が弾け飛んだ。パワーアップさせたマシン・ザ・ハンドでも圧倒的に力が及ばない。これがイタリアの白い流星の実力なのか。

審判の笛が高らかに鳴る。ゴール。これで二失点。

「奴らまだ全然本気じゃないって感じだな…遊んでやがるぜ」

舌打ちするサンダウ。彼の言う通りだった。じわじわと追い詰めて、しかしわざと希望を残す。だから一気に点差を開かせない、圧倒しない。ナメられきっているのは明白だ。

だが、付け入る隙があるとすればそこにある。奴らは油断している。雷門がイービル・ダイスに勝つなど夢のまた夢だ…と。

…それに…こいつら、チグハグだ。

円堂は気付いていた。悲劇に導かれた者同士、目的は一致している。しかし彼らはそれだけなのだ。ただサッカーを潰しだいから一緒にいるだけで…誰もが何処かで“独り”なのである。独りきりでサッカーをしようとしているのだ。ならばその連携の穴を突けば…。

「円堂！」

試合再開の為、ポジションについた鬼道が振り向き、自分と呼ぶどうやら考えがあるらしい。円堂が気付いたことに、鬼道が気付いてないとも思えない。

…分かった…お前に任せる!!

ホイッスル。再び雷門のキックオフ。もうこれ以上点をやる訳にはいかない。

指示を受け、豪炎寺はボールを後ろに下げた。パスを受けた鬼道がシュート体制に入る。センターラインを越える長距離砲だ。

「彗星シュート！」

体力消費の少ない彗星シュートは攪乱に最適である。ロングレンジシュートの中では最弱であり、距離が伸びれば伸びるだけ威力が落ちるのは通常シュートと変わらないが、必殺技なしで止めるのは至難の技だ。

相手GKが止めに来れば、GKの消耗を狙えてかつ手の内を晒させることができる。キーパーまで届かずDFにシュートブロックされても、DFを消耗させ必殺技を使わせることが出来る。

いずれにせよ彗星シュート一発分と引き換えならば充分にお釣りが来るんだ――とは、全て鬼道の言だった。新たな戦術を広げる為に必要なと、FF優勝直後にほぼ全員が覚えさせられた。まさかキーパーの自分まで叩き込まれるとは思ってもよらなかったけれど。どうやらその苦勞が、思わぬところで役に立ったようである。

「この程度…止めてやる！」

『トビタカ』がシュートブロックの体制に入った。他にも何人が反応した者がいる。反応した人間はシュートブロックが可能な必殺技を持っているということだ――鬼道は見逃さなかっただろう。『トビタカ』以外には『ソメオカ』、『ヒロト』、『ゴウエンジ』、『キドウ』、『フブキ』。

面倒なことに人数が多い。ならば、寧ろそこを利用してやればいい。

「真空魔！」

『トビタカ』が蹴りを繰り出す。切り裂かれた空間がパツクリと黒く時空の狭間を作り、真空の刃となってシュートを切り裂く。

ここからだ、と田堂は思った。

ここから自分達の反撃が、始まる。

【二十七：サバイバル・ゲーム】

『飛鷹征矢』

蓮之葉中学二年男子。暴走族とその愛人の間に生まれた子供であり、家庭から学校に至るまで荒れた環境で育つ。

現在同居しているのは実母と義父。母は男を作ってはとつかえひつかえのタイプであり、義父といつても既に六人目である。それでも義父の殆どが収入のある男だった為なんとか生活出来たが、母親は家事も仕事も何もしない女だった。典型的なネグレクトである。

住んでいた地域は治安が悪く（稲妻町と蓮之葉町の境の川を越えた途端、街並み自体がガラリと変わる）、飛鷹の通う学校も荒れたものばかりだった。飛鷹も非行を繰り返し、頻繁に補導される毎日。中学に入る頃には蓮之葉町を仕切る三大勢力のうち一つ、征翼会のボスとして君臨していた。

だが、彼は当初自分の不幸さに気付いていなかった。寧ろ幸福だと感じていたと後に語る。征翼会に集まった不良仲間達は、彼にとってかげがえのない存在であった。

それが、対抗勢力でありヤクザと繋がりがある麗奴嵐レッドストームが、脱法ドラッグをバラまきだしたことで壊れていく。チームの多くが薬物中毒に陥り重体。幻覚を見て発狂した幹部の一人、唐須幸人はチームの仲間数名を殴り殺して自殺。飛鷹もボロボロの身体で病院に担ぎ込まれるが、父母が見舞いに来る事は無かった。

やがてそんな彼は響木と出会い、サッカーの世界に足を踏み入れる。

サッカーが彼にとっての救いになるかと思われたが、ここでも前歴が邪魔をした。チームから抜けた飛鷹を恨み、かつての幹部や部下達が日本代表を襲撃。代表の数名と響木に重傷を負わされ、飛鷹

は夢半ばで代表を辞退させられる。

更には響木は、この一件のせいで片耳に後遺症が残り、持病が悪化。それを推してサッカーに関わり続け、フットボールフロンティアインターナショナルが終わってすぐに病死する。

飛鷹を支配するのは憎しみよりも罪悪感である。自分さえいなければ。サッカーに関わらなければ。免れられた悲劇もあるのだと、そう思っているのかもしれない。

鬼道は素早く周囲を見回し、次の展開を予測する。彗星シュートによる遠距離攻撃はメリットが大きい。反面カウンターをくらいやすいという弱点もある。

彗星シュートをブロックした『トビタカ』が次にパスを出すのは誰か。パスをした後シュートするのは誰か。あらゆるパターンを予想し、臨機応変に対応する。

イービル・ダイスの面々はどれもくせ者ぞろいだが。その中でも初心者に近いのが『トビタカ』だと気付いていた。彼はフェイントが下手なのである。基礎能力は高いが次の行動が読みやすい。それは経験不足が原因だろう。

皮肉にも今、ヒビキが自分達に見せた彼の過去で裏がとれた。『トビタカ』の経験値はお世辞にも高いとは言えない。

彼の眼が一瞬左を見る。足首が動く。

未来線が、見えた。

「風丸！」

鬼道の意図をアイコンタクトで察知したのはさすがと言うべきか。『トビタカ』がパスをした相手――『トラマル』の前に素早く風丸

が走り込み、ボールをカットした。実力はまだまだ及ばない自分達しかしフットボールフロンティアを勝ち抜いた経験とチームワークなら負けはしない。

『トラマル』からボールを奪ったそのモーションで、風丸がシュート体制に入った。

「彗星シュート！」

彗星シュート、第二撃。不意をつかれた『トビタカ』は反応できない。そして多くのイービル・ダイスマンバーが出遅れる。

複数名での彗星シュート乱れ打ち。この波状攻撃はこちらが得点するか向こうがカウンターを成功させるまで続く。そして長引けば長引くほどこちらに優位になる。

・・・さあ...どう出る!?

その瞬間だった。赤い影がまるで神風のように、シュートの軌道上に躍り出た。『ヒロト』だ。

「絶対に...止める」

ぞくり、と。鬼道の背筋に冷たいものが走る。こちらを見据えた『ヒロト』の眼は...他の誰よりも暗く沈んでいた。そこに光はない。絶望しきった人間の瞳だ。

さらり、と。ストップパーをかけた綺麗な赤い髪が宙に舞う。自分達がああ試合で見たヒロトと髪型が違う。ああヒロトはもっとハネた、元気の良さそうな髪をしていた。

宙を舞い踊る肢体。暗い暗い、闇の中に浮かぶ氷のような冷たい美しさ。思わず魅せられてしまい、鬼道の反応は遅れた。

「流星ブレード…」

『ヒロト』は彗星シュートを直に、流星ブレードで打ち返してきたのである。まるで流星のような輝きが弾け、強烈な一撃となって一直線に雷門ゴールに向かう。

「え、円堂ッ！」

マズい。こんな速いカウンターは予想していなかった。シュートブロック対応の技はブロック技限定だと思い込んでいた自分のミスである。

流星ブレードはロングレンジに向くシュートではない。よってこの長距離ならば威力は幾分落ちる……それは間違いないが。

「ボルケイノ・カット！」

とっさの判断。土門が回り込んで、シュートブロックを試みる。完全に殺しきれないのは最初から分かっている事だ。しかし今は少しでも威力を殺げれば万々歳。流星ブレードはパワーこそあるが、グラディウスアーチのようにあからさまに敵を殺傷するのが目的の技ではない。

土門の蹴りで噴き上がったマグマを、シュートは突き破って進む。しかしパワーダウンは見取れた。そこに最後の砦である円堂が待ち構える。

「マジン・ザ・ハンド…改！」

円堂が召喚した魔神が吠えた。筋骨隆々の魔神が、円堂の動きにシンクロして雄々しく腕を突き出す。

…この距離で…シュートブロックを受けて尚…重い！

鉛の塊が腕全体にのしかかるよう。ずしり、とした重みは、さっきの『フィディオ』のシュートとは似て非なるものだった。

『フィディオ』のシュートにあったのはサッカーへの根深い憎しみ。『ヒロト』のシュートは…あまりにも深い、悲しみが込められていた。キリキリと痛んだのは指先か、それとも胸の奥か。

…でも今度は…止められる！

この世には乗り越えようのない試練だってある。世界は優しくなれない。都合のいい神様なんかいない。だけど。

乗り越えようのない試練を乗り越えられるモノに変えるのは、絆の力だ。ミストレに言った言葉はそのまま円堂自身の信念だった。止められないシュートも。仲間と一緒に止められる。彼らの心が、存在そのものが自分に力をくれるのだから。

「…！そ、そんな…！！」

『ヒロト』の眼が見開かれた。円堂の手には、がっしりとキャッチされたボールが。

「さあ、反撃だ！」

円堂はそのまま思い切りボールを蹴った。弧を描く軌跡。その着地点にはダイツコが走っている。

「雷門の奴らばかりに、いいカツコさせられるかよ！」

この試合の中。絆を深めたのは雷門メンバーだけではなかった。

言葉と魂。オーガのメンバーともまた、少しずつ心は通い始めている。

そう、それがサッカーなのだ。呪いなんかじゃない、円堂が信じる、人を幸せにする魔法。

大柄な身体を持ちながらも、『トラマル』のスライディングを思いの外身軽にジャンプしてよけたダイツコは、そのまま一之瀬にパスを出す。

「クイツクドロウ!!」

「悪いけど通させて貰うよ!ムーンサルト!!」

さらに、一之瀬が『マックス』のクイツクドロウを、ムーンサルトの軽やかな動きでかわす。ふわり、と束の間浮いた身体を捻り、一之瀬はパス。その先にはサンダユウがいる。

「よし、パスが繋がりましたぞ!このまま行けば...!!」

だが。サンダユウがボールをトラップした直後に。

「ウゼえんだよ...クソどもが!」

『ソメオカ』だった。罵声と共に、サンダユウにタツクルしにかかる。伊達に少年兵として鍛えているわけではないサンダユウはあっさりそれをかわすが...かわした直後に油断があった。

主審の位置からは見えなかっただろうが、円堂にはハッキリ見えたのである。『ソメオカ』が素早くサンダユウのユニフォームの端を掴み、反対の手では腰に手刀をくらわさせて転倒させたのを。

「うわっ!」

サンダユウは受け身をとった為大事に至らなかったが、ボールは奪われた。審判の笛は鳴らない。

「待てよ、今の反則じゃねえのか！？思いつき殴ってただろ！？」
「よしな、エスカバ！」

頭に血が上って叫ぶエスカバを、やはり怒りを露わにしながらも宥めるミストレ。酷いプレーに怒ったのは円堂も同じだったが、正しいのはミストレだ。

審判が一度セーフと判断したものはまず覆らないし、彼らの立場を考えれば覆してはいけないものだ。寧ろ下手な抗議はこちらの心象を著しく悪化させ、退場の契機になりかねない。

そして何より、時計は止まっていないのだ。こうしている間にもボールを奪った『ソメオカ』がドリブルで上がりつつある。動揺している場合などではない。早く阻止しなければ。

「『ソメオカ』！時計を止めろ！！」

止めたのは意外にも――あちら側の『エンドウ』だった。『ソメオカ』は『エンドウ』の意図に気付いてか、文句の一つも言わずにボールを外へ出す。

――え、何で？どうしてだ？

チャンスではないか。流れも再びイービル・ダイスに傾きつつあったのに――それを何故ブツた切るような真似をする？

円堂は平行世界の自分を、『エンドウマモル』を見た。気持ちが悪いほどに同じ顔。だが――鏡をじっと見つめるような趣味などない円堂自身でさえ、その顔には大きく違和感があった。

『エンドウ』の眼は、他人を見下す眼だった。円堂には分からない感情だ。自分はサッカーにおいてどんな相手にも敬意を払ってきたし、サッカー以外でも誰かを見下ろす真似などした事がない。

あんな眼を。見下す感情の奥に暗い怒りと憎しみを秘めた顔を。自分と同じだった筈の存在がやっっている。

その事実そのものに、円堂は畏れを感じた。そして。

ドゴッー

時計が止まった瞬間……その暴拳は起こった。つかつかとフィールド中央付近まで歩いてきた『エンドウ』が、『ヒロト』を思い切り殴り飛ばしたのだから。小さく噛み殺した悲鳴を上げて倒れる『ヒロト』。

「ちょ、お前！仲間は何やってんだ！！」

円堂は思わず怒鳴っていた。突然の蛮行。怒りと同時に、円堂を支配したのは混乱だ。どうして『ヒロト』は殴られなければならぬのか。

「部外者は黙っててくれ」

そんな自分達に、『エンドウ』は冷たく言い放つ。

「なあ……『ヒロト』」

『ヒロト』は倒れたまま、真っ青な顔で『エンドウ』を見上げていた。その『ヒロト』に、『エンドウ』は嘲りに満ちた笑みを向けて言う。

「シユート、決められなかったな。あの程度のディフェンスで、あの程度の距離で」

使えないヤツは要らないって、言ったよな。『円堂』はそう言うて、嗤う。

「俺達にも棄てられたいか、
『ヒロト』?」

【二十八：クライシス・コア】

棄てられたいか。『エンドウ』がそう口にした途端、『ヒロト』の様子は一変した。ただでさえ白い肌は完全に血の気が失せ、眼に涙を溜めながらガタガタと震えている。

「う、ごめんなさい…」

か細い声が、喉の奥から漏れ出す。

「ごめんなさい…ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…っ！」

狂った機械のように繰り返す『ヒロト』。円堂は困惑するしかない。それはあの試合で自分達を助けにきてくれたヒロトとは、全く別のイキモノだった。

確かに、この『ヒロト』とあのヒロトは別人だ。この『ヒロト』はあちらの彼より遙かに悲惨な人生を歩んできただろう事は想像に堅くない。それでも円堂は、彼らが元々の同一人物だとは思えなかった。

この『ヒロト』は…もつと根っこの部分から、何かがポキリと折られてしまっている。崩れてしまっている。何故だかそんな印象を抱いたのだ。

「お願い…お願いだから俺を見捨てないで、円堂く…」

「気安く呼ぶな…！」

再び大きな音がした。

「きゃあっ…！」

『エンドウ』が『ヒロト』の胸を蹴り飛ばしたのである。『ヒロト』はその喉から、男子中学生とは思えない甲高い悲鳴を上げて転がり、苦しげにうずくまった。

違和感の正体。その原因の一つに、円堂は漸く気付く。だが俄かには信じられなかった。だって、あの試合の助っ人だったあのヒロトは、華奢とはいえ紛れもなく男だった筈。なのに。

「気安く呼ぶな。触るな。俺達まで汚れるだろうが」

『エンドウ』は・・・自分と同じ存在とは思えぬほど、ぞっとするような冷たい声を出して、見下ろした。

「言った筈だ。俺は一生お前を赦さないし認めない…この人殺しの売女」

真っ青な顔で震え続ける、赤い髪の・・・少女を。

間違いなかった。破れかけたユニフォームの間から、僅かながら胸の谷間が覗いていたのだから。

・・・『ヒロト』が女の子だって…！？どういう事なんだ!？

「基山ヒロトは特異な存在だ」

円堂の心を読んだかのように、パウゼンが告げる。

「度合いは異なるも悲劇を逃れられない存在。そして約二分の一の確率で女子として生まれて来る運命にある。理由はどうやら、オリジナルの存在の特殊さゆえとされているが、正確には分かっていない」

目の前では、『ヒロト』が泣き叫び、罵声を浴びせられ、殴られ蹴られを繰り返している。何故あんなにも『ヒロト』が『エンドウ』に憎まれているかは分からない。確かなのは、バウゼン達が助ける気配がない事だけだ。

「そして殆どの世界で、“基山ヒロト”の名は本名ではない。…円堂、お前の助っ人に来た基山ヒロトも含めてな」

本名ではない。その理由は、バウゼンが提示した『ヒロト』のデータにより明らかになった。

『基山ヒロト』

エイリア学園二年女子。だが、彼女が女である事は知っている者と知らない者がいる。今回のようにサラシを忘れた上『エンドウ』が側にいると極端に怯えるので発覚しやすいが。

元は両親から五歳まで虐待されて、児童保護施設・お日様園に保護された子供。親は彼女の出生届を出しておらず、名前すらつけていなかった。正確には保護された時点で彼女の実母は再婚しており、父親との血の繋がりはない。

彼女は、お日様園のオーナーである吉良星二郎の死んだ息子に生き写しだった。吉良はそれを見て息子が帰ってきたようだと言ったと歓喜し、彼女に『ヒロト』と名をつけたのである（基山、は彼女を棄てた親の名字だ）。そして彼女を男として育てた……愛息子と同じになるように。

吉良に嫌われたくない一心で彼女は何でもやった。棄てられる事が深いトラウマとして刻まれていた為である。吉良がヒロトに、息

子と違つるところを見つける度怒り狂つて暴行したのも原因の一つである。

ヒロトの境遇を深く知る者は同情し、知らない者は汚物でも見るような眼で蔑んだ。彼らは皆吉良を父と呼び敬愛している。ヒロトは虐待される中で、望む望まずに関わらずその父と寝る事が頻繁にあった。その結果妊娠と出産、流産を繰り返しているとなれば周囲の風当たりが強くなる筈もない。現在ヒロトは十四歳だが、既に五歳と三歳の息子がいる。二人は吉良の娘である瞳子が主に世話をしているらしい。

やがて始まる吉良事変。ヒロトはエイリア学園頂点のチームを率いて、父に命じられるまま暴虐の限りを尽くす。最終的に事件は円堂達の手で解決するが、円堂がヒロトを許す事は無かった。理由は二つ。

ヒロトが事件の最中、普通の少女になりすまし、円堂を懐柔すべく身体を使って迫ろうとした為（未遂に終わったがこれも父の命だった。）。

何よりも事件のせいで、円堂の友人達が何人も犠牲になった為である。

父が逮捕された今、ヒロトの手綱を握り利用するのは円堂だった。円堂に棄てられたら自分には何も残らない。ヒロトは何度殴られても、円堂の下僕として仕え続けている。

.....

「吐き気がしそうな過去だよな？お綺麗な世界で生きてきたお前達からすれば」

『エンドウ』は嗤い、また『ヒロト』の顔を殴る。倒れた『ヒロト』の唇の端は切れ、血が顎を伝っていく。

「だから…そんな哀れむように見るなよな。こいつは誰かに虐げられ、壊される為に生まれてきたんだ。まあ、もう壊れてるんだけどさ。…なのに俺達の大事なもんを壊してくれたんだから」

バキリ、と痛ましい音。弱々しい悲鳴。『エンドウ』の嘲笑をBGMに。

「これくらい、軽い罰だろ？」

吐き気のするような過去 - 確かにそうかもしれない、と円堂は思った。だがそれは『ヒロト』本人に対してではない。そのような環境を作った、周りの者達に対してだった。

なるほど、彼女はもうどうしようもないくらい壊されているのだろう。殴られ、蹴られ。しかし彼女が『エンドウ』を見る眼に怒りは無い。悲しみと恐怖しかない。彼女自身が自らに向けられる暴力を当たり前のモノとして受け止めてしまっている。

だけど。だからといって。これ以上その不幸を周りが助長していいなんて事はない。そんな権利は誰にもない。『エンドウ』が彼女達によって何を奪われたかは分からないけれど - - でも。

「何のつもりだ…円堂守」

『エンドウ』が唸るように言う。円堂は迷い無く飛び出していた。『ヒロト』を庇うように、『エンドウ』の振るった拳を受け止めて。

「お前が…どんな苦しい思いをしたかはまだ知らない。イービル・ダイスにいる以上、俺が予想出来ないような悲しい事がたくさん起きたんだろっ」

受け止めた拳は痛かった。それは彼の痛みの重さだろう。だからこそ円堂は思った。止めなければ、と。

「だけど…お前に幸せになる権利があつて、誰かに守られる権利があるように！こいつにだつて幸せになつて、守つて貰う権利があるんだよ…！！」

円堂の後ろで、『ヒロト』が驚愕し、顔を上げたのが分かった。信じられない、そんな感情が背を向けて尚伝わってきて、円堂は胸を締め付けられる。

「復讐したくてしたくて。何かにぶつけたくてしょうがない気持ち。俺は幸せだから…そんな経験ないけどさ。でもそうやって必死にもがいてた奴の事は、知ってるんだ」

向こうでミストレがはつとしたのが見えた。彼も気付いたのだろう。憎しみに暴走して、全てを壊してしまえばいいと願つて。ただひたすら何かに怒りをぶつけようとしていた、彼。

その姿を今第三者側で見せつけられた気分になつた筈だ。そして分かつただろう。それがいかに幸福とかけ離れたものであるのかを。「復讐するな、なんて誰にも言えないさ。でも…それが幸せな事だと思つちやつてるなら、俺は止める。止めなきゃいけない。『ヒロト』を傷つける事で…自分の痛みが癒えるわけないって事、分からない訳じゃないだろ！」

「…よく回るクチだな…！！何も知らないくせによくもまあいけしやしゃあと…！！」

ギリギリと唇を噛み締めて…『エンドウ』は勢いよく拳を引いた。全身が怒りで震えている。顔は鬼の形相と言つても過言ではない。にも関わらず彼が円堂を殴らないのは、今が試合中だからに他ならないだろう。

味方チームの『ヒロト』ならまだしも。敵チームの円堂を殴れば、当然審判も黙っていない。せっかく勝っている試合を、私情だけで無茶苦茶にしたくないのだろう。最終的に彼は一番に勝利を大切にしているのだ。その事実が、円堂に一つの真実を伝えた。

以前自分は風丸に言った事がある。勝ちたいと願うのはサッカーが好きだから。だから時には反則を犯しても勝利を望んでしまう人がいるのだ。と。それは今の『エンドウ』にも言える事ではないのか。

「やっぱり…コイツはどんなに歪んでも、俺と同じなんだ。」

サッカーが、好きなのに。境遇により憎むしか出来なくなってしまうっているなら。

「サッカーで…俺はバダップだけじゃない、こいつらをも救えるかもしれない。」

「さつさと試合を再開させる、」『エンドウ』

ヒビキがやや苛立ったように言う。

「言った筈だ。円堂守は浄罪の魔術師…その力は同じ。『エンドウ』といえ、お前を遙かに凌ぐもの。寧ろお前が失ったものだと言っている。」

『エンドウ』は悔しげにヒビキを見る。だがヒビキは容赦ない。

「技術はあっても、魔法への耐性や他人に呪いをかける能力では、貴様は遙かにこいつに劣る。魔術師の言葉に耳を貸すな。お前は以前の望むサッカーをする事だけ考えていればいい。」

そのまま歩き去る男を、『エンドウ』は忌々しげに見送る。そのままポジションに着こうとして、一度だけ『ヒロト』を振り返った。眼があっただけで、びくりと肩を震わせる『ヒロト』。

「分かつてるな？次失敗したら…お前は本当にお払い箱だ」

人の心を傷つけ、縛り付ける呪いの言葉。それはやはり魔法と呼んで差し支えないものだろう。そんな魔法を、人を傷つける為にしか使えない…幸せにする為にしか使えない彼を、円堂は心底哀れに思った。

「…立てるか？」

座り込んでいる『ヒロト』に、円堂は手を差し伸べる。『ヒロト』は死んだ眼で、しかしどこか不思議そうに円堂を見た。

「どうして…優しくしてくれるの？俺に触ってくれるの？」

キタナイっていつも言われるのに、と。言う少女を前に、円堂は必死で笑顔を作った。そうでなければ涙になってしまいそうだったから。

「汚くなんかはないよ、お前は。それに…一緒にサッカーやった奴はみんな、俺の仲間だ！仲間を助けるのは当然だろ？」

「円堂…君…」

彼女はおずおずと、遠慮しがちに円堂の手を掴んできた。同年代の少女達以上に痩せて頼らない手を、円堂は力強く引っ張り上げる。感傷に浸るのは後だ。まだ試合は始まったばかりなのだから。

「さあ、サッカーやろうぜ！」

負けられない。想いを再確認した瞬間だった。

【二十九：パラノイド・ドール】

試合再開の笛が鳴る直前。ミストレはちらり、とベンチの方を見た。車椅子に座り、微動だにせずフィールドを見つめているバダップを。

その瞳には、何が映っているのだろう。もし自分にサイコメトリの能力があったら、彼の心を覗きみれるのに。彼の中からこの景色を見つめられたら、きっとその魂を揺らす方法が見つかるのに。

自分には、自分達にはそれが出来ないから。こうして不器用に考え続けている。自分達は誰一人彼になれない。どうあっても第三者でしかない。その他人という距離なりに、限りなく近付ける手段を探すのだ。

- 他人だから…意味あることも、あるのかな。

分からないから。心が見えないから。自分達は努力することが出来るのかもしれない - 誰かと心で、手を繋ぐ為に。

ほんの少し前まで見えなかったことが、ここ最近で急に見えるようになった気がする。

オペレーション・サンダーブレイクで雷門と戦って。結果論を言えば無為な試合だったのだけど、戦う勇氣というモノを知って。

バダップが生還の望みのない戦場に送られて。ボロボロになって、壊されて帰ってきた彼を見て、誰もがその存在の大きさに気付かされて。

憎しみに暴走して円堂を殺そうと過去に経った先。その円堂の言葉に、自分の幸せというものを見つめ直させられて。そして今 - バダップを取り戻す為の試合の最中、ミストレは見せつけられている。

憎しみで壊れた者の姿と。

愛に飢えて、不幸を享受する者の姿を。

『…ムダじゃ、ない』

…そうだね、バダップ。

『俺は言ったな、ミストレ。円堂守に出逢った事を後悔していないと。…この事実を知っても変わらない。俺は、無意味な事など一つも無いと思っている』

…選んだ未来の結果。どんな悲しいモノを見たとしても、それが悪夢のような現実でも…。

『過去は変わらなかったとしても。俺達は……変わっただろう。だったら、ムダなんかじゃない。必ず未来に繋がっていく。…違うか？』

…ムダなことなんて、一つもない。ムダにしてしまつたら、それは…。

ホイッスルが鳴る。サンダユウのスローイング。ボールを受け取ったのは、一之瀬。

…それは……俺が、諦めた時なんだ。

『諦めんなよ！自分達はもう不幸になるしかないなんて…未来には絶望しかないなんて。バダップがもう戻って来れないなんて諦めるな！…！』

円堂の言葉が蘇る。それは確かに、魔法だった。人の心を引っ張

り上げ、幸せにする白き魔法。ヒビキ達が怖れるのも当然だ。そして、闇に堕ちたあの『エンドウ』には決して持ちえない力である事も間違いなかった。

- - バダップ。そこで見ていて。

悲劇にまみれて、諦める事で幸せを放棄した者達を。イービル・ダイスを相手に。自分は示してみせよう。最後に勝つのは諦めない者である事を。彼の頑張りは決してムダにはならない事を。

そして人は、どんな悲しい運命も打ち破り、幸せになる力を秘めている事を。

「風丸！」

カットにきた『ソメオカ』のタックルをひらりとかわして、一之瀬は風丸にパスを出す。

「見せてやろうぜ！人を強くするのは憎しみなんかじゃないって事を！！」

「ああ！！！」

ああ、そうだ。皆の気持ちは今、一つになっている。ミストレもそうだった。円堂を恨む気持ちが完全に消えた訳ではないけれど、
- 今自分を支配するのは、それを遙かに凌駕する感情。

バダップを救いたい。

悲劇に溺れた連中に、自分達の信じるサッカーを見せつけてやりたい。

こいつらをも光の側へ引き上げる事が出来たらきつと - - 自分達は本当の意味で強くなれる気がする。どんな悲しい未来が待っているても、乗り越えて生きていける気がする。

自分本意と言えがいい。そう、結局誰もが自分の為だけに生きているのだ。それがいつの間にか誰かの救いになっていたりもする。

何故なら努力するから。自分の為に、自分の愛する誰かの幸せを願う事によって。その根底の善意によって。

「一度は絶望して、全部壊してやりたいと思った世界だけど…」

ミストレの呟きはフィールドに溶ける。

「まだ人間、捨てたものじゃないかもしれない…ね」

ドリブルで上がる風丸の行く手を、あちらの『カゼマル』が阻みにくる。

「今のお前程度の力で、この俺がかわせる筈がない…!!」

「ああ、そうだろうな」

余裕の笑みで立ちふさがった『カゼマル』に、風丸もまた不適に笑ってみせた。

「この世界に、カミサマはいないよ。だから乗り越えようのない高い壁だってあるんだ…だけど」

トン、と。風丸の足が軽くボールを蹴る。そちらの方を見もしない。見なくとも彼には分かっていたのだろう…そのスペースに、鬼道が走り込んでいる事が。

「一人じゃ乗り越えられない壁も…仲間と一緒になら、越えられる！」

驚愕する『カゼマル』の横を、風丸は悠々と走り抜けた。その名のどくとく、風になったように。

鬼道にパスしたボールが、再び風丸の元へ戻る。見事なワン・ツープスだった。チームの絆と誇りを武器にしてきた雷門だからこそ

の芸当。

「疾風ダツシュ！」

「くっ……！」

風丸はさらに、疾風ダツシュで『キドウ』を抜き去る。シンプルにして技としての難易度の低い疾風ダツシュは、相手のディフェンス技に力負けしやすい。だが長所もある。

それは、発動スピードの早さ。相手が必殺技を出す前に決めてしまいさえすれば、当たり前負けする事なく敵を抜く事が出来るのである。

「ミストレ！」

来た。ミストレは風丸からのパスを、しっかりと受け止めた。ゴールまであと少し。その時立ちふさがったのは、ディフェンス最後方まで下がってきていた『ヒロト』だった。

「絶対に……行かせるものか……！！」

必死の形相。もうミスをしないうちに、ピンチを招かない為に……。失点を恐れて守りに入ったがゆえの行動だろう。そのあまりにも“ネガティブすぎる熱意”には、苛立ちすらわかなかった。

ただ哀れだった。彼女がいくらそんな形で頑張り続けても、望んだモノが与えられる事はない。手に入れる事は叶わない。それに全く気付いていない事が。

「……そんなに、愛が欲しい？」

ミストレは真っ直ぐに『ヒロト』を見つめた。彼女は自分の知るどんな少女より美しい顔立ちをしていたが、今はその美貌はくすんでしまっている。

霞ませているのは、他ならぬ彼女自身。

「怖いんでしょう？捨てられるのが。愛されたくて愛されたくて仕方ないから…どんな事もやっちゃう。そのせいでまた、みんなに嫌われて、愛されなくなつて。また怖くなつて無茶して…その繰り返し」

「…知つたような事、言わないで…」

泣きぬれた眼で。呻くように、『ヒロト』が言う。

「だったら他に…どうしろつて言うの。誰かに必要として貰わなきゃ、生きてる価値なんてないじゃない…！自分の価値を決めるのは結局、俺じゃなくて他の誰かなんだから…！！」

「そうだね。自己評価はアテにならない」

ミストレはあっさり頷いてみせる。

「それは間違つてないさ。だけど……うん、なんだかね。今の君、ちよつとだけ昔のオレに似てるんだなあ」

『ヒロト』ほど顕著に、愛に餓えていたわけじゃなかった。だが、オーガ小隊ができるまでは、本気で誰かを愛した事などなかったし、きつと愛されてもいなかっただろう。

誰も心から信じる事が出来ない。近付いてくる奴らには皆下心があるか、上辺の美貌だけを見て惚れてきた馬鹿な女ばかりだった。以前、少し親しくなつたと思つていた教師に襲われかけ、結局この容姿目当ての変態だつたと分かつた時も大して傷つかなかつた。最初から人間に失望していたから。

だけど。一度温かい場所が出来て。バダップが壊されて、その場所を失いかけて。気付いてしまったのである。自分は本当の愛が欲しかつた。欲しくて欲しくてたまらなかつたから、偽物のすべてを拒絶してきたのだと。

「何だつてしようつていう覚悟を決めてもさ。君が根本的に相手を信じてなきや…相手が信じてくれる訳ないじゃないか。誰かに手を

差し出して貰っても心の中で振り払うような真似、ずっとしてきたんじゃないの？」

「……………!!!」

「オレは君と違って幸運だったから。オレが信じるより先に、オレを信じてくれる人達に出会えた。でも多分それは、そうそうある事じゃないんだ」

その時、ゴールから声が飛んできた。

「何をグズグズしてるんだ、『ヒロト』」

苛立ちを滲ませた、『エンドウ』の声。

「俺はこの場を一步も動かないぜ。そいつはお前が止めるからな？」

白き魔法を失い、黒に染まりきった太陽の声。『ヒロト』と華奢な肩がびくん、と震えるのを見てミストレは続けた。

「言葉で、手で、脚で、凶器で。君を殴るものはたくさんあるんだろ。でも殴られる手ばかり探して、差し出される手が見えなくなってるのも君じゃない？」

信じてみればいい。信じられないのも無理からぬ事だし、それはとても勇気がある事だけだ。

「君も戦う勇気を持ってみなよ。そうしたら、きっと出来る。少なくとも…あそこのサッカーバカは、信じてても問題ないんじゃない？」

だって裏切るなんて発想も浮かばないくらい馬鹿なんだもの…と。ミストレは円堂を一瞬振り返って笑い、加速した。

「あ…」

隙を突かれて。呆然とした表情になる『ヒロト』の脇を、ミストレは走り抜けていった。

シュートコースが開く。面倒な飛鷹はさりげなくエスカバが押さえつけている。その彼に眼で合図された…行け、と。

- - 当然!!

「デスレイン!!」

ミストレの背面に幾つも開いた砲台。その射出口が開き、幾つもの赤い光が放たれる。それはミストレが蹴り飛ばしたボールを飲み込み、苛烈なシュートとなって、イービル・ダイス側のゴールを襲う。

「くそっ…ロングシュートか…!」

『トラマル』が憎々しげに吐き捨てる。通常シュートの射程圏にないとまだ油断していたのだろう…ミストレがボールを保持してすぐシュートを打たなかった為だ。

- - ロングシュートも、近い場所から打った方が各段に威力が増す…常識でしょ?

コース上に、ブロック可能な選手はいない。それもミストレの計算内だった…しかし。

走り込んできた一つの影があった。『ヒロト』だ。彼女は驚くべき事にミストレに抜かれた後身を翻し、デスレインのモーシヨンの間を使って追いついてきたのだ。なんという脚力なのか。

「勝負だよ…」ヒロト『！』

赤い閃光に立ち塞がるように。『ヒロト』がシュートブロックの体制をとった。

「流星…ブレードオオ…！」

流星の力で、蹴り返すべくボールに脚を叩きつける。二人の力がぶつかり、弾けた。軍配が上がったのは――。

「ああっ…！」

ミストレだった。デスレインは流星ブレードを破り、彼女の身体を吹き飛ばす。ボールは腕組みして立ったままの『エンドウ』の横を抜け、ゴールへと突き刺さった。

【三十：トウル・ブルー】

「よっしやあ！」

やっと一点返したただけだ。だがベンチからもフィールドからも歓声上がる。エスカバはそれをどこか微笑ましい気持ちで見ている。子供のように喜ぶ者の中には、雷門のみならずオーガのメンバーも混じっている。

ほんの少し前まで、自分達は敵だったというのに。ミストレに至っては本気で円堂を殺しにかかったというのに。

- 見てるかよ、バダップ。

エスカバは動かないバダップに想いを投げる。まだ彼の瞳に光は戻らないけれど。

- 俺にも分かってきたぜ。これがサッカー…円堂守のサッカーなんだ。

呪いじゃない。誰かを幸せにできる魔法なのだ。

だから彼らはこんなにも強い。どんな絶望を前にして尚、立ち上がり続ける強さを持っている。

- だから…お前も早く、戻って来い。

この世界は必ずしも美しいとは言えないけれど。現実は今にもあまりにも残酷な色を見せるけれど。幸せもまた、その先にある。

- 今こそが…お前の生きるべき現実なんだ。

歡喜に満ちかけたを壊したのは、一つの悲鳴と一つの罵声。人間を殴り飛ばす音と転がる音。

「やっぱりお前、役立たずだなあ！」

『エンドウ』は『ヒロト』を殴り飛ばして、にっこりと笑った。女の子に暴力を振るった直後とは思えないほど明るく無邪気な笑顔だ。それだけを見れば、自分達の知る円堂と見紛うほどの。

だが、その無邪気さの仮面の下は悪意にまみれている。真っ黒に濁った憎悪に汚れた言葉が、次々次々零れ落ちる。

「うん。これでハッキリした。お前は、他人を踏みにじる事と醜い色仕掛けしか能がない役立たずだ」

だからもう、要らないや。倒れて苦悶に呻く『ヒロト』の肩をスパイクで踏みつけながら、『エンドウ』は言う。

「もうお前は、チームに要らないよ。寧ろ邪魔。足手纏い。さつさとフィールドから出てけよ、クズ女」

「『エンドウ』君……」

『ヒロト』は『エンドウ』を見る。その眼には涙が浮かんでいたが、さつきまでのように謝り倒したりはしなかった。唇をきゅつと結び、何かに耐え忍ぶように『エンドウ』を見ている。子供の顔をした、外道を。

「…何？その眼」

そんな『ヒロト』を見て、『エンドウ』の顔から笑顔が消えた。

「すっげえ、不愉快な眼だ。やめてくんないかな？やめないなら……」

少女を仰向けに突き飛ばす。そして右手の指を二本、突き出して。
「やめないなら。決るよ、その眼」

見開かれる『ヒロト』の瞳に、それが突き立てられる寸前。エスカバは思わず、『エンドウ』の手首を掴んで止めていた。止めずにはいらなかった。

同情ではない――純粋な怒りによって。

「フィールドから出ていくのはお前の方じゃねえの？『エンドウ・マモル』」

「…何だつて？」

「さっきのミストレのシュートよお」

自分がこんな風に怒るなんて、こんな理由で憤るだなんて。ほんの少し前までは思いもなかった事だ。

「もし…もしもお前が真面目にキーパーやってりゃ。止められたかもしれないよな？」

これは、サッカーを汚す者への怒り。

サッカーに全力で取り組む者を馬鹿にする者への憤り。

そうだ。サッカーは危険思想だなんて思ってた時期も確かにあったのに――いつの間にか自分はこのにも魅せられていたのだ。サッカーに。サッカーを愛する者達の奇跡に。

「勝つ気がねえなら…本気で戦う気がねえなら！一生懸命やってる奴を馬鹿にする資格なんかねえだろうが！そもそもフィールドに立つ資格だつてねえ！！違うか！？」

エスカバは声を荒げて叫ぶ。

『ヒロト』の理由は歪んでいただろうが。少なくとも彼女はシートを阻止するべく全力で立ち向かってみせた。今のプレイも、さっきのプレイも。

その頑張りを、一体誰が否定出来るというのか。

「俺らは全員、マジになつてサッカーやってる。助けたいヤツを助ける為に、自分達が正しいって証明する為に。そんな俺らに、本気になれもしねえヤツが勝てるわけねえだろ。寧ろ試合する前から勝敗は見えてらあな」

それは本音であり、挑発でもあった。

努力を惜しまぬ少女を平然と見下して、あまつさえ手を上げるような屑野郎。円堂と元が同一の存在であるなどと認める事もおこがましい。そしてそんな奴と試合なんて、本当ならこっちから願ひ下げなのだ。

だがこうなつた以上、この試合は勝手に終わらせる訳にはいかない。そもそもバダップの心を引き戻せなくては何の意味もない。だからこそその挑発。全ては『エンドウ』を本気にさせて、もう少しでも戦うに相応しい相手になつて貰う為に。

「負け犬は尻尾巻いてお家帰れよ、被害者気取りの下衆野郎」

『エンドウ』の顔が憤怒に染まる。目をカツと見開き、小柄な身体をぶるぶると震わせている。

「…あらゆる悲劇を前に…戦い抜いてきた俺達に向かつて……よくもまあそんなクチがきけたもんだ…」

子供のような愛らしさは消え去り、怒りに満ちた殺戮者の顔が露わになる。

「勝つ気がない？本気になれもしない？負け犬？…はははっ、最高の侮辱をありがとよ！いいだろ…後悔させてやるぜ。俺を本気にさせた事をな！！」

『エンドウ』はエスカバに掴まれた手首を強引に振り解くと、スタスタ…というより怒りも露わにドタドタとゴール前に戻っていた。イービル・ダイスの他メンバーは無言で、或いは忌々しげにエスカバ達を見てポジションに走っていく。

「分かり易いんだよねあ、と思う。どいつもこいつもまったくもって感情を隠すのが下手だ。歪みきっているのは間違いないのに、根っこにどこか子供らしさがあった…結局彼らも元は雷門イレブンだったのだと思ってしまう。」

歪んでしまったのは彼らのせいではない。歪まざるおえない環境を作ったあらゆる運命に、周りの者達に罪がある。彼らとて本当は被害者なのだ分かっている。

何か一つ違っていれば、円堂達と同じように…幸せな“サッカーバカ”をやっていたであろう事も、容易く予想がつくというのに。

「…あの……」

「ん？」

見れば『ヒロト』が…相変わらず血色の悪い顔だ、せつかく美人なのに勿体無い…こちらを見ている。

「助けてくれて…ありがとう」

弱々しく、力は無かったが。それでも彼女は笑みを浮かべて言う。

「努力してるって…認めてくれた人、初めてだったから。ありがとう…嬉しかったよ」

エスカバが何かを言うより先に、彼女はペコリとお辞儀をして去っていった。だが『エンドウ』に言われたようにフィールドから出る事はしない。それが彼女なりの意思表示なのだろう。

- - 救ってやりてえ、な。

バダツプだけじゃない。ここにいる全員を救ってやりたい。そして円堂のサッカーならばそれが出来るかもしれないと思いはじめていた。- - いつの間にか、エスカバを含めた雷門とオーガの全員が。

彼らを救う事で自分達も救われる気がする、なんて。身勝手なエゴだと人は嗤うかもしれないけれど。

- - それでもいいんだ…きつと。

試合、再会。キックオフはイービル・ダイスから。『カゼマル』からボールを受けた『ソメオカ』が、ドリブルで上がり始める。

「…始めるぞ、お前ら」

その向こう。ゴール前から高らかに、『エンドウ』が宣言した。雷門サイドを憎々しげに見つめて。

「俺達の…破壊の為のサッカーを…!!」

その声に呼応して、イービル・ダイス全員の動きが変わった。

- - 何をおっぱじめる気だ…!?

「嫌な予感がする…何かやられる前に止めるぞ!」

「賛成だな」

ミストレに同意し、エスカバは一気に勝負に出た。二人がかりで『ソメオカ』を止めに行つたのである。自分達の考えを読んでは、風丸と一之瀬も援護に入ってくれる。

複数で押さえれば相手は必ずパスを出すだろう。その先を封じてしまえば向こうは攻め手を失う。苦し紛れに後ろに下げれば、それを契機に一気に後退させる事が可能だ。

エスカバの考えはほぼ正解に近かつた事だろう。だが完全な正解では無かつた。失念していたのだ。万が一にと、フットボールフロンティアインターナショナルの資料も、自分達は頭に入れていた筈だつたのに。

「必殺タクティクス…」

『カゼマル』と『ソメオカ』の声が重なる。鮮やかすぎるユニゾンで。

「ダンシングボールエスケープ・改」

一瞬、何が起こつたか分からなかつた。

ボールを保持した『ソメオカ』の後ろから散るように『カゼマル』、『ヒロト』、『ゴウエンジ』、『フィディオ』が飛び出してきて、

自分に『カゼマル』。

ミストレに『ヒロト』。

風丸に『ゴウエンジ』。

一之瀬に『フィディオ』がマークについたかに見えた。――が、認識できたのはそこまでだ。

知覚した直後に彼らの姿が掻き消えて、突風が巻き起こったと思
った時には。自分達四人は全員、地面に転がされていたのである。
身体中を襲う、痛み of 嵐と共に。

「な、何が起きたんだ…!？」

呆然とする雷門イレブン。ベンチから秋が悲鳴に近い声で叫んだ
- - - 一之瀬君!と。

「一之瀬!？」

他三人以上に、一之瀬の怪我は酷かった。横倒しになったその身
体は、ユニフォームもその下の肌もズタズタだ。殆どの傷は浅いも
のだったが、一カ所、脇腹辺りが深く切り裂かれていた。パツクリ
避けた肉からは鮮血がだらだらと零れ落ち、その身体の下に血の池
を作っていく。

「あ…あ…」

信じられない。そんな面持ちで一之瀬は目を見開き、血の気の失
せた顔に脂汗を浮かべている。激痛で動く事もままならないのだ -
- 戦場を知らぬ一般人達からすれば、さぞかし悪夢じみた光景だろ
う。

- - - ば、馬鹿な…!？

エスカバもまた、身体中を切り傷だらけにしていたが、一之瀬に
比べれば遙かに傷は浅かった。それでも身体中を苛む痛みを暫し動
きを封じられる。風丸とミストレも同じ状況だ。無力化された囲み
を悠々と抜け、走り去っていく『ソメオカ』。

あの鬼道ですら。目の前の現実が受け入れがたいのだろう。思考をリリースさせ、棒立ちで抜かれてしまった。

- - イービル・ダイスは… FFI後の雷門がベース。必殺タクティクス
の存在を失念していたのは俺達のミスだ… でも！

ダンシングボールエスケープ。あの戦略も資料で見た事がある。だが、こんな血なまぐさい技などでは無かった筈だ。資料で見たそれより遙かに威力も残虐性も増している。

「改良型ってわけかよ…クソがっ」

なるほど奴らは言った - - ダンシングボールエスケープ・改と。改良じゃなくて改悪型だと言いたい。なんとかエスカバが血でぬめつく身体に鞭打って立ち上がった時には、『ソメオカ』がゴール前まで切り込んでいた。

「絶対に止める…！」

突然の惨事に動揺したのは円堂も同じだろう。だが彼は気丈に相手を見据えて構える。ニヤリ、と笑って『ソメオカ』がシュート体制に入るうとしたその時だ。

甲高い、ホイッスル。前半終了だ。

【三十一：オールスター・ゲーム】

認めるのも悔しいが。時間に救われたな、と鬼道は思う。前半終了の笛が鳴らなければどうなっていたか分からない……一之瀬の怪我を見て思う。

「どう見ても……試合続行は無理だよ、一之瀬君」

秋が眼を真っ赤にして……涙を乱暴に拭ったせいだ……一之瀬に言う。応急処置を受けた一之瀬は、苦々しい顔で押し黙る。

彼の身体は包帯だらけだ。脇腹の傷は縫わなければならないかもしれない……血が滲んでくるのも時間の問題だろう。ダンシングボールエスケープ。あれは通常必殺技とは違う、必殺タクティクスというものだトエスカバは言う。

「チーム全員がかりの必殺技だと思ってくれりゃあいい。お前らの時間軸で……何ヶ月か後に行われるフットボールフロンティアの世界大会。そこから公式ルールに盛り込まれるようになるんだが」

フットボールフロンティアの世界大会。非常に興味のもそられる単語ではあったが、今訊くべきことではないのだろう。なんせ自分達の未来の話だ。

何より今一番の問題はそこではない。あの残虐極まりない必殺タクティクスをいかに攻略するか、それが課題だ。

「俺達が見た、フットボールフロンティアインターナショナルの資料でも、あの必殺タクティクスは出てきた。だが俺達が知ってるモノとは全然違う……多分、サッカーっていうより戦闘用に改良して、軍部が指導したんだろう」

「まったく、悪趣味にも程があるぜ」

イツカスの言葉に、サンダユウが不快感を隠しもせず言う。

「あれを攻略しない限り、勝ち目はない。…それに、怪我人を増やすばっかりだ」

それどころか次は死人が出るかもしれない、と円堂は苦しげに呟く。

「鬼道。…何か思いつかないか？」

鬼道は考え込む。話を振られる前から思考は回っていた。こういつた場合の戦略を考え、対策を練るのは司令塔である自分の役目だ。時折一之瀬あたりがアドバイスをくれるが、彼は今それどころじゃない状態である。

「春奈。…ビデオは回していたな？」

「うん」

彼女がさりげなくビデオ撮影をしていたことに気付いていた。いざという時、映像を見直して相手の弱点を見つける事もままある。指示される前からマネージャーとして最善を尽くす妹を、臍眼目でなく純粹に尊敬した。最近彼女の観察眼に助けられる事も増えている。

「さっきのシーンだよね。…ここだ」

小さな画面を数人で覗きこむ。やや狭くて暑苦しいが仕方ない。

「…必殺タクティクスに参加しているのは…計五名だな」

さっきのケースでは、ボールを保持した『ソメオカ』を宙に添えて、FWの『カゼマル』に『ゴウエンジ』、MFの『ヒロト』と『

『ファイデオ』が援護に回っている。

援護役はまず『ソメオカ』の後ろから現れて、障害となる相手チームの前線メンバーを一人ずつマーク。その後が視認出来ていなかったのだが――。

「疾風ダッシュか…!？」

風丸が驚きの声を上げる。スロー再生で分かったのだ。彼らが何を、あのような惨状を作り上げたのが。

それは――疾風ダッシュ。援護役はマークにつくと同時に、疾風ダッシュで対象の周りをぐるぐると回り、その風で発生させたカマイタチで相手にダメージを与えていたのだ。

援護役にマークされた人間は手傷を追って、その痛みで膝をつく。当然暫く立ち上がれない。無効化させられた四人のメンバーの間を悠々とすり抜け、ボール保持者は敵陣内に切り込むのである。

「最前線に立っていたオレとエスカバより、後ろにいた風丸と一之瀬の方がダメージ受けてるね」

ミストレが、自分を含めてタクティクスを受けた四人の傷を見比べて言う。彼の言う通り、一番重傷は一之瀬であり、その次が風丸だった。風丸はなんとかまだプレイ続行可能のようだが、ミストレ・エスカバ両名と比べると傷が多い。

「タクティクス発動後。援護役四人が後退してないせいで。彼らは全員、ボール保持者を守る距離を保って併走する。ひたすら前に走り続けるから、風丸と一之瀬は前二人分の疾風ダッシュの余波も受けちゃったんだろうね」

ポジション上前にいる分、エスカバとミストレが先に攻撃を受け

た。その攻撃の余波も、次に攻撃された風丸と一之瀬はくらってしまい、ダメージが増加されたという事らしい。

「…穴が無い訳じゃないが…危険な賭になるな」

鬼道は呻く。どんな必殺技、どんな戦術にも必ず弱点はあり、この必殺タクティクスはより顕著だ。向こうもそれくらい分かっている筈。

にも関わらず平然とこのタクティクスを実行するのは――破られない自信があるからだろう。見た通り、残酷さ際立つ戦術。一度披露してしまえば相手の恐怖心を煽るのに充分だ。脚が竦んで判断力が鈍った敵などもはや怖くもなんともあるまい。

そして仮に弱点が露呈しても。それを突くには相応の度胸が必要であり、当然命の危険が伴う。理性的な者ほど恐れる筈だ。そして頭の悪い者に、突けるほど大きな隙ではない。

「…ポジションとフォーメーションを変えよう」

悩んだ末、決断する鬼道。

「一番危険な役割は俺が担う。だが…怪我をするのが俺とは限らないし、今度はもっと大変な事になるかもしれない。それでもみんな…ついてきてくれるか」

本当はもっと安全策を取りたい。自分が怪我をするだけならまだしも、仲間を命の危険に晒すなど耐え難い事だった。正直今の時点で公開している。自分が相手の動きを読み切っていたら――一之瀬にあんな怪我を負わせずに済んだのではないかと。

だが、後悔してばかりでは先に進めない。望む未来を掴みたいなら、世界を変えたいならとにかく動いてみるしかない。自分は円堂

に、豪炎寺にそう教えられた。だから影山の檻を壊して、雷門に転校して今に至るのである。

ならば。危ない橋でも渡るしかない。渡り切れた先に、願った景色があると信じて。

「俺は、鬼道の策を信じる」

発言したのは豪炎寺だった。

「この試合には、たくさんのモノがかかっている。サッカーを信じる者、全ての希望と未来が俺達に懸かっているんだ」

だから負ける訳にはいかない。そう言う彼の瞳には確かな光があった。本当に強い者だけが抱ける光が。

「本当の負けは…試合に負ける事じゃないんだ」

その光の…最初の信託者。円堂はその大きな眼に仲間達を映して、豪炎寺の言葉を引き継いだ。

「自分に負ける事だ。誰かに流されて、自分が一番正しいって思っている事を主張出来なくなる事。自分の信念に誇りを持ってなくなる事だ。それは…説得されて考えを改めるのとは全然違う」

そつだ。一番大切な事は揺らいではいけない。

自分達はサッカーをする為に此処に来た。

自分達の信じるサッカーを示す為に此処に立っているのだ。

「だったら！勝つ為に…諦めないで、やれる事全部にチャレンジしなきゃ。痛い思いをするのも、失敗するのも怖いけど…本当にそう

なるかなんで誰にも分からないし」

円堂の言葉が、魔法が全員の心に染み渡る。全員の勇気になる。

「信じれば信じただけ、可能性の道は広がるんだ。だからきつと大丈夫！つて信じて。やってみようぜ…みんな！」

おう！！とあちこちから声が上がった。鬼道は思う。そして笑う。ああ、そうなんだ。だからだ。

「ありがとう…豪炎寺、円堂」

だから自分は、こんなに彼らが好きなんだ。

「ポジションを言う。みんな、今から言う事をよく聞いてくれ」

F W ミストレ 豪炎寺 エスカバ

M F サンダユウ 鬼道 イツカス

D F 風丸 土門 壁山 栗松

G K 円堂

フォーメーション名はムカタ・マーチ。木戸川清修が使う、攻めに貪欲な速攻型陣型だ。

「さあ、行くぞ！まずは一点だ！！」

「おー！！」

大切なのは諦めない心。

大事なものは戦う勇氣。

鬼道はちらりと、ベンチにいるバダップの方を見た。自分達は示してみせる。未だ闇の中に囚われた彼に、光の射す場所を教える為にも。

後半が始まる。『ヒロト』はポジションに着いて、相手のベンチの方を見た。

「大丈夫…かな」

「ん？」

どうやら口に出してしまっていたらしい。すれ違った『フブキ』
- -今はカナデの人格でいるだろうから、そう呼ぶのが正しいの
だろうか - -が振り向く。

「…さつき交代になった…一之瀬君。結構酷い怪我だったから、大丈夫か…」

こんな言葉、『エンドウ』に聞かれたらまた殴られるだろうが。
『フブキ』になら聞かせてもいいかな、と思ったのである。『シロウ』は臆病で『アツヤ』は好戦的、彼らの保護者である『カナデ』は異常なまでに完璧主義者。彼は敵と見做した者には容赦無かったが、自分が認めた相手には温厚で優しい人間だった。

特にチームの人間。『シロウ』を大切にしてくれると分かっている人間には、優しい。大人としての愛情さえ向けてくれる。

何より彼は他メンバーのように、サッカーを憎んでいる訳では無かった。ただ完璧でありたい、完璧であって息子達を守りたい。それだけなのだ。

「…そうだね。彼はチームにとっては“敵”だけど…僕にとっての敵では無かったし。大事に至らなければいいね」

思った通り、彼は『ヒロト』に同意してくれた。

「でも…これは試合。僕達はいつだって完璧に勝たなくちゃいけない。子供達を傷つけるのは心が痛むけど、ある程度は割り切らなきゃ駄目だよ、『ヒロト』」

「うん…分かってる、けど」

この感情をうまく説明できる気がしない。だから、思ったままを口にした。

「いいチームだね。あの子達がやるサッカーは本当に楽しそう。あれが円堂守のサッカー、なんだなあ」

サッカーは、好きだった。何故ならサッカーを一生懸命やれば、父が誉めてくれたから。あの人が息子を思い出して優しくなったから…痛い事をされずに、済んだから。

だから段々負けるのが怖くなって、必要とされなくなるのが恐ろしくて。試合の最中も怯えるようになってしまったけれど。

「努力してるって。幸せになれる権利があるなんて…そんな事言ってくれた人達、初めてだった。だから嬉しくて…ね。『カナデ』さんは分かるでしょ？」

「…そうだね」

『フブキ』は目を細めて…少しだけ寂しげに、呟いた。

『シロウ』にも、そんな事を言ってくれる人がずっと側にいてく

れたら。あの子が死なないでいたら。…僕は生まれなくて済んだかもしれない」

彼も分かっているのだろう。本当は『フブキ』の中に、自分のような人格がいるべきではないのだと。

「どうして僕達は…彼らと同じ世界を生きられなかったんだろう。彼らとサッカーしていたら…もっと早く、救われたかもしれないのに」

「…うん」

それは願っても仕方のない事だけど。『ヒロト』と『フブキ』は悲しい笑みを向け合った。自分達の世界の『エンドウ』にもはや期待出来ない事であるのは、分かりきった事だったから。

笛が鳴る。いよいよ、後半戦が始まった。

【三十二…シンデレラ・ドリーム】

雷門のキックオフで後半戦開始。鬼道の指示通り、豪炎寺がドリブルで上がり、フォロウの為にミストレとエスカバが一步下がって追走する。そのさらに後ろには鬼道とサンダユウが。

- このままボールを取られず、シュートまで持ち込むのが最善だが、奴ら相手にそれは難しい。

鬼道は駆け上がりながら考察する。

ダンシングボールエスケープは、攻撃専用タクティクス。よってこちらが攻めている限りは発動しないが。

そう簡単に上手いくほど甘い相手ではない。何せイービル・ダイスはパラレルワールドの雷門イレブン。こちらの手の内は知り尽くしているだろうし、バウゼン達からも情報提供されている筈。

「スピニングカットV2」

予想通り、『キドウ』が奪いに来た。豪炎寺もヒートタックルで応戦するが、やはり地力の差が大きいのだろう。力負けしてボールを奪われてしまう。

「来るぞ！戻れ！！」

雷門が点を取るには奇策で上回る他ない。ボールを奪われ、必殺タクティクスを決められるのはピンチでもあるが、唯一反撃出来るチャンスだとも踏んでいた。あれだけの戦略、彼らも自信がある筈。それを破られれば、動揺から来る隙が必ず出る。

思った通り。ボールを奪った『キドウ』はボールを『ソメオカ』

にパス。ドリブルで上がり始めた彼の後ろに、『カゼマル』『ゴウ
エンジ』『ヒロト』『フィディオ』の四人がつく。発動前のモーシ
ヨンだ。

- ダンシングボールエスケープには、二回、大きな隙ができる。

一つは、発動直前。『ソメオカ』が敵陣に突っ込み、援護役の四
人が彼から離れた直後。『ソメオカ』の周りにはフォローする人間
がいなくなる。よってマークされずに済んだメンバーの誰かが、素
早く『ソメオカ』からボールを奪えばそのままカウンターに入れる
のだ。

さつきと今回。二度とも『ソメオカ』をドリブル役に選んだ事で、
鬼道は一つの事実を確信した。彼は単体では、相手ディフェンスの
突破が難しいのだ。- 何故ならドリブル系の必殺技が無いから。自
分達の世界の染岡がそうなのでもしやと思ったが、あちらも同じだ
ったらしい。

だから必殺タクティクスに頼って敵陣を突破する。リスクを背負
って尚彼をゴールエリアまで運びたいのは、それだけシュート技に
自信があるからだろう。ならば何としても彼をゴール前までドリブ
ルさせる訳にはいかない。

- このタイミングでボールを奪取出来れば怪我人は出ずに済む。
だが…。

問題は、隙が小さいこと。

援護役の誰が誰のマークに入るかを素早く見極め、彼らの目をか
わしてドリブル役に近付かなくてはならない。のろのろしていたら
タクティクスが発動してしまう。

だが、“自分はマークされない”と認識するまでも時間がかかる
し、認識した人間がドリブル役の元まで辿り着くのもタイムラグが

ある。さらにはそこで『ソメオカ』から手早くボールを奪えなければ意味がない。

長年練習した作戦ならばまだしも、とっさのメンバーの付け焼き刃だ。残念ながら成功率は低かった。

「くっ…！」

予想は的中する。援護役四人がマークしたのは『ミストレ』『エスカバ』、そして自分に『イツカス』だ。フリーになった豪炎寺が『ソメオカ』からボールを奪おうとするが、彼の元に辿り着く前にタクティクスが発動してしまった。

「ダンシングボールエスケープ、改！」

彼らの声と共に、巻き起こる風。鬼道の周りを『フィディオ』が疾風ダツシュで起こした風が吹き荒れる。それらは真空の刃となって鬼道の腕を、足を、首を、胸を、腹を、次々次々斬りつけていく。

「ぐああっ！」

痛い。痛いなんてものではないくらいに痛い。ゴーグルをつけていて良かったと今日ほど思った事はない。おかげで目をガードせずに済み、最後まで状況を目に焼き付けられたのだから。

風が病むと同時に、鬼道は膝から崩れ落ちた。全身痛い、肩と首筋が特に痛い。手で押さえると、生ぬるい液体がべったりついた。少々、まずい場所を斬られてしまったらしい。

だが意識を飛ばしている場合ではない。鬼道は死力を振り絞って叫んだ――サンダユウ！と。

「任せておけ！」

発動直後。まだ援護役が『ソメオカ』の側につく直前、サンダウが彼の正面に立ちふさがっていた。

ダンシングボールエスケープ、その二回目の際。それは発動直後。こちらの四人を無力化してすぐは、援護役もフォローに走れない。そこに、マークされなかった中盤の人間がボールを奪いに走るのだ。仲間の犠牲と惨状を予め覚悟してさえいれば、出来ない作戦ではなかった。

「グラビティション・改！！」

地面に両手を叩きつけるサンダウ。生み出された重力場が、『ソメオカ』にのしかかる。普段のおよそ十倍のG。地面に身体を押し付けられるようにしてうずくまった『ソメオカ』から、サンダウは見事ボールを奪ってみせていた。

「まさか！！」

『エンドウ』が、『フィディオ』がはつとした顔になる。よもはこんなにも冷静に対処されるとは思わなかったのだろう。

ダンシングボールエスケープは恐ろしい必殺タクティクスだ。だが、一度に五人の人間を密集させる為、発動直後は中盤に大きくスペースが空く。守備に大きな穴が出来るのだ。これ以上ないカウンターの好機だった。

「クイツクドロウ！！」

『マックス』がボールを奪いにくるが、サンダウは素早く上に飛んでかわしていた。鬼道は傷の痛みにも油汗を流しながらも、つい感嘆してしまう。良い動きだ。クイツクドロウが低い位置でしかボ

ールを奪えない必殺技だとよく分かっている。

「現役軍人ナメんなよ…豪炎寺！」

ボールは豪炎寺へ。彼は頷き、スペースの空いた正面からゴールに切り込んでいく。

「幸せな世界しか知らない…悲劇を知らないお前のシュートなんかで、俺のゴールは破れない!!」

「何を勘違いしてるんだか知らないが…『エンドウ』」

豪炎寺は身構え『エンドウ』に、はつきりと言い切った。

「人を強くするのは悲劇じゃない！絶望を前にしても諦めず戦おうとする…その想いだ！悲劇を享受して諦めたお前じゃ、俺達には絶対勝てない!!」

はっと目を見開いた『エンドウ』に向けて、豪炎寺は力強くシュートを放っていた。

「マキシマムファイア!!」

焰を纏い上げる脚、舞い上がる身体。炎のストライカーの名に相応しい、苛烈な一撃がゴール目掛けて走る。それを、まるで親の敵でも見るように睨みつけた『エンドウ』は、ジャンプしてグローブで覆った拳をボールに叩きつけていた。

「怒りの…鉄槌！」

鬼道にとっては見たことの無いキーパー技。もしかしたら円堂が未来の何処かで身につける技なのかもしれない。拳をシュートに叩きつけて相殺する技は今まで幾つかあったが、上から押し潰すのは

新しい発想だ。――なんて、こんな時まで分析してしまうのは司令塔の性なのか。

豪炎寺のシュートと威力と、叩きつけた『エンドウ』の拳。二つの力は拮抗しているように見えた――だが。

結末はどんな勝負にも必ず訪れる。シュートを抑えこむ『エンドウ』の身体が僅かに跳ねたように見えた瞬間、勝敗は決していた。

『エンドウ』の手を弾き飛ばしてゴールに突き刺さるシュート。二対二。これでやっと追いついた。

「さすが豪炎寺！」

円堂の歓喜の声が遠い。本当に良かった。鬼道は心からの笑みを浮かべて――地面に倒れこみ。そのまま意識を手放したのだった。

「お兄ちゃん！」

春奈の悲鳴が上がる。円堂ははっとしてフィールドを見た。鬼道が倒れている。その身体は一之瀬と同じように――あるいはそれ以上に傷だらけ、血だらけだった。しかもどうやら意識が無い。

それにダメージをくらっているのは鬼道だけでは無かった。ほぼ同量のカマイタチを受けたイツカス、前衛にいたとはいえ二度目のアタックを受けたミストレとエスカバ。鍛えが違っただけあって彼らは鬼道より致命的ダメージを回避したようだが、それでも息が上がり膝を突いている。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！！」

「音無さん、落ち着いて！大丈夫だから！！」

担架に乗せられた鬼道に縋り、取り乱す春奈。それをなんとか宥める夏未。

・ ・ 落ち着け… 円堂守。

円堂は自らに言い聞かせる。

・ ・ こうなるかもしれないって分かったた筈だ。俺も… 鬼道も。

自分は司令塔なんてガラじゃない。冷静に、頭を使って作戦を練るなんてまったく向いていない。それでも今は、考えなくてはならない。

タクティクスをくらった面々。鬼道の戦線離脱は確定的だった。手足も胸も腹も切り傷だらけだったが、特に首の傷が痛々しい。一歩間違えば頸動脈をやられていただろう。血の流れ方、色からすればまだ静脈出血、動脈に傷はついてなさそうだ。だが油断は出来ない。

また、残るイツカス、ミストレ、エスカバ。彼らのダメージも無視出来ないだろう。イツカスは下げるべきではないだろうか。さつき応急処置の為戻って来る際、脚を引きずっていた。それでも鬼道より軽傷なのはさすがというべきだが。

ミストレとエスカバも本当は交代させたい。だが彼らは相手チームの指定で、限界まで交代させてはならないと決められてしまっている。体力的にはかなりキているだろうが、恐らく交代を申請しても認められるレベルでないだろう。何より本人達が拒むに違いない。

「これで追いついたけど… もう同じ手は使えないぞ」

苦い顔で風丸。彼も一度あの攻撃を受けた人間だ。まだ身体中が痛むのか、顔色が悪い。もう一回受けたら彼も下げざるおえなくなっていたに違いない。鬼道はそれを見越して、風丸をディフェンス最後方まで下げたのだろう。

しかしだからといって、まだ無傷だった鬼道が負傷する必要は無かった筈だ。なんて、今更言っても仕方ない。危険な橋は自分が真っ先に渡る。有事の際は恐ろしいまでに自分の身を顧みない。それが鬼道有人という男だと、円堂は痛いほどよく分かっていた。

「…どうする…この先。最初からタクティクスを発動させない…それがベストなんだけど…」。

肝心の方法がまったく思いつかない。円堂が頭を抱えた、その時だ。

「…円堂」

一之瀬だった。彼はベンチに横になり、傷の痛みと戦いながらも、意志を失わぬ目で円堂の方を見ていた。

「さっきと今。二回のダンシングボールエスケープを観察して…気付いた事があるんだ。何か役に立つかもしれない」

大怪我をして尚。フィールドの外に出て尚、戦う意志を忘れない。自分出来る事を探し続ける。サッカープレイヤーの鑑ではないか。円堂は素直に感服した。

「…教えてくれ」

試合の残り時間もそう多くはない。まだ全ては闇の中。それでも

円堂と、雷門と、オーガ……仲間達皆の気持ちは一つになっていた。
勝ちたい。

勝って魅せてやりたい。

絶望に染まった者達に……自分達の信じるサッカーを。

【三十三：ファイナル・ディスタンス】

久々の緊張感だな、とミストレは思う。

前線にいる時と同じ。生きるか死ぬかの境目に立つこの感覚。血が沸き立つ。身体中の産毛が逆立つ。そして妙に頭は冴えていたりする。

- まさかサッカーの試合で…ここまで追い詰められる事になるとはね…。

イービル・ダイス側のベンチにいるであろうヒビキとバウゼンを睨む。彼らはこの展開を予期していたというのか。イービル・ダイスのからしてもネックであったらう、オーガの存在。それがここまで痛めつけられる事になるうとは。

ミストレは自らの現状を、冷静に判断する。

- 脚は平気。ただちよつと…肩を深く切られすぎたかな。血がうまく止まってくれないや…。

応急処置の時にうまく誤魔化したつもりだが。雷門のメンバーや敵方に知られるのも時間の問題だろう。そうなる前にケリをつける。他に選択肢は、ない。

- 多分、オレとエスカバが一番の障害になるって分かってたんだろう。どさくさに紛れて反則かましてくれやがった。

二回目の必殺タクティクス発動で。疾風ダツシュのカマイタチで斬りつけると同時に、自分達は二発ずつ蹴りを貰っていた。一発目はガードしたが二発目は間に合わず、肋に一撃くらってしまった。

恐らくエスカバも同じだろう。

多分罅が入っている。切り傷と相まってなかなか素晴らしい痛みだ。最後の理性でポーカーフェイスを装うも、血の気の失せた顔と滲み出る汗は隠しようがない。

…まだだ。まだ倒れるには早い。戦場じゃもっと酷い怪我だつてしてるんだから。

全身複雑骨折だったり、手脚に切断寸前の傷を負ったり、はたまた内臓破裂なんてのも経験している。その度死の淵から生還して今の自分が此処にいるのだ。あれらに比べたら今の怪我など怪我のうちにも入るまい。

まだ立てる。まだ走れる。まだ生きている。今はそれが全てでありそれで充分だ。生きて身体が動く限り自分達は考える事が出来、戦い続ける事が出来るのだから。

「世界を変えるのは争いじゃない。人の想う心。戦う勇気が世界を動かすんだ」

あえて信念を声に出す。目の前に対峙する、悲劇に踊らされた少年達を見据えて。

「まだ終わっちゃいない。絶対に…諦めない!!」

ミストレの言葉に、ピクリと『カゼマル』が反応した。それはほんの一瞬だったけれど。彼は一体何を思ったのだろうか。

『…さつき、必殺タクティクスに参加したメンバーのうち…『カゼマル』と『ソメオカ』なんだけど。妙な癖があるんだ。最初は偶然かと思っただけど二回ともそうだったからまず間違いない』

先程の一之瀬の言葉を思い出す。

『ダンシングボールエスケープ発動直前に、左脇腹を庇うんだ。怪我してるのかも思ってたけど、別に動きが鈍い訳でもない。単純な癖なのかもしれないけど…とにかく、奴らが揃ってその動きをしたら、タクティクスが来る合図だ』

二人揃って左脇腹を庇う。奇妙な事だ。昔傷を負った事があって、その時の名残だとか…そういう理由だろうか。にしても二人が二人ともというのが気にかかる。

…タクティクスは二回とも、同じメンバーとポジションで行われた。多分それが一番奴らが得意な配置なんだろう。

他のメンバーでも発動可能と思っておいた方がいいが。二回同じ構成で来たならばやはりそれにも訳があつて然りだろう。

まずは『ソメオカ』を徹底マーク。あとは攻撃の要となるであろう『カゼマル』と『ゴウエンジ』…特に『カゼマル』から目を離したくはない。あとは別件で『トラマル』。彼にボールが渡ったらまたあの殺人シュートを打たれてしまう。

…だけどその全部を実行するのは…ちょっと非現実的だ。

試合の中で活路を見いだすしかない。残り少ない時間の中、至難の技ではあったが。

ちらりと後ろを振り返る。イツカスの代わりにMFとして入ったのはカノンだった。彼の本領はFWだが、ミストレとエスカバは外せないし豪炎寺の力もまだ必要。ならばいざという時サイドから攻め上がる役を任せた方がいい。悔しいが彼のシュートは武器になる。

「ソメオカ」と「カゼマル」が左脇腹を庇うのが古傷よる癖だったとしたら……。わざとそこを狙えば、相手の体制を崩せるかもしれない。

ミストレの提案に、雷門イレブンは揃って嫌な顔をしてきた。ラフプレーとまではいかないにせよ、相手の身体を直前狙うのは正攻法じゃないと言いたかったのだろう。だがミストレは説得した。これは彼らに傷を負わせるのが目的のプレーではない。それに綺麗なプレーばかりに拘っていられる相手でもないのだと。

彼らの気持ちが理解出来ないではなかった。しかしそろそろ彼らも痛感してきた筈だ。これはもはやただのサッカーの試合ではない。弾の飛び交う最前線に立たされているにも等しい、命懸けの勝負だと。

「そして命懸けだからこそ、価値があるんだ。」

失点したイービル・ダイスのキックオフで試合再開。「ゴウエンジ」がドリブルで走ってくるのを、エスカバが止めに行く。彼も限界が近い。それでも手を抜く事はない。それもまた誇りであるのだから。

エスカバのチャージを、「ゴウエンジ」は「カゼマル」にパスする事で回避した。やるなら今しかない。ミストレは一気に前に躍り出た。

「……」

「カゼマル」の目が見開かれる。ミストレをかわそうとフェイントで応酬するがなかなか抜けない。しかしそれ以上に気付いたのだろう。審判の死角になる位置で、さりげなくミストレの肘が「カ

ゼマル』の脇腹を狙っている事に。

予想通りになった。彼は腕でそこを庇おうと身を引き、それが隙になる。ボールをミストレは脚で引き寄せていた。だが『カゼマル』は、再度奪い返そうとしつこく追いつがる。もはや執念だ。

…必殺技を出される…その前に！

「ジャツジ・スルー2！」

ああ、後で絶対非難されるなあ…と思ったのは一瞬だ。これも戦略なのだから仕方ない。ミストレは奪ったボールを『カゼマル』の胸目掛けてぶつけていた。当然手加減はするし、今回の目的は相手を倒す事ではない。

『カゼマル』が僅かに、サッカーのルールを失念した一瞬を見た。彼は弱点を庇うべく手で腹をガードしたのである。ボールは『カゼマル』の腕に当たり、ミストレはその上から連続で蹴りを見舞っていた。少年の細い身体が地面に仰向けに倒れる。

「ハンド！」

審判の笛と声。ラッキーな事にこちらのファールは取られなかった。理想的な展開だ。

だがミストレは…倒れた『カゼマル』を見て絶句し、固まってしまうていた。そこにはあまりにも信じがたい光景が広がっていたのである…ゴール前から『エンドウ』が飛んできた。

「『カゼマル』！！！」

『カゼマル』が頭を振りながらゆっくりと身を起こす。大丈夫だと彼は言った。なるほど大した怪我をしたわけではないのだろう…

-否、この表現には語弊がある。
彼が怪我などする筈が無いのだ。何故なら。

「アンドロイド…だと？」

エスカバが呆然とした声を上げた。ジャツジスルー2で倒される際、ミストレの脚が『カゼマル』の腕を掠めていたのだろう。さらには倒れた際芝生で切ったのだ。腕が少しだけ裂けていた。そこから“中身”を覗かせて。

皮と肉の割れ目なんて本来グロテスク極まりないものだ。だが覗いていたのは肉でも血管でもなかった。『カゼマル』の皮膚の下に通っていたのは無機質な配線だったのだ。

「馬鹿な…一体どういう事なんだ！？」

ミストレの声も届かぬ様子で、『エンドウ』はしきりに『カゼマル』に声をかけている。先程までの鬼畜ぶりからは一転して、心底心配した様子で。

彼らは…イービル・ダイスは。悲劇的な運命ばかりに見舞われた、平行世界の雷門イレブンである筈だ。なのにその一人である『カゼマル』がアンドロイド？現代の技術では不可能でないが、とても八十年前に確立されていたとは思えないのに…。

「…君が察した通りだ」

混乱するミストレに答えを与えたのは、意外にも『フブキ』だった。

「その『カゼマル』はハウゼンが『エンドウ』に与えたアンドロイド…偽物だ。本物は連れて来れないからね」

「連れて来れない…？」

「僕達の世界の…本物の風丸一郎太は」

彼は目を細めて…苦しげに、言葉を紡いだ。

「福岡のジエネシスとの試合中の事故で…命を落としたんだ」

- - - - -

『風丸一郎太』

雷門中二年男子。円堂守の幼稚園時代からの幼なじみであり、家も近所である。昔から脚が速い子供であり、そんな彼が中学生になつてから陸上部に入ったのも自然な流れだろう。

陸上部では副部長を勤め、全国大会でも短距離でめざましい活躍を見せる。先輩後輩同僚、皆に慕われ、やや真面目すぎるくらいはあるものの理想的な人格者であつた。

彼自身の生い立ちに、悲劇と呼べるほどの悲劇はない。フットボールフロンティアからエイリア襲来まで、チームとしての悲劇は幾つもあったがそれは彼自身の悲劇ではない。寧ろ彼の存在そのものが、悲劇の歯車の一つであつたのだろう。

実力の伸び悩みに苦しみながらも、乖離障害に悩む吹雪を支え、彼と親友になる。しかしその彼と円堂の目の前で、風丸は命を落とした…それも、サッカーの試合の中で。

福岡県の陽花戸中にて。エイリア学園最強のチーム、ジエネシスが襲来。雷門が応戦するも力の差は圧倒的だつた。しかし風丸は諦めかけたメンバーを鼓舞し、先陣を切つてジエネシスに挑みかけたのである。そして僅かながら対等な勝負をもしてみせた…だがそれがいけなかつた。

彼はジエネシスに目を付けられ、集中砲火を受ける。半ばリンチのような、反則ストレスの攻撃。とはいえ多分ジエネシス側も、殺

害する気までは無かった筈だ。だがボールをぶつけられ、吹っ飛ばされた彼はゴールポストに激突し――頭蓋骨折。即死だった。

それが円堂がサッカーを憎み、ヒロトを憎む理由の一つ。ヒロトはジェネシスのキャプテンであり、リンチに反対したとはいえ荷担していた。

恐らく、風丸本人はさほど不幸ではなかっただろう。その死により狂った二人の親友――円堂と吹雪の姿や、闇に堕ちたイレブンを目の当たりにせず済んだのだから。

「今はまだ、インストールが完璧じゃないけど」

『カゼマル』を支えながら、『エンドウ』が言う。俯いたまま。

「ヒビキは言ったんだ。この試合に勝つたら……生きていた頃のデータを脳に完全にトレースしたアンドロイドを作ってくれる。『カゼマル』もみんなも帰ってくるんだ!!」

それは、胸が締め付けられるような悲しい狂気だった。死んだ人間が帰って来る訳ないのに――ミストレは苦しくなり、次に恨んだ。あまりにも残酷な夢を見せたヒビキ達を。

「だから勝つ……絶対に!」

『エンドウ』は吼えた。眼を哀しい色でキラつかせて。

【三十四：マインド・プラスト】

『カゼマル』がアンドロイドだった。その事実が、ミストレに一つの仮定と、恐ろしい推測を立てさせる。

- 脇腹を庇う癖。あれはひょっとしたら…そうするようにプログラムされた結果じゃないのか？

機械ならば当然電源はあるだろうし、核となるシステムやりセツトボタンもある筈だ。増してやアンドロイドを兵器として使う国も増えている昨今。緊急停止スイッチも必須である筈。

左脇腹を庇うのは、一定の衝撃を受けると作動する何らかのスイッチが、そのあたりに存在するからではないか？そして同じ癖は『ソメオカ』も持っている。改めて観察してみればもう二人いた…『キドウ』に『マックス』だ。

「アンドロイドは…『カゼマル』だけじゃないんだな？」

同じ事に気付いたのだろう。豪炎寺が呻くように言う。

「その通りだ。『ソメオカ』『マックス』『キドウ』…この三人も同じくアンドロイド。つまりは死者だ」

ヒビキは事も無げに言う。そして例のごとくデータを提示する。

『エンドウ』は動かない。色の無い瞳でこちらを見ているばかりだ。

『染岡竜吾』

雷門中二年男子。雷門を形作る、悲劇の歯車の一。

彼自身は平凡な存在である。喧嘩っばやいが仲間想いで負けず嫌い。ストライカーの座に執着し、最初は転校生の豪炎寺に辛く当たっていた。しかし彼の過去と実力を知り、自らの言動と無配慮を謝罪。フットボールフロンティアが開催される頃には、互いに良きライバルとして、雷門の2トップとして、良好な関係を築いていた。

それが壊れたのはフットボールフロンティア地区大会決勝。影山零治が仕組んだ鉄骨落下事件。染岡は豪炎寺を庇って鉄骨の下敷きになり、死亡。仲間達の心に深い傷を刻む事になる。

- - - - -

あちらの『ゴウエンジ』が一瞬、俯いて下唇を噛み締める。見なければ良かった、とミストレは思った。あんな - - 苦悩と後悔にまみれた、今にも死んでしまいそうな顔。

「…俺は、守れないんだ。何一つ」

自らの誇りを、痛みを、傷を。その全てを賭けて耐えて尚、恩師を失い、妹を失い、友を失った少年は言う。

「守られてばかりで、何一つ守れやしない。だから…守る為なら強くなると決めた。強くなって、何だってすると」

『松野空介』

雷門中二年男子。愛称はマックス。気紛れな天才だと言われ、何でもこなすが飽きっぽいのが玉に瑕と言われていた少年。そんな彼が初めて本気になったのがサッカーであり、初めて心からの仲間になれたのが雷門イレブンであった。特に同じMFである半田真一とは中が良かったとされている。

だがそんな彼は、エイリア学園襲来時の最初の事件で命を落としている。ジェミニストームに破壊された雷門中。彼は崩壊する校舎に取り残された半田を助けるべく単身戻り、結果二人共が助からなかったのだ。

イービル・ダイス。その悲劇を語るのに欠かせないその事件。雷門中校舎が破壊された際、命を落とした人間は生徒と教師と近隣住民、併せて百三十人は下らないと言われている。――。

「今にも耳に残ってるんだ」

『エンドウ』はくしゃりと顔を歪めて、現実よりも遙か遠い場所を見つめた。

「助けてって。誰か助けてって叫ぶ友達の声…。『ごめんね』って言って校舎に戻ってった『マックス』の声…」

ミストレはベンチを見る。そこに控えたメンバーの中には『ハン

ダ』もいた。まだ試合に出ていない彼だが、きつと『カゼマル』達と同じ癖を持っているのだろう。

無感動な『ハンダ』の瞳。彼もアンドロイドなのだ。死んだ人間の写し身。脳の情報と姿形をコピーされた、残酷な紛い物。

- - -
『鬼道有人』

雷門中二年男子。元、帝国学園の生徒会長。両親は航空機事故で死亡。妹と共に施設に預けられるが、六歳の時養子縁組でバラバラの家に引き取られる。

鬼道を引き取ったのは鬼道財閥であったが、実質的に父親代わりを務めていたのは教育係の影山零治である。影山は父に、虐待されて育った大人であった。その影山が暴力なくして鬼道を“教育”出来なかったのは偶然ではないだろう。鬼道は引き取られてからの八年間で、幾度となく虐待死しかけている。

また、影山と義父は鬼道に、妹と連絡を取り合う事を頑なに禁じた。それが彼の唯一の家族との絆に罅を入れる結果となってしまう。影山が支配していた頃の帝国学園は、表向きは輝かしい王者であったが、裏では凄惨を極めていた。サッカー部の子供達は鬼道以外の面々も影山の虐待に晒されていた。時には影山の部下達が罰を与えに来る事もあり、彼らの精神状態は限界に来ていた。特に佐久間と源田の二人は。

地区大会決勝の一件で、影山が帝国学園総帥の任を解かれ。帝国は解放されたかに見えたが、実際は何も終わっていないかった。影山は新たに世宇子中を率いて表舞台に現れ、今まで天塩にかけて育ててきた筈の帝国を叩きのめし、彼らを病院送りにしたのである。

世宇子を倒し、仲間達の仇を討つ為。鬼道は雷門への転校を決意

する。帝国の仲間達は彼に想いを託し、快く送り出した――筈だった。

だが、齒車は最初から噛み合っただけでなかつたのである。

暴力に晒され、身も心もボロボロだった佐久間と源田を支えていたもの。それは鬼道への忠誠心であった。もはや信仰心と言うべきかもしれない。帝国イレブンは皆一様に鬼道を敬愛していたが、彼らはことのほかそれが顕著であった。

鬼道が去った帝国は荒れ、統率がとれなくなり。そこを、影山に付けこまれてしまった。史実にもある真帝国事件である。違うのは雷門と真帝国が戦うより先に、暴走した佐久間と源田が鬼道を殺害してしまった事だ。

帝国の体育倉庫にて。惨殺された鬼道の遺体を最初に発見したのが円堂だった。後に彼は語る。あれこそが現実を超越した悪夢であった――と。

「幸せに生きてきた…君達には分からないだろうね」

『フブキ』が泣き出しそうな眼で言う。

「大切だと。守りたいと思った矢先に…その全部が掌をすり抜けていく。力さえあつたら。そうしたら何かは違ったかもしれないって…僕らは死ぬまで後悔し続けるをだろう。特に、キャプテンは」

その視線の先には『エンドウ』がいる。多分、彼は分かっているのだろう。その願いがどれだけ切なく、虚しく、愚かしい事か。それでも取り戻したいと願うのが人間だ――もう二度と還らないと分

かっけていても。

ああ、同じだ。ミストレはそう思った。自分も彼らと同じだったのだ。バダツプを取り戻したくて、でも取り戻せやしないと諦めて憎悪に溺れた。似て非なるが根本的には同じなのだ。そう、自分は危うくバダツプを“死者”にしてしまうところだった。

- 死んだ人間は絶対還らない。『エンドウ』も他のみんなも…本当は分かかって、諦めてるんだ。

それでも心は引き裂かれそう。諦めきれなくて、願って足掻いて。

そうして望んでしまった。

偽物でも虚構でも構わない。もう一度、いなくなってしまった人に逢いたい。その人と笑い合いたい、触れたい、抱きしめたい。それがどれほど非道徳的な事だとしても。

「『キドウ』は…全てが終わったら帝国に帰るつもりでいたんだ。なのに想いは届かなくて…殺されちゃった。その後を追って『ゲンダ』と『サクマ』も自殺して『カゲヤマ』も……。なあ、そうなら誰を恨めよって話だよな？」

ははは、と『エンドウ』は乾いた声で笑う。笑っているのに…ミストレにはそれが、泣いているようにしか見えなかった。

実際彼は、泣いていたのだろう。涙もなく、声も出せないままに。

「俺は恨んだ。いもしないカミサマとやらを…まるで存在するかのごとく、恨んだ。何でみんなは死ななくちゃいけなかった？何で俺達ばかりこんな目に遭わなくちゃいけない？」

彼の気持ちが分かるだなんて言えない。自分は彼ではないし、そ

の心は彼以外の誰にも見えないものなのだから。

それでもミストレには、分かる気がしたのである。自分も恨んだ。何故バダツプは壊されなければならなかったのか？何故自分達はこんな想いをしなければならなかったのか――と。

運命を憎み、妬み、恨み。最終的にはその想いを円堂にぶつけようとした。それが幸せを諦める事と同義であると気付けずに。

「俺は運命を憎んで…今、お前達を憎んでる。俺達はこんな想いをしてやっと生きてるってのに…当たり前のように仲間と幸せなツラしてサッカーやってるお前らが、お前らのサッカーが…憎い」

修羅のような瞳。ああ、自分もそんな眼をしていたのだろう。

本当は逆恨みだと分かっている。でも憎まずにはいられない。それ以外に心を保つ方法なんて知らないから。

「この世界がどうなるかと知ったこっちゃんないけど。ヒビキは俺達に救いをくれた…願っても願っても手に入らなかったものをくれると約束してくれた！アンドロイドだろうとなんだろうと、『カゼマル』達の心と記憶が宿っているならそれは本物と同じだ…！みんなが帰って来るんだ…！」

違う。ミストレはそう叫びたかった。同じはずがないじゃないか。どんなに姿形がそっくりで、思考が同じで、記憶を引き継いでいたとしても…彼の愛した仲間は世界に二人としない存在の筈ではないか。

叫びたかったのに言えなかったのは。

もし自分が『エンドウ』の立場だったら、きっと同じ事をしてしまっていたと分かっていたから。どんなに罪深いとしても、望んでしまったに違いないから。

もつにどと、あえないひとを。

「だから何が何でも勝つ…お前らなんかに負けるもんか！」

『エンドウ』は。自分の憎むサッカーと、恨めしい幸福な“雷門イレブン”を破壊する為に此処にいる。だがそれだけではなかった。彼にもまた取り戻したい大切なモノがあった…それがどれだけ歪んであつたとしても。

「なら尚更…オレ達も負けられない…！」

彼らに本当の救いを与えてやれるとしたら。過ちを正してやれるとしたら。それは他でもない、一度は同じ轍を踏んだ、自分ではないだろうか。

これはエゴだ。分かっている。彼らを救うことで自分達も救われると信じたい、身勝手極まりないエゴイズムだと。嗤いたければ嗤えばいい。

何より。負けられない理由があるのはミストレだって同じなのだ。

「もう決めちゃったからね。バダップを一発ブン殴るまで、諦めないんだって…！だから、勝つのはオレ達だ…！」

その時、『エンドウ』を睨んでいたミストレは気付かなかった。否、フィールド上の誰ひとりとして気付かなかった。

ベンチの横。車椅子の上のバダップが…その言葉に、ピクリと反応した事に。

【三十五：スマイル・アゲイン】

それは深い、深い闇の深淵。まるで異空間に漂うような感覚だった。

バダップは世界の何もかもを遮断していた訳ではない。周りの仲間達には知る由もない事だが、バダップは自分の身に起こった事も周りの様子も全て把握していた。別に目を開けたまま眠っていたわけではないのである。

ただし。それを受け取る感覚は、現実のそれとは異なっていた。真つ暗な映画館で、たった一人、スクリーンを眺めているような感覚と言えばいいのだろうか。バダップにとって全てはおかしなほど遠い景色だった。

こうなつた理由は分かっている。自分自ら心を閉ざした為だ。軍で教育されたマインドコントロールの一種。ただし、余程緊急でない限り使うのは避けると言われていた方法だった。暗示が強すぎて、自力で解けなくなる恐れがあったからだ。

……だが、情けない事に：他の方法を知らなかったんだ。

鉄面皮と擲掬されるバダップだったが。その実演技する事が下手では無かった。鉄面皮のまま歩いて誤解を受けるのは単に、感情豊かに振る舞う気が無かつただけの事である。

少年兵。子供である自分達は、どんなに記述を磨いても大人に勝てないものがある。腕力と体格だ。無論必ずしもそうではないが、殊に自分やミストレ、エスカバなどは悲しいまでに体格に恵まれなかつたタイプである。

その代わり別の武器もある。小回りのきく小柄ゆえの身軽さと、相手を油断させやすい事。時には無力な民間人の子供を装う事もあるし、今回のようにシヨタコン趣味の男に取り入る事もある。その

為演技力を磨く事は、己を護る盾を磨く事と同義であった。

正直、プライドが許さない場面も多々ある。以前その容姿を武器にテロリストを偵察しに言ったミストレは言っていた - - 吐き気がして死にそうだと。まったく同感だ。

それでも自分達にしか出来ない事ならば、やるしかないのである。バダップの行ったミッションもそう。そしてバダップは自らの身に起こるあらゆる可能性を覚悟した上で任務に望んだ - - それ以外に道は無かったから。

- - 地獄を、見た。

敵の半分以上を殺した後、わざと隙を作って捕まった。すぐにレツド・マリアのボスであるアルフレッドに引き合わされて、気に入られて - - 銀髪が好みだのカラダがいいだの気色悪い事をたくさん言われた気がする - - それからが悪夢の始まりだったのだ。

毎日、毎時間、毎秒。体の至る所にメスを入れられ、妙な薬を打たれた。拘束、監禁、虐待、性的暴行、実験動物。人間の尊厳など欠片もない。一日の半分は服さえ着せない。おかげで自分の身体がいかように変えられていくか、嫌というへど見せつけられた。

麻酔も打たれず、肌食い込むあらゆる凶器と狂気。伸びてくる手、手、手。人を生き物とすら認めていないような吐き気のする視線と下卑た嗤い声。気が狂わなかったのは日頃の訓練の賜物だったが - - 果たしてそれは幸せな事であったかどうか。

耐えて、耐えて、耐えて。男達に服従し、媚び諂うフリまでしてバダップはどうか任務達成に必要な情報を手にしていた。ありとあらゆる知識を総動員してアルフレッドに色を仕掛ければ、男は油断しきって何でも話した。まったく、テロリストのボスが聞いて呆れる。

泣き叫んだ声は半分演技で、半分本気だった。そこまでバダップの身体と心は追い詰められつつあった。覚悟を決めて臨んだ事でも

限界はあるのだ。

それでもどうにか、後は組織の残りを皆殺しにして脱出するだけとなった矢先に - 目を覚ましたバダップは鏡の中の自分を見て絶望した。

傷が腐敗して、千切れてしまった右腕。そして身体の半分以上が女性のそれへと変えられていた。さらには胸の中心に、レッドマリアの紋章が入れ墨されている。薄々予感していた事ではあったが -

- それでも衝撃は計り知れない。

- もう駄目だ、と思った。

もう壊れてしまう。だが、完全に壊れてしまう訳にはいかない -

- 自分の帰りを待っていてくれる仲間がいるのだから。

バダップは選んだ。自らの心をシャットアウトする事を。残ったのは本能だけ。いつものように全裸で寝台に横たえられたバダップは次の瞬間、科学者達を蹴り飛ばしていた。

彼らは油断していただろう。武器を取り上げられた裸の子供に。

自分達のボスに身も心も屈服させられた筈の元・少年に。

まさかここにきて、雷門対策で培ったサッカーの技が役に立とうとは。バダップはデススパアで彼らを生きたまま粉微塵に破壊した。そして衣服と愛銃を取り戻し - 資料を回収して、残ったテロリスト達を織滅したのである。端的に説明してしまえばそんな感じだ。

バダップはボロボロの身体で帰投した。だが身体以上に心に負った傷が大きすぎて - 自分でかけた筈のマインドコントロールを解除する事が、出来なくなってしまったのである。

- 俺は…失格だな。キャプテンとしても…隊長としても。

動けないベッドの上。バダップは遠い遠い場所から、仲間達の有

様を見るしかなかった。誰の悲痛な表情も胸を抉るものだったが、特にミストレの涙にはショックを受けた。

見た目に反して誰より気が強く、負けず嫌いな彼が――年頃の女の子にしか見えない様で泣くだなんて。あんな風に自分の手を握るだなんて。一体どうして想像できただろうか。

――駄目なんだ……ミストレ。俺は、もう。

自分なんかの為に涙を流さないで欲しい。だが、彼らの望む場所にはもう帰れない。悲しいと、やるせないと自分は思っている筈なのに――その感情すら遠くて、身動きできないのだ。心と記憶と身体を、バラバラに引き裂かれてしまったよう。

それに。もう帰ってはいけないのではないかと思う。

任務の最中はそれが生きる希望だった。彼らの元に生きて帰る。

その想いがあつたから自殺せずに済んだのだ。だが。

自分はもうこんなにも壊れ、汚れ、崩れてしまった。あんなにもおぞましい真似をし、おぞましい真似をされた自分。もう二度光の元へ戻る資格など無いのではないか。

――すまない……みんな。

最後に残った、小さな小さな意識の窓。それを閉じてしまえば自分は今もう完全に何も聞こえず、何も見えなくなるだろう。

このまま人形のように朽ちてしまえばいい。仲間達は守れたんだ。オーガの皆はもう自由の身。ならば何も思い残す事は無いではないか――。

「……本当に？」

その時。

バダップ一人しかいない筈の闇の中に、その声が響いた。

「本当に、そう思ってる？」

緩慢な動作で顔を上げる。真つ暗闇の中、そこにぽつんと光があった。それはやがて人の形になり、見覚えのある姿になる――円堂カノンの姿に。

「何が言いたいんだ」

何故彼が自分の意識の世界にいるのか。疑問に思わなかったではないが、それは一瞬で弾け飛んだ。

彼が現実だろうと幻だろうと関係なく、自分は答えるべきだと分かっていたから。

「嘘、吐いちゃ駄目だよ。思い残す事は本当に無いの？」

カノンは悲しそうな眼でバダップを見つめた。

「そもそも…本当に守れたってそう、思ってる？」

守れてなんかない。遠まわしにそう示唆する言葉に――バダップ

は激昂すら出来なかつた。ふざけるな、と叫んで彼に掴みかかれたらどれだけ楽だっただろう。

本当は何一つ護れちゃいない。分かっていたのだ――自分自身が誰よりも。だが人からそれを指摘された事で、さらに胸を抉られたというだけで。

自分が壊れた事で、皆をどれだけ傷つけてしまっただろう。そうだ、本当はまず最初に驚くべきだったのだ。何故なら自分はずっと思っていたのだから――皆心の奥底では、自分を恨んでいるに違いないのだと。

オーガのメンバーを選抜し、巻き込んだのはそもそも自分だ。自分が選ばなければ彼らはおそらく、まだ前線を知らずに済んだだろう。何よりオペレーション・サンダーブレイクに参加する事もなく、面倒な罰を受ける羽目にもならなかつた筈なのだ。

そもそも自分は人に好かれるような人間じゃない。客観的に見てそう思う。人間の魅力とは、数字で表されるものではない。どんなに成績優秀でも、運動神経抜群でも、器量が良くても――愛想のない人間は好かれないものだ。

演技ならば出来る。しかし、それは苦痛を伴うものだった為、任務以外で実践したいとは到底思えない。円滑な人間関係を築く為には必要と知っているが、残念ながら平常時のバダツプは殆ど表情の動かない人間である。自分でもそれを自覚している事だった。

ただでさえいつもトップに立ち、皆に嫉妬やら羨望を向けられる立場だ。それで長年ミストレに恨みに近い感情を向けられているのも知っていた。とてもじゃないが彼らに好かれる要素などない。

だから。

彼らが自分の姿を見て悲しみ、涙を流すのを見た時――心底、驚き、気付くべきだったのだろう。

彼らを愛していたのは自分だけじゃない。

自分も彼らに愛されていたのだと。

「分かってるんだ。…俺は…もっと早く、気付くべきだったと。自分が愛されている事に」

他に方法があつたかは分からない。考えても見つからなかったかもしれない。それでも考えるくらいは出来た筈だ。…皆と、一緒に。

「誰も傷つかない方法を…もっと考えていたなら。最悪の未来は回避出来たかもしれない」

だが実際はどうだ。自分はエゴイステイックな自己犠牲で皆を傷つけたばかりか、それ以前に仲間に相談する事さえしなかった。任務の内容が極秘だったから。…なんてのは建前。極秘であろうとなかろうときつと自分は秘密を秘密のまま隠し通したに違いない。

一人で背負えば済むと思っていた。

とつくに。…自分の背負っていたモノが仲間達に支えられて成り立っている事に気付けなかった。

その結果どうなった？

壊されたのはバダップだけじゃない、ミストレもエスカバも、オーガの仲間達全員の心がスタスタになつてしまった。何も知らせなかったのはバダップだというのに、彼らは自らを何より責めているに違いないのだ。…どうしてこうなる前に気付けなかったのだ、と。

「分かってる。…だがもう、何もかも遅すぎる。今更俺は戻れない。戻る方法など…知らない」

この闇の中に、出口は無い。

鍵はもしかしたら自分が持っていたのかもしれないが、見つからない。

今更後悔して遅いなら、貫き通すしかないではないか。自分は正しかった。間違っていなかった。彼らの心は守れずとも身体は守れ

た筈だ――と。

「遅くなんか、ないよ」

カノンは一歩、また一歩とバダップに近付く。

「眼を逸らすなよ。…最悪の未来かどうかなんて、まだ分からないだろ。だって…」

だってまだ、みんな生きてる。

カノンの言葉が、バダップの胸に沁みていく。

「ミストレ達は諦めてないんだ。曾祖父ちゃんに教わった事を、思い出したから」

手を、握られる。

「まだ、終わってねーぞ。な、そうだろ？」

【三十六：モザイク・ロール】

試合は平行線を辿っていた。

『ソメオカ』と『カゼマル』にマークを集中させた事で、あちらも必殺タクティクスを発動させにくくなったのだろう。だが、こちらもカウンターを狙う隙が見つけれない。終始イービル・ダイスが有利なまま、試合は後半十五分を過ぎようとしていた。

…このままじゃ…負ける。

エスカバは流れる汗を、タオルで乱暴に拭った。『カゼマル』達がアンドロイドと発覚した後、イービル・ダイス側のプレーはますます乱暴になっている。また、『ソメオカ』と『カゼマル』にマークを集中させた事で他が手薄になり、『トラマル』にまたあの殺人シュートを打たれてしまった。

なんとか防いだものの、今度は栗松が足を負傷。交代で松野が入る事となった。

…奴らも疲れてはいるだろうが…ほぼ無傷。それに俺らはともかく、雷門イレブンとイービル・ダイスじゃ自力の差がデカイ。

持久戦になればなるだけこちらに不利なのは目に見えていた。ロスタイムに入る前になんとしてもあと一点を入れて勝負を決めなければ。オフエンスが疲弊しきっている今、まかり間違ってPKにでもなるものなら笑えもしない。

「…ん？」

時計が止まった際に手早く水分補給したエスカバは、カノンがべ

ンチ前にいるのに気付いた。正確には、バダツプの前に。一体何をしているのだろう。

「おいカノン。早く位置につきやがれ。何してんだ？」

「あ…うん」

カノンはちらりと『バダツプ』を振り返る。

「…バダツプがさ、ずっとこの試合を見ててくれてる気がしたんだ。だから…話しかけてた」

「バダツプが…？」

エスカバは彼の方を見る。車椅子の上、力なく座るバダツプに変化はみられない。瞳は虚ろなままだ。

「今はまだ出てこられないけど…俺は少しずつ、届いてるって気がしてるんだ」

無駄な事なんか何も無いんだ、とカノンは力強く言う。そんな顔は…彼の敬愛する曾祖父とそっくりだった。

「だから…絶対勝とう。絶対何かある筈だ…攻略の糸口が！」

何故だろう、とエスカバは思う。

何故なのだろう。

この世界に“絶対”な事も“確実”な事もない…本当の意味では存在しないと分かっているのに。円堂やカノンが口にする、それが現実に有り得るような気がしてならない。

絶対、大丈夫。絶対、なんとかなる。そんな夢見がちな事を口にしてもいいかもしれない…そんな気になる。不思議な力だ。

「…バーカ」

ああ、そうなのか。

こいつは紛れもなく、円堂守の曾孫。曾祖父の“魔法”を――
“浄罪の魔術師”としての力を――立派に引き継いでいるのだ。
だから、強い。そして皆が惹かれ、集う。

「生意気言ってんじゃねえっての。当たり前だろが」

勝とう。否、絶対に勝つのだ。

全ては願いを叶える為に――失いかけたモノを、取り戻す為に。

試合再開の笛。その音色はまだ遠かれど、バダップの耳にも確かに届いていた。

そしてカノンに握られた手の温もりが教えている。今こそが現実。自分は夢でも幻でもなく、現実の世界を見ているのだと。

――平行世界の…雷門。悲劇の可能性：イービル・ダイス。

なんて残酷な真似を、と思う。試合の中、痛めつけられているのは身体だけではない筈だ。身体より何より、心が痛くて仕方ないに違いない。

円堂達が今日まで幸せに生きて来れたのは、必然でもあり偶然でもある。幸運に恵まれたのは間違いないだろう。それはけして罪ではなく、責められるいわれのない事だ。

それでも罪悪感を抱いてしまうに違いない。彼らは優しすぎる。仕様の無い事と分かっているにも、罪を感じてしまう事もあるだろう。

無論、それもヒビキ達の計算の内に違いない。どんな相手である
うと……この試合で雷門が絶望し、心を折り、敗北すれば問題はな
い。その姿が、現代のエレメンタルサッカーを愛する者達、全てへ
の絶望になるのだから。

……そこまで……そこまで貴方はサッカーが憎いか。ヒビキ提督。

自分は何も知らないのだと思い知らされる。何故彼がここまでサ
ッカーを忌み嫌うのが分からない。今までの自分達は、彼に言わ
れるままサッカーは人類を弱体化させる貧弱なスポーツだと信じて
きたが……その思想こそがフィルターとなり、眼を曇らせていたと
気付く。

何か、大きな理由があつた筈だ。何せ彼の祖先である響木は、サ
ッカーを愛してやまない男だったのだから。

……だがそろそろ貴方も焦っているんじゃないか……？

景色の中のヒビキに、心の中で問いかける。長年軍人として鍛え
てきただけあつて、その表情に揺らぎはない。しかし、内心けして
穏やかじゃない筈だ……何故なら。

後半も残り僅か。この時間になつて未だ二対二の引き分け。どち
らも決定力を欠いて攻めあぐねている状態……地力の総合力では、
イービル・ダイスが圧倒的優位である筈なのに。

そして何より。未だ雷門のメンバーもオーガのメンバーも誰一人
として……諦めていない。心を折られていない。絶望を前にして立
ち上がり続けている……どれだけ身も心もズタズタに引き裂かれよ
うとも。

……どうして。どうしてなんだ……ミストレ、エスカバ……みんな。

教えてくれ。気付けばそう口に出していた。

「どうして…どうしてお前達は諦めずにいられる？何がお前達を突き動かす？」

ああ、分かっている。

本当は分かっている。

救いたいからだ。護りたいモノがあるからだ。

一体何を？ - - 誰を？

「答えなど…最初から決まってる、か…」

景色の中で、試合が動く。栗松が彗星シュートを放ち、ミストレ、エスカバ、豪炎寺、染岡が一気に上がる。雷門が得意な波状攻撃だ。だがそれは、平行世界の雷門であるイービル・ダイスにも言えること。雷門が得意な戦法とその穴を彼らが理解していない筈がない。

『エンドウ』は彗星シュートを楽々片手でキャッチし、そのまま -
- 彼もまたシュート体制に入った。

戻れ、カウンターだ、と豪炎寺が叫ぶ。どうやらあちらの『エンドウ』も彗星シュートを持っていたらしい。ゴール前からでは距離的にも大した威力は望めないが - - それでも彼は栗松よりパワーがある。

何よりシュートに気を取られすぎて、敵FWのマークが確実に甘くなる。雷門もそれは理解していた筈だが - - そこはいかんせん、地力と経験の差がモノを言った。

「ザ・ウォール！」

ギリギリのところ、壁山がなんとか攻撃を防いだ。しかしボールはラインを越える。嫌な位置からのスローインだ。

・そもそも奴らはシュートブロックの出来る人員が多い…。ロングシュートで攻めるのは逆効果だな。

さらにキーパーの『エンドウ』が彗星シュートを会得していると
なれば。さっきのようにキャッチされてそのままカウンター、なん
て展開もザラにあるだろう。益々ピンチを招くことは想像に難くな
い。

・だが普通にドリブルで切り込むには、奴らの守備が堅すぎる…。

そしてボールを奪ってすぐ、ダンシングボールエスケープで一気
に攻める。もしくは『トラマル』のグラディウスアーチで貫く。そ
れが奴らの必勝パターンだ。

・その全てを一度に突破して蹴散らす方法…しかも、奴らが体制
を立て直す隙を与えてはならない。そんな手段が…。

あるわけない。そう呟きかけて…バダップはハツとした。気が
ついたのだ…たった一つ。たった一つだけ…可能な手段がある
ことに。

それも現状、自分だけが…その方法を持っている事に。

・俺がいれば…勝てるかもしれない…のか？

だけど、と。二の足を踏む心。

勝てる可能性があるとしても…自分があの場所に立つ事は赦さ
れるのか。

汚い真似をした。身体も心も魂さえ血で汚れ、穢された自分。壊
したのは己だけではない。皆の心をもズタズタにした。絆もだ。身

勝手なエゴでどれだけ仲間達を追い詰めた事だろう。

それでも、いいのか。それでも彼らは赦してくれると言うのか。

・・・バダップ。

フィールド上に立つ、カノンと目があった。

この距離で彼の声が聞こえる筈はないのに・・・何故か今、聴こえてくるような気がしてならなかった。

・・・君は、自分が愛されてると気付けなくて。それは間違っていたかもしれないけれど。

丸い、大きな瞳が語りかけてくる。

それが真実だって告げるように。

・・・でも。凄く凄く頑張ったよな。それはみーんな、分かっているからさ。

思えば誰かにこんな風に誉められた事など無かった気がする。バダップが築く功績は全て、“優れていて当然”という評価ばかり下されてきた。実の親ですらそう。バダップもそれを疑わなかった。それ以外の愛情など知らなかったから。

まるで子供のように誉められる。それは気恥ずかしくて、照れくさくて、でも。

・・・赦して欲しいなら... 赦してやらなくちゃ。

とても、温かいもので。

「もう充分苦しんだんだ。お前を赦せないのはお前自身。だからそ

ろそろ…赦してやりなよ、バダツプ」

はっきりと声になってその思いが響いた瞬間。

ピシリ、と闇に染まった世界に亀裂が入る音がした。その小さな亀裂はやがて大きな罅となり、暗く沈んだ空間を満たしていく。

「みんな、待つてる。バダツプが帰ってくるって信じてるから、諦めずに頑張ってるんだ。どんなに苦しくても、痛くても」

パン、と弾け飛ぶ、景色。

闇のガラスが霧散すると、そこには光があった。光の中、大きな窓の向こう、必死で走る仲間達の姿があった。

「負ける…もんかつ」

意地でボールを奪い返し、駆けるミストレが見えた。

「絶対、諦めねえぞ…!!」

そのミストレからパスを受け、傷だらけでゴールを目指すエスカバがいた。

「まだまだ…終わっちゃいないんだ!!」

ああ、そうか。

愛したっていいじゃないか。誰かが憎むサッカーだとしても、自分達にとって大切ならばそれでいいじゃないか。

憎まれるだけの己ならば殺したっていいじゃないか、そう思っていた。だけどそれは自分自身の命じゃない。昨日までの弱かった自分。壊れて打ち捨てられた過去の自分を。

赦される。否、とつくに赦されていた。赦してなかったのはたった一人、バダップ自身だけだったのだ。

「俺は… 幸せ者だな」

どうして出逢えたのだろう。こんな素晴らしい仲間達に、こんなに強い魂を持ったイナズマイレブンに。

そう、これも運命じゃないか。

必然という名で与えられた奇跡じゃないか。

ならば自分は - - 自分は。

「受けた恩は、必ず返す。… だから」

バダップは窓に手をかけ、一気に開け放った。その瞬間、意識だけの世界は現実に繋がった。車椅子の堅い感触と、アンバランスな隻腕。残酷で美しい、これが現実。

「もう一度… サッカーをしよう。みんな」

バダップは立ち上がった。

ふらつきながらも、自分の脚で。

【三十七：タイガー、ストーム】

後一点。後一点あれば勝てる。勝てるのに。

気持ちばかりが焦る。身体がついていかなくなっている事を、エスカバは認めざるをえなかった。

「クソがつ…！」

悪態を吐く息も荒い。残り時間は僅かとはいえ、試合の最後まで立っていられるかどうかが怪しくなってきた。疲労に加えて全身の切り傷と肋骨骨折。だが自分より重傷であるうミストレが頑張っている以上、弱音など吐ける筈もない。

何より。必ず勝つと決めた、この意志を覆す気など毛頭無い。バダップは必ず戻ってきてくれる。ならば自分達はそれまで彼の帰ってくる場所を全力で護る義務がある。自分達は彼に選ばれた、彼が選んでくれた誇り高きチーム・オーガなのだから。

「『ファイディオ』！」

『カゼマル』のスローイン。ボールは『ファイディオ』へ。その瞬間エスカバは残った力を振り絞り、彼にタツクルを決めていた。

「ちつ…悪足掻きなんてみつともない！」

彼は忌々しげに舌打ちする。ホイッスルが鳴らなかつたせいもあるだろう。イエローカードくらいは覚悟していたので心底幸運に思った。

今の自分に、最後までドリブルで持ち込む余力はない。エスカバは素早く周囲とアイコンタクトを交わした。エスカバの意図を悟り、

カノンがサイドから前線を駆け上がっていく。

「マックス！」

踵でボールを下げる。そこにマックスがいるのを分かっただけだ。彼は頷き、必殺ロングシュートを放った。

「彗星シュート！」

その途端、高々と笑い声を上げる『トラマル』。

「なあにやってんだか！それは効かないって言ったでしょ？そんなにカウンターで殺されたいんですか？」

だが彼の表情はすぐ一変した。彗星シュートの軌道はゴールから大きく逸れていく。これはシュートではない。長距離砲の威力とスピードを利用したキラーパスであると。

その最終地点には、カノンが。オフサイドを狙う『トビタカ』をかわしてシュート体制に入る。

「ゴツドキャノン！」

両足を揃え、力を溜めて一気に蹴る。ボールは砲台から放たれた砲弾のごとく、イービル・ダイスのゴールへ向かう。

これで決まるかと思われた。しかし。

「イジゲン・ザ・ハンド」

『エンドウ』は大地に拳を叩きつけ、衝撃波のドームを作った。ボールはそのドームに弾かれ、ゴールを大きく逸れてしまう。

「そ、そんな…！ゴツドキャノンが止められるなんて…！！」

啞然としたのは、シュートを放ったカノンだけではなかった。絶好のチャンスに絶好のタイミング。カノンのシュートの威力が折り紙つきである事は誰しも周知の事実。まさかそれを、こつも完璧に止められようとは。

まずい、とエスカバは思った。今のシュートが阻止されてしまった事で皆が多かれ少なかれ動揺している。その隙をイービル・ダイスが見逃すとは思えない。

何よりこのパターンは今までと同じ…！

「さあ、トドメだ」

ニイ、と凶悪な笑みを浮かべる『エンドウ』。彼が放ったのはシュートではなく…パス。パスを受け取ったのは、『トラマル』。

「くそっ…逃げ」

逃げる。反射的にそう言いかけて、エスカバは齒軋りした。あのシュートが放たれたらまた怪我人が出る。今度は怪我ではすまないかもしれない。ならば時に退くのも勇気…軍人であるからこそ痛いほど分かる理屈。

しかし。だがしかし。

ここで一点とられたら、勝利の可能性は絶望的なものとなる。そうでなくとも逃げると言われて逃げられるような人間は此処に一人もいなかった…エスカバ自身を含めて。

…どいつもこいつも…マジでキチガイの大馬鹿野郎だぜ！

逃げる、と仲間達には心の中で叫んでいるのに。肝心の自分自身

の脚は真逆の方向へ走るのだ。

いつの間にかこんなに馬鹿・・否、サッカー馬鹿になってしまったのやら。全部全部円堂のせいだな、とつい苦笑してしまう。

「死んで下さい！グラディウスアーチ・改！！」

この短時間で『トラマル』もまた技を進化させていた・・その憎しみと、恨みを糧にして。

相手を殺傷する為に磨かれた何本もの刃が、ボールと共にゴールを狙う。ゴッドキヤノンを防がれた動揺から皆より早く立ち直った豪炎寺が、デイフェンスに動いていた。

「悪いが…易々と死んでやる訳にはいかなくてな」

無茶をするな、と誰かが叫んだ。しかし叫んだ誰かも分かっていただろう。そんな声で止まる筈がない事くらいは。

「ファイアートルネード！！」

シュートに向けて。焔を纏った脚を叩きつけた。焔とボールと刃。オーラとオーラがぶつかり合い、激しくせめぎ合う。

その肩に、脚に、刃が食い込んで血を吹かせた。それでも豪炎寺は歯を食いしばって痛みを耐え、グラディウスアーチを全力で止めにかかる。

「…どうして、ですか…っ」

叫んだのは、今し方殺人シュートを放った『トラマル』だった。

「サッカーなんか…サッカーなんかで守れるモノなんかはない！サッ

カーは何かを壊す事しかできやしない……！そうやって頑張って頑張って頑張ったって……何が変わる訳でもないのに……裏切られるだけなのに……！」

それは彼の、心の叫びだったのだろう。貧しさの中で擦り切れる日々。信じていた人に裏切られ、それでも頑張り続けたのに報われず。人に拒絶され、孤立し、最後は望まずして手を血に染めて。

どうせ守れやしないなら、諦めてしまえばいい。そうだ、彼も諦めるしかなかった者の一人だろう……幸せを、楽しいサッカーをする事を。

……俺も……ぶっちゃけ、諦めてたもんな。

ミストレが暴走し、円堂を殺そうと過去に飛んで。それを止めなければと思いつつ、エスカバにもまた未来への展望があつたわけではなかった。ただあの時は、これ以上傷つく親友を見たくないという、そんな自分のエゴだけで動いていたようなものだ。

何かが変わったとすればそう、円堂の言葉を聴いてから。諦めたら全て終わるのだと、つまりそれは今はまだ終わっていないものもあるのだと……そう心から思えたのは全て円堂のおかげと云っている。

彼は紛れもなく魔術師だった。人の罪を洗い流し、光へと導く浄罪の魔術師。その言葉こそ、魂こそ魔法。その力があつたからこそ今自分は諦めずに立っていられる。

もしかしたら『トラマル』の、彼らの最大の不幸は。円堂のような存在に出逢えなかつた事かもしれない。人は決して一人きりでは善き方へとは変われないのだ。出逢いがなければ、支えてくれる腕がなければ。悲運な事には、彼らを変えられた筈の彼らの世界の『エンドウ』が……既に闇に堕ちてしまっていた事。そんな運命が満たす世界であつた事だ。

諦めれば楽だ、それは逃げだと言う人がいる。

だがエスカバは思う。一生に一度も逃げないで生きていける人などいない。仮に逃げだとしても、本当はそれもまた勇気がいる事で、楽な事ではなかったりするのだと。

『トラマル』も、本当は諦めたくなかった筈だ。それでも歯を食いしばり、痛みを耐え、傷を抉るような気持ちで諦めたのは - - 彼が、彼らが強かったから。

どんなにボロボロになっても、生きる 覚悟を決めたからだ。

「裏切られる事もあるだろうさ。…時には」

じりじりとシュートの威力に押されながら、豪炎寺が言う。血がポタポタと滴り、フィールドに落ちる。

「だが：俺は知ってる。俺が頑張れば絶対に裏切らないものが一つある事を」

「そんなもの、あるわけ…」

「あるさ」

豪炎寺が微笑む。傷を抉る痛みに歪みそうになりながらも、儂く強い笑みで。

「俺のサッカーは、絶対俺を裏切らない。信じた分だけ、必ず意味を残してくれる。そして…：そんな自分のサッカーを見ていてくれる人が、きつといる」

焰が、破裂するかのように弾け - - 豪炎寺の身体は吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。ボールは勢いを弱めてゴールへと向かう。だが『トラマル』はもう、自らが放ったシュートの行方を見ていなかった。

ただ豪炎寺だけを、見ていた。

「…『トラマル』」

血を流し、荒い息を吐きながらも、豪炎寺は身を起こした。

「どんな暴力的なシユートでも…受けてみれば分かる。お前が培ってきた努力と、実力は本物だ」

ふらふらと、誘われるように豪炎寺の前まで歩く『トラマル』に豪炎寺は言った。- おそらくは彼が最も欲しがっていた言葉を。それでいて手に出来ずにいたモノを。

「お前は、頑張った。今も頑張っている」

『トラマル』が膝をつく。その頬に、豪炎寺は微笑みながら手を伸ばした。

「胸を張れ。お前が頑張ってきた事は何一つ…無駄になんか、なっちゃいない。どんなに辛くても本当はサッカーが好きだから、本当は楽しいサッカーがしたいから…今日まで頑張ってこれたんじゃないか」

『トラマル』の頬も、豪炎寺の手も、伝う雫で濡れた。『トラマル』はその大きな目いっぱい涙を溜めて…やがてそれは決壊した。

「う…う…」

彼はきつと、認めて欲しかったのだろう。誰かに誉めて、労って欲しかったのだろう。

自分のしてきた事は、無駄なんかじゃないと。

「うわあああつー!!」

顔を覆い、少年は幼子のように泣きじゃくった。エスカバはそれを見て感嘆する。

円堂守は、凄い。気付けばその力を、自分の仲間にも波及させてしまうのだから。

「来い…!!」

そして今その円堂守は。向かってくるシュートを受け止めるべく、必殺技の構えをとっていた。豪炎寺のシュートブロックが齎した効果は、単に威力を弱めただけではない。円堂最大のキーパー技であるオメガ・ザ・ハンド――その弱点をカバーする結果にもなったのだ。

オメガ・ザ・ハンドの守備力は驚異的に高い。円堂の次点の持ち技であるマジン・ザ・ハンドとは比較にならないだろう。

問題はその溜め。発動まで時間がかかりすぎる。それはあれが彼が突貫工事で身につけた未完成の技であるからだ。にも関わらずあれだけのガード性能を誇るのだから、その凄さは推してはかるべしだが――。

とにかく。豪炎寺がシュートブロックしてくれた事で、シュートがゴールに達するまでの時間を大きく稼ぐ事が出来たのである。少なくとも円堂が技を発動させきるに充分なくらいには。

「オメガ・ザ・ハンド――!!」

光輝く極大の神の手。究極進化を遂げたゴッドハンドが、シュートをがっちりと掴んでいた。光を浴びた刃が、まるで焼けるかのようになく。円堂自身には、傷一つつける事なく。

「豪炎寺！」

まるで円堂がゴールを守るのを見届けたかのように、豪炎寺が崩れ落ちた。泣きじゃくる『トラマル』の前で。
そして。

「あっ……」

ベンチが、ざわついた。エスカバは振り向く。そして――驚愕に目を見開いた。

夢じゃないのか。いや――もしこれが夢だったらきつと立ち直れなくなってしまう。

バダップが車椅子から立ち上がった。

その眼に――確かな光を宿して。

【三十八：ジ・オーガ】

夢だろう、とミストレは思った。
だから無意識にそれを口にしていた。

「オレ…夢見てるのかな」

すると隣でエスカバが…彼もまた自分と同じように呆然とした様子で…言った。

「真つ昼間からオネムかよ…戦場の真つ只中で二人揃って？死亡確定フラグじゃねえか」

「ああ、うん。君と心中なんてシユミないし真つ平ごめんなんだけど…」

いつもの軽口を叩こうとして、お互いに失敗している。中身はともかく口調がおかしい。三流の舞台役者のような有り様になっている。

「とにかく…君も見てるなら…多分」

ああ、夢じゃないのか。

きつと夢だろう。自分達がそれを望みすぎたから、ガラにもない無茶ばかりしたから幻を見ているのだ。そうに違いない。

だけど。ああ、でも。だけど。

「これは…白昼夢じゃない、のかな」

もし夢なら…死んでしまうかもしれない。ああ神様。神様なんて信じてやしないけど今だけは言わせてくれまいか。

幻なら。優しいだけの夢ならどうか取り消して。そんなモノ望ん

じゃない、此処にいる誰一人として。自分達の願いはそんな安っぽい希望で満たされるほど軽くなんかないのだ。

「サンダユウ。ジニスキー。ダイツコ」

よろけながらも立ち上がったバダツプが、言葉を発する。

「イツカス。ゲボー。ブボー」

久しぶりに聞いたその声は少し掠れていたが、長くベッドの上にいた人間のそれとは思えないほどよく通った。

「ザゴメル。ドラッへ」

そして仲間達の名前を呼ぶ。一人一人、まるで確かめるように。

「エスカバ」

呼ばれたエスカバの細い肩が、跳ねた。

「ミストレ」

自分って案外単純だったんだなあ、とミストレは思う。ずっと大嫌いだと思っていた相手。しかし本当はミストレが世界で唯一心から尊敬できた相手。自分がたった一人と認めた隊長。

その彼と眼が合って、名前を呼ばれて。生きているのだと実感した瞬間。

「遅くなって、すまなかった」

こんなにも。歓喜で胸を満たされるなんて。

「馬鹿」

遅くなつてすまなかつた、だつて？

まったくもつてその通りだ。

「そんな言葉で…足りると思つてんの？」

ミストレ、とエスカバに名前を呼ばれた。その意味は簡単に分かつたが、今は彼の方向を見るわけにはいかなかった。

「オレ達が…どんだけ振り回されたか。迷惑したか。君の身勝手でも思つてたわけ？それで守つたつもりだったら勘違いも甚だしいよね…！」

早口でまくしたてる。

ポロポロと落ちる言葉。零れる涙と共に。

「自己満足だけの、大馬鹿野郎。それでも、オレ達の隊長なわけ？」

「…すまない、ミストレ」

「だからさあ！」

よろよろとバダツプの元まで歩き。手を振り上げた。思いつきり殴り飛ばしてやったら、どれだけスッキリできるだろう。

「そんな謝罪より先に！言う事あるんじゃないの！？」

だが…出来なかつた。拳は力無く下ろされる。怒りよりも遙かに別の感情が勝っていた。それがミストレに別の欲求を齎していた。

「久しぶりに…帰って来たんでしょ。仕方ないから許してあげる。家に帰ってきたら最初に何を言うのか、そんなの小学生でも分かるよね？」

バダツプは目を見開き…そして一つ息を吐いて、眼を閉じた。そしてとても穏やかな表情で…。

「…ただいま」

そう…言った。

「……お帰り！」

恥ずかしいとか情けないとか、我ながら驚くほどその辺りの感情が飛んでいた。それくらい嬉しかったから…ミストレは泣きながらバダツプに抱きついていた。

「お帰りっ…お帰り、お帰り！ごめん…本当にごめん、ごめん、バダツプ…」

「ミストレ…」

「本当は、謝らなくちゃいけないのはオレの方なんだ…っ！ごめん…ごめん…！！！」

そして…ありがとう。

戻ってきてくれて…生きていてくれて。

「…赦されない事を、した」

抱きしめられたまま、ミストレを振りほどく事もなく…バダツプが言う。

「醜い真似をした。された。…もう此処に戻る資格などないと…そ

う思っていたんだ」

何より、と彼が続ける。

「ずっと悪い夢を見ていた。伸びてくる悪意のこもった、手。逃げられなかった。そこから抜け出せなかったんだ……怖くて」

怖かった、と。それはミストレが初めて聞いたバダップの弱音だった。

だがそれを情けないとは思わない。きっと他の皆も思わないだろう。寧ろ自分は嬉しい。彼にとって自分達は、そんな弱音をも吐露出来る相手になれたのならば。

「だけど声が、聞こえたんだ。お前達の、声が」

『世界を変えるのは争いじゃない。人の想う心。戦う勇気が世界を動かすんだ』

『絶対、諦めねえぞ……!!』

『みんな、待ってる。バダップが帰ってくるって信じてるから、諦めずに頑張ってるんだ。どんなに苦しくても、痛くても』

『俺のサッカーは、絶対俺を裏切らない。信じた分だけ、必ず意味を残してくれる』

『まだまだ…終わっちゃいないんだ!!』

『だから…絶対勝とう。絶対何かある筈だ…攻略の糸口が!』

『もう決めちゃったからね。バダップを一発ブン殴るまで、諦めないんだって…!だから、勝つのはオレ達だ!!』

『サッカー、やろうぜ!そうしたらきつとバダップも思い出してくれる。あの日の試合で見つけた、大切な事をさ!!』

「俺にはまだ待っていてくれる人がいる。何度でも手を差し出してくれる仲間がいる」

ああ、届いていた。

届いていたんだ。

「だから…諦めはいけないと、思ったんだ」

どうせ届きやしない。彼はもう帰ってきやしない。そう諦めていた自分を思い出す。

そして今ミストレは思う。諦めないで良かった。感情のまま円堂を殺さずに済んで良かった。ああ本当に、無意味なんかじゃなかったのだ。

頑張った分は。傷ついた分は - - 無駄なんかじゃあ、無かった。

「ありがとう…ミストレ」

バダップの身体が離れていく。ミストレは大慌てで顔を擦った。きつと今、涙でぐしゃぐしゃのヒドい有り様になっている。落ち着いたら、プライドを思い出した。こんなみつともない顔、バダップにも皆にも見せたくない。

「選手交代だ」

まだ目眩がするのだろう。筋力や体力の低下も激しい筈だ。それでもバダップはしっかりした足取りで、今まさに担架で運ばれようとしていた豪炎寺の前に立った。

「礼を言う…この舞台を用意してくれた事」

「それは、円堂に言うべきだな。最初に提案したのはアイツだ」

思ったほど深い傷ではないようだが、それでも全身が痛むのだろう。苦痛に時折息を詰めながらも、豪炎寺は笑う。

「サッカーで、お前を取り戻すと。円堂は宣言して、実現してみせたんだ。俺達はそれに便乗しただけさ」

「…そうか」

そうだな、とミストレも内心同意する。円堂守。彼は本当に凄い魔法使いだ。その言葉に宿した力で、本物の奇跡を起こしてみせたのだから。

「バダップ！」

その円堂が駆け寄ってきて、笑う。満面の笑み。嬉しくて堪らない、そんな様子を隠しもせずに。

「お前は絶対戻ってくるって信じてたぜ！やるよな、サッカー！」

キラキラしている。そんな彼だから、自分もまた信じてみよう

いう気になったのだろう。

「…サー、響木」

「サーはよしてくれ。俺はお前達の上官って訳じゃないんだ。まあ癖みたいなもんだろうが」

バダツプの問いかけの意図を悟り、苦笑する響木。

「無理はするな、病み上がりだろう？それが約束出来るなら…暴れて来い！」

「イエス、サー」

「だからそれはやめてくれて言ってんじゃん」

相変わらずお堅い様子のバダツプに、土門がついツッコミを入れ、皆が笑いに包まれた。

試合は何も好転しじゃない。ただバダツプが帰ってきた、円堂が言葉にした通りの未来を実現した…それだけだ。

それだけなのに…何故だろう。何とかなる。きっと大丈夫。根拠もないのにそう思えるのは。

…そうか。

ミストレは理解する。嬉しいとか、楽しいとか。そんな気持ちが溢れれば溢れるほど実感させられる。

…これが…幸せ、なんだ。

復讐にかられていた時は気付かなかった。自分が幸せじゃない事すらも。

「豪炎寺修也に代わって…バダツプ…スリード！」

響木が高らかに交代を宣言する。

さあここからが始まりだ。

嬉しい、なんて。彼を死地に送った自分が思うのは間違っているのだろう。

それでもバウゼンは思うのである。バダップが目覚めて・・・本当に良かった、と。

・・・これは…本当は不幸な事かもしれない。

フィールドへ走っていく、隻腕の少年兵を見つめる。その背中はずっと以上に痩せて、華奢ですらあった。バダップがどれだけ苦しんだかは本人にしか分かるまい。それを乗り越えて戻った事が、どれほどの勇気であるのかも。

その強さがなければ。彼がもっと弱い人間だったなら。もしかしたらその方が幸せだったのかもしれない。彼が立ち上がったこととは即ち、もう一度彼を“処分”しなければならぬ可能性が出てきたことを示すのだから。

・・・卑怯だと、嗤えばいい。

自分は卑怯で、身勝手だ。バウゼン自身がそれを一番よく分かっていた。

もう二度と、あんな惨い真似などしたくはない。努めて厳しく接してきたが、それはバダップ達が優秀だったからこそ。彼らを愛しい部下だと思っていたからこそ。

何が何でも生きて帰ることが出来るように。時に心を鬼にしてバ

ウゼンは彼らをそう指導した。それだけ彼らを愛していたから。

バダップが憎いテロリスト達に壊されて。それでも任務を達成させて帰ってきた時は――本気で嬉しくて。同じくらい悲しくて。生きていてくれたと喜ぶ反面、その心を殺してしまった己を延々と責め続けてきた。

もう、戻ってこない。もう彼に謝る事は出来ない。諦めて絶望していたのは、バウゼンも同じ。

――だが：円堂達は。バダップの心を生き返らせてみせた：他ならぬサツカーによって。

サツカーを、円堂守を恨み否定する気持ちは消えない。そもそもオペレーション・サンダーブレイクが失敗しなければこんな事にはならなかったのだ。

それでも。バダップの心を救ってくれた――その一点だけは、感謝してもいい。自分の力では決して出来なかった事だ。もう一度立つて歩く、バダップの姿を見る事は。

「部下が帰って来た事が嬉しいか、バウゼン大佐」

「：分かりますか」

「長い付き合いだからな」

ヒビキの声は、相変わらず淡々として感情が読み取れない。だがバウゼンは隠す事をやめていた。本来許されない事だとしても――この気持ちだけは、偽りたくなかったから。

「大丈夫ですよ、ヒビキ提督。一番大事な事は：間違えませんから」

ヒビキは答えなかった。ただ黙って、バウゼンを見ただけだった。

【三十九：ローリン・ボーイズ】

『フィディオ』は疑問でならなかった。

…何で彼らは…こんなにも一生懸命なんだ…。

自分の前に立つ少年達 - 雷門とオーガの混成チームを見る。彼らが何の目的でこの試合に臨んでいるかは聞いていた。一つは人形のようになってしまったバダップを目覚めさせる為。もう一つはこの試合の中で、彼らの信念を証明する為だそうだ。

彼らの信念 - サッカーは破壊の道具ではなく、あくまで楽しむ為のもの、という。

…最初は父さんも言ってたな。サッカーが楽しくて仕方ないって。

まだ父が現役で、プロとして最盛期を築いていた頃。幼い自分は無知で、それゆえ幸せだった。休日に父とサッカーをやる時間が楽しくて、それを見守る母も幸せそうに笑っていた。

父はサッカーを心から愛していたのだろう。同時にサッカーは皆に元気を与えるものだと思っていたのだろう。自分も確かにそうだった。そんな時間も、あった。それは否定しない。

だけど。その結果はあまりにも報われないもので。サッカーとサッカーを愛する者達を信じた父は裏切られ - 全てを奪われた。父に怪我を負わせたアンチの連中は、ほんの些細な嫌がらせのつもりだったのかもしれない。だがそんな小さな悪意のせいで、自分達は救いようのない地獄を見せられたのだ。

サッカー界を追放された父は荒れに荒れた。薬に溺れ、母を精神的に追い込み、その母の目の前で何度も『フィディオ』を殴り暴行

した。痛くて痛くて、怖くて怖くて、毎日涙を流していた。父が死んでも、その過去から解放される事はなく。

昼はサッカーを汚したと父を恨む者達に罵られ。

夜は父に虐待される夢に魘され続けて。

きつと自分はこのままでは死んでしまう。過去と父の幻影に食い殺されてしまう。無気力に生きる自分に生きる糧を与えたのは……似たような傷を持つ者達だった。

『エンドウ』は言った。憎めばいいと。お前にはその資格がある。と。サッカーとサッカーを愛する者達を憎み、絶望させてやればいい。そしてそれを愉しめば生きていける……と。

……何処かが歪んでるって分かってた。でも……サッカーを憎む以外に、生きてく方法なんかなかったんだ。

信じれば裏切られる……ならば信じなければいい。

『エンドウ』の事も信じたわけじゃない。ただ、感謝はしているのだ。生きる事も死ぬ事も無気力なまま、屍のようになっていた自分に、生きる意味を与えてくれたのだから。

サッカーを心から恨んでいるかと問われると、正直必ずしもイースとは言えない。だがそれ以外に生きていく方法がないのも確かだった。それに、『エンドウ』にある程度の恩返しはしたかったのもあるのである。

何より。自分達の全てが間違ってるとは思っていない。サッカーを破壊の道具と考えている訳ではないが、それでもサッカーで誰かが救えるとは思えなかった。元は娯楽として生み出されたモノだとしても、所詮はスポーツ。要は勝負事。敗者が幸福になどなれる筈がない……父や自分達がそうだったように。

……でも……彼らは確かに、救ってみせた。

バダップ＝スリッドがああなった原因は、ざっくりとだが知っている。恐らくこの今場所にいるあらゆる不幸な者達にひけをとらぬ地獄を見せつけられたのだろうという事も。あのままなら廃人として一生を終えるか、役立たずとして秘密裏に処理されていたに違いない。－それを。

円堂達は、目覚めさせてみせた。他ならぬ彼らの信じるサッカーの力で。奇跡は起こせると、信じ続ければ叶うものがあるのだと証明してみせたのだ。

何より。彼らに心を動かされたのはバダップだけではない。

「…『トラマル』」

豪炎寺が倒れたその場所から動かず、未だに泣きじゃくっている少年に声をかける。

「『フィディオ』さん…俺、俺は…」

『トラマル』は嗚咽しながら、切れ切れに言葉を紡いだ。

「初めて、だつたんです。無駄じゃないって…頑張ったねって認めてくれた人。病弱な母さんの前では弱音なんか吐けなくて…それ以外の人にはいつも言われてばかりだった。頑張れって。もっともって頑張れって。そうすればクラブにもっと出れるようになるし、みんなに迷惑をかけないようにできる…今は辛くても乗り越えられるって」

「…そうだな」

きつとそう言った人達に、悪意は無かつただろう。寧ろ善意だったかもしれない。幼いながらも苦境に立たされた『トラマル』に、強くなつて欲しい…という。自分も同じような言葉をかけられてきたから、分かるのである。

彼らに罪があるとは思わない。ただ、彼らは気付いていないのだ。

本気で頑張っている人間に対し、その言葉がどれほどのタブーであるかなど。

「頑張れって…もう頑張ってるのに、これ以上どう頑張ればいいか分からなくて。頑張れって言われるのは、今頑張ってるって誰にも思っただけでないからだって…そう考えたら辛くて辛くて」

十回。百回。千回。万回。

自分の身体をズタズタに傷つけながら転がってきた自分達。次こそは、次こそは望んだ場所に辿り着ける筈だと信じて。信じなければ壊れそう。

「もう全部どうでもいい。絶対に報われない努力ならもうしたくない。全部壊しちゃえばいいって、そう思ってたんです」

もう一回。モウイツカイ。

僕らは今日も転がります、と。

彼らは言う。子供は云う。言葉に意味を奏でながら。

「だけど…だけど！俺…もう駄目です」

もういいかい？と彼は尋ねた。

もういいよ、と彼は答えた。

がんばったね。そろそろ君も疲れただろう？と。

息を止めて、休んだっていいのだと。

「俺…やっぱりサッカーが好きです！大好きなんです…！あんな風に…頑張ってるって、認めてくれる人と。俺のサッカーを分かってくれる人と…ずっとサッカーがしたかったんです…！！」

『トラマル』の心の叫びが、フィールドを裂いていく。『フィデイオ』は自分の頬が濡れている事に気付いたが、気付かないフリで放置した。泣いているのは自分達だけではない。

『トラマル』の言葉は、そのまま自分達の想いだった。自分達に罪が無いとは思わない。だけど、今日までの頑張りが無意味でないのだと、誰もがそう労って欲しかった筈だ。

『ヒロト』も。

『フブキ』も。

『トビタカ』も。

『ゴウエンジ』も。

みんな。みんな。みんな。

円堂や豪炎寺は。自分達がサッカーへの憎しみの裏に隠していた本当の感情を暴き、浮き彫りにしてしまったのだ。彼らの魔法にかけられるな、魔術師の言葉に耳を傾けるなかれとヒビキには散々言われていたけれど。

どうやらそれは無理な相談だったらしい。彼とサッカーで向き合えば耳を塞げど入ってくる。その熱い想いも、願いも。逃げられる筈が、無かったのである。

「俺がサッカーをしていたせいで。俺のサッカーのせいで『ヒビキ』さんやみんなを不幸にしちまったって…ずっとそう思ってた」

『トビタカ』が悲しげに目を伏せる。

「だけど…俺は自分の悲運を…サッカーのせいにして逃げてただけなのかもしれない。…だって、少なくともあの響木さんは…あいつらの監督やつてるあの人が。不幸そうには、見えない…」

「…あんまり自分を責めちゃ駄目だよ。言いたい事は分かるけど…逃げたって、それは罪な事なんかじゃない。君が悪い訳じゃない…いや…」

『トビタカ』を諭す『フブキ』も辛そうだった。きっと自分の中で今は眠っている二人の息子・・・『アツヤ』と『シロウ』の事を想っているのだろう。

「何でだろうね。きっと誰も…誰一人悪く無かったのに。彼らと僕らの命運を分けてしまったモノは、何だったんだろう」

彼が見つめる先にも雷門イレブンがいる。必死で、一生懸命すぎて、傷だらけで。それでも命懸けでサッカーを楽しもうとしている。自分達とは・・・大違いだ。

「俺達は悪の賽子…悲劇ばかりを集めた可能性。あのヒビキ提督は、そう言ってた」

『ヒロト』は目に涙を浮かべている。そうしていると普通に女の子にしか見えないな、と『フィディオ』は思う。

二分の一の確率で男として生を受けていた筈の少女。そうしていればまだ幸せになれたかもしれない・・・少なくともこの年で二児の母になる羽目にはならなかっただろう・・・流星のストライカー。

「雷門のあの子達を見て…思っちゃったよね、俺達。どうして…どうしてあの子達は幸せそうなのに、俺達ばかりこんな辛い目に遭わなきゃいけないんだ…って」

「醜い嫉妬…だよなあ」

分かっている。分かっていた。ただ改めて言葉にした事で思い知ったというだけ。

彼らのサッカーを潰す為に使われ、しかし自分達の意志で集った『フィディオ』達。その根元にあったのは、サッカーに憎悪を押し付けた身勝手さと、幸せな彼らへの嫉妬。

「俺達を本当の意味で不幸にしていたのは…他でもない、俺達自身

だったのかもしれない」

どんな悲劇に見舞われていたとしても――目の前の不幸しか見え
ず絶望に溺れていたのでは、奇跡など起きよう筈もない。

そう。久しく忘れていた。父のかつての口癖。現役時代、どんな
に点差が開いた試合でも諦めなかった父の言葉を。

「奇跡は起こるものじゃない。人の手で起こすものだ。…彼らがそ
うだったように」

眩しいな、と初めて思った。嫉妬でも羨望でもなく、ただ彼らが
眩しいと。それは届かない光に焦がれる羽虫のように。

雷門イレブン。彼らが幸せなのは運があっただけじゃない。きっ
とその心が引き寄せたのだ――光に満ちた“今”を。

「お前達、そろそろ試合が再開する。ポジションに着け」

すたすたと歩いてきたのは『キドウ』だった。ゴーグルを外した
ルビーの瞳に感情の色はない。それは彼がアンドロイドであるから
か――それとも。

「…『キドウ』、お前は…」

「言つな」

「……！」

言葉を紡ぎかけた『フィディオ』を、『キドウ』は端的に遮った。

「俺も…このままでいいと思っているわけじゃない、だが…」

彼は本物の『鬼道有人』ではない筈だった。だがその声は苦悩に
満ちている。その眼は悲しげに『エンドウ』を見つめている。

「だが…頼む。お前達まで『エンドウ』を否定しないでくれ。あいつを…独りにはしないでくれ」

多分、自分達が雷門イレブンに感化され始めているのが分かったのだろう。『エンドウ』は忌々しさを隠しめせず、自分達を、そして雷門イレブンを見ている。ゴール前。この距離からでも伝わる・

・ - 殺気。憎悪。

かつては共感していた。だが今は - - 哀れだとすら思った。勝手な事とは分かっているけど。

高らかに試合再開の笛が鳴る。『フィディオ』はちらりと隣に立つ『キドウ』を見、前にいる『ソメオカ』と『カゼマル』を見た。

彼らは今、何を思っているのか。偽物の身体に偽物の記憶。本物の身代わりとして景色を見て。

残念ながら自分にとってそれは、想像可能な域を超えた事だった。

【四十：デス・ブレイク】

「これで役者は揃ったね」

ボールを奪い合う染岡と『ヒロト』を見ながら、ミストレが言う。
「だけどバダツプ、君体力全然戻ってないでしょ。残り少ない後半は乗り切れても、その先は保証ないよね？」

「ああ」

「何か策があるのか。後半だけで勝負を決める方法が」

エスカバが状況に気を配りながらも尋ねてくる。作戦会議の時間も無きに等しい。だからバダツプは言った。

「二撃決殺。…これで決める」

はっとしたように二人が顔を見合わせる。彼らには伝わった筈だ

- 本来ならばかの雷門戦で使うつもりで、しかし歴史への影響を鑑みて封じられた必殺技。

「…確かに、あの技ならディフェンス連中をまとめてブツ飛ばせるけど……」

難しい顔になるミストレ。

「でも…いいの、あれ雷門の前でやっちゃって。だって本来あの技は、雷門イレブンがフットボールフロンティア世界大会で習得する筈じゃないか」

オペレーション・サンダーブレイクの前に。雷門の過去・未来における試合の様子を頭に叩き込んだ自分達。バダツプも無論例外で

はない。

件の技は・・・その雷門が主軸となった日本代表チーム、イナズマジャパンのオリジナルを拝借したものだ。破壊力、突破力。それはサッカーのみならず通常戦闘でも有用だと上が判断した為である。

しかし。それは本来なら彼らが未来で、自力習得する筈のもの。パクった自分達が出し出す事で大きく未来が変わってしまう可能性は否定出来なかった・・・それも、良くない意味で。よって封印されたのだが。

「円堂守は絶対的確定要素だ。忘れたか？」

「そりゃそうだけど・・・」

「それに」

あの時とは状況が違う。円堂に関わる事象をいくら未来の自分達が引つ掻き回したところで確かに過去は変わらない。だが、その代わりもはや彼らは自分達にとって“赤の他人”ではなくなってしまった。悪影響が出るかもしれないと知っていれば二の足を踏むのも当然だろう。

「それに俺は・・・俺達がどう動いて、未来がどう変わるうと。円堂達ならば乗り越えられる・・・そう、信じている」

バダップは思う。

誰かを心から信じる。信頼し、信用し、大切なものを託せる。

全ては円堂達と、オーガの皆が教えてくれた事。知る事ができた自分は本当に幸せだ、と。

「そうだね。・・・ここまで来たら、今更って気もするし」

「腹括るつきゃねーか」

苦笑気味に言うミストレとエスカバ。どうやら彼らも理解したらしい。他に方法はない、という事も。

「お前は病み上がり。俺らは満身創痍。失敗したら後はねえ…そう思っとくべきだな」

強大な敵と、体力の限界という壁が大きく立ち塞がる。だがそれを恐れている者は一人もいない。そればかりか、笑みすら浮かべている。

きつと、何とかなる。何とかできる…自分達なら。

「円堂！」

バダツプは声を張り上げる。ゴール前にいる円堂に向けて。

「俺達が必ず、決勝点を決めてやる」

それは、宣誓。

彼らへの。そして自分自身への。

「見せてやる。我々オーガの本気をな！」

ついこの間まで敵同士で。こんな風に手を取り合う時が来ようとは思ってもみなかった。自分達はサッカーを悪だと教え込まれていたし、その元凶たる円堂を憎んでさえたのだから。

きつとあの時の自分達が見たらひっくり返るだろう。こんな馬鹿な事有り得ないと否定するかもしれない。

だが有り得ない筈の事が有り得たりする。起きない筈の奇跡が起きる事もあるのがこの世界だ。全てはそう、自分達の心一つ。

バダツプは学んだ。そして今確信している。

運命に自分達は試されているのだ。未来の為に…戦う勇気を持てるかどうか。真の勝利者になれるかどうかを。

「おう！」

バダップの言葉を受けて、円堂がニカツと笑った。向日葵が咲いたような笑顔で。

「お前らなら“絶対できる”！信じてるからな！！」

ああ、今また。彼は無意識に魔法を使った。

絶対できる。その一言だけで本当に、何とかできる気がしてくるから不思議だ。

「行くぞ！」

「サー、イエス、サー！！！」

バダップの声に、完璧に答える二人。染岡も粘ったが、ボールは『ヒロト』に奪われてしまった。『ヒロト』がパスしたのは『ゴウエンジ』。向こうも決める気だ。

「エスカバ！」

「了解ッ！！！」

バダップの意図を瞬時に把握し、エスカバが『ゴウエンジ』の元へ走る。自分達三人の脚の速さはさほど変わらない。ここで大切なのは数字ではないのだ。どんなプレイを得意とし、どんな特徴を持っているか。

スピードは同じだが、三人の中で一番小回りが効くのがエスカバだった。さらに後の展開を考えればここでボールを奪うのは彼であるのが好ましいのである。

「くっ…！」

エスカバはショルダーチャージで牽制しながら、素早くターゲットの前方に回りこんだ。『ゴウエンジ』の脚が止まる。エスカバの役目はボールを奪うと同時に、彼を足止めする事にもあるのだ。

時間稼ぎ……自分とミストレが彼らを追い越し最前線に駆け上げるまでの。

「邪魔をするな……！」

「いや、邪魔させて貰うぜ」

キツと睨みつける『ゴウエンジ』の眼も何処吹く風と流すエスカバ。

「なあお前……この試合に勝ってどうしたいよ？」

「!？」

突然のエスカバの問いに、『ゴウエンジ』が戸惑うように眉を潜める。

「復讐とか。憎しみとか。そういうのを否定するつもりは無え。人の心は自由だ。それを他人に決めつけられたり踏み込まれるいわれは無えからな」

「だけどな、と彼は続ける。」

「お前らの……復讐ってヤツはどうしたら終わるんだ？終わったとして……その後どうしたい？絶対途方に暮れるだろ。お前らの話聞いて……と、未来への展望ってのがまったく見えてこねえんだよな」

はっとしたような顔になる『ゴウエンジ』。きつと彼も彼らも、考えてこなかったのだから。否、考えられなかったのかもしれない。復讐の後の、未来だなんて。目的を失った後どうやって生きるかなんて。

「俺らにはあるぜ。この試合終わったらなあ……」

ニヤリ、と笑うエスカバ。

「俺らは間違つてねえつて、証明出来る！いつ処分されんじやねえかって怯える事もねえ…きつと堂々と表歩けるようになるんだ！そしたら、まずバダップをブン殴つて…」

ブン殴る、のくだりで思わず笑つてしまふ。確かに、自分はみんなから一発ずつは鉄拳制裁をくらわないといけないうらさう。

でも、今はそれすら嬉しいと感じる。不思議な気分だ。

「そんでまた…みんなでデケエ花火見て、サッカーすんだよ！やりたい事いっぱいありすぎて困るぜ」

やりたい事。それがほんの些細な事でもいい。それだけできつと自分は生きていける。力を貰える。

「だから俺らは強え。そんな力の無えお前らに負けるかよ！」

『ゴウエンジ』の瞳が揺れる。揺れる。いつの間にか魔法は円堂だけの専売特許ではなくなっていたらしい。

人は望めばいくらでも魔法使いになれるのだ。黒き魔術師にも、白き魔術師にも。

- - 準備、完了。

自分達が計算された位置に着き、バダップが心の中で呟くと同時に。それを図つたがごとくエスカバが必殺技を放っていた。

「デーモンカット！」

蹴り技と同時に地面から吹き上がる黒いオーラ。それはある者には闇色の焰に見え、またある者には巨大な悪魔の顔に見えたさう。

エスカバの言葉に動揺していた『ゴウエンジ』は、あっけなく吹き飛ばされた。それでも受け身をとって転倒を免れたあたり流石だが、ボールは既にエスカバに渡っている。

「バダップ！」

パスが通った。バダップはボールをトラップし、頷く。魅せてやればいい。自分達の、本当の力。本物の強さというヤツを。

「ミストレ！」

「オツケイ！」

バダップとミストレは、同時にボールへ向けて蹴りを繰り出した。凄まじい力の奔流。紫色のオーラがボールを中心に集まり、渦を巻いていく。

その光に魅力された己に気付いた時はもう遅い。バダップは囚われた者達に向けて、高らかにその技を叫んだ。

「キラールフィールズ！！！」

悲鳴を上げて、イービルダイスのディフェンスメンバーが何人も吹き飛んだ。光が弾け、竜巻のように相手フィールドを襲う。手加減した為物理的な怪我は大した事もないだろうが、暫く目が光にやられた上の脳震盪で動けない筈だ。

残ったのはGKの『エンドウ』のみ。その『エンドウ』の唇が動いた。 - そんな馬鹿な、と。

「絶望に堕ちた者よ…覚悟するがいい」

さあ、勝負をしよう。

既に結末の見た勝負を。

「これがお前が捨てた…俺達のサッカーだ!!」

ミストレとエスカバと共に。バダップは宙へと舞い上がった。束の間の風の中、面白いものだ、と思う。

サッカーを捨てる。自分があの試合で繰り返し円堂に向けて叫んだものだった。計画通りにいかない苛立ち、初めてと言っていいかもしれない挫折。植え付けられた憎悪と憤怒に任せて…ああそれは、イービル・ダイスの彼らに通じるものがあるだろう。

立場はひっくり返ったが、同じだ。

望まずして悲劇のレールを走らされた彼らと。

知らず知らず大人達の強い道を歩かされていた自分は。

あの試合の中。何度倒れても立ち向かってくる者ほど恐ろしいものはない…あの時円堂と戦って痛感させられた。負けない強さよ、負けて立ち上がる強さの方が貴い時もある、と。

今、思うのである。

サッカーを捨てると叫んだ自分が。円堂達が捨てなかったもののおかげで生き長らえている。彼らはサッカーを捨てなかったからこそ今がある。イービル・ダイスのメンバーは彼らのサッカーにおいてとても大切なモノを…幸せになる為に前を向いて戦う勇気を…忘れてしまったから、絶望に溺れてしまった。それでも完全にサッカーを捨てきれなくて此処にいる。

全ては、必然。自分達が、あの試合に負けて良かった。円堂達がサッカーを捨てずに戦ってくれて本当に良かった。その結果が今、この場所に在る。

「デスブレイク!!」

まるで歯車が噛み合うように、今という瞬間に導かれた。今の自分ならば、闇に堕ちた彼らに言える。

「サッカーを、捨てるな」

それは、君達の誇り。

「それは君を…君達を幸せにする魔法なのだから」

放たれた、三人の連携技。オーガ最強のシュートを前に、一瞬怖じ気づいて…しかし『エンドウ』は射殺するような眼で見、構えをとった。

「イジゲン・ザ・ハンド…改ッ!!」

土壇場で技を進化させた『エンドウ』。叩きつけた手を中心に発生した衝撃波のバリアが、シュートを阻む。

だが、バダップは分かっていた。心を揺らしているのは彼も同じ。彼もかかり始めている…円堂の、自分達のサッカーという、魔法に。

ガラスの割れるような音。それはまるで心の壁を破るような。

黄金のバリアは粉々に砕け散り、シュートはゴールネットに突き刺さった。

【四十一：イナズマ・イレブン】

どうしてだ。

何故こんな事になるんだ。

『エンドウ』はギリギリと奥歯を噛み締めて、唸る。イジゲン・ザ・ハンドが破られるなんて……いや、いや。そんな事よりもだ。バダップが帰って来た途端、奴らの動きが見違えるように変わった。オーガの連中……殊にミストレとエスカバの身体はボロボロで、限界も近い筈なのに。

確かに連中が強敵なのは分かっていた。奴らは前線の兵士。いくら自分達が数多の試練を乗り越えてきたといえど、死線をくぐり抜けてきた数は奴らが勝るだろう。個人勝負で勝てる相手だとは思っていない……しかし。

本来の予定ならば、雷門の連中が盛大にオーガの足を引っ張ってくれる筈だったのだ。それが一体どういう見だ？

捨て身とはいえ自分達の必殺タクティクスを破り。チームメンバ―の心を揺さぶり。あまつさえバダップを蘇らせてみせた。完全に想定の外だ。

……俺達イービル・ダイス……その存在そのものが、雷門の連中を動揺させた筈だ……なのに！

何故こんな事になっている？

誰のせいでこんな事に？

「くっ……！」

八つ当たりと分かっていた。だがつい睨む視線は『ヒロト』に向かう。彼女はびくりと肩を震わせて……しかし、さっきまでのよう

に謝り倒したり泣き叫んだりはしなかった。
ただじつと、悲しそうな眼で自分を見た。それすらも忌々しい。

「…『エンドウ』」

さりげなく『フィディオ』が『ヒロト』の前に立つ。まるで彼女を庇うように。

「彼女のせいじゃないよ。…喻えこの試合に負けてもね。…まあ君も分かっているんだろっけど」

「五月蠅い！！」

凶星を突かれて、頭に血が上る。

「物の喻えでも…負ける事なんて口にするな！俺は絶対に負ける訳にはいかないんだ…！！」

後半残り僅か。一点を追う展開。

まだまだ。まだ逆転のチャンスはある。地力でこちらが勝るのは明白なのだ。増してやあちらは怪我人だらけ。ミストレとエスカバは勿論、病み上がりのバダップも体力は残っていない筈。

「勝つ…！勝って取り戻すんだ…！！」

『お前らは…死ぬんじゃないぞ』

「この試合に勝てば、『カゼマル』達は戻ってくる…!!」

『キャプテン…後は、よろしくね』

「そうしたら今度こそ…今度こそみんなでシアワセになれるんだ…
…!!」

『田堂…ごめんな。もっとお前とサッカー、したかったんだけど…
な』

『ソメオカ』の。

『マックス』の。

『カゼマル』の。

最後の声が反響して、消えていく。彼らは何故あんな理不尽に死ななければならなかったのだろう。おかしいじゃないか。だってまだ十四歳で…たくさんの時間があつた筈なのに。

『どんなに離れても。サッカーが俺達の絆になる。ずっと繋がって
いられる』

泣きそうになる。死ぬ前の晩の、『キドウ』の言葉。蹂躪された過去を持つにも関わらず、彼は最期まで綺麗なサッカーを信じていたのだろう。かつてのチームメイトに惨殺される、その瞬間まで、『エンドウ』も信じようとした。何度も、何度も、繰り返す。だが駄目だった。世界は悉く自分を裏切り、残酷な現実ばかり見せつけた。まるで嘲笑うかのように。

「要らない。要らない。要らない。こんな理不尽なだけの世界なんて。」

自分にとってただ一つの真実は。こんな世界でも出逢えた仲間達の存在。亡き者達の記憶が日々美化されていく事に気付きながらも、『エンドウ』はそれをやめようとは思わなかった。

彼らに報いる事。まだ生き残っている仲間達を全力で護る事。

そして全てを奪ったサッカーに復讐する事。サッカーを愛する者達に絶望を見せつける事。

それが今の自分の存在証明。生きていく僅かな糧なのだ。

「許さない…お前らは“シアワセ”なくせに！」

『エンドウ』は吼える。雷門イレブンに向けて。平行ワールドの自分に向けて。

「俺達の…たった一つの生きていく理由すら壊す気なのか！これ以上俺達から何を奪う気なんだよ！！」

この試合に負ける事は。

生きていく意味を失うのと同じ。

「死ねよ…死んでしまえ！全部全部全部呪われてしまえ！滅んじまえ！どうせ救いなんかありやしないんだ！！」

その声に…ミストレが一瞬泣き出しそうな顔になって、『エンドウ』を見た。

『エンドウ』は知る由も無い事だ。つい数時間前、ミストレが殆ど同じ台詞を円堂に投げつけた事など。その姿があまりに悲しいものだと、思い知らされた事などは。

『円堂守』

雷門中二年男子。全ての始まりにして全ての終わりである存在。

元々、円堂という存在には二つ呼び名がある。“浄罪の魔術師”と、“断罪の魔術師”である。

前者は言葉の力で他人を魅了し、自らの側に引き上げ、同じ思想を感染・共有させていく力。白き魔法、と呼ぶ者もいる。

対して後者の力は似て非なるもの。言葉の力で他者を洗脳するのは同じだが、性質は真逆である。他者の心を果てしなく突き落とし、精神的に殺してしまう事さえある。黒き魔法と称する者もいるほどに。

この円堂は、その“断罪の魔術師”としての力ばかり特化された存在だ。それは無論第三者が手を下した結果ではない。一千万二千八百五十三分の一で発生した悲劇により運命が動いた為である。

祖父、円堂大介は伝説的なサッカープレイヤーであった。だが影山との確執により無残な死を遂げ、娘であり円堂温子にトラウマを植え付ける事になる。

サッカーをする者は、不幸になる。

そう考えた彼女は息子である円堂にサッカーを禁じた。折檻には至らなかつたが、時にはその憎しみから円堂の前でボールを傷つけたりしたという。祖父と同じサッカーがしたいと願っていた円堂は相当なストレスだったに違いない。

中学生になつた円堂は、サッカー部を設立する。当時雷門中にはサッカー部が無かつた為である。原因は件のイナズマイレブンの悲劇。サッカーをする者は不幸になる - - そう思っていたのは円堂温子だけではなかつた。雷門中の教員達もである。加えて雷門には影山の配下が何人もスパイとして送り込まれていた。彼らは円堂の部活動を妨害し続けた。

スパイは大人ばかりではない。生徒の中にもいた。円堂は何度も苛めまがいな目に遭いながらも一人ボールを蹴り続けた - - 染岡と半田が入部するまでは。

だが彼らや一年生達が入部した後も、サッカー部への嫌がらせは耐えず。止めようとしたマネージャーの秋は殴られて重傷を負い、今尚意識不明のまま入院し続けている。

そして始まるフットボールフロンティア。悲劇の連鎖。

地区大会にて。染岡は帝国の罠にかかり死亡。

エイリア襲来。最初のジェミニストームの襲撃にて、半田と松野が崩れる校舎から逃げ遅れて死亡。小林寺、影野、穴戸は試合にて重傷。

また、影山脱獄の折、真帝国設立の際は鬼道が犠牲になつた。エイリア石の力で洗脳された佐久間と源田が暴走したのである。彼らと影山は試合の後、円堂の目の前で自殺した。

さらに最初のジェネシス戦。試合中の事故で風丸が死亡。

そして星の使徒研究所崩壊の際は、綱海条介と立向居勇氣が瓦礫の下敷きになつて死亡している。

度重なる悲劇は円堂に確信させるに充分だつた - - サッカーに関わると、皆が不幸になる。自分は大切なモノを失っていく、と。実

際エイリアメンバーの殆どは最終的に、生体実験と虐待の影響で死亡している。

フットボールフロンティアインターナショナルは陰惨を極めた。円堂はサッカーで、対戦チームを次々血祭りに上げていったのである。観戦者達に、絶望を見せつけるように。

大会、決勝戦前日。この円堂達がイービル・ダイスメンバーとしてスカウトされた時期である。全てを終わらせる直前。彼らは何を見ているのか。この試合で……幸せを享受してきた者達を見て。

- - - - -

目を逸らしてはならないだろう。絶望に堕ち、憎悪に身を焦がすその姿から。

耳を塞いではならないのだろう。世界の破滅を願う、呪詛の言葉から。

……俺は……俺達は。誰かの何かを奪う為にサッカーを……この試合をしている訳じゃない。

円堂は思う。寧ろ奪おうとしているのはあちらだった筈だ、と。別にそれは向こうを恨んでの考えではない。円堂達のサッカーを壊したいという願い、それは彼らも自覚しているに違いないのだ。

自分達はこの試合で、取り戻そうとしていた。闇に閉じ込められてしまったバダップを。その目的は既に果たされたといっている。

残り僅かな試合を戦うのはもう一つの理由からだ。この試合に勝って、証明したい。サッカーは何かを壊す道具ではなく、誰かを幸せにできる魔法であると。

…それでも…あいつらは、奪われると感じるんだらうか。

だとすれば。自分達にその気がなくとも、悪意がなくとも、それはまさしく略奪行為なのである。ある者は『エンドウ』達の逆恨みだといい、被害妄想だと嗤うだらう。だが、それは円堂には出来ない事だ。

彼の痛みが分かるとは言えずとも。分かるような気はするから。

…もし、俺があいつと同じ目に遭ったら…同じように仲間を失ったら。

きつと耐えられない。

狂って、憎悪すら抱く前にきつと。

「…お前、強いな」

「……え？」

思ったままを口にする、『エンドウ』は虚を突かれた顔をした。実際、さっきまでの彼の叫びとなんら繋がらない言葉だ。だが、円堂は言いたかった。どうしても伝えなければならぬ気がした。

「お前もさ、お前らみんなさ。本当に、強かったんだな…だって」

自分の本当の気持ちを。

ありのままの想いを。

「だって今日まで…頑張って生きてる。生きようと頑張ってる。…
凄いや、ほんと」

自分だったら、きつと死んでしまうだらう。絶望に押しつぶされて、狂ったまま命を絶ったかもしれない。

なのに彼らは。こんな惨たらしい過去を抱えて、傷だらけで、世

界を憎んで、不幸になって壊れそうで……。
それでも、生きてる。
生きて足掻き続けている。

「俺達は…何かを奪い合う為に此処にいるんじゃない」

破滅を願っていたかもしれない。
だが今、自分はこう言いたい。

「大切なものを取り戻す為に、戦ってる。サッカーをしてる。そう
だろ？」

雷門は、自分達の愛したサッカーを。

『エンドウ』は亡くした仲間達を。

それは歪んだ理由なのかもしれない。自己満足なエゴの塊と称さ
れるかもしれない。

だがその想いを、否定する権利は誰にも無い筈だ。

「残り時間…思いつきりやろうぜ、サッカー！」

笑ってみせれば、『エンドウ』の眼が驚愕で見開かれる。時間は
僅かだが残っている。それで自分は自分出来る事をしよう。

救いたい。否……救ってみせる。

サッカーを憎む事でしか愛せない……『エンドウ』達の事も。

【四十二：サン・ライス】

「鬼道、悪いがこっちを手伝ってくれないか」

「ん？…ああ」

つけっぱなしのテレビ中継。つい見入っていた少年は、名前を呼ばれて我に返った。

今朝起きたシステムエラーが、意外と難敵で手こずっている。危うく選手達の管理データまで消えかけたのだから笑えもしない。エメンタルサッカーにおいて、システム管理が命といっても過言ではないのだ。よってチーム専属メカニックになる為には超難関の資格試験をパスする必要がある。

少年はそんなメカニックチームのリーダー的存在だった。本来ならテレビなんぞに熱中して仕事を疎かにするなど言語道断。常ならば絶対にしない事だ。

そう…その画面に、親友の姿がなければ。

「カノン…」

軍が突然始めた、度肝を抜かれる試合。それは今やサッカー界の伝説と言うべきイナズマイレブン…その起源たる雷門イレブンと、そのパラレルワールドの存在であるチーム・イービルダイスとの一戦だった。どちらも過去から連れてきた存在。タイムワープが禁止されたこのご時世でだ。今頃政府は大混乱だろう。

この試合を企画したヒビキ提督がサッカーを危険思想と見做している事は、少し詳しい人間なら誰でも知っている。一時は彼がタイムワープシステムを用いて、よからぬ計画を立てているとの噂もあった。実際、いずれ彼が行動を起こすだろうな、とは予想していた事である。

だがまさか…逆だったなんて。少年からすればこれは予想の斜

め上いく展開だ。

「…てつきり軍の誰かを過去に飛ばして、歴史操作を図ると思っ
いたのに。」

まさか雷門の方を未来に連れてくるだなんて。さらにはカノンが
そこに関わってくるだなんてどうして予測できようか。

「しかし、意外だよなあ。雷門側のチームに加わってんの、王牙
学園の精鋭部隊メンバーじゃねえか」

画面を覗き込み、隣でキーボードを叩いていた仲間が言う。

「バダップにミストレにエスカバ…有名人ばつかじゃん。しかもこ
いつらサッカー嫌いで有名だったろ？なーんでこんな事になったん
だろうな？」

仲間は首を傾げている。だが少年には…その理由が、分かるよ
うな気もしたのだ。

「…魅せられたんじゃないか？」

「ん？」

「きつと、そうだ」

眩しさに、眼を細める。

雷門にカノンが加わった理由も、オーガが協力している理由も。
なんとなく。同じものではないかと、そう思ったのだ。

「だってあいつら…楽しそうだろう」

イービルダイス側は、辛そうだ。負けたら破滅しかないと言うよ
うに、絶望に沈みかけて必死にもがいているように見える。

それに対し、円堂達はどうだ。一点リードしたとはいえまだ予断許さぬ戦況。総合力で負けているのは明白で・・・それでも誰もがきららしている。あのオーガのメンバーですら。

「あいつらはこの試合を、真剣に楽しんでるんだ」

どうして。そう問う必要は無かった。何故なら自分はいつも見てきたから。

同じようにサッカーを楽しみ、周りも巻き込んで輝かせてしまう存在を・・・そんな親友の姿を。

・・・カノン。これがお前の曾祖父・・・円堂守のサッカーなんだな。

まるで魔法のようだ。

その姿を見ていると自分達までサッカーがしたくなる。暗い気持ち、沈んだ気持ち。その全てを吹き飛ばしてしまいたくなるのだ。

「サッカーは、楽しいものなんだ」

つい呟くと、仲間達が次々笑い声を上げた。けして不愉快な笑いではない。何今更そんな当たり前な事を、と。そういった意味での笑いだと笑った。

「何言ってるんだ鬼道。だから俺達みんな、ここにいんだろ？」

それもそうだ、と少年は笑った。

だが同時にこうも思った。

偶には自分もメカニックではなく、プレイヤーとしてフィールドでサッカーがしてみたい・・・と。

同じ時。その老人もまた、その試合の中継を見ていた。

「まさか」

思わず笑みが零れる。最初にあつたのは何よりも驚き。だが今は、静かな歓喜が胸の奥を満たしている。

「まさかこんな形で…貴方の“現役”時代を見る事になるなんて、思ってもみませんでした」

今、家内も子供達も家を空けている。家の中には老人一人だけだ。だからその独白を聞く者はいない。当の老人以外には。

「貴方はこの頃から…何一つ変わらないのですね、円堂監督」

七十年。その長くも短い時間で、この世界は大きく変わった。良くも悪くも姿を変えたサッカーと、政府体制の激変。世界恐慌に徴兵制の復活。そして…時間旅行技術の確立。

あの頃には考えもしなかった事。絵空事だった未来が今現実のものとなっている。タイムワープが可能な時代になり、少年だった自分が大人と呼ばれる年になり。最初に思ったのは…恩師のかつての姿を間近で見たい、という事だった。

だがタイムワープが確立されてすぐ、歴史犯罪が増加。時を渡る技術は政府と一部の研究者のみの特権となり、彼のささやかな夢は

叶わずに終わった。

残念な事だが仕方ない。元より時間なんてものに手を出すのは神をも恐れぬ行為。触れるべきではなかったのだと、彼は諦めていた。恩師は大人でありながら子供のひたむきさを忘れぬ心で懸命に指導してくれた。その過去だけで充分ではないか、と。

だから……まさかその夢がこんな形で叶おうとは、思ってもみなかったのである。リアルタイムの映像の中、仲間達に声をかける円堂の姿が見える。その声に励まされる雷門とオーガの姿がある。

円堂のサッカーが、そこにある。

「サッカーは……みんなを笑顔にするもの。貴方はそう、教えてくれましたね」

足を悪くした為、やや緩慢な動作で、老人は棚の上の写真立てをとる。

そこにはセピア色に褪せた古い写真があった。プラスチックの枠ごしに、皺の増えた指で顔をなぞる。七十年前の、フットボールフロンティアの写真。中学生だった自分達が笑っている。幸せでたまらない。嬉しくてたまらない。そんな様子で。

「貴方の想いは……受け継がれていますよ。そして今……この試合を見ているみんなに届いている筈です」

鮮やかな黄色。雷門のユニフォームを着た子供達は今、大人になった彼らは今、きつと自分と同じようにこの試合を見ている事だろう。そしてその子供達や家族もきつと。

「神童キャプテン……ね、貴方にも見えるでしょう?」

悲しいことに。この写真のメンバーには既に、この世にいない者

もいる。もうあれから七十年も経っているのだから当然といえば当然だが、自分達の主将だった神童拓人は若くして命を落とした一人だった。

だが。彼もまた確かに、円堂のサッカーを受け継いだ者の一人で、きつと空の彼方から見ていてくれるに違いない、自分はそう信じている。

「サッカー、やろうぜ」

老人は子供に帰ったように笑い、口にする。

それは自分達の敬愛する監督の口癖。

ある者にとっては呪いの言葉でも、自分達にとっては幸せの魔法だった言葉。

「生まれ変わってもまた…貴方とサッカーがしたいなあ」

老人は。

革命を起こした、三代目のイナズマイレブンの一人であり。

その名を、松風天馬と言う。

サッカーを根絶する為に。

雷門が絶望する様を見せようと、試合を全国ネットで流したテレビ
キ提督。

しかし、結果は逆効果だった。

悲劇に堕ちた自分達のもう一つの姿である、イービル・ダイス。その無残さを、非道な力を見せつけられて尚、円堂守は折れなかった。

否、円堂だけではない。

円堂に影響された雷門にオーガ、全ての者達が倒れなかった。

その姿が、闇の中にいたバダップを目覚めさせ、イービル・ダイスの者達の心すら揺さぶった。

彼らは言う。何度でも言う。“絶対に諦めない”、と。

それこそが最大の武器であり、自分達の誇るサッカーであるのだと。

試合を見ていたある少女が言った――頑張つて！と。

試合を見ていたある少年が言った――サッカーって楽しいんだね、と。

折れないイナズマイレブンの姿を、真剣にサッカーを楽しむ彼らの姿を、今日日本中が見ていた。

その誰もが魅了され、多くの者が応援に声を出していた。

円堂守のサッカーは、確かに皆に届いていた。

確かに、確かに、世界を動かしていた。

風になる、感覚。

『フブキ』はそれを、懐かしいと感じていた。ほんの少し前まで慣れ親しんでいたもの。少し前まで側にあったもの。

だけどずっと、忘れてしまっていたもの。

- - 忘れてしまったのは、いつ？

ああそうだ、大好きな親友が - - 風丸が死んでしまっただからだ。

- - 忘れてしまったのは、どうして？

思い出すのが怖かったからだ。本当はサッカーが大好きな自分を完璧じゃなくてもいい、誰かと一緒に笑いあえるサッカーが一番いいと知っていた頃を。

完璧でなければ何も守れない。誰も救えない。そう思った時、サッカーを楽しむ心は邪魔でしかなかった。そもそも大切な人達を守れない自分に幸せになる資格はないと思っていたから - - 捨てた、筈だった。

完璧でなくても楽しかったサッカー、なんて。

『…カナデ』

心の中から声がする。『シロウ』、の。泣き出しそうな声が。

『カナデがずっと…僕達を守ろうとしてくれた事は、分かっている。その為に力を欲しがってた事も』

だけどね、と。『シロウ』は続ける。

『相手を壊して。完璧な勝利を見ても…本当は、辛かったんだ。父さんが見たかった僕達のサッカーって、本当にこれで良かったのかな…って』

ああ、そうだね。『フブキ』は…否、『カナデ』は心の中で呟く。

本当にこれでいい？…いや、そんな筈はない。自分は彼らの父親代わりでいたつもりだけれど…息子達の本当の父親の望みがなんだったのか、知らなかった筈はない。

分かっていて。

本当は分かっていたのだ。

それでも自分は…彼らを守りたくて。

「…『シロウ』。『アツヤ』。…お前達は…」

ああ、そうか。

彼らは今…やっと自分達の力で抜け出そうとしているのか。

「傷ついても…どんなに苦しんでも。楽しいサッカーが、したいかい？」

縛られ、凍てついた過去から抜け出して。

幸せになるために、生きていくためにもがこうと。

『…うん』

そうか。

自分は。自分という存在は…人格は。今日この日の為に…あったのか。

「分かった。…だったら、やってみなさい…」『シロウ』「

精神世界で。『カナデ』はうずくまった双子のうち、兄の方へと手を伸ばす。銀髪に青い目の子供は、おずおずと“父”の手に触れてきたので。

『カナデ』は微笑み、その手を引っ張り上げた。

「お前の望む…楽しいサッカーをやってみなさい。父さんは…僕は、信じて見ているから」

『シロウ』に身体を明け渡す。

『カナデ』は決めた。何があっても、受け入れよう。彼が選んだ、ただ一つの道を。

【四十三：ラスト・チャンス】

理解出来ない。『エンドウ』は混乱する。

自分は幸せな未来の彼らを憎む。どんな残酷な手を使っても試合に勝つつもりでいる。それはあちらも嫌というほど思い知った筈なのだ。現に怪我人が出ているのだから。

なのに。

『お前もさ、お前らみんなさ。本当に、強かったんだな…だって…
なのに、どうして。』

『だって今日まで…頑張って生きてる。生きようと頑張ってる。…
凄いや、ほんと』

どうしてそんな事が言える？

どうして相手を認めるような事が言える？

『俺達は…何かを奪い合う為に此処にいるんじゃない』

違う。これは奪い合いで潰し合いで、殺し合いだ。

相手の信念を否定し、拒絶し。互いの信念を押し付けあい、平伏させ、認めさせる。その為の戦いではないか。

そう言いたかった。言いたかったのに。

『大切なものを取り戻す為に、戦ってる。サッカーをしてる。そう
だろ？』

円堂の言葉に耳を傾けてはいけない。それは自分もまた分かって

いた事だ。

なのに、一度聴いてしまっただけで抜け出せない。元は同じ存在
- パラレルワールドの自分である筈なのに、円堂守が分からない。
分からないから気になり、知りたくなってしまう。

否 - 否。そうではない。

本当は分かっているのだ。分かっていた事に気付かされてしまい
それで - 怖いのだ。

『残り時間：思いつきりやろうぜ、サッカー！』

彼は、彼らはただ。

サッカーがしたいのだ、自分達と。本当のサッカーが - 楽しい
サッカーが。分かっている。何故なら彼は、自分なのだから。自分
だって本当は - サッカーが大好きだったのだから。
だけだ。

- だけどサッカーは：俺の大切なモノを、悉く奪っていった。

だからサッカーを憎んだ。愛していた分、憎んだのだ。
しかし。だつなら何故、自分は未だフィールドに立っている？
それはサッカーを否定する為。喪った仲間を取り戻す為。サッカ
ーを愛する全ての者達に絶望を見せて、サッカーという思想そのも
のを根絶やしにする為だ。それ以上に何も無い筈だ、理由なんて。

ああ - 本当に？

「キャプテン」

自分を呼ぶ声に、我に返る『エンドウ』。呼んだのは『フブキ』だった。

「『フブキ』、お前は…」

どうしたいんだ、と言いかけて。『エンドウ』は気付く。

『フブキ』の眼が、穏やかな海の色をしていること。妙に達観した完璧主義者の気配が消えて - - 少しでも臆病な、しかし優しい光を湛えている事に。

「お前…まさか」

見た事は、ある。だがここずっと、自分の前には姿を現さなかった人格。彼はいつも『カナデ』に守られて、鍵をかけた心の奥底にうずくまっていたのに。

「うん。…『シロウ』だよ。久しぶりだね、キャプテン」

自信のなさそうな笑み。それが、彼が彼である事を証明している。どうして、と思った。どうしてこのタイミングで彼が出てきたのだろう。今まで少なくとも試合中に、『シロウ』の人格を見る事は無かった。殆ど『カナデ』が前に出て、時折『アツヤ』に交代するのが常だったのに。

「…ごめんね、キャプテン」

唐突に、『フブキ』が言う。

「完璧に…完璧になれば。勝ち続ければ。大事なモノを取り戻せるって、思ってた。キャプテンはサッカーを憎んでたかもしれないけど僕は…僕達は違ったんだ。サッカーに、怯えてたんだと思う」

『エンドウ』は何も言わない。分かっていた事だ。『フブキ』は…否。自分以外に、本気でサッカーを憎んでいる者は誰一人としていなかった事。誰もが本当は、『エンドウ』と同じ景色など見ていなかった事を。

だから、傷つかなかった。それでも目的さえ同じならそれでいいと思っていたから。

「僕も…風丸君や死んじやったみんなを取り戻したいって、思うよでも…でもね。あっちの円堂君の話を聴いてて…思ったんだ。例えばこの試合に勝っても…辛いだけのサッカーじゃ、本当に大切なものは戻って来ないんじゃないかって」

『エンドウ』は…沈黙する。

今度は何も“言わない”のではなく、“言えなかった”のだ。

眼を背けようとしていた事を、まざまざと見せつけられた気がして。

「完璧じゃなくても、いい。楽しいサッカーがしたいよ、キャプテン」

泣き出しそうな『フブキ』の眼。その言葉は、『エンドウ』が信じて貫いてきたものを丸ごと否定するに等しいものだった。だが、

何故だか怒りは感じなかった。

ただ虚しくなった。それが彼に対してか、自分に対してかも分からないけれど。

「…勝手にしろよ」

ふざけるな、と。いつもなら言った筈のところを、静かにそう投げるにとどめた。

それでもこれだけは告げねばならない。自分も、彼も。もはや後戻りなど出来ないのだ。

「けど忘れるな。俺達は絶対に負けられない。勝たなかったら…風丸達は取り戻せないんだ」

今度は『フブキ』が押し黙る番だった。もはや彼に言うべき事は何もない。『エンドウ』は空虚な気持ちのまま振り返り、いつの間にか『キドウ』と『ゴウエンジ』がすぐ傍に立っていた事を知る。二人とも、どこか苦しげな表情に見えるのは気のせいだろうか。

「雷門は、オーガも含め皆消耗している。怪我人も多い」

口を開いたのは『キドウ』。

「あと一点…一点だ。同点延長、もしくはPKに持ち込めば、こちらが圧倒的有利になる。地力とスタミナならば明らかにこちらに分があるからな」

「なら、何が何でも一点取るだけだ。博打を打ってでもな」

『エンドウ』は彼に強い視線を向け、宣言する。

「あの技で、決める。あんな平和ボケした“円堂守”ごときに止められるものか」

具体的な名称は出さなかったが、彼らには充分に伝わっただろう。一瞬驚いたように目を見開いたものの、二人とも異論を唱える事はしなかった。

「今のお前はリベロじゃないんだ。『タチムカイ』はもういない。文字通り、“賭”になるが？」

「構うもんか。このチャンスを生かせなかったら、どっちみち俺達の負けなんだから」

「…そうだな」

もう時間がない。点を入れられた自分達からのキックオフ…これがラストチャンスだ。賭だろうと博打だろうと関係ない、挑めなかった者はその場で敗北者に成り下がるだろう。

負けられない。否…負けたくない。雷門にだけは、絶対。彼らに勝てなければ自分達は証明出来ないのだ。あまりにも多くの痛みと喪失を受けて、それを対価に得られた強さもあると。流された血と涙は、払われた犠牲は、意味あるものだ。

この力は。幸せに生きてきた彼らには持ち得ないものであるのだと。

だから、自分は。

「『ゴウエンジ』。『キドウ』。…お前達を信じる。…頼んだぜ」

勝つ為にもう一度だけ、信じてみよう。

サッカーで得た…仲間との絆を。

「信じる…か。お前の口からは、久しく聴いてなかったな」

『ゴウエンジ』がどこか遠い眼をして言った。

「もしかしたら俺達は…仲間の命だけじゃない、気付かないうちに、

他にも大事な何かを失っていたのかもかもしれない」

荒々しい感情ではない。静かに見つめ直す彼の声に、だからこそ重たい心を読み取る事が出来た。

「なあ『エンドウ』。俺達のサッカーへの復讐は、どうすれば終わると思う？そして終わった後の事を、お前は考えた事があったか？」

それはさきほど、『ゴウエンジ』がエスカバに言われた言葉だった。その気合いと希望に満ちた声は、『エンドウ』の耳にも届いている。

『お前らの…復讐ってヤツはどうしたら終わるんだ？終わったとして…その後どうしたい？絶対途方に暮れるだろ。お前らの話聞いて…と、未来への展望ってのがまったく見えてこねえんだよな』

「俺は考えていなかった。…未来を、考えられなかったんだ…怖くて。それは、知らず知らずに諦めてたって事なのかもしれない」

確かに、そうかもしれない。その実、『エンドウ』は羨ましいと思ったのだ。この試合が終わった後。これから先の未来。やりたい事がたくさんあると笑った、エスカバが。

「なあ。それでもまだお前は…復讐がしたいって思うのか？」

揺らがされている…今『エンドウ』の一番身近にいる筈の『ゴウエンジ』ですら。それは魔法だ。『エンドウ』を信じ、サッカーを愛する者が使う、言葉という名の魔力。

しかし、もはや『ゴウエンジ』を叱ろうという気は起こらなかった。揺らがされ始めているのは、『エンドウ』も同じであったから。

「この先、どうするかなんて」

考える事が、怖い。

未来の事なんて、考えたくなかったのだ。ずっとずっと、自分は
「試合の後に、考えればいいだろ」

「…分かったよ」

『ゴウエンジ』は小さく息を吐いて、きびすを返した。

「俺は、今のうちに考えておく。途方に暮れたくはないからな」

彼の方が強いな、と『エンドウ』は心から思った。自分には、まだ無理だ。もう眼を背けようがないほどはつきり気付かされてしまった。

この先の未来で、やりたい事。思いつかなかったわけじゃない。寧ろすぐ思いついたのに忘れようとしたのだ。

「俺は…」

この試合に、勝ったら。

「サッカー…やりたいよ。『カゼマル』や『キドウ』達と……みんなと」

一番やりたい事は、サッカーだった。

こんなに憎んでいる筈なのに、まだこんなにも自分の中には残っていたのだ。サッカーを愛する気持ちが…情熱が。

…だってあいつらが一番輝いていた場所は…俺達が自然に笑えた場所は…。

笛の音で我に返る。いつの間にか試合再開されている。随分長く誰かしらと喋っていたような気がするのだけど。

『カゼマル』が前線に向けドリブルを始める。止めに来るのはバダツプだ。しかし『エンドウ』は事前に貰ったデータにより知っている。彼も含めたオーガの3トップは、全員がディフェンス系の必殺技をもっていない事を。エスカバが土壇場でディフェンス技を修得してきたのは計算外だったが、入院していたバダツプにそんな暇は無かった筈だ。

例え必殺技がなくとも、普段の彼ならば脅威だっただろう。だがバダツプは病み上がりであり、先程大技を二つ連続で放った為酷く消耗している筈だ。

今なら抜ける。『カゼマル』のあの技ならば！

「風神の舞…改!!」

華麗に舞踊り、吹き荒れる嵐で相手を牽制する。普通の相手ならこれで吹き飛ばされるところだが、バダツプは身を屈めて風を軽減させそれを防いだ。流石としか言いようがない。

それでも『カゼマル』からボールを奪取するには至らず。彼が体制を立て直した時には既に、『カゼマル』は遠方に走り去っていた。

「『ゴウエンジ』！」

さらにパスを使い、サンダユウとカノンを纏めてかわす。上出来だ。ボールは『ゴウエンジ』へ…その間に『エンドウ』は『フブキ』と共に前へ。

さあ、これが最後の攻撃。

自分達は勝つ…絶対。

【四十四：ジ・アース】

ズキズキと身体を苛む痛みが、鬼道を現実に引き戻した。揺さぶられる脳が不快で、思わず呻き声を上げる。

背中に堅く冷たい感触。どうやら自分はベンチで寝かされているらしいが……一体何があったのだったか。

「……！！」

急激に全てが蘇り、鬼道はバツと目を見開いた。そのまま慌てて身体を起こそうとし、体中に走った激痛に叶わず小さく悲鳴を上げる。

「お、お兄ちゃん！」

春奈の焦った声が聞こえた。

「まだ駄目よ、起きちゃ！酷い怪我なんだから！！」

「春奈……」

思い出した。自分達はオーガと組んで、イービル・ダイス……パラルワールドの雷門である彼らと戦っていたのだ。バダップを蘇らせる為に。そしてサッカーの未来を守る為に。

「試合は……どうなっている？」

腕と頭だけを動かして時計を見れば、時間は驚くほど経過していなかった。スコアは3 - 2。いつの間にか雷門がリードしている。

「オーガが、三点目を入れたんだ」

答えたのは春奈ではなく、自分と同じように負傷し、ベンチに下がっている一之瀬。その向こうにはイツカスとジニスキー、栗松、豪炎寺の姿もある。

「見てみる、フィールドを」

言われるままフィールドに視線を向けて……驚愕した。

「バダップが……！」

バダップがフィールドに、出ている。FWとして。ミストレ、エスカバと共に。

自分が負傷して意識を飛ばすまでは、まるで人形のように車椅子に座っているだけだった彼が。

「雷門のサッカーが……カノン達の言葉が。届いたんだ……バダップにも」

だから彼は今、あそこにいるんだ、と。一之瀬は言う。

鬼道が思い出したのは、バダップの病室で円堂が言った言葉だ。

『サッカー、やろっぜ！そうしたらきつとバダップも思い出してくれる。あの日の試合で見つけた、大切な事をさ……！』

「まさか、本当に……現実にするだなんてな」

信じられないが、納得したのも事実。

これが円堂の力、雷門の力なのだ。奇跡をあっさり起こしてしま……う……当たり前のように。

「それだけじゃない。雷門のサッカーは……イービル・ダイスのメン

「バーも、引つ張り上げつつあるんだ」

「そうなのか？」

「ああ」

「もう少しだ、と豪炎寺。」

「俺達のサッカーは…みんなを幸せにする魔法。誰かを傷つける為の手段なんかじゃないと…証明出来る」

「そうだ、と鬼道も思い出す。すっかり頭の隅に追いやられていたが、この試合はこの未来世界で、全国に中継されているのだ。自分達のゲームを、自分達の姿を、自分達のサッカーを。日本中の人々が、見ている。」

「俺達が勝つ事で…それが未来のサッカーへ、未来の子供達へ繋がって行く…か」

「壮大で、見当もつかないような話だ。だが鬼道は自然と笑みを零していた。」

「自分達のサッカーが、世界を変えるかもしれない。だとしたらそれはなんて…。」

「素敵じゃないか」

「なんて、凄い事なんだろう。」

「こうなったら意地でも負けられないでやんすよ！フレイフレイ！雷門！！オーガ！！」

「栗松が声を張り上げ始める。鬼道と豪炎寺と一之瀬、ジニスキとイツカス。五人も互いの顔を見て、頷きあった。」

怪我をして交代した自分達はもうフィールドには戻れない。だが心は、共に戦う事が出来る。マネージャー達がいつもそうしてくれていたように。

「ら・い・も・ん！」

「オーガ！」

「ら・い・も・ん！」

「オーガ！」

「みんなー頑張つてー！！！」

五人と、秋達マネージャーの声が重なって、少ない人数ながらも大きな声援になる。

試合が動く。

バダツプを抜き去った『カゼマル』が『ゴウエンジ』にパスを出し、一気に前線が上がっていく。イービル・ダイス、最後の攻撃だ。これが通れば同点延長、そうなれば疲弊している雷門の勝ち目は薄くなる。

…止める…円堂！！

大丈夫。

彼なら、きっと。

フィールドで戦う彼らは知る由も無いが。

雷門。オーガ。

その時。その二つの名を呼んで声を張り上げていたのは、ベンチに控えた者達だけではなかった。

中継を見ていた日本中の人々。

試合に心を動かされ。サッカーを否定するなど、王牙学園の前まで押しかけた多くのサッカーファン。

多くの人々が雷門とオーガの勝利を願い、希望を託し、応援の声を上げていた。

それはそう、雷門に起こるいつかの未来で――彼らがダークエンペラーズと戦うその時と、同じように。

既視感を覚える光景。雷門を応援する一之瀬や夏末達の声聞きながら、『エンドウ』は思った。

同じだ。自分達がエイリア学園最後のチームを打ち倒した時と。仲間を失い、ボロボロになり、絶望に打ちひしがれ。それでも勝利を掴みとった、その時と。

――日本を守る為とはいえ…壊す為の試合、酷い試合だった筈だ。それでも俺達を応援してくれた人達がいたのは…きつと。

少しでも届いたからだ。自分達の願いの強さが、幸せな未来への強い想いが。

僅かでも揺り動かしたからだ。自分達のサッカーが――それを見ている人々の心を、世界を。

――今、応援されているのは俺達じゃない。応援も『ライモン』だけど…俺達のサッカーじゃない。

今、人々を揺らしているのは雷門の、円堂のサッカーなのだろう。それは『エンドウ』にも容易く想像できた。何故なら既に嫌という

ほど理解させられていたから。

円堂守のサッカーが、どれほど大きな力を持った“魔法”であるのかを。

-. それでも、俺は。もう誰にも理解されなくたって、突き進むしかないんだ...！

本当は、分かっていた。

間違っているのは自分だと、分かっていた。

自分達の悲劇は、誰のせいでもないと分かっていた。

無論サッカーやサッカーを愛する人々を恨むのは、逆恨み以外の何者でもないという事も。

-. 取り戻す... 絆を。命を。心を！

一瞬、『ソメオカ』と目が合った。彼が悲しげに目を逸らした事には、気付かないフリをした。

だってもう、他に手段などないではないか。

「『エンドウ』！」

『ゴウエンジ』が自分呼び、パスを出してきた。それをがっちり受け止め、『エンドウ』はシュート体制に入る。

これで、終わりだ。

「勝つのは、俺達だ...ッ...！」

『ゴウエンジ』と『フブキ』と自分。ボールを中心に置き、三人の気を集約させる。立ち上るオーラの柱。それにあわせて三人は大地を蹴り、高く飛び上がった。

風に溶ける、一瞬。

『エンドウ』は見た。全員守備・ゴール前に集結する雷門とオーガの者達と、こちらをひしと見据える円堂の姿を。

「来い！」

ああ、彼は逃げる事など全く考えていない。

「受け止めてやる…お前達の、サッカーを！」

だから…強いのか。

彼自身も。彼の元に集う者達も。

…俺の絶望とお前の希望。どっちが強いか…勝負だ。

「ジ・アース!!!」

三人でエネルギー弾に向けて脚を振り下ろす。願いを込めた強烈な一撃が雷門ゴールへ向かう。イービル・ダイスの最強シュート。フットボールフロンティアに優勝した頃の自分ではまったく相手にならなかった筈だ。

だが…あそこにいるのは同じ『エンドウ』でも自分ではない。絶望を打ち破り、幸福な未来を手にしてきた円堂守だ。

ならば…もしかしたら。

「スピニングカット！」

「グラビティション・改！」

「ザ・ウォール！」

「ボルケイノカット！」

「デーモンカット！」

「メガトンヘッド・G2！」

風丸が、サンダユウが、壁山が、土門が、エスカバが、カノンが
- -。次々シュートブロック技を放つ。

シュートはそれらを悉く打ち破ったが、威力は大きく軽減された。
そこに待ち構えるのは円堂。『エンドウ』さえ修得出来なかった最
強のキーパー技を引っさげて。

「オメガ・ザ・ハンド…… G2!!」

金色の、光。

『エンドウ』は思い出していた。自分の原初の技 - - ゴツドハン
ド。それを習得した日の事。自分の、サッカーの、全ての始まり。
まだ何の悲劇も知らず、ただ毎日新しい発見に目を輝かせていた -
- あの頃の事を。

家の倉庫で。祖父のボールとノートを見つけた瞬間に自分のサッ
カーは始まった。ただのボールを蹴り続ける事が楽しくて仕方なか
った。文字が読めもしないのに、祖父のノートを見るたびにワクワ
クした。その必殺技を習得出来れば、きっとそれが祖父と自分の
絆になると信じて。いつの間にかサッカーが大好きでたまらなくな
っていた - - あの頃。

円堂の得たオメガ・ザ・ハンドは、そのゴツドハンドの究極進化
系と言っている。

サッカーは楽しいもの。

サッカーは皆を笑顔にする魔法。

キーパーの役目は全てを受け止めること。それはボールのみなら
ず、あらゆる心を、相手の信念を受け入れる事。

キーパーの役目は全てを守ること。それはゴールのみならず、あらゆる誇りを、仲間の願いを守り抜く事。

確かに……ああ、確かに。祖父はノートにそのような事を書いていて。自分も確かにそれを信じていた頃があったのだ。

ただど度重なる悲運に心をすり減らし、絶望に負けて。祖父の願いを、望んだサッカーを否定してしまった。しかし。

あの円堂守は、そんなサッカーを護り続けたのだ。

だから辿り着いた。全てを護り、受け止めるあの技……ゴッドハウンドの進化の先へ。修羅の道を歩んできた『エンドウ』にさえ、否『エンドウ』だからこそ成し得なかったその境地へと。

……ああ。じいちゃん。……俺に足りなかったのは。

シュートが巨大な神の手に、がちりと収まる様を見て。『エンドウ』は降下しながら、ゆっくりと目を閉じた。

……全てを受け止める、覚悟。立ち向かう勇氣……だったんだ。

スコアは、変わらず。3対2、雷門の一点リードのまま。残り時間、あと……。

「絶対に、勝たなきゃいけなかったのに……」

「『エンドウ』」

ポツリ、と。呟いた声を拾った『カゼマル』が、悲しげに言った。

「もっ……いいよ」

アンドロイドそのものに、設定された感情は無い。だから今『カゼマル』に涙を流させているのは、彼のオリジナルの“風丸一郎太”の記憶なのだろう。

「もう…頑張らなくていいんだ。お前が苦しんでいるのをもう見たくない…本物の、“風丸”だつてきつとそう言う」

「『カゼマル』…」

「受け入れてくれ」

言葉が、風の中に溶けていく。

「死んだ人間が生き返る事なんかない。此処にいる俺は…俺達は偽物なんだ」

そんな事言わないで、と願う。

でも『エンドウ』の声は嗚咽になって、言葉にはならなくて。

「俺達”は…もう死んでるんだよ。『エンドウ』」

叫んだ。張り裂けそうな胸の内を、声にならない声の限りに。涙を散らせながら。

「…っ!!」

ラストホイッスルが鳴る。試合終了。

雷門&オーガ対イービル・ダイス。勝ったのは、雷門&オーガ。

日本中のあちこちで歓声が上がった。

【四十五：マジシャンズ・セレクト】

バウゼンは目を閉じ……一つ、深く息を吐いた。

試合の勝敗が全ての結果を物語る。真に敗れたのはイービル・ダイスではなく……自分とヒビキだという事も。

作戦は失敗。そればかりか全てが裏目に出る結果となってしまうた。

今やエレメンタルサッカーの起源とも言つべき伝説のイナズマイレブン。彼らがイービル・ダイス相手に敗北し、絶望し、朽ち果てる様を日本中に見せる。そうする事でサッカーという危険思想を排除する事が出来る筈だと信じ、自分達は試合を全国ネットで流した。ところがこれは一体どういう事か。

雷門が試合に勝ったばかりではない。彼らはどんな絶望的展開であるかと折れる事なく、立ち上がり続けた。己のサッカーを貫き続けた。

バダップを救い。サッカーを憎んでいた筈のイービル・ダイスマンバーですら救ってみせた。

そして……それを見ていた全ての人の心を揺さぶってみせたのだ。その実、バウゼンも例外では、ない。

……サッカーは……何かを奪ったり傷つける為のものじゃない……救う為の、もの。

バウゼン個人としては。何もサッカーを争いの道具と見ていた訳ではない。もつと貧弱な、人々を弱体化させる娯楽でしかないと考えていたのである。

だからサッカーを憎んでいた訳では無かった。ただ敬愛するヒビキに同調し、人々に強い心を取り戻させ、争いのない平和な世界を築く為に……。必要だと思ったのだ。サッカーを、この国から排除

する事が。

- - だがそれは本当に…正しい事なのか？

この試合を見て。サッカーが貧弱な娯楽であるなどと…誰が嗤うだろうか。もはや誰もそう思わないかもしれない。少なくとも自分はそのよう。もしかしたら、ヒビキ提督ですら。

今此処には確かに、一つの戦場があった。

弾丸も飛び交わない。銃声も爆発音もない。それでも誰もが命と誇りを賭けて戦った…そんな戦場が。

違うのは勝者がけして敗者の死などを望まないこと。勝者はあくまで敗者を救う為に戦っていた事だ。

- - だったら、私は。私のしてきた事は…。

「バウゼン大佐！」

バタバタと慌ただしい足音が、バウゼンを現実に戻した。

「お、王牙学園の前にサッカーファンのデモ隊が…！恐らく3000人は下らないかと…！！！」

真つ青な顔で部下が言う。予想された結果だった…。円堂達が絶望に負けなかった時点で。この試合の勝敗が決した時点で。

「…如何なさいますか、ヒビキ提督」

慌てふためくような無様な真似はしない。どちらにせよ自分達は全てを失う覚悟で此処にいるのだ。結果が真逆の方向へ転んだところで何も変わりはない。

だがパウゼンは迷っていた。自分がこれからすべき事は。何が最前であるのか。一人では決めあぐねているのが実際だった。 - 嗚呼、情けないと笑いたければ笑えばいい。

だから気になったのだ。この試合を見てヒビキ提督は何を思ったのか。彼もまた考えを変えつつあるのかを。

パウゼンの中の答えは出ていないようであるのかもしれない。ただそれを明らかにするのが怖かったのかもしれない。

彼に着いていく。そう決めた事は後悔していない。ヒビキには個人的に多大な恩もあるし、その地位を抜きにしても尊敬している。この世界を平和に導く為、紛れもなく必要な人材である事も。

だから彼がそうと決めたなら、自分が逆らう事は無いのだ。軍の地位や権力もあるにはある。しかしそれ以上に、究極的最終的に彼は必ずや正しいのだと、まるで刷り込みにも似た絶対的信頼がある為だ。

だから - - だから自分は。どんな犠牲を払ってでも彼に従わなければならないから。

彼が望む選択をしてくれる事を願っていた - - その時点で、何か矛盾していると気付きながらも。

「... 中継をやめさせる。今更遅いかもしれんがな」

やがて。ヒビキが口にした言葉は。

「どんな結末になろうと、我々が揺らいだら世界は終わる。ケジメはつけなければならん... そうだろう?」

パウゼンにとっての - - 絶望。

凍りついた時間の中、パウゼンは漸く口を開いた。希望が砕ける音を聞きながら。

「イエス…サー」

握りしめた銃は、氷のように冷たかった。

「負けた…な」

『エンドウ』と『カゼマル』の嗚咽が響く中。フィールドの真ん中に立った『フィディオ』がぼつりと呟いた。

「そうですね」

そこに、『トラマル』が同意する。

「俺達は、負けたんですね」

そしてその言葉を引き継ぐかのように、『フブキ』が言う。

「負けたのに…不思議だなね。何も失わない、敗北なんて」

茫洋と。呆然と。悄然と。しかし誰もがどこか吹っ切れたような、清しい顔をしていた。少なくとも円堂にはそう見えた。

試合の度。岐路に立つ度。何かしらの犠牲を払い、何かを奪われ、悲劇に涙してきた彼ら。もしかしたら戸惑っているのかもしれない。初めての - - 何も奪われない結末に。喪わない結果に。

いや。本当は、彼らが何も失わない訳と分かっている。こうなつた以上、『カゼマル』や『キドウ』、『ソメオカ』、『マックス』、『ハンド』 - - 彼らアンドロイドが完全な姿になる事はもう、無いのだろう。そもそも彼らは偽物。オリジナルは死者だ。完全を装ったところで、最初から本物にはなれなかつたのだからうけれど。

それでも、『エンドウ』は彼らを望んでいたのだ。それほどまでに仲間を愛していたから。仲間を失った現実を受け入れ難かつたら。もう一度 - - 彼らに逢いたかつたから。

その『カゼマル』達はきつと - - 失われてしまつただろう。負けた以上、ヒビキ達が報酬を払うとは思えない。オリジナルの記憶と容姿を受け継いだ彼らは再びただの機械に戻されてしまつたかもしれない、廃棄されてしまう可能性もある。それは『エンドウ』にとつてはあまりに無慈悲で残酷な結末である筈だ。

それでも。彼らにとつては初めてでの、“何かを失うだけ”の試合では無かつたのだろう。それは同じほどに、あるいはそれ以上に得るモノがあつたからこそ。少なくとも円堂はそう、信じている。自分がこの試合の中で手に入れた力を、彼らもまた手に入れてくれている筈だと。

「サッカーは憎むべき悪。…俺達もまた、ずっとそう思っていた」

静かに。バダップがそう告げる。

「だが…違う。サッカー自体にはなんら罪は無い。罪があるとしたらそれは、弱さを受け入れられなかつた俺達自身。そう、気付かされた」

そうだ。最初はバダップ達オーガのメンバーもまた、同じであつた筈。確かに彼らはイービル・ダイスメンバーのように、個人の感情でサッカーを憎んでいた訳ではない。だが、サッカーを否定し、

排除する事こそ世界の為であり己の為だと……そう信じていたのは、同じ。

「円堂守と雷門のサッカーが、教えてくれた。大切なのは戦う心、立ち向かう勇氣であると」

トン、と。隻腕の少年兵は、右手で左胸を突く動作をした。それはあのフットボールフロンティアで、撤退間際の彼が円堂に示してみせたのと同じもの。

自分達の心は、確かに彼に届いたのだ。

だから今、バダップは此处にいて。自分の脚で立っている。

「世界は……残酷かもしれない」

そしてバダップとは違う意味で。違った感情と試練を乗り越えた、ミストレが言う。

「神様なんかいない。都合の良い奇跡なんか起こらない。願っても願っても……頑張っても頑張ってもどうしようもない事が、たくさんあるよ」

でもオレ、分かったんだ。ミストレは笑う。泣きそうで、切なくて……でも何かを見つけた者の笑みを。

「人は誰だって……幸せになる権利があつて。幸せになれる力を持つてるんだ。願い続ければ、絶対じゃなくても……可能性の道は繋がっていく」

そう。

それがたった一つの、奇跡の起こし方。

「同じだよ。君達も…オレ達も」

『エンドウ』はバダップを見、ミストレを見、最後に円堂を見た。涙でぐしゃぐしゃの顔だったが、それを醜いとは思わなかった。

だって彼はきつと…やつと。涙を流す事を許し、赦されたのだから。

「……試合に勝った後。復讐が終わった後。何がしたいかなんて…考えてなかったんだ」

『エンドウ』が言葉を絞り出す。

「全部、壊しちゃえばいいと思ってたから。こんな世界も自分もどうにでもなれって…思ってた。だけど…それでも勝って、『カゼマル』達を取り戻したいって思ったのは…」

声に嗚咽が混じり、聞き取り辛かったが。フィールドに立つ全員が今、彼の声に耳を傾けていた。憎しみに堕ちた太陽の、初めて語られる本音に。

「もう一回…もう一回。『カゼマル』達とサッカーがしたかったからなんだ…！考えて、気付いちやっただよ。サッカーは俺からたくさん、たくさんものを奪って…憎んでいた筈なのに」

手で顔を覆い。『エンドウ』は、叫んだ。

「友達をたくさん連れてきてくれたのも…出逢わせてくれたのもサッカーで…！俺は、やっぱりサッカーが好きなんだ…大好きなんだよおっ…！…！」

そんな彼に、バダップがゆっくりと歩み寄った。その顔は驚くほど優しく、穏やかで。

「もう一度、さっきと同じ事を言っ」

顔を上げる『エンドウ』。その頭に、そっと右手を乗せる。まるで幼子の頭を撫でるように。あやすように。

「サッカーを、捨てるな。それはお前達を幸せにする魔法なのだから」

優しい声に。くしゃり、と『エンドウ』の顔が歪む。そして、小さな子供のように頷いた。

「うん…うん…！捨てない…捨てられるわけ、ない…！！」

『エンドウ』を覆っていた、黒い憎しみのオーラが消えていく。太陽は何度だって昇るのだ。何度沈み夜を迎えても、必ず自分達の夜は明ける。必ず朝はやって来る。

そう信じ続けられ、きつと。

「…どうすつか。これから」

気持ちを切り替えるように、エスカバが言う。

「本音を言っと俺はまだ不完全燃焼だ。まる」

「小官もバメル准尉に同意であります！」

「君達ねえ…ボロボロの癖に何言ってるの」

「「サー・カルスほどではないかとー！！」」

「ブツ殺すよ二人とも」

エスカバの言葉に、サンダユウが軍人口調で便乗し。さらにはミストレが苦笑しながら悪乗りして二人をこずく。

円堂はつい笑ってしまった。よく見ると他のみんなも笑っている。バダップやイービル・ダイスのメンバーですら。

だから円堂は言った。

「じゃあもう一試合、やっちゃおうか!!」

「出たよ無茶発言!」

マックスが言い、さらに笑いが巻き起こる。仕方ないではないか。やりたいものはやりたいのだから。

それ、立派なサッカーバカと人は言う。

「いいじゃん!サッカー、やろうぜ!!」

今度は最初から笑ってサッカーができる気がする。自分達も『エンドウ』達も等しく。

「さすが、“俺”だなあ」

『エンドウ』が失笑し……しかし次の瞬間、その笑みは凍りついていった。

パン!

一発の、銃声によって。

【四十六：ラスト・ホイッスル】

何が起こったのか。最初は誰一人として理解出来なかっただろう。円堂は全てを見ていた。ただ目を見開いて、見ている事しか出来なかった。

「あ…」

『エンドウ』の眼も、こぼれんばかりに見開かれている。その顔には点々と赤い飛沫が飛び散っていた。

ぐらりと。彼の目の前にかがんでいたバダップの身体が、傾ぐ。軍服のその背中に、黒いシミがあった。それがじわじわと大きくなり、やがては服に染み込みきれなくなつて身体を伝い始める。

彼の身体が横倒しに倒れる様子が。まるでスローモーションのように映り。ゆっくりとその身体の下に広がる血の海を見た時 - 円堂の脳内で何かが弾け飛んでいた。

「バダップ!!」

悲鳴が上がった。円堂は足をもつれさせながら駆け寄る。バダップは倒れたまま、小さく呻き声を上げ、身体を震わせていた。真っ青な顔。きつく閉じられた瞼。胸元を押さえた手から真っ赤な鮮血が溢れ出ている。

それでもまだ、息がある。だが。

- 場所が、悪い…！

背中側から、一発。弾丸はバダップの背中から左胸を貫通している。自分は素人だから詳しくは分からないが、生きているという事

は辛うじて心臓は外したのだろう。だが、確実に肺を傷つけた箇所だ。

「ぐっ…」

「『エンドウ』！」

右肩を押さえ、うづくまる『エンドウ』。だらだらと血が腕伝っている。どうやら弾丸はバダップの身体を貫通し、『エンドウ』の肩も抉っていたらしかった。

ジャキン、と鋭い音。それはサンダユウが長い軍刀を抜き、ミストレがナツクルを装備した音だった。それ以外のオーガの面々も手に自ら得意な武器を構え、険しい眼を向けている。――銃弾が飛んできた方向、バウゼンのいるベンチへと。

「副隊長命令。チーム・オーガ。総員戦闘態勢へ」

「イエス、サー！！」

ミストレの言葉に、オーガのメンバーが訓練された返事をする。隊長が撃たれ、瀕死の重傷。それでも彼らを取り乱したのは一瞬だった。――それが軍隊だ。

「エスカバはバダップを頼む」

「イエス、サー」

そして上官の命には逆らわない。どうやらチーム内の立場はエスカバよりミストレの方が上だったらしい。――とは今知った事実だが。

「刃向かう気が、カルス小尉。そしてオーガの諸君」

バウゼンがゆっくりと立ち上がる。その手には未だ硝煙の立ち上る黒い銃が。彼がバダップを撃つたのだ。――そう理解した瞬間、円堂を支配したのは憤りと、それ以上の疑念だった。

「どうして、だ」

何故。どうして。

「どうして撃った！バダツプはあんたの部下だろう！何で簡単に…」

それはずっと。一番最初から円堂が訊きたくて仕方なかった事だ。今バダツプを撃った事だけじゃない。そもそもの発端はオペレーション・サンダーブレイクに失敗したバダツプを、彼らが厳罰に処した事。バダツプを殺す気で、生還の望みのない戦地に送った事だ。

「何で簡単に…人の命を捨てられるんだ…！！」

誰かを殺すとか、生かすとか。そもそもそんな事を他人の裁量で決める事がおかしいではないか。人は駒ではない。人形でもない。ちゃんと意志があつて感情がある。本来ならその命を生かすも殺すも、本人だけに与えられた権利なのだ。

ミストレの復讐を肯定しておいて矛盾していると人は言うかもしれない。それでも円堂は思う。人を殺す事は時に悪ではないかもしれない。だが、正義だと思う事はあまりにおこがましいと。自分がミストレの憎しみを肯定したのは、彼が己の行いを正義などと奢っていないかつたのも理由の一つなのだ。

「バダツプは…やっと悪い夢から醒めた。オーガのみんなはやっと救われた。その未来を、他人のお前に奪う権利があるのか…！？軍の意向に反したから？任務に失敗したから？」

円堂は思ったまま言葉をぶつけていた。ただ許せなかった。自分勝手な理由と笑われてもいい。ただ理不尽だと思つたのだ。

やっと始まったかもしれぬ幸せな時を。関係のない人間に無遠慮に壊されることが。

「そんな“程度”のことで…誰かを傷つけるなんて、間違ってる！」

睨みつけられる数多の視線に晒されて。それでもバウゼンは眉一つ動かさない。これが百戦錬磨の軍人というモノなのか。上官に命じられるまま機械的に動き、近しい者を殺すことも厭わない…それが兵士なら。

まるで、ロボットじゃないか。

「…その“程度”、か。貴様にはそう感じても、我々にとってはあまりに大きな失態なのだ」

やがて、口を開くバウゼン。

「それはあくまで“普通”の人間の考えだ。貴様はそこから動けない。我々の信念など、到底理解出来る筈もない」

恐ろしいほど無感動な口調。無表情な顔。だから…円堂はハツとした。それが感情を殺した時のエスカバ達と、同じ様であることに。

彼も心を殺している？一体、どうして？

「スリード大尉。及びオーガ小队。実に残念だが、危険思想に染ま

ったお前達は…我々の敵。反乱分子だ。よってこの場で全員、処分
させて貰う」

もしかしたら…もしかしたら、彼も。

「そして雷門イレブンとイービル・ダイス。お前達も…このまま無
事で帰れると思うな」

推測でしかない。憶測でしかない。

それでも円堂は直感した。そしてこの直感は外れないものである
と、経験から知っていた。

だから…だから、余計。

「……どうしてッ!!」

胸の奥から突き上げてきた怒りを、悲しみを…抑えきれず、円
堂は叫んだ。もしバウゼンもまた悲しんでいるのなら。望んでもい
ないことをしようとしているのなら。

それはなんて…酷い喜劇だ。

「そんなに軍の命令が大事なのかよ! 仲間の命よりも!? 自分の心
よりも!? そうやって…」

許されない言葉かもしれないと思った。

それでも言わなければ後悔すると知っていた。

だから、言った。

「そうやって得た平和なんか、平和じゃない! そんな悲しい世界な
ら、俺は要らない!!」

心の叫びが空間を裂き、その場にいた者達の魂を揺さぶる。そしてその瞬間、サンダユウが長刀を、ドラツヘがハンマーを握って、バウゼンに踊りかかっていた。

「オレ達は死なない…バダツプも死なせない…！生きて生きて、生きてやる。オーガの誇りに賭けて…！！」

ミストレの号令に、オーガの面々が次々動き。バウゼンの方も自らの部下達に命じて。

戦闘が、始まった。

無意味かもしれない。エスカバの脳裏にすぐそんな考えがよぎったが振り払った。

…こいつはあの地獄を、たった一人で生き抜いてきたんだ…！

こんな場所で死ぬ筈がない。死なせてたまるか。やっと彼は闇の底から戻って来れたのだ。こんな場所で終わらせていい筈がない。

バダツプの身体を横たえ、濃い緑色の軍服のボタンに手をかけた。ぬるりと血で滑り、指先が触れただけで呻き声上がる。それは多分、傷の痛みだけが原因ではないのだろう。あの地獄で拷問され続けたトラウマ…服を脱がされることは、それだけで恐怖を蘇らせる契機である筈だ。

それでも処置をしない訳にはいかない。このままでは、バダツプ

が死んでしまう。

「すま、ない… エスカ… かはっ！」

「いい、喋るな！」

喀血するバダップ。やはり肺を抉っている。エスカバは傷を見る為、ボタンを外し、バダップの胸をはだけさせた。そして… 改めて目の当たりにした現実には、唇をきつく噛み締める。

男には有り得ない、柔らかな膨らみを帯びた胸。中心に無惨に刻まれたレッドマリアの刻印 - 薔薇と十字架の入れ墨。それらはあの地獄でバダップの身体に刻みつけられた、消えない烙印だった。

銃創は、左乳房の上の方を抉り、だからと鮮血を零し続けている。酷く沁みるだろうが仕方ない。エスカバは救急キットのポーチから、消毒薬と治療薬を取り出す。この八十年で医学は各段に進歩した。血液型さえ間違えなければ、薬をぶっかけるだけでもある程度の延命が可能なほどには。

「これ…！」

ガーゼが足りない。そう思った矢先に、声をかけられて驚く。

秋だった。彼女は雷門の救急箱を手に、そこに立っていた。

「あんた、危ないだろ！ベンチの影に隠れてるよ！いつ銃弾が飛んできてもおかしくな…」

「できません！」

「お、おい！」

彼女は強い眼差しで、きつぱりと言い切った。

「私に出来ることなんてたかが知れてるかもしれないけど… 目の前で仲間が死にそうなのに、放ってはおけないよ！」

「仲間、つて…」

「仲間だよ！」

テキパキとガーゼと包帯を取り出す秋。

「試合の後はみんな仲間！勝敗だって関係ない…それが私達のサッカーだから！！」

あっけにとられるエスカバの前で、止血を始める秋。驚いた、なんてものではない。マネージャーの彼女ですら、こんなにも強い信念を持っているのか。それが雷門だと、言うのか。こうなった以上いつ誰が殺されてもおかしくない…そんな場所だというのに。

「心配しないで。私達だって自分の身くらい自分で守るから！」

「…はは…」

まったく恐れ入る。

「強えな…お前らは」

元来の器用さに加え、マネージャーの主軸となつて応急救護もこなしてきたのだろう。彼女の手際の良さは、現役軍人のエスカバにひけをとらぬものだった。

「…ところで…バダップ君って女の子だったの？」

「……いや」

戸惑うように投げられた疑問。当然と言えば当然だ。バダップは元々男だし、声も男のままだ。確かに顔立ちは綺麗だが、普通にしていれば誰も彼の性別など疑わないだろう。

それなのに、明らかに少女の胸があれば、驚くのは無理からぬことだ。

「…身体を改造された結果の一つだ。拷問だけじゃなくて、生体実験のモルモットにもされちまってたみたいだからな」

「……そう」

秋は悔しげに眼を伏せる。元は敵だったというのに…面識は数えるほどしかないというのに。彼女はバダップを心から心配し、その傷を想ってくれるのか。

嬉しくて…同時にエスカバは切なくなった。ひよっとしたらそ

れこそが人としてあるべき姿なのかもしれない――自分達の方が、忘れていただけで。

「…どうするつもりでいるの、これから」

バダップに痛み止めを打つエスカバに、秋が問う。

「…さあな。どうするんだろうな」

最終判断は副隊長のミストレが下す。自分が今決めることではない。だがエスカバがそう答えたのは、そんな建前だけの理由では無かった。

「これで俺達は軍の敵として、追われる事になるんだろうが。まあ、そんな事あ、この学園を脱出してから考えるべき事だ。あとあんたらを無事過去に送り届けてから…な」

そう。今は、後でいい。

「とりあえず、生きてりゃなんとかなんだろ」

生きること。それがまず最優先だ。

「エス…カ…」

その時。少しだけ苦痛が和らいだバダップが、息も絶え絶えに言った。

「どうしても…お前達に訊きたかった事が、あるんだ」

【四十七：ラスト・メッセージ】

恐らくだが。自分の受けた傷は致命傷なのだろう。

恐らくだが。自分もつてあと数十分の命だろう。

バダップはどこか他人事のように、自らの現状を観察していた。不思議なものだった。今まで何度も死に瀕する事はあったのに……こんなに穏やかに結末を見つめるのは初めてだろう。

横たわる自分を見つめるエスカバ、秋。駆け寄ってきた円堂守とカノン。その前で、自分は一番言いたかった事と訊きたかった事を口にする。

「エスカバ。…お前は、後悔していないか」

バウゼンの腕ならば一発で心臓を撃ち抜けただろうに。外したのが意外だった。だからこうして、最後に話が出る。おかしな事だが感謝したい気分だ。

「こんな…事になって。オーガに選ばれた事を、悔いていないか」

「馬鹿言ってんじゃねえよ！」

バダップの言葉に被せるように、エスカバが叫んだ。

「俺はお前のこと…確かに最初は思ってたさ、勝手な奴だって。いきなり自分の部隊に入れとか訳わかんねえって。でも…」

叫ぶ声が、震えている。

「でも…お前みてえな凄え奴は…世界の何処探しだっていない。そんな奴に選ばれた事は誇りだった…いや、オーガは俺ら全員にとつての誇りだ…！」

震わせているのは、自分。

「お前は違うつてのかよ、バダップ!!」

違う。違うものか。

バダップは小さく息を吐いた。 - もはや呼吸さえ辛かったが、心は穏やかだった。

「…本当に、良かった」

ずっと恨まれてるのではと思っていた。それが闇から抜け出せずにいた理由の一つでもあった。だが。

彼らが自分を愛してくれていると。待っていてくれると気付かされて。こうしてまた同じ場所に帰って来れて。

「俺はたくさん…間違った事をしてきたのだろうけど」

改めてその言葉をちゃんと聴いてみたくなったのだ。もう忘れる事のないように。 - 消えないように。

「お前達を、選んで良かった」

彼らはバダップにとって初めて友と呼べた存在であり。

チーム・オーガは。生まれて初めての居場所だった。大切だと、他の何に代えても守りたいと思えるモノが、出来た。

「俺にとっても、お前達は誇りだ。だから…頼む、エスカバ」

自分は、幸せだ。

「これから先…どんな事があっても。お前達はお前達の誇りを、捨てるな。そして出来れば、納得するまで生き抜いてくれ…世界は」

この世界は醜くて。

汚いもので溢れているけれど。

「世界は残酷だけど…お前達と出会えた世界は美しい。納得出来ないものがあるなら、それを変えるまで生きるんだ。お前達なら、きっと出来るから」

「ふざけんな！」

エスカバが叫ぶ。悲鳴のような声で叫ぶ。

「約束しただろうが…世界を変えるって！俺達はその為に軍にいらんだってよ！！」

『変えようぜ…世界を。俺達の手で、必ず』

「お前がやんなきゃ誰がやるんだ！こんな場所で勝手に死ぬなんざ許さねえぞ！！」

そうだったな、とバダップは思う。思い出したのはいつかの戦場。血にまみれた場所で肩を抱き合って誓った言葉。

それまで生きると決めた、あの日を。

「そう、だな…」

死にたい訳じゃあない。未練が無い訳でもない。

でももう、分かっている。どうしてもかは分からないが、例えこの傷が癒えても…。

「すまない」

自分はきつと、此処で死ぬだろう。

「ありがとう」

バダップは思う。短い時間だったかもしれないが、自分は彼らを救う為に、仲間達の想いに応える為に、この命を延ばしたのだろう。あの戦場から生還し、闇の中から這い出してきたのだろう。それはきつと、意味ある事だから。

「…喩え、俺自身がその先を見れないとして、も…」

激しく咳こみ、血を吐いた。鮮血がエスカバや円堂の顔を汚してしまふ。ゆーひゅーと嫌な音が喉から漏れた。見苦しく生にしがみつく姿は、多分みつともないものなのだろう。

「俺はもう、今日までの事を後悔しない。…幸せだったのだから」

これでもう、充分。

「駄目だ…駄目だバダップ！」

がっつと。カノンが自分の右手を握った。温かいばかりではない、とても熱い手だと思った。

「やっぱり駄目だ…死んじや駄目だ！諦めるなよ、最後まで…！」

あちらで怒声と、銃声が断続的に響いている。こうしていられる時間も残り僅かだろう。どうにかカノン達に銃弾が飛んで来ずに済んでいるのも、ミストレ達が粘っているからこそ。

「カノン…君にも、礼を言わなければならない、な」

あの日。もしカノンが自分達の、ヒビキ提督の作戦を邪魔しに来なければ。あれがもし成功してしまっていたら。

自分は今も、大切な事に気付かなかつただろう。

「フットボールフロンティア決勝戦。オペレーション・サンダーブレイク。間違っていた俺達を…止めてくれた事、礼を言う」

もしあの作戦が成功していたら。自分が死地に送られる事も、ミストレヤエスカバをこんな風に苦しめる結果にもならなかつただろう。

だが。あれは失敗して然るべき事だったと今なら分かる。自分達は知らなければならなかつたのだ。この世界で一番大切なモノが何であるのか。一番の強さというものを。

「そして…さつきも。君の声が俺を闇から引き戻してくれたんだ」

カノンの眼が見開かれ…やがてくしゃり、と歪んだ。本当はとも泣き虫なのかもしれない。きつとそんな優しい子だったから…キラードも彼に未来を託したのだろう。

自らの、存在を賭けて。

「そして、円堂守」

「…何だ」

いつもくるくると表情が変わる。眩しい、太陽のような少年。誰かを導き、救う力を持つ浄罪の魔術師。

その彼は今、涙をこらえて、しかし溢れそうな感情を眼の奥に必死に押さえ込んだ…そんな顔で、こちらを見ていた。

「サッカーは……楽しいな」

円堂は一瞬目を見開いて、やがて頷いた。

「うん。…そうともさ。サッカーは楽しいんだぜ。試合したら、試合した数だけ。試合した相手の数だけ…楽しいんだ」

「…そうか」

サッカーは世界を滅ぼすものじゃない。世界を笑顔にするもの。同時に…平和的に、勝敗を決める事のできる手段でもあるのだ。どうしてそんな簡単な事に気付けなかったのだろうか？

「お前は…それでいい」

円堂守。

どうか君は、誰かに汚されないで。
そのまま、いて。

「お前はずっと…太陽でいろ。何度沈んでも…何度だって昇る太陽。それがお前だ」

そうやって何人も照らして。照らされて。

「そうすれば…きっと。世界だって変えられる」

君の生きる未来がどうか。
自分達のそれよりずっと、希望に満ちた未来でありますように。

「お前なら、出来る。俺達の未来を変えた、お前なら」

その時だった。複数の悲鳴が上がり、何か大きなものがこちらに吹き飛んできた。それは傷だらけのミストレだった。反射的に必殺技の構えをとった秋は流石だろう。

「ゴッドハンド！」

金色の神の手が、ミストレの身体を受け止める。

「ミストレ君！…酷い怪我…！！」

「ありがと。…大丈夫だよ、これくらい」

言葉では強がっていたが、その口調は弱々しい。肩から、足から血を流し、顔色は真っ青だ。只でさえ彼は試合で負傷していたのである。満足に戦えなかったのだろう。

「閃光の拳士ことミストレーネ・カルス小尉。…貴官が万全の状態だったら、危なかっただろうな」

両手に、小型のショットガン。両脇に迷彩服の兵士達を携えて、パウゼンが言う。その前にはボロボロになったオーガのメンバーが膝をついている。

「お褒めに預かり光荣だね：散弾銃の機械兵ことドレイス・バウゼン大佐」

ミストレが忌々しげに吐き捨てる。致命傷は避けているとはいえ、度重なるダメージ。ミストレもオーガの皆も限界に近い筈だ。

それでも立ち上がるうとするミストレに、無理しないで、と秋が悲鳴に近い声を上げる。

「：今一度問う。考えを改める気は無いか？」

臨戦体制を取りながらも、バウゼンはまだ降伏を勧める。思い起こせばこの人は昔からそうだったな、とバダツプは過去の戦場を思い出した。

戦争においては。無慈悲にならなければ、味方も自らの命も失う。殺られる前に殺らなければ何も守れはしない。それが現実だ。綺麗なヒューマニズムを謡えるのは、最前線の苛烈さをまるで知らない人間だけだろう。

だが。この人は叩き上げ軍人にも関わらず。どんな相手にも一度だけ、たった一度だけでも必ず降伏を呼びかけた。そして断った相手を葬り去った後、必ず祈りを捧げていた。

本当はとても、とても優しい人なのだろう。自分は知っている。彼は訓練中いつも厳しくて。でも、全ては自分達が生き残れるように配慮したからこそだった。

今も、本当は。

「：悪いけど」

緩慢な動作で立ち上がり、ミストレが言う。怪我を感じさせぬ、凜とした声で。

「サツカーは、悪なんかじゃない。円堂守を悪者にして…逃げてい

た未来の人間こそが弱かったんだ。変わらなきゃいけないのは過去じゃない、現在の俺達だ」

「その通りだぜ」

そこにエスカバが加わる。キツとバウゼンを見据えながら。

「この世界が荒れちまったのは…今を生きる俺達に勇気が無かったから。真正面から向き合う勇気が無かったから…何でも力で解決しようとして、本当の強さを見失っちゃった。八十年前のコイツらは、当たり前前に持っていたモノをな…！」

バダップは何も言わない。悲しいかな、もはや意識さえ朦朧とし、殆ど喋る事が出来なくなっていたのが実状だった。

しかし。もはや自分が言うべき事は何も無いだろうと思う。

円堂守が。円堂カノンが。自分に伝えてくれた“勇者の心”は…仲間達にもしっかり届いていると、分かったから。

「俺達はサッカーを捨てねえ。こいつらにも捨てさせねえ…！それが俺達の、答だ…！」

エスカバの言葉に。オーガの他メンバーも一斉に頷く。皆、心は一つだった。

バウゼンはそんな自分達を見て、眼を閉じ…そうか、と。ただそれだけを言った。

「例え命を落とそうとも揺るがない……か。ならば、私も……こうする他無いな」

何をする気だ、と思った。バウゼンは銃を持ったまま一歩踏みだし…。

「ダツシユストーム・V3」

凄まじい、風が。フィールドを襲った。バダップも、バダップの周りにいた者達も散り散りになり、吹き飛ばされて地面を転がる。胸の銃創と治りきっていない全身の傷に激痛が走り、バダップは息を詰めた。皮膚にもその痛みが、霞みそうになる意識を繋ぎ止める。やがてバウゼンの足音で。彼がこちらに近付いてきている事を悟った。

「最終通告だ…オーガ諸君」

足音は、横倒しに倒れたバダップの目の前で止まった。

「隊長を失っても…その信念は貫き通せるものかな？」

【四十八：ラスト・リボルバー】

こんな筈じゃ、無かったのに。

バウゼンの頭を占めた感情はその言葉に尽きた。こんなつもりではなかった。バダツプが目覚めた事を誰より喜んだのは自分。オーガにもう一度サッカーを否定させれば、彼らを“処分”しなくてもいいと――ヒビキにそう告げられて、心底安堵したのも自分だ。

この試合で、バダツプ達が敗北してくれれば。

そして何よりイービル・ダイスの絶望に吞まれて、彼らが再びサッカーを否定してくれさえすれば。

自分は彼らを――殺さずに済んだのに。

――甘いのは、分かっているんだ。

彼らは意志を曲げないだろう。迷っているのは寧ろ自分の方だ。彼らを殺したくないあまりに、どうにかして降伏を認めさせようとしている――戦場ではその甘さこそ命取りだと、長年の経験で嫌というほど思い知ってきたのに。

嗚呼、そもそも。

自分は本当に――彼らを傷つけなければならぬのだろうか。

――駄目だ。考えるな……ドレイス・バウゼン。

心を殺す。

想いを、封じる。

――何があってもヒビキ提督についていくと……そう決めたじゃないか。

新兵時代。戦場で捕虜となり。部隊に見捨てられた自分をたつた一人助けに来てくれた若き上官。その時誓ったのだ。自分は一生を賭けてこの人に恩を返すと。この人の望む世界を実現させてみせると。

…だから…だから、自分は。

血だらけで倒れたままのバダツプの前に立つ。少年は虫の息で、その命の灯火は今にも消えんとしていた。それでも、意志の消えない眼でバダツプを見る。絶対に屈しない…そう言うように。

このまま放置してもすぐに彼は死ぬだろう。だがバウゼンはある程度自らトドメを刺さなくてはならなかった…オーガの他のメンバー達の心を折る為に。

バダツプを殺して。彼らが屈服してくればあるいは…ミストレ達だけでも命を助ける事が出来るかもしれない、なんて。甘すぎる考えと分かってはいたけれど。

「やめる！やめてくれ！！」

ミストレが叫ぶ。悲鳴のような声で絶叫する。這いずるのが精一杯の身体である筈なのに、まだ立ち上がるうとする彼を、バウゼンの部下達が銃で制する。

だが、部下達の視線が一瞬ミストレに向いた際に、エスカバが動いていた。手に持った三本の短刀を素早くバウゼンに向けて投げつけてきたのである…それも正確に致命傷になる箇所を狙って。

訓練以上の動き…流石としか言いようがない。

「相手が私一人ならば、まだお前に分があつたかもな…幼き惨殺者」
チャイルド・ザ・リッパー

その短刀全てを左手の銃身で叩き落とし、バウゼンは言う。恐ら

く刃には致死性の猛毒が塗られていただろう。掠っただけで危なかつた筈だ。

視界の先、エスカバが膝をつく。その右脇腹には深々と、部下の軍刀が突き刺さっていた。

「ぐっ……う！」

「エスカバ！」

「これ以上抵抗してくれるな、オーガ諸君。君達はよく頑張った。我々もこれ以上無益な犠牲は払いたくない」

バウゼンはそのまま、動けないバダツプの髪を掴んで、身体を仰向けさせた。痛みに少年が小さく呻き声を上げる。

応急処置の為、その軍服の胸元ははだけたままになっている。レツド・マリアの入れ墨――バダツプの心臓の真上に、バウゼンは銃口を押し当てた。

甘い。

弱い。

情けない。

迷いが手元を狂わせ、彼に瀕死の傷を与えて苦しませてしまったこと。その顔を吹き飛ばすのが嫌で、頭ではなく胸を狙ったこと。そして。

「……もう一度、訊くぞ。バダツプ……スリード大尉」

まだ彼を、殺したくないと願っている事。

「……お前にとって、サッカーとは何だ」

胸元に押し当てた銃身から、弱々しい鼓動が伝わってくる。髪を掴む手と、引き金にかけた指の震えが伝わってしまいそうで怖かった。軍人失格だ。自分達はどんな時でも冷静に、理性的に任務をこなさなければならぬというのに。

この引き金を引けば、少年の小さな心臓は壊れて、確実に止まる。自分の最愛の部下だった彼は――バダツプ＝スリードは、死ぬ。

「サッカーは……」

掠れ、息も絶え絶えな消え入りそうな声で。バダツプは、言った。

「サッカーは……悪などでは、ない。人々を幸せにするもの……平和な世界に必要なもの、だ」

その声が。言葉が。バウゼンの心を、揺さぶる。

「貴方も……本当は分かっているんじゃないのか？」

言うな、と。心の中、もう一人のバウゼンが言った。

頼むからどうか、どうか言わないで。

揺らさないで。迷わせないで。

「……此処で……殺されるとしてもか」

私二、貴方ヲ 殺サセナイデ。

「……貴方が、ヒビキ提督を慕う理由は聴いている。でも……」

少年は光の消えぬ眼でバウゼンを見る。

「大切ならば尚更…殴ってでも過ちを正すべきだ。上官だろうと関係ない…そうだろう」

簡単に言ってくれるな、と思った。

そう思った時点で…答は出ていたのかもしれないが。

「バダツプ、嫌だ！」

「バダツプ！！」

「ふざけんなあつ！！」

「やめて、殺さないで！」

「隊長お！！」

叫ぶ声。嘆く声。悲鳴。怒声。様々な声が満ち、感情が満ちる中。

バダツプが最期に見たのはバウゼンでは無かった。

円堂守、だった。

このままではバダツプが殺されてしまう。何とかしなければ。早く彼を助けなければ。

「離せ！離せ！」

部下達に包围され、押さえつけられて。それでも円堂は暴れた。自分も殺されるかもしれない状況だと分かっていたが、自らの死への恐怖とは別の恐怖で死にそうだった。

目の前で人が殺されようとしている。

共にサッカーをやった仲間が・・・友達が死んでしまう。

そんな事赦されていい筈が無い。耐えられない。だって自分達は、彼らはやっとな未来を取り戻せたのだ。

こんな理不尽な形で終わらせていい筈が・・・筈が。

「黙ってる、ガキが！」

「がっ！」

「円堂君！」

銃身で頭を殴られ、目の前に火花が散った。秋の悲鳴が遠い。芝生に顔面から崩れ落ちる。一瞬、意識が遠のきそうになる。

駄目だ。こんな所で寝ている場合では・・・！

「円堂守」

その時。小さく、微かな筈のその声が・・・円堂の聴覚を揺らした。

束の間、時が止まった気がした。

円堂は顔を上げる。眼があった。バウゼンに倒され、胸元に銃口を押し付けられ・・・今にも殺されようとしている、バダップと。

「生まれ変わったら、今度は同じ時代で・・・」

彼は - - 微笑っていた。

「サッカーを、しよう。誰かを傷つける為じゃない…皆を笑顔にするような、そんなサッカーを」

銃声が、響いた。

バダップの胸と背中から噴水のように血が噴き出して…そのまま彼は、動かなくなり、なった。

「あ、ああ…」

円堂は崩れ落ちる。誰もが呆然と立ち尽くし、座り込んでいた。駄目だ。

いくら彼でも。ゼロ距離で、心臓に鉛玉をぶち込まれて。生きている、筈が。

「嘘、だ」

カノンの声を、円堂は遠い世界の出来事のように……聞いた。

「こんなの、嘘だああ……っ!!」

ミストレ達は動かない。先程まで冷静に対処し、戦っていた筈の彼らが。目を見開き、完全に凍りついて見つめている。

バウゼンに押さえつけられたまま事切れた、バダップの亡骸を。

……何でだ。

カミサマなんて、いない。

改めて思い知った現実は、あまりに残酷で。

……こんなの、あんまりじゃないか。

これからやりたい事がたくさんあったし、彼にだってあった筈だ。無論彼の仲間達にだって。

それなのにこんなに早く。やっと見えた筈の希望がこんなに簡単に絶たれるだなんて。

……これが、絶望。

イービル・ダイス達とは違い。今まで悲劇に見舞われずに済んできた円堂が初めて経験させられた、絶望。近しい人間が目の前で死ぬという、この喪失感。

知りたくなかった。

知らないでいる為に……そうならない為に。自分達は此処にいて、試合に臨み、勝利を手にした筈なのに……。

「さて…オーガの諸君及び雷門の諸君」

悲嘆と絶望に立ち尽くす自分達に、ヒビキが容赦なく告げる。

「バダツプ…スリードは死んだ。貴様らが必死で取り戻したモノは無駄になったわけだが」

男の言葉が、その場にいた全員の胸を抉る。円堂は唇を噛み締めた。そうでなければ怒鳴り散らしてしまいたいそうだった。真っ赤な怒りが喉元までこみ上げ、景色を血の色で明滅させる。

ふざけるな。

無駄だなんて。自分達のでしてきたことが無駄だなんて、お前にそんなことを言う権利があるのか。

もしそうならば、そうしたのは。させたのは。

「…お前は、クソだな」

ずっと沈黙していた響木が口を開く。憎たらしい。忌々しい。そんな感情を隠しもせず。

「たった十四歳の…こんなガキどもの人生弄んで。挙げ句公開処刑か。そうまでして何がしたい。そこまでサッカーが憎いのか」

「理屈ですね」

キラードが静かに…しかし響木以上に憎悪を剥き出して吐き捨てる。

「こんな犬畜生にも劣る真似をして…そうまでして得た平和に何の価値があるのですか？理解出来ませんししたくもありませんがね」

その通りだ、と円堂も思う。

確かに自分達は一般的な、普通の人間の感覚しか持ち合わせてい

ないかもしれない。戦場を生きてきたヒビキやバウゼンのような惨劇など見てはいないし、理解が追いつくとは到底思うまい。

しかし。それでも - - それでもだ。

平和の為に犠牲が必要だなんて、どうにもならない言い訳だ。確かに必要悪はある。何の努力もせず理想は実現しないし、痛みのない教訓は意味がないかもしれない。だけど。

ならば平和の為に犠牲になった者達は - - どうすればいい？その者達はどんな想いで、自分達を踏みじって得た平和な世界で笑う人々を見つめるだろうか。

数多くの人の幸せの為に。一握りの人の幸せを壊していいなんて、そんな筈はない。綺麗事だとしても、そうあるべきとまずは願うべきではないか。

最初からあって当然の犠牲だと切り捨てるなんてそんな非道、無茶苦茶だ。

「お前達の理解など、最初から求めちゃいないさ」

憤り、悲しむ者達を鼻で笑うヒビキ。

「お前達の道は二つに一つ。今此处でサッカーを否定し、サッカーを捨てると宣誓するか…無残な屍を晒すか、だ」

サッカーを捨てなければ、自分達もバダップと同じ末路を辿る、と。分かってはいたが、誰も返事を返せなかった。

サッカーを捨てるなんて、出来ない。だがオーガの者達は満身創痍の上、バダップの死で心を挫かれかけている。ヒビキ達を倒して包囲網を突破するなんて、そんな事 - - 。

「捨てるものか」

円堂ははつとして顔を上げた。『エンドウ』だった。彼は傷ついた肩を庇いながらも、キツとヒビキを睨みつけて……言った。

「俺達は、サッカーを捨てない」

【四十九：ソウル・ウェポン】

本当は、怖かった。

いくらたくさんの悲劇を乗り越えてきたからといって――軍人達に囲まれ、銃を向けられる経験などある筈もない。喉はカラカラ、背中は冷たい汗でびっしょり、油断すれば足の先から震えが来そう。何より撃たれた右肩が痛くて堪らない。

それでも――『エンドウ』は立ち上がり、ヒビキ提督を睨みつけた。

「捨てないさ。もう此処にいる誰一人、サッカーを悪だなんて思っ
てないんだ」

『サッカーは憎むべき悪。：俺達もまた、ずっとそう思っていた』

「変わらなきゃいけなかったのは、自分達の悲運を全部サッカーに
押しつけて：悲劇の主人公気取ってた、俺達だ」

『円堂守と雷門のサッカーが、教えてくれた。大切なのは戦う心、
立ち向かう勇氣であると』

「戦わなきゃ：立ち向かわなきゃ、運命は変えられない。だから俺
達は：あんた達と戦って、未来を切り開いてやる！」

バダップの言葉が蘇る。彼をあんなにも眩しいと感じた理由、その言葉に力を感じた理由は。彼が既に乗り越え、闇から抜け出した者だったからだろう。そうだ、バダップは自分達が辿り着くべき場所に、既に立っていたのだ。

たった一度。たった一度試合をした相手だ。だから雷門の彼らの

言葉を借りるならば、試合をした自分達はもう“友達”だ。その友達が - - 自分達に大切な事を伝えてくれた彼が今、理不尽に命を奪われた。

バダップともっと深い繋がりがあつた者達とは、多分根本的な動機が違うだろう。悲しみも自分の比ではないに違いない。それでも今、『エンドウ』は思う。

このまま立ち尽くし、ヒビキが提示したままの選択に流されたら - - それこそ命懸けで自分達を救ってくれた彼への冒瀆。

その意志を継ぎ、幸せになる為に戦う事こそ報恩。何よりの弔いになる筈だと。

「今、ハッキリと理解した。世界はサッカーを捨てちゃいけない」

『サッカーを、捨てるな。それはお前達を幸せにする魔法なのだから』
『ら』

「サッカーは、みんなを幸せにする魔法なんだから！」

勝つ。どんな試合だって勝ってやる - - この魔法で。

「我々を裏切る気が、イービル・ダイス」

「裏切るも何も。最初から仲間だなんて思ってないくせに」

まあ自分達もそれは同じだったのだが。偶々利害が一致したから手を組んでいたに過ぎない。

「それに俺達はもう… “悪の賽子”^{イービル・ダイス}じゃない」

悲劇の一の目しか出ない賽子ならば、ブツ壊せ。

「俺達は…こいつらと同じ、イナズマイレブンだ！」

『エンドウ』を手当てしてくれた夏末と春奈が。悲嘆に膝をついていた円堂とカノンと秋が。皆がこちらを見ていた…はっとしたような眼で、見ていた。

「…そうだな」

やがて。円堂が、立ち上がった。

「ヒビキ提督。あんたは俺達を取り戻そうとしたモノは無駄になっただって言ったけど。本当に無駄になるのは…俺達が諦めた時だ」

その眼に涙を溜めて。悲しみに、悔しさに心をスタスタに切り裂かれながらも。

「生きる事を。サッカーを守る事を。俺達が諦めた時…バダップは本当に無駄死になっちまう。だから！」

彼は、叫ぶ。

叫び、見据える…己が倒すべき敵を。乗り越えるべき壁を。

「絶対に諦めねーぞ…！サッカーも、未来も！！」

そして、涙を乱暴に拭い…円堂カノンもまた、隣に立つ。

「お前達を許さない…だから絶対、お前達になんか屈しない。これ以上俺達の大事なモノを壊させてなるもんか！」

涙でぐしゃぐしゃの顔で。それでも圧倒的力を前に立ち上がるのは。彼もまた、円堂の血とバダップの遺志を継ぐ者である証拠。

「暴力なんかで。俺達や世界の心まで支配できると思うな…！！」

今。三人の“浄罪の魔術師”が立つ。

生きて、幸せになる為に。

「…どいつもこいつも…救いようのないサッカー馬鹿だな」

呆れ果て…やや苦笑さえ滲ませながら、ヒビキは言った。

「ならば仕方ない…此処で全員、消えて貰う。サッカーしか知らない…素人のお前達がどこまで戦えるか、見物だな」

おいバウゼン、と。ヒビキが部下を呼んだ。しかし何故か百戦錬磨の筈の大佐は、さっきからずっと沈黙したまま動かない。

「バウゼン。聞いているのか。こいつらとオーガを始末しろ」

流石のヒビキも訝しみ、やや苛立った口調で催促する。だがバウゼンは、ヒビキを見なかった。バダップの遺体を抱きしめたまま…

- やがて、声を発した。

「…出来ません」

「なんだと？」

バウゼンが顔を上げる。もはや中年を過ぎたと言ってもいい年に入る男は - 叩き上げの大佐は。泣いていた。

「私には……出来ません」

バウゼンは思う。

今まで何十人何百人 - 否、何千人かもしれぬ数を殺してきた、

自分。銃を撃つのが初めてな筈もない。増してや自分の異名は“散

弾銃の機械兵”ショットガン・サイボーグ。バダップに銃器のいろはを教えたのも自分なのだ。

だが。

泣きながら人を撃つのは - 初めてだった。

「私には……出来ません」

そして、敬愛するヒビキ提督の命令を拒否した事も。

「…ヒビキ提督。これは、何の為の戦いなのですか」

もはや物言わぬバダップの遺体を抱きしめる。華奢な身体は血だらけで、しかしまだ温かった。瞼を閉じた顔は穏やかで、まるでただ眠っているかのよう。撫でた髪は、幼い頃と変わらず柔らかくて

綺麗なままだった。こうしていると彼がまだ生きているかのように錯覚してしまいそうになる。
でも。

「どうして私は…この子を殺さなくてはならなかったのですか」

引き金を引いた瞬間、全てが終わった。

もう少年の心臓は使いものにならない。鼓動は途絶えた。呼吸も消えた。自分が彼を、殺してしまった。

思い知ったのは、もはや取り返しがつかなくなってからだ。

「こうまでして…私達は一体何を得るのですか」

バダップの事は王牙学園の初等部から見てきた。専任の教官、というほどではないが。彼の才能を見込み、付きっきりで訓練する事も少なくなかった。

疲れ果て、ボロボロになった幼い彼を。眠れるまで見守った昔を思い出す。自分にとって彼は、部下というより息子に近い存在だった。バウゼンがかつて戦災で実子を失った父親である事もあるかもしれない。無意識にバダップを、息子の代わりにしていた事も否定しないが。

世界が平和になったとしても。

その世界にはもう…この子がいない。

バダップの身体から力が抜け、その鮮血を浴び、その身が物言わぬ軀と化した瞬間 - - 理解した。理解させられてしまった。

自分が欲しかった景色は。望んでいた世界は。

こんなに血に汚れた - - 悲しいものじゃあ、無かったのだと。

「サッカーがなくなれば戦争もなくなると?…そんな訳が、ない…」

今。パウゼンは真っ向から否定した。信じていたはずの人の思想を、拒絶してみせた。

「寧ろ…サッカーを嗜む円堂達は、こうして暴力に屈しない心を持っている…！立ち向かう勇氣がある…！我々が逃げ出した現実には、彼らだけが向き合ってる…違いますか！？」

「パウゼン、お前…」

「私も円堂守の呪いにかかってしまったのかもしれないが…そう思いたければ思えばよろしい」

感情が零れ、溢れて止まらない。パウゼンは泣いた。子供のように泣き、少年の亡骸を掻き抱いた。

「彼らから…世界からサッカーを奪う事は！戦う心を奪う事に他ならないのではありませんか！？」

間違っていたのは自分達だった。嗚呼…そうだ、前提がまずねじ曲がっていたのではないか。

サッカー云々以前の問題だ。どうして自分達は自分達を、絶対的に正しいと信じたのか。正義なんて概念なんか人の数ほどあり、その度悪も姿を変える。サッカーを“絶対悪”と謳った時点で、何かがおかしかったというのに。

信念を貫く事と。過ちを認めずに盲目的に突き進む事は違う。

薄々気がついていていた筈なのに…ハッキリと理解させられたのは、円堂達の言葉を聴いてから。バダップを殺してしまったからだった。どうしてももっと早く。もっと早く…自分は。

「私はもう…愛しい部下達を殺せない…たとえヒビキ提督、貴方の命令でも…！」

抱きしめた亡骸がどんどん温もりを失っていく。それがまた悲し

くて悲しくて涙が溢れた。

「もうたくさんだ…これ以上、私は嘘など吐けない…！」

もうたくさんだ。たくさんだ。

こんな想いをするのも - - 大切な者の血で手を染めるのも。間違いに気付きながら、自分を誤魔化し続ける事も。

「…ならば、バウゼン。お前は どうする？」

沈黙の後。ヒビキが口を開く。

「我々を裏切り、刃を向けるか？」

刃を向ける。

その一言に、ずっと背中 of 芯が冷たくなった。命令拒否。それは軍において赦されぬ事。無論どんな事にも例外はあるが、今がその“例外”にあたらぬ事など火を見るより明らかだ。

愛しい部下であるミストレ達を。真の強さを持った円堂達を。殺すなんてもう、出来ない。だが。

自分にとって恩師と呼んでも差し支えない上司に - - ヒビキ提督に。謀反を起こすなんて、そんな事 - - 。

「…：… 申し訳ありません、ヒビキ提督」

そして。

バウゼンが選んだのは。

「この子を殺した私に、仇討ちなどする資格もなく…この子の遺志を継ぐ権利もない。何より貴方に楯突くなど有り得ない」

愛銃の銃口を、自らの顎下に当て。

「しかし…本当の強さを持った彼らを。間違った正義で断罪する事も出来ない。ですから」

諦めと共に。

「一足先に、退場させて頂きます」

自害を - - 宣言した。

「ば、バウゼン大佐…!？」

兵士達がざわめく。万が一の為にこの地下修練場に配置され、オーガを戦滅せよと命じられた彼らは。半分がヒビキの部下であり、半分がバウゼンの部下だった。動揺したのは無論、後者だ。

彼らにも忍びなく思う。自分の感情と都合だけで振り回し、拳げ句目の前で自決するなど。本来あつてはならない事。彼らの多くが自分を慕い、信じて着いてきてくれると分かっているから尚更だ。けれど。

自分に残された選択肢はもはや無いに等しい。自分には雷門やオーガの子供達は殺せない。そしてヒビキの事など殺せる筈もない。つまりは誰も殺せない。

「私は…貴方の事もオーガの子供達も殺せない。他に償う方法も、無い」

負け犬と呼ばれても構わない。バウゼンは引き金に指をかけた。自分は此処で、この戦場から降りる。これ以上耐えられない現実

を直視する前に――。

「アンタは、卑怯だ」

その声に。バウゼンはゆるゆるとその方を見る。

ミストレだった。オーガの副隊長を務めた少年は、泣き腫らした眼で――こちらを睨みつけていた。

「逃げるのか。そうやって自分の心からも…バダップの願いからも――」

魂を打ちつけられた気が、した。

【五十：エンジェル・ボイス】

知らなかった事が、たくさんある。

バダップが死地に送られ、ボロボロになって生還してから……ミストレにとってはヒビキもバウゼンも憎い相手に成り下がった。彼らの思想に、一時とはいえ共感していた自分を恥じた。

自分は生まれてから死ぬまで、自分だけの味方。戦うのはその己と、己が愛しいと思う存在の為だけ。

多分自分は本当は他の誰よりも、軍人として相応しくない存在だったのだろう。ただ今まではそんな本性を上手に隠して生きてきただけだ。そんな自分勝手さこそ、己の強さの根源である事も知っている。

そんな自分にとって。バウゼンは恩師ではあったが、今や殺してやりたいほどの存在だった。否、殺すだけでは飽き足りない。バダップの想いを、誇りを踏みにじり。運命を弄んだ拳げ句殺した男なのだ。

- - 酷いよね、バダップ。

やっと見えた筈の希望の光。

やっとまたあの頃と同じように、みんなで馬鹿騒ぎをして、サッカーをして、喧嘩して……そんな日々に戻るの思った矢先。

あっさりと未来は壊された。希望は打ち砕かれた。

これでもう、二度と。願いは叶わない。

- - 酷すぎるよね……こんな運命。

こんな結末では。このまま何もかもが終わったら……あまりに報われないではないか。

バウゼンの事が憎い。憎くて憎くて堪らない。

知らなかった事は確かにある。

全ては彼さえも望んだ未来で無かった。彼も本当はバダツプを殺したくなかった。ただヒビキに従っただけ、軍人としてであろうとしただけだった。それはミストレにとっつは意外で、予想外だった事だけ。

ならば尚更許せない。どうしてバダツプを殺してしまう前に、逆らう勇気を持たなかった？涙を流すほど悔いるなら、何故その前に悲劇を止めようとしなかった？何もかも今更過ぎるではないか。彼にも勇気さえ……戦う勇気さえあったらこんな事にはならなかったのに。

そして何より。今彼は、バダツプの願いを無視して、ただ現実から逃げ出そうとしている。それがどうして赦せるだろう？

「ふざけるな」

怒りも露わに、ミストレは言い放った。

「罪だと思っなら生きて償え。勝手に死んで……楽になろうとすんじやねえよ……！」

這いずり回って、一生を賭けて贖い続ける。それが最大の罰であり、当然の義務ではないか。

ミストレの気迫に気圧され、バウゼンの部下達がたじろぐ。彼らも哀れなものだ。当たり前のようにバウゼンの指示を信じ、従ってきたのだろうに……そのバウゼンが今自らの過ちを嘆き、命を絶とうとしている。果たして自分達はどうするべきか、何に従うべきか、迷いに迷っている事だろう。

「思い出せ…バダップはアンタに何て言った？」

ずるり、と。ろくに動かない身体を無理矢理引きずり、ミストレは一步前に踏み出す。その気迫たるや、迷いのあるバウゼンの部下達が思わず道を開けてしまうほどだった。

「バダップは多分俺達より、アンタを理解してたよ」

『…貴方が、ヒビキ提督を慕う理由は聴いている。でも…』

「アンタが薄々過ちに気付きながらも…提督に逆らえない理由も。アンタの立場ってヤツも」

『大切ならば尚更…殴ってでも過ちを正すべきだ。上官だろうと関係ない…そうだろう』

「それでも…大切な人なら尚更、間違つたままの道を進ませていい筈ない…そう言ってたじゃないか!!」

試合中のダメージと先程の戦闘のダメージ。

肋は二三本イカレ、右肩と右脇腹には肉が見えそうなほど深い切創。左太股左上腕と脹ら脛には銃創。失血と激痛のせいで今にも意識が遠のきそうだ。

それでもミストレは歩いた。一步踏み出す度地面に血の華を咲かせながらも。バウゼンと、バウゼンに抱かれたバダップの遺体に向かって。

「アンタがそんな卑怯な真似ばかりするから…自分の気持ちに向き合う勇気も無かったから!こんな悲劇が起きたんじゃないか!!」

長い時間をかけて。バウゼンの前に立つ。息は絶え絶えで、今にも倒れそうになりながらも――ミストレは叫んだ。想いの限り。願いの限りに。

「立てよ！目を逸らすなよ！耳を塞ぐなよ！！…これ以上…悲しい事が起こらないように…！！」

これ以上の悲劇ってどんなだ、とも思う。こんな残酷な世界に、望みを賭けるだけの希望なんてあるのだろうか、とも。

未だに悪い夢を見ているかのようだ。

目が覚めたら全て嘘になっていくんじゃないか。くだらない理由でサンダユウが部屋に飛び込んできて、エスカバの大音量の目覚ましで叩き起こされて、自分は不機嫌で。でもいつの間にかバダツプが朝ご飯を用意して待っていてくれて、自分はエスカバと喧嘩しながらも食べて、講義室へ急いで――。

そんなありきたりで。退屈で。でも幸せだった朝が来るんじゃないかと期待している己がまだどこかにいる。そんな期待などするだけ虚しいと知っていながら。願えば願うほどより傷が深くなるのを知りながら。

それでも。悲しいほど理解させられているから、今立っている。今こそが現実。やっと救えた筈のバダツプは死んだ。軍を敵に回した自分達も、明日の朝日が拝めるかすら分からない。

だからこそ、祈る。

これ以上の惨劇は起こしてはならない。起こるとしたらそれは。

「俺達が…アンタが！バダツプの死を無駄死にして…何にも生かさないで死ぬ！！それ以上の悲劇があるのか！！」

「ごめんなさい。」

たった独りで逝かせてしまつて。
でも自分達がすぐ後を追つたら、きっと貴方は悲しむから。

「後悔してるなら…終わらせてみせる！全ての悲しい事を…悪い夢を！！」

だから、生きるよ。

一秒でも長く、足掻いて。足掻き抜いて。

「それがきつと…俺達の隊長の、願いだ…！！」

そうだよね。

バダップ。

「わたし、は…」

バウゼンの手から、銃が転がり落ちる。ミストレは間近で、その
かいなに抱かれた少年の亡骸を見た。

綺麗な死顔だった。今にも寝息が聞こえてきそうなほどに。

- - ねえバダップ。君は、この十四年の人生…幸せだった？

あまりにも短すぎる時間。血にまみれ、大人達のエゴに振り回され、テロリストの欲に汚され、策略の内に命を絶たれ。短く、あま

りにも辛い事だらけの人生だっただろう。心の弱い者ならば気が違ってもおかしくないほどに。だけど。

自分の記憶の中で、彼は微笑っていた。感情を表に出すのが下手で、陰では鉄仮面だと揶揄されて。皮肉にも彼の涙を見たのは、あの残酷な映像が初めてで……笑う事も、本当に少なくて。

それでも、自分達には笑いかけてくれたのだ。

『大事なものは長く生きる事じゃない。短い人生で、どれだけ多くの証を遺せるかだ』

確かに。確かに。微笑っていたのだ。

……もしかしたら俺達もすぐ、君の処へ行く羽目になるかもしれないけど。

身を屈め、眠るように事切れているバダップの髪を撫でて。ミストレは心の中、一人誓う。

……少しでもそれが先になるように。精一杯生きるから……戦うから。

戦う勇気を、忘れない。

円堂が、バダップが教えてくれた事を、無意味になんかしらない。絶対にしない。

「見ていて、バダップ。君が愛したオーガの誇りを……ミストレーネ
「カルの生き様を……！」

今はもう、これ以上の涙は流さない。

子供のように声を上げて泣くのは、全てが終わってからだ。

「ドレイス」バウゼン教官。何一つ選択出来ないと言つなら…そこ
でいつまでもへたり込んでいればいいさ」

ミストレはキツとヒビキを睨みつける。

「奇跡、起こしてやろうじゃん。想いの力ってヤツでさ…!!」

誰が言った言葉だろう。

奇跡は起こるモノではない。

人の手で、起こすモノだと。

「俺達も…戦うよ」

立ち上がったのは「ヒロト」だ。

「どっちみち俺達が過去に還る為には、軍のタイムワープシステム
のある場所まで行かないといけない。辿り着けさえすれば後は自力
でなんとかするさ」

「そういえばお前の特技は“ハッキング”だったな」

苦笑しながら、「ゴウエンジ」が做う。

「何が変わった訳じゃないかもしれない。帰ったところで俺達に待
つのはまた同じ運命かもしれないが」

『トビタカ』がヒビキ達に鋭い眼光を投げる。

「悲劇に溺れるだけでは…万に一つも運命は変わらねえ。…響木監
督や死んだみんなの想いに報いる為にも俺は…生きて、幸せってヤ
ツを掴んでやる…!!」

『フィディオ』が、『ソメオカ』が、『マックス』が、『カゼマル』が、『キドウ』が、『フブキ』が、『ハンダ』が、『トラマル』が……そして、『エンドウ』が。

「絶望を…打ち破る！」

イービル・ダイスが…否、イナズマイレブンが立ち上がる。
戦う勇気を持って、今。

「…そういう訳だ、円堂守」

ミストレは円堂達を振り返る。

「オレ達オーガとイービル・ダイスで、ヒビキ達を抑える。その間にお前達は学園の外に脱出しろ。エスカバ、途中までこいつらの道案内は頼む」

「イエス、サー」

「ま、待てよ！！」

講義の声を上げたのは風丸だ。

「お前達だけ置いて逃げるなんて…そんな事出来るわけないだろ！俺達だって戦うっ！！」

「そうだ！」

風丸の言葉を引き継ぎ、円堂が叫ぶ。

「お前達全員…俺達の仲間なんだ！見捨てるなんて出来ない！！」

仲間。その言葉が胸に沁みいる。

ミストレは小さく笑みを浮かべた。まったく…どいつもこいつもお人好しなんだから、と。

「怪我人だらけの素人が…何言っちゃってんだか」

言葉の内容は辛辣だったが。

自分でもびっくりするほど、優しい声が出た。

「足手まといは要らないよ。現役軍人ナメないで。伊達に前線生き抜いて来ちゃいないんだ」

もう…円堂守への憎しみはない。

彼が消えただけで、歴史は大きく秩序を失う…今更ながらその理由をハッキリと理解させられる。

円堂守は太陽だ。世界を、闇に堕ちた人の未来さえ照らし出す太陽なのだ。太陽が失われれば夜が明けなくなってしまう。だから彼は何度沈もうと、何度でも昇り続けなければならない…今までそうしてきたように。

「…大丈夫。オレ達は死なないよ」

彼は世界に必要なだ。

その心を、魂を。いつか次の世代へ繋ぐ、その時まで。いつか

「どうか…信じて。オレ達を。オーガを」

さようなら。

きっともう、会う事はないだろうけれど。

「生きな」

生きなさい。

いつか空に還るその時まで。

もう一度かの人に巡り逢うまで。

「……ッミストレ！」

円堂はぐつと唇を噛み締め……やがて、叫んだ。

「いつかきつと……きつと！またサッカーしようぜ！」

そして彼と雷門イレブン、キラードとカノン、エスカバが走り出す。修練場の出口に向けて。

……サッカーやろうぜ、か。

ミストレは笑う。そして銃を構え、呟いた。

「素敵な言葉だね」

【五十一：シャイニング・ウィザード】

爆発音。修練場の扉が吹っ飛ぶ。それはジニスキーの投げた手榴弾によるものだった。吹っ飛んだ扉がヒビキの部下達にぶつかり、怯ませるのも彼の計算のうちだろう。

その間に円堂達が壊れた扉から通路に出る。脱出の直前、一度だけ秋がこちらを振り返ったので――ミストレは安堵させるように、微笑んでみせた。

――心配しないで。オレ達は、負けないから。

目だけの合図。それでも何かは伝わったのだろう。彼女は目に涙を溜めて頷き、走り出した。もう振り返る事なく。

――君達に、逢えて良かった。

失われた命があり、日常があり、幸せがあり。その上でなおミストレは思う。

これで良かったのだ。

本当に強くなる為には――バダップとの約束を守る為には。

「オレ達が世界を、変えるんだ」

過去ではない。現在という名の現実を。

「チーム・オーガ！戦闘開始！！」

「イエス、サー！！」

「見せる、稲妻魂！！」

「おー！！」

オーガメンバーとイービル・ダイスが、ヒビキの部下達の前に次

々飛び出していく。

「追え！」

円堂達を逃がすまいと、兵士達が出口へ走る。その前に立ちふさがったのはザゴメルとブポー、ゲボーだ。

「此処から先：一歩たりとも進ません！！うおおお！！」

ザゴメルの武器は、巨大なハンマー。重さ数トンのそれを軽々振り回すのは、彼の剛腕あつてこそ。そしてそれは掠るだけで十分相手に深刻なダメージを与えるのだ。

腹に一撃をくらった兵士は口から潰れた内臓を吐き出して悶絶し、頭を掠った兵士はそのまま頭蓋と脳の一部を持って行かれる。サブマシンガンで中距離から撃つ者もいるが、ザゴメルの超合金ハンマーは頑丈な盾にもなるのだ。そこらの銃撃ではびくともしない。

隙を見てザゴメルの脇から飛び出そうとした者は、鉄線のトラップに引っかけかかって感電させられた。ブポーが仕掛けたものである。どうにかトラップを避けた者も、ゲボーの電気鞭の一撃で感電死する。見事なコンビネーションだ。

見た目は愛らしい双子も戦場では悪魔と化す。彼らは電撃で敵を仕留めるのを得意としていた。トラップマスターのブポーと電気鞭のゲボーである。

「オーガの誇る鉄壁ディフェンス！ナメんなよ〜！」

「ナメんなよ〜！」

けらけら笑いながらブポーとゲボーが言う。

チームオーガのメンバーは、基礎能力だけで見ても他を凌駕するが、特に恐れられるのはそれぞれが卓越した武器の技能を持つことだ。

ミストレは格闘技。

エスカバは短刀。

ザゴメルはハンマー。

ブポーはトラップ。

ゲポーは電気鞭。

サンダユウは長刀。

ジンスキーは爆発物。

イツカスは遠距離射撃。

ダイツコは鉄球。

ドラツへはサブマシンガン。

そして中でも恐怖の象徴として恐れられていたのが、銃器を自在に操るバダツプである。誰もが何かしらの達人でありエキスパート。その上で連携力でも群を抜く。軍史上最強の特殊部隊と呼ばれる所であった。

…もう、隊長はいないけれど。

彼以外にオーガの隊長は有り得ない。ミストレですらあくまで“副隊長”だと、自分自身ですら分かっている。それほどまでに彼の存在は大きなものだったのだ。

いくら権限を引き継ごうとも変わらない。隊長の空席は彼がそこに生きた証。その上で…自分達は彼がいずとも戦えることを証明する。バダツプに心配かけないように。安心して天に昇れるように。

「これが俺達からのレクイエムだ…なんてね」

そして今はオーガだけではない。もう一チーム、頼もしい味方がいる。

「正義の…鉄拳、G5!!」

『エンドウ』の必殺技が、兵士達を薙ぎ倒す。その顔が苦痛に歪み、傾いだ。撃たれた肩の傷に響いたのだろう。

その背中を狙う兵士に気付き、ミストレは拳を振り上げる。

「はいはい、邪魔だよ邪魔っ」

悲鳴さえ上がらない。首を折られた身体がどう、と音を立てて崩れ落ちる。パタパタと血の滴が散った。ズキリ、と体中の傷に響き、呻くミストレ。

「大丈夫か？」

「そりゃこつちの台詞。素人なのは分かってるけどね、背中側の注意を怠るなつての」

「次から気をつけるよミストレ。ま、ある程度は慣れてないってことで勘弁」

「それで死んだら意味ないでしょ。まったく」

しかし、憎まれ口を叩きながらも、ミストレは彼らの能力を高く評価していた。戦闘経験はない筈なのに、なかなかどうして様になっているではないか。足手まといになるどころか充分に戦力だ。

特に『エンドウ』。きつと鍛えれば自分に次ぐ拳士になれるだろう。・・無論、この苦境を打破出来たららの話だが。

「そろそろ頃合い、か」

突然。『キドウ』が拳を振り上げ。・・自らの脇腹を殴打した。すると『カゼマル』や『ソメオカ』達も意図を悟ったように、同じ行動をする。

「何だ？」

ミストレの疑念に気付いてか、『カゼマル』が苦笑して言う。

「コントロールパネルを破壊したんだ。これでもう…俺達アンドロイドが遠隔操作されることはない」

「その代わり、充電池も壊れたからな。時間が経てばいずれ俺達は充電切れで動けなくなるだろう」

『キドウ』が彼の言葉を引き継ぐ。その意味するところを悟り、息を呑むミストレ。

「たとえ偽物でも…俺達の心は俺達のモノだ。創られた記憶だって俺達にはたった一つの真実なんだ」

他の誰かに奪わせたりしない。

彼の眼には強い決意と覚悟があった。

「俺達は俺達のまま…最期まで生き抜いてやる。『エンドウ』の為に…そして俺達自身の為に！」

『キドウ』を先頭に、アンドロイド達が駆け出していく。素材が一般人とは思えぬ俊敏な動きで兵士達を翻弄し、必殺技を駆使して一人ずつ確実に倒していく。

やがて『カゼマル』が叫んだ。さあ、俺達のサッカーをしよう…と。

「必殺タクティクス…真・ダンシングボールエスケープ！」

必殺タクティクスが炸裂する。彼らの巻き起こす風は嵐になり、カマイタチになり、ハリケーンになり…敵を次々と切り裂き、倒していく。血煙が上がる。悲鳴が上がる。それでも彼らが止まることはない。

ダメージを受けるのはヒビキの部下達だけではない。元は素人なのだ。攻撃の防ぎ方、避け方、受け身の取り方…様々な面で未熟

さが露呈する。

『マックス』の足首を銃弾が貫いた。

『フィディオ』の腕を軍刀が切り裂いた。

『キドウ』の腹と『ヒロト』の肩から血飛沫が上がった。

『エンドウ』の手がみるみる血だらけになっていった。

それでも彼らは止まらない。ただ運命を、未来を切り開く為に戦い続ける。どんな痛みも、恐怖にも耐えて。

・ ・ ・ 見るよ、ヒビキ。アンタも目を逸らさないでこいつらを見る。

ボロボロの身体で。サンダグウが振るった刃が兵士の首と胸を切り離す。その彼の背中に容赦なく突き刺さる銃弾。それでもサンダグウは歯を食いしばって反撃し、狙撃手を一刀両断する。

その向こうではダイツコが鉄球を振り回し、次々と兵士達を肉塊に変えていった。頭から大量に血を流し、意識さえ怪しくなりながらも。

・ ・ ・ こいつら、強いだろ。何でだと思っ？

兵士達の統制はあまりにとれていなかった。バウゼンが明確な指示を出さないまま、動きを止めてしまった為である。だがそれを考慮しても、イービル・ダイスとオーガの善戦はめざましいものがあったらう。

誰もが満身創痍で ・ ・ ・ しかし諦めていない。諦めないでいられる。それは、何故か？

・ ・ ・ 戦う勇気を持つてるからだよ。

ミストレはふらつきながらも、襲ってきた相手に拳を叩き込む。顎を砕かれた男は悶絶して地面を転がる。それを一瞥して、ミスト

レはヒビキを睨みつけた。

- 無駄なことなんか一つもない。円堂守に教えられた“勇気”とバダップがくれた“希望”が…今の俺達を支えている。

だから。

「それでもアンタは…サッカーはこの世界を滅ぼすだなんて思ってるわけ？」

声に出して訊く。ヒビキは答えない。ミストレはさらに続けた。

「アンタも実は…イービル・ダイスと同じだったんじゃないの？サッカーが偶々自分の幸せを奪う契機になったから…自分の悲劇を全部サッカーのせいにして逃げてんじゃないの？」

だが、イービル・ダイスの彼らの方がまだマシだ、とミストレは思う。

何故なら彼らは、憎み嫌いながらもサッカーを捨てなかった。サッカーに真正面から向き合っていた。もがきながら、苦しみながら、自分の足で立ち自分の手で答えを掴もうとしていた。

それに比べて、彼のやったことは何だ？

「全部、全部、全部！他人任せじゃないか！最初は俺達、俺達が刃向かったら次はイービル・ダイスだ。自分自ら動こうともしない、サッカーに向き合おうともしない！」

ミストレは真っ直ぐヒビキに拳を向けて。断言する。

「そんなアンタに…世界を変えるなんてこと、出来るもんか！」

世界が凍りついたかのように思えたのは……一瞬。次にはヒビキは、弾かれたように嗟い声を上げていた。

「この俺にそこまで言うか……いいだろう！」

ヒビキの合図に、彼の後ろから新たな兵達が現れる。ヒビキ自身も重たい銃を握った。

「俺とお前達……どちらが世界を導くに相応しいか！ハッキリさせようじゃないか！！！」

遠くで爆音や銃声が響いている。イザという時の為、安全な脱出ルートを確認しておいたオーガは流石だ。カノンは心底感心して、先に行くエスカバを見る。

……強いよね、君達は。

油断するとまた涙が出る。バダツプを、救えなかった。救えた筈なのに、守れなかった。後悔で死んでしまいたいそうさ。もう一度サツカーをすると……そう約束した筈だったのに。

……駄目だ。まだ……まだ泣き叫ぶには、早い。

王牙学園の地下修練場で始まったこの戦いは。大きな革命の波となって、この国を動かす契機となるだろう。――何故なら、試合の様子は中継で全国ネットに流れていたのだから。

何が正しくて何が間違いか。実のところそれはまだ誰にも分からない。それでもサッカーを愛する者達は、試合で心を動かされた者達は。それが正しいと信じて戦うのだろう。

たとえ絶望ばかりの、修羅の道であったとしても。その先に幸せな未来が待つと信じて。

「このダクトを抜ければ、キラード博士の研究所前に出る」

どれだけ歩いたか。狭い通路の奥まった場所、金網を外しながらエスカバが言う。

「研究所まで行けば、タイムワープで元の時代に戻る。俺の案内は、此処までだ」

「エスカバ……」

彼は修練場まで戻り、ミストレ達に加勢するつもりなのだろう。

――だったら俺は……俺のすべき事は。

「ひいじいちゃん」

カノンは考え――結論を出した。真っ直ぐに円堂を見つめて、言う。

「俺も……みんなを助けに行く。だから此処で、お別れだよ」

彼らは自分の、大切な仲間だ。

だから共に戦う。誇りを賭け――全ては幸せに生きる為に。

【五十二：スタンドアップ・ヒーローズ】

“ 疑う事無き 哀れな勇者よ
抗い続ける 愚かな道化よ ”

「ミストレって歌上手いんだな」

「そう?」

「うん。キレーな声してる」

「ありがと。でも出来れば可愛い女の子に言われたかったなあ」

「そりゃ悪かった。ここは俺で我慢してくれ」

「うーんいくら美人でも男は勘弁」

ミストレが小さく歌を口ずさみ、『フィディオ』がそれについてコメントする。バウゼンはそれを、どこかぼんやりとした気持ちで見ている。

長く前線に立っていた自分は知っている。戦場において軽口を叩き合う事は、無事を確認する為の挨拶であり。まだ軽口を言う余裕があるから大丈夫、と己や味方を励ます行為でもある。

そして歌は。希望を紡ぐもの、そのものだ。苦境にあればあるほど歌う者は増える。絶望から抜け出し、光を見つめる為に。まだ戦えるのだと言い聞かせるように。

「それ何て歌なんです? 未来の歌?」

「バダップから教わっただけだから俺もよく知らないんだよね」ト
ラマル』。案外古かったり: あ、もしかしたらバダップの自作かも
!?」

「そりゃすげえ! あの隊長が作曲かよ! ?」

「いやいやイツカス君。これマジ」

「なになにサンダユウ君、何か知ってるわけですか」

「偶々な、バダップが歌ってんの聴いた事あんだわ。すっげえ上手かった。で、よもやと思っでこっそり部屋覗いたら、引き出しの中に手書きの譜面がこっそり！」

「へえーふうーん。“オレ達の”部屋勝手に入って物色したんだ？へえー…」

「い！？あ、それはそのだなミストレ…っ」
どうしてだろう。

とても楽しげでさえある会話なのに…どうして涙が出るのだろう。

確かに今は戦闘中。軽口を叩きながらも彼らは必死の形相で武器を奮っている。自分と敵と味方の血にまみれながら。だが、理由はそれだけでないと分かっている。

聞こえて来るからだ。軽口に隠された、彼らの本当の心の声が。

『一度でいいから、バダップの歌を聴いてみたかった』

彼らが楽しげであればあるほど思い知る。彼らが幸せであったことを。それを奪い去ったのが自分達である事を。

- - 泣くな。これ以上無様な姿は晒すな。

言い聞かせ。言い聞かせ。亡骸を抱く腕に力を込める。

「今の私に…彼らの為に泣く資格など無いんだ…」

だけど。心の奥底からもう一つ声がするのである。

だからといって。このまま何もしていない気なのか？本当にそれでいいのか？と。

バウゼンは考える。正しい事が何一つ分からない世界で、ただ考

え続ける。

“ 独りきりの舞台挨拶

仮面はいつも標準装備

貴方の姿を身に纏い

大人の顔演じ繕い

悲哀にすら理由が要るさ

別れ際の君の虚しさ

最初から俺らは不在だ

赤信号点滅中だ”

Stand up!

この脚はまだ折れちゃいない

答えを探求中だ

だから足掻いてるんだろ

たった一つ信じたネガイは消えない

世界が手繰る糸は切れないとしても”

お別れ。その言葉が円堂の胸の奥に重く落ちる。

「カノン…」

こんな時。何て言うべきかが分からない。驚くほど言葉が出てこない - 感情をそのまま表すのは、得意中の得意だと思っていたのに。

行くな、と。引き止めるのが正しいのか？ああ、仲間の安全を想うならばそれも間違いいのではないのだろう。 - 究極的な意味で正解ではないのだとしても。

だが、カノンが生半可な覚悟でそれを言っているわけでないのは分かっている。必ず生きて帰ると、少なくとも本人はそう決意している事も。それでも迷うのは - 迷ってしまうのは。

バダップが、死んだからだ。

血だらけで、眠るように事切れた姿を思い出す。もう失いたくなくなかった - 誰一人。あんな想いはもう、たくさんだ。

「ミストレ達の事も…イービル・ダイスのみんなも。俺にとっては大事な仲間だ。仲間として信頼してる。此処でひいじいちゃん達と逃げる事が、みんなを見捨てる結果なんて…思わない」

半分嘘で半分本当だろう。 - そんなカノンの言葉。きっと理性では分かっている。身を挺してミストレ達が自分達を逃がしてくれた事の意味。彼らは見捨てられたなんて微塵も思わないだろうし、カノンが助けに戻る事を善しとしないだろう事も。

だけ。

万が一 - 万が一。彼らがバダップのようになってしまったら。

その結果自分達だけ生き残ってしまったら。その恐怖と罪悪感が拭い去れないに違いない - 円堂と、同じように。

「だけど…やっぱり俺は、あそこにいなくちゃいけないと思う」

「…どうして？」

「…うまく…言えないんだけどさ」

静かに問い返す一之瀬に、カノンは頭を掻きながら、苦笑する。

「これは多分…大きな変革になる。サッカーにとっても、世界にとっても…俺達にとっても」

だってあの試合は中継されていたんだから、と。カノンは言う。

「世界はきつと、変わる。それがどんな形かは分からない。もしかしたら今より酷い時代が来るかもしれない。…だけど」

真っ直ぐ。曇り無い眼でカノンは円堂を見て。

「みんなが幸せで、一人でも多くの人が笑顔になれる世界になる。そう信じて…俺はその時、その場所にいなくちゃいけないんだ」

笑った。

恐怖を、絶望を押し込んで。精一杯の希望の光で。

「カノン…俺は…」

円堂は考える。

考えて考えて沈黙して…答を、出す。

「俺はもう、誰にも死んで欲しくない」

「俺もだよ」

「本当はバダップを死なせたくなんて無かった。生きていて欲しかった」

「そりゃそうさ」

「何も出来なかった。目の前であいつが殺されるのをただ見てただけで…そんな自分が悔しくて」

「うん」

「無力で情けない。これ以上悲しい事が起きたら耐えられない…それしか考えられない」

「…うん」

「だから、カノン」

狡くて他人任せだなあと我ながら思う。それでも円堂は、願った。

「もう誰も死なせない。お前自身も、オーガのみんなもイービル・
ダイスも。お前にそれが、誓えるか？」

全ての悲しい事の。

全ての悪い夢の――終わりを。

「うん。…誓うよ。円堂カノンの名にかけて」

カノンはそう言って力強い笑みを浮かべた。
その言葉が。その笑顔が、全てだった。

“ 幼い眼に映った背中

貴方に何を強いた彼方

スライグマ
聖痕を刻んで逝った

笑顔もはや光に散った

何もかもが遅すぎたのか
君に未だ期待するのか
振り下ろした刃の先に
狂ったフリの骸の果てに

Stand up!

この声はまだ枯れちゃいない
希望を発掘中だ

だからもがいてるんだろ
たった一つ叫んだコトバも咲かない
カルマが廻る あの約束すら置いて”

ミストレが唄う。銃声と悲鳴、爆炎と血煙の中で。誰もが満身創痍で、希望を手探りするような場所で。

その声が綺麗だと思ったのは『フィディオ』達だけではなかった。ヒビキもまた魅入られていた一人だった。絶望の中にあつて尚、希望を紡ぐその音色に。

- 本当は…確かめたかったのかもしれない。

ヒビキは思う。戦場で一人、思う。

- 俺は間違つてない。そう信じたかったのかもしれない。

イービル・ダイスのメンバーの一人である『トビタカ』は。仲間
の狂乱と惨劇 - そして自らをサッカーに導いた師の死から闇に墮
ちた。

本来の歴史において、『トビタカ』の仲間の暴走行動は起こらな
い。だが、その実一つだけ歴史に違わない事があるのである。それ
が彼の師、『ヒビキセイゴウ』の死である。

円堂達の世界でも、同じ。元々持病のあつた響木は、彼らの世界
から数年〜十数年の後に病死する。これはまず確定的未来だ。彼の
年齢を考えれば“若くして”というほどではないだろうが - 問題
は彼の死んだ原因と、その後の出来事である。

サッカーとサッカーを愛する雷門イレブンの為に。魂を削るよう
にして男は生き、そして死んだ。その闘病の様子を見ていた妻や子は
願つたという - もうこれ以上サッカーに関わらないで欲しい、と。

響木が死んだ後。収入をなくした家族は極貧に喘いだ。折り悪く
その年丁度大きな震災が起こり、日本はドン底の不況に落ちていた
のだ。老いた妻は無論、学生の娘と息子にも働き口は無かつたので

ある。

そして起こるテロ事件。

あのエイリア学園を模倣した犯罪組織だった。サッカーは凶器になる。- - そう気付いた彼らは日本中を荒らし回り、恐怖を振りまいた。響木の妻と娘もそのテロリストに殺されている。

サッカーは、悪。犯罪組織が逮捕されて尚、日本にはそんな風潮が残った。それを変えたのは、三代目イナズマイレブンの救世主、松風天馬という男である。

彼と彼のイレブンは、新たなサッカーの形を世間に広めた。不況と治安の急速な悪化で落ち込む日本経済にもたらされた娯楽。それがエレメンタル・サッカーだったのである。苦境に喘ぐ者達は皆その娯楽に縋った。- - まるで何かから逃げるように。

- - サッカーはこの国にとって希望の光のように扱われた。だが。

響木の息子。- - つまり『ヒビキ』の祖父は怒り狂った。自分と父の何もかもを奪ったサッカーが、世界の救いであるかのように扱われる事が。

サッカーを憎め。壊せ。この世から消せ。

祖父は死ぬまで息子や孫達に言い続けた。その意志を継いだ父はサッカーを世界から消すべく暗躍した後、戦禍の中で若くして亡くなった。その全てを見た『ヒビキ』もまた誓ったのである。- - サッカーをこの世から消す事を。

「サッカーは世界を滅ぼす。世界を不幸にする」

声に出すと、気付いたサンダユウが振り返り。- - 哀れむような眼でこちらを見た。もはや不快とすら思わなかった。ただ胸の奥が、少しだけ痛んだだけで。

「私はもはや、この正義を貫く以外に道は無いのだ」

だが……こうも思うのである。

荒れ果てた世界の中。もしも円堂守がこの時代の人間であったなら。

「もっと早く円堂に出逢っていたら……何かは変わったのかもしれない」

“Stand up!”

この脚が折れたとしても

光に焼かれ爛れ

闇に食われて溶けても

たった一つ抱いたモノを忘れるな

閉じた未来も力づくで抉じ開け

Stand up!

魂はまだ砕けない

明日を宣言中だ

だから走り続けるんだ

たった一つ誓ったオモイは消えない

絆よ何時か何処かで巡ろう きっと”

私もカノン君に同行します、とキラードが言った。タイムワープマシンの起動の仕方とパスワードを教えた上で。

「戦いますよ。私もカノン君の友達ですからね」

その手にはポケットピストル。実はキラードもかなり強いのも
しれない、と円堂は思った。

「カノン。エスカバ。キラード博士」

もう二度と、逢う事は無いかもしれない。それでも円堂は笑って
言った。

「またな！」

また逢いましょう。

未来の何処かで、きっと。

“ さあ立ち上がろう 救いの戦士よ
さあ希おう 幸福の調べ ”

挿入歌『Stand up, Heros!』（前書き）

こちらは作中に出てきた曲『Stand up, Heros!』の歌詞になります。元々は別の版權をイメージして作った曲ですが、立ち向かうバトルソングとしていいかな?と思いついてみました。

この曲もニコニコ動画にて、煌はじめがはじめアキラP名義で制作した鏡音リンの曲となっております。よって歌詞の著作権は煌はじめにあります。曲を聞いてみようかな?という奇特な方は、“悪セルでオリジナル曲『Stand up, Heros!』” <http://www.nicovideo.jp/watch/nm13167253> から飛んでやって下さい。

ちなみに煌はじめのボカロ処女作でした。よって音が少々小さめになってますので御注意下さい。

挿入歌『Stand up, Heros!』

Stand up, Heros!

作詞作曲：煌はじめ

歌唱：鏡音リン

“ 疑う事無き 哀れな勇者よ
抗い続ける 愚かな道化よ ”

独りきりの舞台挨拶
仮面はいつも標準装備
貴方の姿を身に纏い
大人の顔演じ繕い

悲哀にすら理由が要るさ
別れ際に君の虚しさ
最初から俺らは不在だ
赤信号点滅中だ

Stand up!

この脚はまだ折れちゃいない
答えを探求中だ
だから足掻いてるんだろ
たった一つ

信じたネガイは消えない
世界が手繰る

糸は切れないとしても

幼い眼に映った背中

貴方に何を強いた彼方

聖痕を刻んで逝った

ステイグマ

笑顔ももはや光に散った

何もかもが遅すぎたのか

君に未だ期待するのか

振り下ろした刃の先に

狂ったフリの骸の果てに

Stand up!

この声はまだ枯れちゃいない

希望を発掘中だ

だからもがいてるんだろ

たった一つ

叫んだコトバも咲かない

カルマが廻る

あの約束すら置いて

Stand up!

この脚が折れたとしても

光に焼かれ爛れ

闇に食われて溶けても

たった一つ

抱いたモノを忘れるな

閉じた未来も

力づくで抉じ開け

Stand up!

魂はまだ砕けない

明日を宣言中だ

だから走り続けるんだ

たった一つ

誓ったオモイは消えない

絆よ何時か

何処かで巡ろう きっと

“ さあ立ち上がろう 救いの戦士よ

さあ希おう 幸福の調べ”

(出展：ニコニコ動画 悪セルでオリジナル曲『Stand up, Heros!』 <http://www.nicovideo.jp/watch/nm13167253>)

【五十三：ファイナル・アンサー】

カノンとキラードが走り去っていく。秋はそれをほんの少し、ほんの少しの時間だけ見送った。

これが今生の別れになる。それはもはや直勘ですらない、確定的事実。もし彼らがこの苦境を乗り切れたとしても――自分と彼らとは、生きる時代が違うのだ。そして自分達は過去へ戻れば、もうこちらへやって来る手段は無い。彼らの安否を、こちらから知る術も無いのだ。

――本当は、ミストレ君達を置いて此処に来た事そのものが、間違いのかもしれない。

仲間を見捨てて逃げた臆病者。自分達をそう罵る者もいるだろう。だが、仮にそう言う者が目の前に現れたとしても、自分達はそれを悔いたり後悔してはならないのだ。

何故ならば過去とは、もはや過ぎ去った“絶対的に変えようのない”ものだからだ。時間旅行の出来る時代になり、時間が渡れるものだと知った多くの者達は忘れてしまったのだろう。過去とは、“変えてはならないもの”であるという事を。

――そう……変えちゃいけないんだ。私達を護ってくれたミストレ君達の想いも……立ち向かう勇氣を持った彼らの心も。

「……行くこう」

ボロボロの身体で、しかし気丈に立つ豪炎寺が言う。

「このまま此処で立ち止まっていれば、いずれ追いつかれるかもし

れない。過去に戻るまで、安全な場所など何処にも無いんだ」

何処にも、無い。ああ確かに、と秋は思う。

今やこの場所は戦場と化した。サツカーのように、ある程度のルールさえ守られはしない。秩序もなく奇麗事は通用しない、正義が正義を否定する、そんな場所だ。

「何より…あいつらを信じて、俺達が無事に逃げ延びる事。それがカノンやミストレへの報恩だ」

そして誰より先に歩き出す。それにやがて円堂が続き、鬼道が続き、皆が重い足を動かし始めた。

誰もが理解しているからだ。自分達は生かされ、守られたからこそ。立ち止まる事は赦されないのだという事を。

…いつか今日の日を後悔するとしても。

ダストを一人ずつ潜り、ゆるゆると這腹前進で進んでいく。

…それは今じゃない。今であつては、ならない。

「…ねえ、秋先輩」

不意に後ろから声があった。春奈だ。この体勢では振り向けない。なあに、と声だけで返事をする秋。

「…オーガと最初に戦った日から。ずっと考えてた事があるんです。私だったらどうするだろうって」

「？」

何の話か分からず、首を傾げる。春奈には見えないと分かっていたけれど。

「…もし…世界が減んじやうとか。大切な人が死んじやうとか。そんな凄く悲しい何か起きたとして」

一文字一文字。重なるように、考えこみながら春奈は言う。

「もし過去を変えられる手段を目の前に提示されたら。先輩は…どうしますか」

思わず…言葉に詰まる。もしかしたらそれは、秋が薄々気付きながらも逃げていた最大の議題であったかもしれない。

自分達の時代に、タイムワープなんて技術は無い。だからどんなに足掻いても過去は変えられないし、変えたいと願ったところで無理だと誰もが心のどこかで諦めている。

だがこの時代ではそうではなくて。だからこの一連の事件は、起きたのだ。

「例えば…そう、例えばですよ？私にとって大切な人…お兄ちゃんとかが、事故で死んじやったとして。その理由が“私が買い物を頼んでその場所に行ったから”だったとして」

考えるだけで辛いのだろう。それでもハッキリとした口調で声を紡ぐ春奈を、大したものだと思う。

「もし私が買い物を頼まなかったら、お兄ちゃんがその事故に遭う事は無かった訳で。もし過去に戻れるならきつと私は過去の私に言いたくなると思うんです…“お願い、その場所にお兄ちゃんを行かせないで”って」

でもそれってつまり、過去を改竄しようとしたヒビキ提督と同じ

事をしてる訳ですよ、と。春奈はどこか苦しげに笑う。

「歴史を、ねじ曲げちゃいけない。分かっているんです、そんな事。それでも私は……。ねえ、秋先輩だったらどうします？」

真摯な声。自分達にとって逃れられない、最大の課題であるとかかっていた。この答が出せなければ、自分達は自分達の正しさを失う。ただ自分達の勝利と夢の為にサッカーをして、戦った偽善者へと成り下がるだろう。

秋は沈黙する。ずりずりと狭い配管の中を這う音だけが、暫し空間を支配した。

「時が戻れば…か。私も、思った事…あったなあ。それくらい後悔したから…一之瀬君が、車にはねられた時は」

空気が変わる。少し後ろにいる一之瀬と土門が反応したのが分かった。彼らにとっても自分達にとっても思い出したくない事。永遠のトラウマ。

しかしそんな傷を持つ自分達だからこそ、春奈の問いに答えられる気がする。

「あの日。一緒にサッカーしようって誘ったのは私だった。…確かに晴れた日だったけど、三人でサッカー以外の遊びをする事もあつたし、偶には誰かの家に行っても良かった。だけどサッカーが大好きな私はやっぱりサッカーを選んで、いつもの場所を選んで…結果あの事故が起きたの」

何十回。何百回。何千回。何万回。数え切れないほど後悔した事だ。

どうしてあの日二人を誘ったのだろう。サッカーをしたのだろう。

あの場所を選んでしまったのだらう。そのどれかが違えばあの事故は起きなかった。一之瀬は死なずに済んだ筈なのに、と。

「あの頃はずっと思っただけで、自分を責めてた。一之瀬君を…殺してしまったのは私だった」

一之瀬と土門と春奈が、それぞれ違う意味で息を呑んだのが分かった。

「結果的に一之瀬君は生きてて、それを知った後は…過去をねじ曲げてでも変えたいとは思わない。でもあの頃の私だったら…きつと過去を変える事を、選んでしまっていたと思う」

過去に戻る事で、大切な親友を救えるのなら。

何よりこの途方もない絶望から解放されるのなら。

自分はきつと願ってしまうだろう。それがどれだけ良くない事と分かっていても。

「…でもね、音無さん。私、過去を変えたいと願う事自体は、罪だとは思ってないの」

「え？」

「だってそれは、人として当たり前前の感情じゃない。それに、そこまでして…誰かを救いたいとか、護りたいって思う気持ちがあるって事は大切でしょ？」

ある程度進むと、急に広い通路に出た。もう這う必要はない。そればかりか全員で立つ事ができるほどだ。

服についた埃を払いながら、秋は言う。

「ただね。過去を変えるとしたら…その先にあつた幸せとか出逢いを犠牲にする覚悟が必要だと思う。さらにその上で、その覚悟を他人に押し付けちゃいけない…」

ヒビキもまた過去を変えたいと願っていた。それ自体に咎はない。良い事ではないとしても、第三者にそれぞれのものを咎められるいわれはないだろう。

「ヒビキ提督が間違っていたのは。…自分自身の“現在”の為に、過去の私達に犠牲を強いた事だよ。誰かの大切なものを理不尽に踏みじめる事が明白なのに、自分達の幸福の為の対価を過去の私達に払わせようとした。…それはやっぱり、おかしいよね」

上手く…ああ、自分にも上手くは説明出来ないけれど。

彼は変えたい未来の為に、犠牲を払わずに済む手段を模索しなかった。しかもそれを自分自身の痛みではなく、赤の他人、しかも過去に強いようとしたのである。

彼も彼なりに悩み、苦しんだのかもしれない。その上で苦渋の選択をしたと言うのかもしれない。けれどそれは、訳も分からず事情も知らされず、ただ犠牲だけを払わされる身からすればたまったもんじゃないのだ。

何より。彼の根本には責任転嫁があつた。自分自身は手を汚さずオーガやイービル・ダイスを使い。しかも荒れた未来の原因を全て過去に押し付けた。

変えようのないほど破滅的な未来ならばともかく。この時代にはまだまだ変える余地があり、希望と呼べる光があつたというのに。

「…時間を超える機械なんて…発明されるべきじゃ無かつたのかも…しれない」

やや苦い表情で半田が言う。

「過去を変えたいと願う事は罪でなくとも。時の流れなんて…人が干渉していいものじゃなかつたんだよ、きっと。その技術そのもの

が人の罪なのかもしれない」

「…そうかもしれないわね」

その言葉に、夏末が頷く。

「時間は巻き戻らない。やり直せる事とやり直せない事があって…
きつとそれに意味があるのよ。過去は消しゴムじゃ消せない、だから私達は精一杯生きていけるんだわ。後悔しないように、道を外れないように」

ひたひたと通路を歩いていく。それぞれの言葉が染みていく。きつと皆が今、考えさせられているのだらう。自分なりの言葉で考えさせられているのだらう。

「さっきの答えはね、音無さん」

自分も結論を出そう。

秋は口を開く。

「きつと私は…過去を変えたいと願うけど。それでも、誰かを犠牲にする変え方だけは選ばないようにしたい。過去が抵抗してきたら、逃げないで私自身が全力で向き合う。だけど…今の私達に時間を超える手段は無いわ。それは、寧ろ幸せな事だと思っ」

選ぶ余地が無い事は必ずしも不幸ではない。見えなくていいものが見えるのが幸せな事ではないのだから。

「秋先輩は、凄いですね」

春奈はやがて、どこか吹っ切れたように笑う。そしてこっさり、秋の耳元で囁いた。

「やっぱり私、キャプテンには秋先輩みたいな人が相応しいと思いますけど?」

「!?!」

「告白、まだですか?」

突然いきなり何を言い出すのだ。耳まで真っ赤になって固まった秋から離れ、春奈がけらけらと笑う。

「ちょ、ちょっと音無さん!」

完全に遊ばれている。恥ずかしさでわたわたする秋と笑う春奈を見て、鬼道が首を傾げていた。そして言う。

「何を話したか知らないが…春奈が楽しそうで何よりだ」

ええいこの天然シスコンめ!

妹の質の悪さを暴露したるか秋はつい腹黒く思う。

「そろそろ出口か」

通路の突き当たりで、響木が上を見上げる。そこには鉄製の梯子が固定されており、上まで登れるようになっていた。そして天井には丸い切れ込みがあり、そこから丸く光が漏れている。

もしかやマンホールか何かなのだろうか。

「…俺、登れるか不安っす」

「万が一梯子が壊れたら大変だ。壁山は最後だな」

「そ、染岡さぁん…!」

壁山が涙目と言う。つつい何人かが吹き出す、あちこちから笑い声が上がった。

「大丈夫だろ………多分」

「全然大丈夫に聞こえないぞ円堂…」

ひきつり笑いの円堂に、これも幼なじみの役目と風丸が突っ込む。
大丈夫だ、と秋は思った。

大丈夫。自分達はまだ、自分達を保てている。たくさん悲しい事はあつたけれど、それでも。

「行くう」

少林寺から一人ずつ梯子を登り始める。一年生を優先にと真つ先に提示した円堂はさすがキャプテンと言つべきか。

登つた先には光がある。未来へ続く光。自分達はまだそれが掴める。

生きて、此処にいる限りは。

【五十四：リアル・ファイト】

円堂達の足音が遠ざかっていく。

葛藤しながらも自分達の意志を尊重してくれた彼らに、エスカバは心から感謝していた。否、感謝すべき事だらけだ。自分達を闇から引つ張り上げ、最高の魔法をかけてくれた浄罪の魔術師。もはや恩返し之机会さえ無いだろう事が、残念でならない。

- - いや。一つだけ…ある。

道を引き返しながら、エスカバは思う。彼らに報いる方法が、たった一つだけある事を。

- - それは俺達が…幸せになる事だ。あいつが愛したサッカーをみんなが愛せるような、そんな未来を作る事なんだ。

その結果を知らせる事は出来ないとしても。自分達が覚えて、理解して、心に刻み込む誓いには意味がある。

いつか空の彼方で出逢う時、胸を張って生き抜いたと言えたら。それ以上の報恩は無いではないか。

- - だから生きて、生きて、生きてやらあ。こんな場所で死んでたまるかよ。

そしてもう二度と、誰も死なせはしない。

バダップならば願った筈だから。

全ての悲しい事を。

悪い夢を。

どうか自分で終わりに、と。

「…円堂カノン」

だから後悔しない為にも。エスカバは隣を走る彼に問いかけた。

「良かったのか。お前は一緒に行かなくて」

カノンはこの時代の人間だが。元はといえばこの事態はオーガと軍部が招いたもの。彼が最後まで付き合う義理は無い筈である。と、いうとやや冷たい言い方になってしまふけれど。

それに、心配だった筈だ。この道の先、研究所まで無事に辿り着ける保証は無い。無論引き返すより安全なのは間違いないが、彼らにだって命の危険はあるのである。敬愛する曾祖父に最後までついていかなくて良かったのだろうか。

加えて…自分達はまだしもカノンやキラードは元々一般人だ。戦闘能力という意味では遥かに劣るだろう…キラードは多少銃器の心得があるようだが。

ここから先は、一秒先の安全すら保証されぬ最前線。怖いと思うのが普通。逃げたいと思うのが普通。何より彼は以前エスカバが研究所まで脅しに行った時、一丁の銃にビビッて腰を抜かしていたほどののだ。

「怖くねえ筈ないだろ。…何で一番危ない場所に戻ろうとする？」

何が彼にそうさせる？

何がそこまで彼を突き動かす？

「……………うん。正直…めっちゃ怖い。怖くて足もガクガクしてるし、冷や汗びっしょりだ」

カノンはそう言って、乾いた声で笑った。それは恐れる者の笑みだとわかった。

「死にたくないよ。痛い思いなんか、したいもんか」

だけど。

だけど彼は、怖れて尚向かっていこうとしている。

「でも……これ以上、仲間が死ぬのは絶対に嫌だ。俺臆病だけど欲張りだから。死にたくないし死なせたくない。両方叶えなきゃ、気が済まないんだよ」

それは、円堂守の強さとは種類が違うのかもしれない。きっと精神的な意味でも、魔術師としての才も、カノンはまだまだ曾祖父に遠く及ばないのだろう。

しかし。エスカバは思う。

怖れないフリをして虚勢だけを張るのはただの愚か者だが。

怖れる自分を認めて受け入れて、その上で立ち上がる者こそ真の勇者であると。

「ミストレ達も、イービル・ダイスも死なせるもんか。だってあいつらが救われなかったら……きつとバダップだって悲しむし」

俺勝手に決めちゃったから、とカノンは言う。

「みんなでまたサッカーするって、あの試合よりもっともっと楽しいサッカーをするって。そう決めちゃったんだもん！」

怯えながら、震えながらも前を向く少年。その姿は不器用だけど、格好良かった。否、不器用だからこそと言うべきか。

またサッカーを、しよう。
それは約束。それは誓い。
それは――未来。

「お前は」

だからエスカバも、こつそりと身勝手な誓いを立てる。
全てが終わってもう一度カノンとサッカーをする時は。絶対に負
けてやるものか、と。

「お前は紛れもなく円堂守の曾孫だよ」

彼は間違いなく受け継いでいる。

円堂守の魔法も、円堂守の強さも。

「カノン君は武器なんて扱った事ないでしょうから、素手と必殺技
で頑張って下さいね」

ポケットピストルを回しながらキラードが言う。ヘル・ブレイズ
？型。見た目はただのポケットピストルだが、実際は超小型の散弾
銃である。一発一発の威力は極めて弱い。しかしピンポイントで狙
えば対象はまず回避出来ない。そして貫通しないので確実に痛みで
悶え苦しむ事になる。

さらには、ヘル・ブレイズ？型には専用の弾丸が何種類も開発さ
れている。一発の威力が弱い分、掠めたり決っただけで対象を麻痺
させたり致死性の毒を仕込んだりする事が可能だ。技術は要るが汎
用性の高い銃である。ヘル・ブレイズ？型の特性をあれだけ詳しく
語ってみせたキラードがそれを知らない筈がない。

「…何タイプの弾持ってきたんだよ、博士」

「速効性の弛緩性麻痺タイプです。撃たれたら内臓以外の筋肉がほ

「ぼ麻痺するので、三時間ばかり地獄を見ますね」

「鬼だなアンタも」

「だが致死性ではないんだな、と思う。出来る限り敵兵も殺したくないという、彼なりの意思表示だろうか。」

「甘いのは分かってますよ。…でも私は、もう人を殺すだけの仕事はやめたんです」

キラードは苦い笑みを浮かべる。その言葉で、今までの彼の言動が一本に繋がった気がした。

「あんた…元軍属か」

ヘル・ブレイズシリーズは確かに今この国で一番流通している銃だ。しかしその歴史は浅く（そもそもこの国は数十年前まで平和憲法を謡い、銃器を厳しく取り締まっていたのである）、今でも一般人が持つには大きく制限がある。ここまで詳しく知識を得る機会もあるまい。

だがそれも、彼が元々軍にいたならば領ける事だ。

「メインは軍医でしたから…後方支援ばかりでしたけどね。そして医者と言っても、いかに効率良く敵を殺せるか…そんな毒薬やら爆薬からの研究ばかりしてましたよ」

隣でカノンが驚いた顔をしている。どうやら彼も初耳だったらしい。

「最終的には医者として生きる気力もなくなって、軍を辞めて長くちんまりと研究者やるようになった訳ですが。…今はそれで良かったと思いますよ」

キラードはさっきとは違う、どこか吹っ切ったように笑った。

「だってカノン君と出会えて。誰かから何かを奪う事しか出来なかった私が。今は誰かを救う為に戦えるんですから」

「キラード博士……」

「カノン君は友達です。ならカノン君の仲間は私にとっても仲間です。その仲間を助けられる、これ以上に幸せなことはありません」

「……そうか」

本当は。何故引き返してきたんだという問いを、キラードに対してもするつもりでいたのだが。どうやらその必要は無くなったらしい。

友達の友達を助けたい。子供のように純粹無垢な、それが彼の答えだった。

……理由は違ってても、いいんだよな。

サッカーを通じて出会い、分かち合えた自分達。そこに大人も子供も関係ないのだ。それがエスカバは嬉しかった。

違う理由であっても、同じ願いを持って戦える。心と心で手を繋げる。それが、絆だ。

「因みにここまでの事態はちょっと予想外でしたので。マガジンの予備が一つしか無いんですよね。エスカバ君、持ってます？」

「？型は使わねえから俺：基本ナイフだし。使っても？型くらいだし」

ヘル・ブレイズ？型は今エスカバのベルトに差してある。？型は中型の銃が見た目より軽く安定した威力と射程を誇るので、軍の基本装備として指定されていた。割と初心者向けの扱いやすい銃として知られている。

それに加えて、銃器の得意な者は自らの好むナンバーを標準装備にするのである。バダップは総弾数と跳弾が武器のヘル・ブレイズ

？型。遠距離スナイプを得意とするイツカスは圧倒的射程距離を誇るヘル・ブレイズ？型といった具合にだ。

？型以外のヘル・ブレイズシリーズはどれも多かれ少なかれ癖がある。銃弾のサイズも威力も指定がある為、？型の弾丸を？型で使うことは出来ない。

「可能性があったらイツカスだが、奴も？型はあんま使わねえからな。予備は無いと思ってた方がいいぜ」

「うわ、これだけで戦うとかどんなピンチですか」

「準備不足は自分のミスだろ。頑張れ、一人で」

「エスカバ君が冷たいのはよく分かりましたよ」

戦場で仲間とするように、キラードと軽口をかわすエスカバ。それが自分なりの最初の挨拶だ。キラードも分かっていることだろう。勝っても負けても。これより先は地獄だ。

「もうすぐ、着く」

カノンが青ざめながら、拳を握り直す。爆破された扉の前。三人は素早く左右に分かれて身を隠し、様子を伺う。

その途端、まるでタイミングを見計らいでもしたかのように……
我らが副隊長の叫ぶ声がした。

「デスレイン・V2！！」

どうやらド派手にブチかましたらしい。しかもさり気なく技を進化させている。满身創痕のくせになんて根性だ……エスカバは小さく笑みを浮かべて、キラードとカノンに突入の合図をする。必殺技のせいで起きた爆発が土煙を巻き上げ、いい具合にブライトと化していた。

「カノンと博士は右から回れ。カノンは前衛で直接殴って博士は銃で後方支援。アンタの腕は信用していいんだろ、博士？」

「まあ、それなりに」

「ならよろしく」

有無を言わず送り出す。彼らもそれが最善だと分かっているの
だろう。文句を言う事もなく走り出していく。

カノンはサツカーの実力からして、あれでも冷静に戦えばそれな
りに戦力になるだろう。いざとなればキラードが責任を持ってスト
ッパーになる筈だ。それにいくら素人と言えど、身の程を弁えない
ほど馬鹿ではあるまい。

何より彼は死を畏れている。死ぬ事が全く怖くないなんて言う人
間は、余程壊れているか余程のうつけだ。エスカバだって未だに戦
場は怖い。怖くなかった時など無い。だからこそカノンを、カノ
ンの強さを信頼出来るのである。

彼ならば無茶はしない。それが信じられるだけでどれほど安堵出
来る事か。

「只今戻りましたよ」と

「遅い」

ミストレの横に並ぶと、間髪入れずに苦情が来た。だが彼の眼は
笑っている。相変わらずのツンデレめ、とエスカバまで笑いたくな
る。

「戦況どーよ」

「五十八人くらいは行動不能にしたと思う。でもさっき、ジニスキ
ーが動けなくなったから後方下がらせた。あとイービル・ダイスの
アンドロイド組がついさっき充電切れしたよ」

「…そうか」

目を見開いたまま倒れ、静止している『カゼマル』の姿が見えた。
もう彼らは、動かない。だが今は悲しんでいる暇などない。

「援軍は…キリ無さそうだなあ」

終わるかどうかも分からない戦い。それでも自分達は、願った終

わりを奪い取る為に此処にいる。まだ息をして立っている。

「ま、やるしかねえんだけどさ！」

「当然！」

エスカバとミストレは拳をぶつけ合い、走り出した。

まだ見えぬ、望んだ未来を掴む為に。

【五十五：ブルー・バード】

こんな時に――いや、こんな時だからかもしれない。バウゼンは幼少の頃読んだ童話を思い出していた。幸せの青い鳥を探す、幼い兄妹の話だ。

細かい筋は忘れたが結末は覚えている。彼らがいくら旅しても見つからなかった青い鳥は、実は最初から彼らの元にいたというオチだ。誰もが追いつめ、幸せという名の理想。しかし本当はすぐ側にあるのに気付かないものだという、いかにもな教訓である。

けれど。いかにもだ、と感じ。ありきたりだ、常識だと誰もが思うにも関わらず――結局肝心な時には見失ってしまう事でもある。大切なモノは失ってから気付く。全くもってその通りだ。

――バダップ：本当に、すまなかった。

きっと口に出して謝る事は赦されない。だからバウゼンは心の中だけで懺悔する。

――こんな筈じゃ、無かったのにな。

抱える軀はもう冷え切っている。鼻につく血の臭いと微かな死臭。バダップの魂はもう此処には無い。どれだけその死に顔が穏やかであつたとしても。

どうして自分は、バダップを殺さなければならなかったのだろう。どうして自分は、こうしてへたりこむ事しか出来ないのだろう。

どうしてあれだけ軍に忠実に従ってきた筈のオーガが、今命懸けで軍と戦っているのだろう。

どうしてあれだけサッカーを憎んでいた筈のイービル・ダイスが、サッカーと円堂達を守る為に軍に立ち向かっているのだろう。

- 絶対的なものなど、何一つ無かった。

世界が正義と悪で出来ていると。敵と味方で出来ていると。そんな事を馬鹿みたいに信じていた頃があった。だが人間の心はもっと複雑なもので、世界とはもっとシンプルなものだった。

人の心は力技で支配出来るものではなく、恐怖政治はいつか必ず瓦解する。

そして世界を統べるのは多数決と強者だ。より多数に、より強者になった者達がルールを作り正義を語る。それが真の意味で正しいかどうかはまるで関係が無いのである。

だから盲信とは、信仰とは恐ろしい。

ヒビキに恩があるのは事実で、彼を尊敬する気持ちにも嘘偽りは無い。だがそれはヒビキが正義であるかとは無関係なのだ。そんな当たり前の事すら、行き過ぎた崇拜は曇らせてしまうのである。

殺したくないなら、殺したくないと言えば良かった。間違っていると感じたら間違っているとえば良かった。

その結果罰を受けたかもしれないし、それが通らなかつた可能性も充分にある。自分がやらずとも誰かがバダツプを殺した可能性だつて十二分に考えられる事だ。

それでも - 言う事は、出来たのである。

バウゼンがヒビキを止めなかつたのは、罰を畏れていたからではない。彼が正しいに違いないと、思い込む事で放棄したからだ。自分の考えを投げ捨てた。彼に従っていればより良き未来を築ける筈だと、信じたフリをして逃げたのだ。敬愛する彼が間違っているかもしれない、そう考える事が怖かつたから。

『アンタがそんな卑怯な真似ばつかりするから…自分の気持ちに向き合う勇気も無かつたから！こんな悲劇が起きたんじゃないか！』

ミストレが怒るのは当然だ。

あまりにも遅すぎる。こうなる前に何故自分は自分を見つめ直す事が出来なかったのだろうか？

失ってしまった命は、もう取り返しがつかないのに。

『立てよ！目を逸らすなよ！耳を塞ぐなよ！！…これ以上…悲しい事が起こらないように…！！』

これ以上悲しい事なんて、考えたくない。考えたくはないけれど、でもこのまま考えるのを止めたら…何も変わりはない。ミストレ達は殺されるだろう。ヒビキは間違った思想を貫いて破滅するだろう。その時はもう刻一刻と迫っている。こうしている間に誰が死んでもおかしくない、それが戦場だ。

『俺達が…アンタが！バダップの死を無駄死にして…何にも生かさないで死ぬ！！それ以上の悲劇があるのか！！』

そしてその結末こそ…バダップの死を無為にするものであり、最大の悲劇。誰も救われない、最悪のバッドエンド。

『後悔してるなら…終わらせてみせろ！全ての悲しい事を…悪い夢を…！！』

自分は、後悔している。

間違った事を間違っていると見えなかった事を。

命じられるまま、愛しい部下を手につけ、愛しい部下達を苦しませた事を。

『それがきつと…俺達の隊長の、願いだ…！！』

その罪を、今からでも……僅かでも購えるものがあるとするならば。

「……ヒビキ提督」

バウゼンはバダツプね亡骸を地面に横たえて、ゆっくりと立ち上がった。そして……ヒビキに銃を向けた。

「私は……貴方を正すまでは、死ねません」

ヒビキはサングラスの奥で眼を細め、やや口角を上げた。

「ほお。それがお前の答えか」

「はい」

「お前に俺が殺せるのか？」

「……いいえ」

素直にそう答えると、ヒビキはやや意外そうな顔をする。だからバウゼンは言った。

「貴方を殺したら、説得出来ませんから。……それも一つの覚悟ではありませんか？」

自分は敬愛する上司に刃を向ける。

自らの犯した罪を償う為に。

自らの信じる道を示す為に。

バダップとオーガの意志に報いる為に。

そして、何より目の前にいるこの人を救う為に。

「円堂守の言葉は呪いなんかじゃない。人を幸せにする、魔法だ」

銃声や爆音すらも掻き消す声で、バウゼンは叫ぶ。

「彼の言葉と生き様は貴方にだって届いていると、私はそう信じている！」

ぎゃあ、だの。わあ、だの。下から悲鳴が連なって聞こえる。狭い円柱型の通路、滑りそうな梯子を登りながら円堂は思う。下を見たら死亡フラグ間違いなしだと。

…ってか俺がもし滑って落ちたらどーなるんだろ…。

何人潰れる事やら。小柄な小林はまずアウトだろう。壁山や染岡は…案外平気な気がしないでもない。

というか壁山は寧ろこの通路に体が詰まらないかが心配だ。梯子の強度も不安だけれど。

「よいしょ…とっ…」

先頭に行く松野が一番上まで登りきり、蓋を押し上げるのが見えた。途端に差し込む光。だが思ったほど眩しくはない。長く地下にいたせいで麻痺していたが、世間はすっかり夜だった。

慎重に一人ずつ外へ這い出していく。途中、栗松が滑り落ちかけるハプニングはあったが、全員無事に地上へ上がる事が出来た。

「ぐっ……」

「お兄ちゃん！」

「大丈夫だ、春奈……」

どうにか登りきったものの、鬼道が苦しげに膝をつく。顔色が真っ青だ。包帯からはあちこち血が滲んでいる。鬼道だけではない。豪炎寺や一之瀬、風丸や栗松も怪我の痛みで顔面蒼白だ。

それ以外の面子も精神的肉体的に疲労が激しい。彼らを早く安全な場所へ、そして病院へ連れて行かなくては。円堂は辺りを見回した。

――此処は……！

地面は芝生。そして“イチヨウ”と書かれたプレートの下がった木が何本も植えられている。気温からしても今この世界の季節は夏なのだろう。イチヨウの葉は生い茂り、自分達の上に大きく影を作っていた。ちよつとした林のようになっている。

少し離れた場所には黄色いタイルで舗装された並木道が見える。その道の先は見慣れた研究所に続いていた。その反対側には煌びやかなネオンが夜空を照らしている。街の郊外――オーガ学園はシテイのやや北寄りにあっただが、どうやら地下通路は思ったより長いものだったらしい。

「研究所までもう少しだ。だが油断するなよ、待ち伏せやトラップがあるかもしれん」

響木が至極真面目な顔で言う。待ち伏せはともかくトラップなんてそんな影山じゃないんだから……と円堂は思ったが、キラードの顔を思い出して撤回する。

軍部ではなく。あのオジサンなら面白がって仕掛けて忘れてるなんて事もあるかもしれない……ついそう考えてしまつような子供っぽさがキラードにはあった。

まあ冗談はさておき。

待ち伏せは充分に有り得る事である。気をつけるに越した事は無い。

「茂みに隠れて慎重に進もう。焦って目立ったら元も子もない」

風丸が囁き声で言い、皆が頷く。彼もボロボロだというのに、実に冷静だ。風丸を裏キャプテンと呼ぶ者がいるのも頷ける。自分も見習わなくてはならない。

「壁山………まあ頑張れ」

「何すかその間は！」

「お前ら、コントは後にしろコントは」

そろそろと進みながら壁山を振り返り、とても残念そうな顔で言う穴戸と、意味を理解して涙目になる壁山。半田が呆れ顔で突っ込むのはまあやお約束だ。確かに壁山の巨体で目立つなというのはなかなか酷である。

「いざとなればお前は木のフリでもすりゃいいじゃん。お前のアタマなら可能だ、俺が保証する」

「キャプテン」(涙)

「冗談だつてば」

「まったくもう！円堂も悪ノリすんなつてば！！」

「ごめんごめん」

半田がさらに突っ込むも、彼も怒っている様子は無い。マネージ

ヤー達がぐすくす笑っている。皆も気付いているのだろう、円堂の意図に。

ふざけている場合ではないと言うかもしれない。だが誰もが多かれ少なかれ荒んだものを抱えている現状、過度の緊張状態から解放する為にはこれが何より効果的だった。

試合中、ミストレ達が事あるごとにジョークを飛ばしていた理由が今なら分かる。戦場を、生死の狭間を生きる彼らは知っていたのだ。自分達が自分達でいられなくなったら終わりだと。

「ま、壁山のアフロは盆栽みたいだーなんて…思ったの俺だけじゃないだろ、絶対。」

あの深緑色のモコモコつぶりがいかにもだなあと。これで本当に誤魔化しがきいたら後で笑ってやるうか。

そう…この苦境を乗り切って、みんなで思い切り泣いた後で。

「あと、少し…。」

じりじりとしたスピードながらも、建物が近付いてくる。

研究所の暗証番号と電子キーのスペアは借りてある。裏口の方が木々に隠れて見えにくいので、そちらから回れとも。

身をかがめて、やや小走りにドアに駆け寄ろうとした…その時だ。

「動くな」

びり、と。まるで静電気が走るように……くぐもった声が皆の動きを止めた。

「キャプテン！」

後輩達が悲鳴を上げる。

鼻先に突きつけられた銃口……円堂は無言でホールドアップした。マスクをした迷彩服の者達が、ぞろぞろと建物の影から出て来る。その数、見える範囲だけで十二名。恐らくこれが全員では無い筈だ。

……やっぱり待ち伏せされていたか……。

あと少しだったのに。悔しさに唇を噛み締める円堂。

……どうする。どうすればいい。俺達みんな、いざとなったら戦える。でも……。

いくら必殺技があるといってもこちらは素人でほぼ丸腰だ。怪我人もいる。戦うにしたって限度があり、プロ相手にどこまで通用するかは怪しい。

その時、円堂の真正面にいる男が口を開いた。

「円堂守。お前に一つ訊きたい」

思っていたより高い声。

「お前は何故、サッカーをする？」

意外な問いに、円堂は目を見開いた。

【五十六：ホールド・アップ】

静かな夜の隅で、静かな攻防は続く。両手を挙げた格好のまま、円堂は自分に銃を突きつけている者達を見た。

軍人達は - - 殆どがわりと小柄で、しかし全員が武装している。さっきのも訓練された動きだった。細長い銃をこちらに向け、皆が防毒マスクをして、一部は何やらタンクのようなものを背負っている。

もしや催眠ガスでも使って全員を眠らせる魂胆か。いや、眠らせるだけならばまだいい。あの中身が毒ガスならば手の打ちようがない - - 毒ガスには、触れただけで皮膚から体内に入り、死に至るタイプのものもあると聞いた事がある。まあ、そこまでの劇薬を使うのは彼らにとってもリスクが高いだろうが。

- - 此処は街の郊外だ…近くに建物は無く時間も時間だから人気もない。こいつらにとっても好都合って訳だ…。

仮に毒ガスを少しばかり撒いても、余計な被害は出ない。屋外だから霧散するのも早いだろうが、ほぼ無風の今ならシテイにガスが流れていく事もないのだろう。

- - いや、毒ガスがなくても…銃だけで充分脅威だ。

拳銃の弾は、引き金と銃口に注意すれば避ける事も可能らしい - - が、それは相手が一人だったらであり、それもある程度距離があったら話だ。この至近距離では、即死を瀕死の重傷へ変える事もままならないだろう。

ついでに言えば彼らの銃は“拳銃”と呼べるものではなさそうだ。銃の知識なんてこれっぽっちもないが、銃身が長い上両手で支えて

持っている。よく軍事ドラマで見るそれにそっくりだ。

どうする。

どうすればいい。

円堂は必死で考える。連中は問答無用で撃って来なかった。動くな、と自分達に制止をかけたという事は、自分達を生きて捕縛する気が、多少なりに話をするつもりでいるという事だ。ならば会話の中で反撃の糸口を見つけろ他ない。

ミストレヤヒビキは自分を“浄罪の魔術師”と呼んだ。人を惑わし洗脳するほどの、言葉という名の魔法を操ると。そんな大層なものじゃない、と円堂は思う。だがもし自分にもプロの軍人達相手に対等に戦える武器があるとしたら、それはこの“言葉”だけではないかろうか。

自分と同じように銃を突きつけられ、震えている後輩達を見る。

彼らは自分が護らなければ。雷門イレブンのキャプテンとして。

覚悟を決めて円堂が口を開こうとした、その時だ。

「円堂守。お前に一つ訊きたい」

真正面の軍人が、円堂に問いかけてきた。

「お前は何故、サッカーをする？」

思ったよりも高い声に、目を丸くする。問われた内容もまた予想外だった。何故今それを訊かれるのか・・・そうは思ったが、悩んでいる暇などない。

「そんな事、決まってる」

彼らの機嫌を損ねれば命の保証はない。それでも円堂は、選んだ。偽らない事を、選んだ。

「楽しいからさ。サッカーは楽しくて、プレイする奴も見ている奴も笑顔にできる。少なくとも俺はそう信じてる」

自分の心だけは、嘘を吐きたくない。
誰かの心に届くとしたら、偽りの無い真っ直ぐな真実だけだ。

「どんなスポーツだって、勝ち負けはある。それで時には失くすものもあるだろう。だからスポーツは悲しい時もある。サッカーだってそれは同じ。俺はサッカーが、全ての人にとっての希望だなんて思っていない」

名もなき兵士達へ。銃を突きつけられ、ホルドアップの姿勢を守りながらも、円堂は真っ直ぐに投げかける。
それこそが最大の武器だと知っていたから。

「でも。サッカーを見て、光を見いだしてくれる人が一人でもいたら。それは確かに、意味ある事だと思う。フィールドで戦う俺達が諦めない姿勢を示す事で、見ている人達もまた諦めない心を思い出してくれたなら！」

余命僅かと宣告された患者。

ベッドの上の寝たきりの老人。

自殺の方法を考え続ける少年。

受験のストレスで悩む少女。

親に捨てられた子供達。

親を喪った子供達。

家族を失った親達。

戦火に故郷を焼かれた人々。

戦火で故郷を焼くしか無かった軍人達。

「サッカーをしている最中に、そこまで考えてやってる訳じゃないけどさ。楽しいからサッカーをやる、理由なんてそれで充分じゃないか。自分が楽しむ事で何かを壊すならそれは間違いだけど、楽しむ事で誰かを笑顔に出来るなら、それはきつと素敵な事だ」

あらゆる人達の心に、それは届く可能性を秘めている。
サッカーと、サッカーに関わる者達の笑顔は。

「もしサッカーが壊したものがあつとしても。その分まで俺は、サッカーはみんなを幸せに出来ると思ってる」

身勝手に偏見に満ちた考えと言われるかもしれないが。
円堂は信じている。サッカーと、サッカープレイヤー達の無限の可能性を。

「だから俺はサッカーを捨てない。例えその結果お前達に撃ち殺されてもだ」

「ここでもし信念を曲げて生き延びても。
心が死んでしまうのは、身体が死ぬ以上に辛い事だから。

「暴力なんかで、俺達の稲妻魂は殺せない！人の心は、心でしか動かせないんだから！！」

言い切った。円堂はキツとマスクごしの相手の眼を睨みつける。

声は震えなかっただろうか。怯えは瞳に滲んでやしないだろうか。ちゃんと立ち続けているだろうか。身体は真つ直ぐ正面を向けているだろうか。

本当は怖かったけれど。その恐怖を、無理矢理信念で塗りつぶした。退いたら負ける。隙を見せれば言葉という名の盾と矛は簡単に碎け散ってしまう。

暫くの間、無言の睨み合いが続いた。十分か二十分か――いや、ひよっとしたらほんの数秒だったかもしれないが。円堂にはあまりに長い時間を感じた。

「…見事だ」

やがて。

兵士はそう言って――銃を降ろした。

「浄罪の魔術師と、提督が恐れるだけの事はある。銃を向けられて尚己を偽らず、媚びへつらう事もなく信念を貫き通す強さ。実に見事なものだ」

そして彼が手で合図すると、周りの兵士達も銃を下ろした。円堂は目を見開く。

「俺達を、捕まえに来たんじゃないのか？」

「いや」

どうやら彼がリーダーらしい。円堂の言葉に首を振る。

「ヒビキ提督からは射殺命令が下っている。催眠ガスの使用許可も出ているしな」

射殺命令。やはり、と思う。ここまで派手に事態が動いているのだ、ただ捕まるだけで済むとは思っていなかった。

「だが：その命令を実行するか否かを決めるのは、我々なのだ」

「…命令違反になるんじゃないのか」

「処罰なら幾らでも受けるさ」

あっさりと言うリーダー。どうしてそこまでして自分達を見逃してくれるのだろう。

疑問に思っていると、リーダーは自らの防毒マスクに手をかけた。

「この小隊メンバーは全員：オーガ学園の生徒だ」

驚愕する円堂。現れたのは円堂達と同じくらいの年の、少年の顔だった。イギリス系だろうか、明るい茶髪に青い大きな眼。小柄な上声も高かったからまさかと思ってだったが、予想以上に幼い顔立ちをしていた。

「俺達にとってオーガ小隊は羨望と崇拜的だった。特にバダップとミストレとエスカバの三人を信望する人間は多い。彼らはそのカリスマ性もさる事ながら、けして屈しない生き方で我々を導いてくれた」

他のメンバーも次々とマスクを取る。全員が年端もいかぬ子供で、なんとリーダーの両脇にいた二人は、見目麗しい少女だった。

「サッカーは悪だと教えられてきたが。あの方々とお前達が、どんな絶望を前にしても立ち向かい：自らのサッカーを貫き通す姿を見た時。目が覚める思いだった。我々は過去のサッカーに責任を負わせて、自らの進化を諦めていたのだと」

「お前達も：試合を見てくれていたのか？」

「我々だけじゃあない」

少年はフツと、その幼い顔に大人びた笑みを浮かべる。

「全国ネットで中継されていたんだ。国中が試合を見ただろう。そして多くの者は心を動かされた筈だ：俺達がそうだったようにな」

「世界が変わる時が来たのよ」
緑のショートヘアの少女が言う。年の割にバッチリしたメイクが印象的だった。

「あたし達は受け入れて、考なきやいけない時が来てるんだわ。あたし達が生きるべき未来ってヤツをね」

生きるべき、未来。

その言葉が静かに、円堂の胸に積もっていく。

「貴方達に曲げられない信念があるように、わたくし達にもあるという事ですわ」

お嬢様然とした長いウェーブのかかった髪の少女が、穏やかに微笑む。

「貴方達はわたくし達がお慕いするミストレ様と、ミストレ様のオーガ小隊を救って下さいました。確かに悲しい結果もありましたけど…救われたのもまた事実ですよ」

だから今度はわたくし達が恩返しをする番なのですわ、と少女は言う。

「サッカーは悪などではありません。貴方達は生きて、貫き通すべきですわ。貴方達の信じる、貴方達だけにしか出来ないサッカーを」

自分達の信じる、自分達だけのサッカー。

円堂は思う。ひょっとしたら自分達は、この世界の歴史を動かすようなとんでもない事をしたのかもしれない。そしてそれは自分達に課せられた、自分達にしか出来ない役目だったのかもしれない。

「円堂。お前ならば…俺達とは違った、さらに良い未来を作り出せるようになるかもしれない。平和憲法が失われず、子供達が戦場に出る事も、その為の学校が作られる事もない未来を…」

思いを噛み締めて…吐き出すように。切なげに眼を伏せて、リーダーは言った。

「どうか、頼む。お前の世界にいずれ生まれてくるバダップが、あんな死に方をしなくて済むように…あんな悲劇が起こらない未来を。そんな世界を作って欲しい」

ああ、彼は分かっているのだ。どれだけの決意をしても、この世界ではもはや取り返しのつかないものもあるのだという事を。後悔してもしきれない惨劇があった事を。

円堂に未来を託しても。円堂の作る未来をその眼で見れない無力さを。

「…あんだ達の、名前は？」

円堂は尋ねる。

「エディ＝ブラック。この部隊の隊長だ」

リーダーの少年が最初に名乗った。

「サザン＝プシユケ。副隊長よ」

短髪の少女が手を差し出してきた。

「カリナ」ブーストと申しますわ」

お嬢様然とした少女がにっこりと笑う。

「エディに、サザンに、カリナか。…ありがとう。覚えておくよ」

円堂も微笑み返し、三人それぞれと握手を交わす。

彼らもまた勇者だった。理不尽な世界に抗い、自らの意志を貫いた戦士達。大丈夫だ、と円堂は思う。オーガや、カノンや。エディ達ならばきつと世界を変えていけるだろう。

どんなに修羅の道でも。その姿が平和へと連なる行列となり、多くの人々を揺り動かす筈だ。

「御武運を、円堂守。そして伝説のイナズマイレブンよ」

「そつちも、元気だな！」

一同は彼らに見よう見まねで敬礼し、まっすぐ研究所へと走り出した。もう自分達を遮るものは何もない。

さあ、信じて歩いていこう。光差す未来へと。

【五十七：シューティング・スター】

裏口には鍵がかかっていたが、受け取ったカードキーとpassで開ける事が出来た。他にもあちこちロックがかかっているのは、流石研究所と言うべきか。機密と呼ぶべきものもたくさんあるのかもしれない・・・その割に整理整頓にだらしなすぎるのがキラード博士のようだ。

早足で研究所内を進みながら、鬼道はやや訝しく思っていた。

・・・室内が妙に片付いてる…？

自分達がこの未来世界にやってきた数時間前に見た時。廊下には資料と古新聞の山が積み重ね、屑籠はひっくり返り、客間にはゴミは散乱している有様だった。すわ、強盗でも入られたかと思いきや、カノン曰わくこれが平常、寧ろマシンな方だという。キラードの生活能力の無さはもはや神クラスだとかなんとか。

なのに、だ。それがやたらと綺麗になっている。ホームヘルパーでも雇っているのだろうか。あるいはキラードの家族が誰かが来たのか。

そのどちらも外れていた事に気付くまで、さほど時間はかからなかった。

「思ったより早かったな」

研究所の中心部・・・タイムワープマシンの部屋のドアは開いていて。マシンの前には一人の少年がこちらに背を向けて立っていた。

鬼道も皆も、思わず身構える。子供相手でもこの世界では油断ならない。それは今までの経験で嫌というほど思い知らされた事だ。

「もう少し、妨害されたかと思った…無事辿り着けて何よりだ」

少年は喋りながら、何やらマシンを弄くっている。鬼道は首を傾げた。何故だろう、どこかで聞いたような声だ。

「お前は…誰だ。何をしてるんだ」

皆を代表するように、円堂が口を開く。すると少年が、ふっと笑みを浮かべた気配があった。

「設定してあるまま、マニュアルに従って操作すればいいと博士に言われたんだろうが…もし誤った操作をすれば一大事だ。お前達に何かあつては困るからな…博士に言われて、此処で待っていた」

少年が振り向き…皆のあちこちから驚きの声が上がった。

鬼道は声も出ない。

明るい茶髪にゴーグル。少年の姿は…自分にそっくりだったのだから。

「逢えて光栄だ、円堂守。そして伝説の二代目イナズマイレブン」

まさか、そんな事が。

しかし瞬時に、鬼道はカノンの例を思い出していた。彼は円堂の曾孫だ。ならば、自分の子孫もこの世界に存在していてもおかしくはないのではないか。

「お前、名前は…」

「キドウ、だ」

尋ねた風丸を遮るように、少年は言った。

「あなた達の察する通りだ。下の名前は…言わない方がいいだろう

な。いずれあんた達はその目で確かめるといい。うまくいけば、未来の何処かで逢う事になるだろう。俺ではない俺に、な」

彼の言わんとしている事を理解し、風丸も円堂も押し黙る。

そつだ、未来を歪めない為には――本来自分達はカノンに逢うべきではなかったし、彼の名前を知るべきでも無かったのだろう。今更のような事だが、それを律儀に守るあたり少年の真面目さが窺える。

益々、自分そっくりだと鬼道は思った。

「部屋を片付けたのもお前か」

「汚い部屋で見るに耐えかねてな、博士が出かけた後で仲間と一緒に片付けにきた。博士から連絡が来てからは危ないから皆は帰して俺だけが残って待っていた」

「そつか。ありがとう」

この少年は敵ではないらしい。それが分かり、誰もがほっと胸を撫で下ろす。

「…あんた達のサッカーは、魔法のようだな」

少年は再び機械の操作に戻って言う。

「俺も仲間達と中継を見ていたが…気付いたら周りにいた全員が声を張り上げて雷門とオーガを応援していた。カノンがいたからというのもあるが…それだけじゃない」

喋りながらも少年は手を休めない。

「あんた達を見ていると、サッカーがやりたくてたまらなくなるんだ。…きつともう、サッカーが悪だなんて言う奴はいなくなる。お前達の魂は、国中の人間の心をも動かしたはずだ」

そうだと。鬼道は心の底から誇らしくなる。

いつの間にか強引に、関わる者を光の側へと引っ張り上げてしま
う。それが円堂のサッカーだ。自分達が惚れ込んだ、イナズマイレ
ブンのサッカーなのだ。

「俺達は、自分のやりたいサッカーをしただけさ」

鬼道は素直に感想を述べた。

「だが…この時代ではそれが何より難しく、見失われがちなことだっ
たのかもしれないな」

思い出すのはオーガの事。彼らは最初、任務の為にだけにサッカー
をしていた。それは彼らの望みではない、誰かから奪う為だけのサ
ッカー。楽しさなんて微塵も無かっただろう。やりたいサッカーが
出来ない不幸すら理解していなかったかもしれない。

それを変えたのは、円堂だ。

円堂は彼らに、そして共に戦う自分達にも教えてくれた。

サッカーは楽しむ為にするものだと。

未来を切り開くのはいつだって、戦う勇気を持った者達の心だと。

…かつては俺も…忘れていた事だ。

サッカーが勝利の為の手段でしか無かった時期があった。大事な
ものを見失い、仲間達の想いが見えなかった時期があった。そんな
自分を救ってくれたのもまた円堂だ。

この世界の未来は、変わるだろう。

いや、変わるのはきつと彼らの未来だけではない。自分達に突き
つけられたあらゆる悲劇の可能性と、荒んだ現実の可能性。それを

見せつけられた上で乗り越えて絶望を打ち破った。それで何も変わらない筈がない。自分達もきつと変えていける筈だ。この世界の史実に刻まれた以上に、素晴らしい明日へと。

「雷門イレブン。未来に生きる俺達は知っている…これから先俺達達の身に起きる事も。あんた達のおおよその寿命も」

少なくともこれはほぼ確定している事だが、と少年は続ける。

「近い未来…日本の歴史に残る大きな事件が起きる。失うものも、きつとあるだろう。ひよつとしたら今日の試合より酷い事が起きるかもしれない」

「…そうか……」

「でもそれも、あんた達が成長する為に必要な試練で、あんた達なら乗り越えられると俺は信じている。だから回避する方法は言わないぞ」

不親切か？と笑う少年に、鬼道は首を振る。

彼がここまで言うからには、それ相応の悲劇が自分達を待ち受けているのだろう。だがその詳細を知ってアドバンテージを得るのは禁忌であり、赦されない甘えだ。そして対等に運命に立ち向かわなければ、本当の強さは得られまい。

「未来は見えないから面白いんだ。それに…」

鬼道は円堂を振り返る。円堂が頷いた。

この世界には神様なんかいないかもしれない。神は乗り越えられる試練しか与えないなんていう言葉があるけれど、時には乗り越えようのない試練だってあるだろう。だから理不尽に命を失う人達が後を絶たないのだ。

でも。

「一人では乗り越えようのない試練も、仲間と一緒になら乗り越えられる。そうだろ？」

自分達は、雷門イレブンはそうやって戦い抜いていく。今までも、これからも。

「……そうだな。それでこそ俺達が憧れたイナズマイレブんだ」

そう言って、少年はエンターキーを押した。ブン、とマシンが起動する音。

「最終確認及びメンテナンス、微調整、全て終了した。お前達がこの世界に来た日の夕方六時ジャスト、鉄塔広場にジャンプする筈だ」

「恩に着る」

「礼には及ばない。礼を言いたいのはこちらの方だ」

指示されるまま、鬼道達は指定されたサークルの中に入った。マシンが転送を始め、徐々に視界が青い光の中に薄れていく。

「貫き通せ、お前達は、お前達のサッカーを。たとえどんな運命が待ち受けていても」

最後に聞いたのは、少年のそんな言葉だった。

「それが世界の、希望になる」

がくり、と膝を着いた。

一度動きを止めてしまえばもう動けなくなると分かっていたが、さしものエスカバも限界だった。ぼたぼたと滴る血が池になって足を汚す。己と敵と味方、あらゆる血を吸ったユニフォームは重いとさえ感じるほどだった。

- 肋何本イッてるかわかんねレベルだし。つーか、ぜってえ内臓もやられてるよなあ…。

腹に少なくとも三発は銃弾を食らっているし、刃物でも挟られている。血を吐き続けている時点で消化器系のどこかを破られているのは明白だろう。胃酸混じりの血が不味いつたらない。喉が焼けそうだ。

おまけに左足。辛うじて動くから腱は切られていないのだろうが、大きく裂けた傷からは筋がびらびらしている。よくもまあこんな状態で走り回れたものだ和我ながら感心せざるをえない。

立ち止まった途端全身の傷からの激痛を思い出して、悲鳴を上げそうになった。が、潰れかけた喉から溢れたのは血泡だけだ。本格的にマズい。傷の深さもさることながら、出血量が限界だ。

- 人間ってどんだけ血イ流したら死ぬんだっけ…常識問題だってミストレに叱られたばっかなのに、俺…。

意識が薄れかけ、思考が回らない。それでもエスカバは、腰の銃を抜いて撃っていた。銃弾は今まさにこちらに狙いをつけんとしていた兵士の頭を綺麗に撃ち抜く。

- 俺、射的の腕上がったぜ…誉めてくれよ、バダップ。

ああ、でももう彼はいないのだった。

- 駄目だ、すげえ痛えのに…眠く…。

ぐらぐらする頭で辺りを見渡す。

『キドウ』が動きを停止して倒れているのが見えた。

そのすぐ隣では『エンドウ』が頭から血を流してうずくまっているのが見え。

さらに向こうでは『ザゴメル』と『トビタカ』がうつ伏せているのが見えた。

彼らの安否さえ分からない。確かめに行かなくてはと思うのに、その短い距離さえもはや遠すぎてかなわない。エスカバの足はもう、動いてくれない。

- ミストレ…！

彼は思いのほか近い場所に、横向きで倒れていた。こちらに背を向けている為顔が見えない。その背中の中からはじわじわと赤が滲み出ている。彼の周りも立派な血の池地獄だ。

起きる。自分も頑張るから、眠るんじゃない。そう言おうとしたが、もはや喉からは掠れた音しか出ない。

がくがくと震える腕をミストレに伸ばそうとして、体制を崩し倒れ込んだ。もはや体を起こす力さえ残っていない。

「ミス、ト…」

無慈悲な銃弾が、二人の間を切り裂いた。エスカバは目を見開いて…伸ばしたままの自分の右手を見た。

一発の銃弾は…エスカバの右手の人差し指と中指を吹き飛ばしたのだ。背筋を這い上がる凄まじい激痛。声にならない声で絶叫する。転げ回って苦しむ気力さえない。反射的に涙が滲み頬を伝った。

もはや親友に、伸ばす手すら許されないというのか。

……ちく、しょ……！

ここまでなのか。意識がブラックアウトする寸前……エスカバは、戦場の空気が変わったことに気付いた。

どたばたとたくさんの、訓練されていない足音が雪崩れ込んでくる。サッカーを壊すな、ヒビキを捕まえろ……そんな声があった。

もう少し落ち着けばいいのになあ。エスカバはそんな風に思い……それが最後の思考となった。

【五十八：ティステイニー・ドロ】

- 西暦2010年。

タイムワープした後の、独特の浮遊感。まるで世界の靄が晴れるかのように、白んでいた景色が明るくなった時 - 円堂達は、鉄塔広場にいた。

赤々と照らす夕焼けが眼に痛いほど鮮やかだ。皆の陰が長く伸びて、地面に濃い陰影を形作る。鳥の鳴く声と、木々の合間を渡る風の音、六時を告げる古めかしいチャイムの音がどこか遠くから聴こえる。

静かな田舎町独特の、懐かしい稲妻町の香り。その全てが自分達に教えた。自分達が元の時代に帰ってきた事を。

「なんか」

ぼつり、と半田が呟いた。

「なんだか…長い夢を見てた気分だ」

その感覚は、円堂にも分かる気がした。

未来に生きる者達に出逢ったのは初めてじゃないけれど。でもひよっとしたら心の何処かはまだ、疑っていたのかもしれない。確かにカノンは祖父のノートを持っていたし自分そっくりの顔をしていたけれど、現実感というのはまた別の問題だ。

しかしそれが、実際に未来に飛んで。その進歩と実情を目の当たりにして。驚くべき事も、怖い事も、悲しい事もたくさんあって。

あまりにも怒涛の一日だった。今日だけで一生分の奇運を使ったのではと思うほどに。まだじっくりこないのも当たり前といえは当たり前前だろう。
でも。

「夢じゃ…ないさ」

確かめるように、自分に言い聞かせるように。円堂は自らの手を見つめ、握りしめた。

「夢じゃ、ない。あいつらは確かに…いた。あそこで、生きてた」

カノン。

オーガ。

イービル・ダイス。

ヒビキとバウゼン。

王牙学園の少年兵達。

鬼道の血筋らしき少年。

「そして俺達と…出逢った」

証拠らしい証拠は何一つ持ち帰っていない。だが自分達の身体に刻まれた無数の傷が、あの激しい試合を物語っている。

そして円堂のユニフォームに僅かに染み付いた赤は。バダップの血が、飛んだもの。彼が生きていた、その証明だ。

「もう…あの世界のあいつらに出逢う事は、無いんだろうな…」

僕達の未来は、あの世界に繋がらないんだから、と。どこか寂しそうに松野が言う。

彼らの話が正しいのであれば、フットボールフロンティアにオーガが介入した時点で平行世界は始まってしまっている。仮に今ここで自分が死んでも、あの世界のカノンは消滅しない。そして自分が長生きしたところで、あの世界のカノンに出逢う事はもう無いのだ。

それこそ彼らがまたこの時代のこの世界にタイムスリップしてこない限りは。

「…寂しいけど、それでいいのかもしれないわ」

夏未が静かに言葉を紡いだ。

「彼らの未来は、彼らだけのもの。それを知ったからといって、過去の私達が好き勝手にしていいものじゃない…。だから、歴史が変わらない事で…私達は自由でもあるんじゃないかしら」

「自由？」

「ええ」

聞き返す春奈に、彼女は続ける。

「彼らの未来が彼らだけのものであるように…私達の未来も私達だけのものだから。これから好きなだけ自由な未来を作っていけるって事よ。あの未来と同じ世界にするも、違う世界を作るも、私達次第なんだわ」

自分達、次第。

ひよっとしたら、と円堂は思う。

ひよっとしたら運命は、その為に自分達を巡り会わせたのかも知れないと。あの未来の全てを否定するつもりではない。だが平和憲法がなくなり、徴兵制が復活し、科学技術の進化と引き換えに大切なものを見失ってしまったあの世界が…自分達に一つの警鐘を鳴らしたのは事実だ。

その現実を受け入れつつも、どう立ち向かっていくか。それが自分達に課せられた大きな使命であり、課題であるのかもしれない。

「そうだ。変えたい運命があるならば――望んだ未来があるならば。全力で立ち向かっていくしかないのだ。オーガとイービル・ダイスがそうだったように。」

「…なあ鬼道」

「何だ？」

「フットボールフロンティアの決勝の後：お前言ったよな？カノンが本当に曾孫かどうか確かめるには、その時まで生きればいいって」

「…言ったが」

何が言いたいんだ、とゴッグルごしに瞳をぱちくりさせる鬼道。なんだか可愛い。

彼にしてみれば冗談半分だっただろう。八十年だ。あまりにも長い。生きていけば自分は九十四歳になっている。男性の平均寿命を思えば少々厳しい数字だろう。カノンが生まれる時までにしたって自分は八十歳まで頑張らなければならないわけ。

しかし、円堂はたった今決めてしまったのである。

「それ…真面目に目指してみようかなあ」

非現実的な未来を、現実に見せる、と。

「…この国がさ、戦争をやるような国になっちゃうのは…正直、嫌だ。変えられるものなら変えたいって思う。でも…それ以上に、俺」

思い出した、あの瞬間。冷たい汗が流れ、声が震えそうになった。でも円堂は、どうにか思い出してしまった恐怖と悲哀を振り解いて、決意を語った。

「いつか俺達の…未来に生まれてくるバダップ達が。幸せに生きて…ちゃんと大人になれる世界を、作りたい」

彼らがその華奢な手で冷たい銃を握り、血を浴びることなく。バダップがあんな風に、幼くして理不尽に命を奪われることのない…
- そんな未来を。

どんなに飾ってもこれは現実。自分達は結局、バダップを救えなかったのだ。彼の心は救えても、命は救えなかった。むざむざ目の前で死なせてしまった。たくさん仲間達に悲しい想いをさせてしまった。

あんな悲劇がもう起こらないように。自分達の未来では、起こる事のないように。

サッカーが幸せの魔法だと、皆が気付いてくれる世界が来るように。そうすればきっと、無為な争いは起こらずに済む筈だから。

「だからその時が来るのを…見届ける。生きてやるさ…2090年まで、いやもつと先まで！」

あまりにも途方もない未来だけれど。

言葉にすれば叶えられる気がした…なんて…言葉こそ人間が使える最大の魔法に違いないのだから。

「キャプテンが言うと…あながち洒落になりませんよね。マジで八十年後もピンピンしてそう」

宍戸が誉めてるんだか貶してるんだから分からない事を言う。おまけに周りの目金や小林まで納得したように頷きあっている。

ふと、円堂は思った。さっきまでいたカノン達の世界…そこにも当然平行世界の自分達が存在していて、その上であのような未来に辿り着いた訳だが。

あの世界での自分達は、一体どうだったんだろう。円堂はまだ生きていたのか - - まあ高い確率で亡くなっていたとは思いますが、それは何時だったのか。

そして結局自分達は何故、ヒビキがあそこまでサッカーを憎むようになったてしまったのか分からないはまだ。名前といい容姿といい、響木監督の血に連なる者ではるのはほぼ間違いはない。だから余計気になるのだ。響木がサッカーを愛しているのは周知の事実なのに、後世ではそれを覆してしまうような何かが起こるのか - - と。

いや、よそう。それはいくら考えてもどうしようもない事だ。まだ起きてもないし起きるかも分からない未来に悩んだところで手の打ちようはない。同じ未来は作らない - - 今まさにそう誓ったばかりではないか。

悲劇が起きるなら止めるまで。未来は白紙から自分達で作る - - 否、作らなくてはいけない。それは権利であり義務でもある。

幸いにも自分達は今日まで誰一人理不尽に欠ける事なく、幸せな日々を歩んでこれたのだから。

「…絶対に忘れないようにしよう。オーガの事、カノンの事、イービル・ダイスの事…未来の事」

鬼道が思いを噛み締めるように、言った。

「サッカーを楽しむ気持ちを忘れない限り…俺達はきつと幸せでいられる。いつか離れる時があっても、サッカーが俺達を繋いでくれる」

そう。サッカーが、自分達の絆だ。

今までも、そしてこれから。過去や未来さえ超えて繋がっている。

もう二度と会えないだろうミスストレ達とも、一生仲間でいられる。

願い続ける限り、ずっと。

「俺達はその気持ちを広めていけば…サッカーが悪とされる、そんな時代を迎えずに済む筈だ」

「お前にしてはフアンタジーな理論だな」

「かもな。でもフアンタジーも実現させてしまえば本物になる。そうだろ豪炎寺？」

「違うない」

鬼道と豪炎寺がくすくすと笑いあい…その身体が同時にふらついた。春奈と秋が慌てて二人に駆け寄って支える。いけない、彼らが重傷なのをすっかり忘れていた。

「ヤバイヤバイ！とりあえず病院！！」

「もう六時過ぎてるぞ…近くでやってるところあるか？」

「お前ら重傷だぞ！？救急車呼んでいいレベルだからな！？」

本人達が無駄に余裕ぶつくので（多分豪炎寺も鬼道も血が足らなくて頭がぼんやりしてきていると見える）、染岡がキレ気味に喚く。二十四時間救急に駆け込むかなあ、でも理由どうやって説明するかなあ、と悩む円堂。まさか未来でサッカーやってて怪我しましたというわけにもいかないし。

悶々としているうちに、ついに一之瀬がぶつ倒れた。

「きゃあ、一之瀬君！」

「か、川の向こうで死んだお祖母ちゃんが手を振って、る…」

「それ三途の川ー！！」

騒げるのもまた生きているからだ。円堂は心から思った。

今日という日を、忘れない。

もう二度と逢えない人達を、失った人を、そして彼らの想いを。

それから。

円堂がカノン達と逢う事は - - 無かった。

これから君達の身に、歴史に残る大きな事件が起こる - -。鬼道の子孫と思しきあの少年が言った事の意味はすぐに分かる事となった。悲劇は、鬼道達の怪我が治りきる前に降りかかってきたのだから。

中学校連続破壊事件 - - 後に語られる吉良事変である。

エイリア学園の力を前に、何度も敗北し、仲間を傷つけられ、誇りを奪われる事になる雷門イレブン。特に円堂が個人的にシヨックだったのは、助っ人で窮地を救ってくれたヒロトが敵として登場した事だった。

だが当然、このヒロトはあのヒロトではないし、それは後に彼とも仲間になれる事への布石でもある。迷いを振り切り、未来を信じ、円堂達は立ち向かった。立ち向かう事が出来た。何故ならば自分達は史実の雷門イレブンにはない力を持っているから。

それはオーガヤイービル・ダイスが教えてくれた事。世界を変える、強い願いの力だ。

それがある限り、イナズマイレブンの伝説が終わる事は無いのだろう。

一度だけ。カノンは円堂の家に、留守伝を入れた。

そのメッセージは以下のようにして締めくくられている。

『みんなのおかげで、俺達の世界も変わったよ！大丈夫。ミストレ達も元気に頑張ってる。逮捕されたヒビキ達も少しずつ前に向けて歩き出してる。もう誰も、サッカーが悪だなんて言わないよ。』

俺、曾祖父ちゃんに負けないからね！曾祖父ちゃんの作る未来よりずっとずっと素敵な世界にしてみせる。みんなが笑顔でサッカー出来る世界にさ！

だってサッカーは幸せになれる魔法なんだから！！』

【五十九：ブレイブ・ハート】（前書き）

コレ入れて残り三話となります（意外とある？）。もう少しだけお付き合い頂ければ幸いです。

【五十九：ブレイブ・ハート】

- 2091年

天気予報は悉く当たらない。それがあの予報士がいい加減なのかはたまた最近の天気が読みにくいのかは分からないけれど。

昨日の雨が嘘のような青空。雲の割合が空の二割以下ならば快晴と呼ぶ - - であつた筈なので、今日のような日を人は快晴と呼ぶだろう。ベタつきの残らない、実に気持ちの良い午後だ。気温も丁度いい。

今は青々としている桜の並木道を通り、その奥に広がる敷地へと少年は足を進める。ある種整然とした石が並ぶ空間 - - 墓地。その一つの前に彼、ミストレーネ・カルスは立つ。つい癖でピシリと背筋を伸ばそうとして - - 左足に力が入らず、ふらついた。

「おっと…！」

なんとか持ち直し、墓石に手をつくのだけは免れる。ざまあないつたら。自嘲し、ミストレは改めて手を合わせた。

「君の前で無様なところは見せたくなかつたんだけどなあ…バダップ」

墓参りの際の、昔ながらの習慣はまだこの国にも残っている。だが、ミストレは軍以外での形式ばった作業が嫌いなクチだった。バダップもそんなミストレをよく知っていたし、気にする質でもないだろう。それでも適当に水をかけ、適当に花を添える事はする。

これでも彼はそれなりに敬意を払うべき相手だ - - 形だけとはいえ上官だったのだから。

「もうちょっと早く来るつもりだったんだけどね。ま…いろいろあった」

本当に色々な事があった。良い事も、悪い事も。ミストレは追憶するように瞼を閉じる。

「あれからもう一年…か」

雷門とオーガの混成チームと、イービル・ダイスの一戦。その試合を契機に起こった大規模な騒動から丸一年が経過していた。あっという間の一年だ。それだけ苦労が多かったともいえる。

あの日。円堂達を逃がした後。自分達はヒビキ提督達とドンパチして - - 長く防戦したものの、最後は力尽きて倒れた。瀕死の重傷だ。正直死んだと思っただし、それから暫くの記憶がミストレにはない。

気がついた時は病院のベッドの上で、件の日から一週間も経過していた。

「あの子の事…君は知らないだろうから教えてあげる。まあオレも、半分以上人から聞いた話なんだけどね」

あの試合を、ヒビキ達は全国ネットに流していた。全てはサッカーを潰す為。八十年経った今でも尚伝説に等しい雷門イレブンがイービル・ダイスに敗北し、絶望にひれ伏す様を国中に見せる為。そうする事で全国のサッカー愛好家達の心を挫くのが狙いであった。

だが結果的に雷門は絶望に屈する事なく - - 自らの闇の姿そのものであるイービル・ダイスを乗り越え、打ち破った。そしてイービル・ダイスですら救ってみせた。ヒビキには計算外 - - そればかりか逆効果となった訳である。なんせ雷門の姿は国中のサッカー少年

達絶望どころか希望を与えたのだから。ネット中継が完全に裏目に出たのである。

そして、具体的に何が起きたかという点。

サッカーを否定するな、サッカーを壊すな、ヒビキを逮捕しろ - そんな風潮が広まり、大規模なデモ運動が始まった。中でも過激な連中が王牙学園まで押し寄せ、最終的には力づくで地下修練場まで突破してきたのである。まったく凄いというか恐ろしいというか。しかしそのおかげで自分達は助かったのだ。雷門と共にヒビキに立ち向かったオーガを、サッカーファン達は半ば英雄視した。瀕死で倒れていた自分達を解放し、病院まで運んでくれたのである。

バダップ・スリートの殺害とミストレ達の殺害未遂。今やタブーとなった歴史干渉を犯し、王牙学園の子供達に不当な労働（オペレーション・サンダーブレイク及びオペレーション・シルバードレット）が明るみに出た事が大きいを強いていたとして。ヒビキとバウゼン、さらに軍上層部数名が現行犯逮捕された。何故だか彼らは警察に対しては抵抗しなかったという。殺人及び殺人未遂、労働基準法違反及び時間旅行治安維持法違反。その他諸々の罪状がある。裁判はまだ続いているが、彼らは当分シャバには出てこれなくなるだろう。

だが彼らが捕まったからといって、それで全てが終わった訳ではない。寧ろあの一件 - 後に称される“王牙革命”は、全ての始まりだったと言っている。あの事件を契機に、この国とこの国のサッカーに革命の風が吹き荒れたのだ。

大規模デモなんて大人しいもの。中には公的機関との武力衝突やテロ紛いの事件も起きた。サッカーを愛する者達の鬱憤が爆発したと同時に、サッカーを否定しヒビキ釈放を求める者達も少なからずいた為である。それは主にヒビキと同年代以上の、吉良事変やエイリア模倣テロの被害に遭ったりその親族だったりした者達だった。

「ヒビキ提督は、言ったらしいよ」

「チームオーガ。彼らは我々の長い人生の中でも間違いない、最も優秀な精鋭部隊だった。特にバダップ・スリード。彼は天才で…とても優しい子だった」

「オレには最後まで…提督の考えが分からなかったけど」

「私が憎んだのはあくまでサッカーであり、あの子では無かった。あの子達には何の罪も無かったのに、私はあの子を殺した」

「…正直あの人の事を、オレは一生赦せないだろうけど」

「もはや後悔さえ赦されない事だ。それに私は私の全てが間違っていたとは思わない。だが…もし彼らと別の出会い方をしていれば。こんな時代でなければ」

「あの人もあの人なりに…悩み抜いて、何かを守ろうとしていたのかも…しれない」

「本物の仲間になれたかもしれない。心から、そう思う」

今更どうしようもない事もある。動けないベッドの上。様々な現実を思い知り、ミストレは子供のように泣きじゃくった。何を後悔すべきか、すべきでないのかも分からなかった。自分達は精一杯戦ったつもりだ。信念を貫いたつもりだ。それでも…護れなかったものも、あったのだから。

民間人達が駆けつけた時にはとうにバダップは息がなく。蘇生も試みても無駄に終わったと聞かされた。覚悟していた事だ。今の技術でも、心臓を撃たれた人間を生き返らせるのは並大抵の事ではない。

さらにミストレ達が失ったのはバダップだけではなかった。あの戦闘で負った傷 - - 重傷の身体で無理矢理動き続けたのも良くなかったようだ - - が原因で。ミストレを含めたオーガの何人かは、重い後遺症が残った。

ミストレの左足は半ば麻痺して、前のように自由には動かない。それでも撃たれて脊髄損傷した事を考えれば、この程度で済んだのが奇跡だろう。最新医療に感謝しなくてはならない。

また、腎臓にもダメージが大きく、一生人工透析のお世話にならなくてはならないかもしれないそうだ。これではとても前線で戦える筈がなく。今は通信士として軍で働いている。こんな身体でも必要としてくれるなら有り難い事だ。

「…ボロボロだけどさ…オレも、みんなも、この国も」

空を仰ぎ、咳く。

「でも…生きてる。自分の足で立って、前に進んでる」

たくさんの犠牲があった。たくさん血が流された。大きなテロもあったし、経済も混乱を極めた。だが一年かけて - - それらも漸く落ち着きを見せ始めている。エレメンタルサッカーの競技人口は増え、多くの者達が皆に希望を与えようと奔走している。

この国の民に笑顔を齎す為に。

サッカーが幸せの魔法である事を示す為に。

「…そうだ。オレ、CD出したんだよ。バダップが作った曲でさ」

それは - - バダップの遺品を整理していた時、見つけたものだった。五線譜と歌詞カード。そしてMIDIを入れたUSBメモリ。多分、あの出兵の前にバダップが作っていったものなのだろう。

歌詞を見たミストレは泣いて - - 決意したのだった。彼の想いを、
彼が生きた証を、この国の歴史に残したいと。

「あんま、上手に歌えなかったけど。良かったら…聴いてっよ」

ミストレは小型スピーカーのスイッチを入れる。

オルゴールから始まる切ないメロディーが、緩やかに墓地へと流
れ出していった - -。

- - - - -

B r a v e h e a r t

作詞作曲：煌はじめ

v o c a l : 鏡音リン

人も神も食らえる程の

心無い鬼になってしまえばいい

言い聞かせながら僕等は

月日と共に屍を積み上げてきた

上司<オトナ>の引いたレールの上で 走るのは楽な事だった

いつも

善悪論なんて考えたら

立ち止まってしまおうと分かっていたから だけど

敗北という名の死が墮ちる(墮ちていく)

歴史は僕等を拒絶して(否定して)

思い知ったんだ
僕等はずっと怯え続けていた事を

諦めなければ打ち破れる

絶望も在る筈さと

君は示して傷だらけの笑顔で

その手を差しだしてきました

忘れていたのは闘う勇氣

大丈夫だなんて未だ言えないけど

傍に立つ死神も振り切つて

生きていける可能性があるなら

“ 呪いにかけられるなかれ

かの者こそ悪の魔術師なのだから ”

押し付けられた誰かの事実<フェイク>

疑う事は赦されていなかった

世界<ダレカ>の決めた命令通り

流されるのは楽な事だったから ずっと

それでも正義の味方なんて

気取るにはこの手は汚れすぎていたんだ そして

終焉という名の笛が鳴る（ホイッスル）

歴史の道は揺らぐ事なく（変わらずに）

思い知ったんだ

僕等は痛みが理由が欲しかっただけと

諦めなければ打ち壊せるさ

どんな悲しい運命ですら

君の差し出した手に触れる前に

現実はまだ引き裂くけれど

覚えていたのは一つの絆
明日が在る保障なんてない
それでも立ち向かってみたいんだ
未だ僕も幸せになれるのなら

諦めなければ打ち破れる

絶望もきつと在るさと

君は示して傷だらけの笑顔で その手を差しだしてきました
忘れていたのは闘う勇氣

大丈夫だなんて未だ言えないけど
傍に立つ死神も振り切って

生きていける可能性があるのなら

もし最期だとしても僕は

一秒でも長く誇り続けたい

(出展：ニコニコ動画 オーガ学園でオリジナル曲「Brave
heart」
http://www.nicovideo.
jp/watch/nm15510070)

- - - - -

「さてと…俺も、そろそろ行かないと」

ちらりと見た先、道路の向こうでエスカバが手を振っているのが
見えた。彼も今日は非番だ。墓参り来るのは当然の流れだろう。

そのエスカバは、一年前のあの戦闘で左足と右腕に甚大な傷を負
った。左足は回復したものの右腕は結局切断せざるをえなくなり -

「今の彼は右腕を義手に変えている。だが、ちゃんと生き残り、自分の生きるべき道を見つけた。バダップが、円堂達が守ってくれた未来の中で。」

「もう一人の墓参りも、行かないとね」

自分達の世界の円堂守は、十年前に亡くなっていたが。あの世界の円堂や『エンドウ』は、果たしてどうなるだろうか。ちゃっかり2091年も生きてるような気がする。

「負けないからね、円堂」

彼らの作る未来に負けないように。

ミストレは歩き出した。来年また元気な姿で、この場所に来る為に。

主題歌『Brave heart』（前書き）

こちらは、ブレイブ・ハートの主題歌歌詞となります。本文中でも出てますが一応改めて掲載をば。

ちなみにこれも煌はじめが“はじめアキラ”名義で制作し、ニコニコ動画にてアップしてあります。よって歌詞の著作権は煌はじめにあります。テンポアップって面倒くさい&音がバラけた&鏡音姉弟に反抗された一曲であります。

もし気になるという方は、ニコニコ動画の“オーガ学園でオリジナル曲『Brave heart（鏡音リン&鏡音レン）』”
<http://www.nicovideo.jp/watch/nm15510070>”に飛んで聞いてやって下さいませ…！

主題歌『Brave heart』

Brave heart

作詞作曲：煌はじめ

歌唱：鏡音リン

コーラス：鏡音レン

人も神も食らえる程の
心無い鬼になつてしまえばいい
言い聞かせながら僕等は
月日と共に屍を積み上げてきた
上司<オトナ>の引いたレールの上で
走るのは楽な事だった いつも
善悪論なんて考えたら
立ち止まってしまうと分かっていたから だけど

敗北という名の死が墮ちる（墮ちていく）
歴史は僕等を拒絶して（否定して）
思い知つたんだ 僕等はずっと怯え続けていた事を

諦めなければ打ち破れる

絶望も在る筈さと

君は示して傷だらけの笑顔で
その手を差しだしてきました

忘れていたのは闘う勇氣

大丈夫だなんて未だ言えないけど
傍に立つ死神も振り切って

生きていける可能性があるなら

“呪いにかけるられるなかれ
かの者こそ悪の魔術師なのだから”
押し付けられた誰かの事実<フエイク>
疑う事は赦されていなかった
世界<ダレカ>の決めた命令通り
流されるのは楽な事だったから ずっと
それでも正義の味方なんて
気取るにはこの手は汚れすぎていたんだ そして

終焉という名の笛が鳴る（ホイッスル）
歴史の道は揺らぐ事なく（変わらずに）
思い知ったんだ 僕等は痛みが欲しかっただけと

諦めなければ打ち壊せるさ
どんな悲しい運命ですら
君の差し出した手に触れる前にまた
現実には僕等引き裂くけど
覚えていたのは一つの絆
明日が在る保障なんてない
それでも立ち向かってみたいんだ
未だ僕も幸せになれるのならば

諦めなければ打ち破れる
絶望も在る筈さと
君は示して傷だらけの笑顔で
その手を差しだしてきました
忘れていたのは闘う勇氣
大丈夫 未だ歩ける

傍に立つ死神さえ今振り切り
生きていける可能性があるのなら

もし最期だとしても僕は
一秒でも長く誇り続けたい

(出展：ニコニコ動画 オーガ学園でオリジナル曲「Brave
heart」
http://www.nicovideo.
jp/watch/nm15510070)

【六十：クリア・マインド】

- - 西暦2012年、とある世界。

駅前の噴水広場前。

待ち合わせまであと十五分ある。彼は真面目だから、きつと五分前までには来るだろう。そう思いつつ、長い赤髪の少女 - - 『ヒロト』は腕時計を見た。

「お母さん、お母さん」

不意に服の裾を引っ張られ、少女は目線を下に向ける。七歳と五歳になる二人の愛息子が、何やらニコニコしながらこちらを見ている。長男が口を開いた。

「どうしたの？ 凄く楽しそう！」

ああ、そうかもしれない。これから会う相手は、その実今『ヒロト』が“付き合っている”人物だ。息子達とも面識がある。所謂結婚を前提に - - の交際だが、残念ながら自分も相手もまだ結婚のできる年ではない。それでも、こうして逢えるだけで『ヒロト』は幸せだった。

昔を思うと不思議に感じる。自分は彼に半ば一方的に嫌われていた筈だ。大好きな“お父様”の寵愛を得たかったのは、お日様園にいた全員に共通している。カラダを使って父に取り入った小娘 - - 『ヒロト』をそう言って蔑んでいたのは、大人達だけではない。

しかし - - 吉良星二郎が逮捕されてエイリア学園がなくなり。イ

「ビル・ダイスとして雷門と戦って……それを契機に、少しずつ世界は変わっていったのだ。」

彼を含め疎遠だったお日様園の元メンバーとも連絡を取り合うようになり。翌年行われた第二回FFIでは、彼らとも笑ってサッカ―が出来るようになった（第二回以降はルール改正され、女子参加も可能となったのである）。

そして……時々直接会うようになって。『ヒロト』は勇気を出して、自分から告白したのだ。実は昔からずっと憧れだった彼。自分の目標だった彼。嫌っていただろうに、一番辛い時は傍にいてくれた彼に。

それで、今に至るのである。『ヒロト』の告白を聞いた彼の最初の言葉は、「アホか」だった。「普通プロポーズは男からするってのに、先に言いやがって」と。まったく毒舌な彼らしい。

「ふふっ……」

思い出して、『ヒロト』は笑みを浮かべた。

「大好きな人に逢うのに、嬉しくないわけじゃないか」

吉良ヒロトに似せようと、短めにしていた髪も伸ばした。痩せぎすな体型はどうしようもないけれど、化粧もして、少しは女らしい格好をしようと決めた。

彼が買ってくれた白いワンピースを着てみた。こんな可愛いのは似合わないと思ったけれど。

自分今、幸せだ。

「ヤバイ……ヤバイよ数学……」

そんな時、聞き覚えのある話し声が聞こえた。学生服姿の高校生

が三人、こちらに歩いてきている。

「微積死んだ。死亡フラグ立った。これ赤点だったら追認受けなきゃいけないのに…っ！」

「君が悪いよ。勉強サボってサッカーばかりやってるから」

「まさにサッカーバカ、だな」

「うっさい！大体二人もサッカーやってたのに、何でそんな余裕なんだよ！」

「そりゃ授業はちゃんと聞いてたもの」

「普通の復習予習を怠らなければなんとかなる」

「ちつくしょー！一年で留年とかマジ洒落にならな…」

そこまできて彼らは、こちらの視線に気付いたようだ。うち一人、銀髪の少年が目を丸くしてこちらを見た。

「わっ…もしかして『ヒロト』!?!」

「久しぶりだね、『フブキ』君。あと、『エンドウ』君と『ゴウエンジン』君も」

何やら『フブキ』は目を輝かせ、『エンドウ』と『ゴウエンジン』はポカンとした表情でこちらを見ている。何やら気恥ずかしくなった。やはり、この格好はおかしいんじゃないだろうか。

「凄い凄い！『ヒロト』可愛くなってるじゃん！！髪伸ばしたんだね…！」

意に反して、『フブキ』は目をキラキラさせて言った。思わず顔を赤らめて俯く『ヒロト』。

「そ、そうかな…。ありがと」

「うんうん。前よりずっとその方がいいよ！誰かと待ち合わせ？もしかして彼氏？」

「相変わらず鋭いなあ…君は」

その『フブキ』も、かつてと比べると随分変わった。彼とは比較的頻繁に連絡を取り合っていたが、直接逢ったのは久しぶりだ。障

害を乗り越え、人格統合を果たせたというのは聞いていたけれど。こんなによく笑うようになったなんて・・・本当に嬉しい。

『フブキ』にからかわれ、からかいながら喋っていると、『ゴウエンジ』が声をかけてきた。

「明るくなつたな、『ヒロト』」

綺麗な笑み・・・女の子なら思わず目眩がしてしまいそうな声で言われて、『ヒロト』は顔が熱くのを感じた。彼ら三人が同じ高校に進学したのは知っている。きっと高校でも『ゴウエンジ』のモチッぷりは凄いだらう。

「・・・『ヒロト』」

その時、『エンドウ』が。

「ずっと・・・逢って言わなくちゃって思ってた。・・・今まで、ごめん。本当に・・・ごめん」

後悔に満ちた顔で頭を下げられ、驚く。彼が言っているのが二年前までの暴力や暴言に対する事なのは分かるけれど。手紙では何度も謝って貰っているし、自分もとくに許した事だ。

何よりあの頃は・・・どこまでも周囲を苛つかせる自分の態度にも問題があったと思っっている。

「・・・じゃあ『エンドウ』君。許してあげる代わりに、一つ頼み事聞いて貰える？」

普通に“赦す”と言ってもきつと彼は聞かないから。『ヒロト』はわざと冗談めかして言った。

「俺達とサッカーしてよ！カレもお日様園のみんなも、君達とまた試合したいってうずうずしてるんだから！！」

「え、ママサッカーするの！？」

「ボクもやりたい！！ボクも！！！！」

「はいはい」

サッカー、と聞いた途端、大人しくしていた長男と次男が騒ぎ始めた。『ヒロト』は苦笑する。自分に似てこの子達もとんだサッカーバカになってしまったものだ。

「：分かった！受けて立つぜ『ヒロト』！」

「キャプテンは試験が終わってからね。数学だけじゃなくて世界史と古文も死んでるんだから」

「だあぁっ！！！！」

『フブキ』の的確なツツコミに脱力する『エンドウ』。『ゴウエンジ』はくすくすと笑っている。

そんな時、『ヒロト』の聴覚に聞き慣れた足音が聞こえた。そう、愛とは偉大なもので、足音だけで彼だと分かるようになってしまったのだ。『ヒロト』は顔を輝かせて、歩道橋の方から歩いてくる人物に手を振った。

「玲〜！こっちこっち！！！！」

大好きな大好きな青髪の少年。かつて『ウルビダ』と呼ばれていた彼が、こちらに走ってくる。

そしてこの世界の未来でも、また。

- 西暦2082年。

暖かな春の日差しを浴びて、老人と子供は歩く。満開の桜がはらはらの花びらを散らす並木道は絶景で、見ているだけで幸せな気持ちになる。ましてや、愛しい曾孫と一緒になら尚更だ。

老人 - 円堂守は八十六歳になっていた。あの運命の決戦から、七十二年。なんだかんだでまだ自分は生きている。後輩の何人かはまだ存命だが、同輩以上の者達は皆円堂より先に逝った。その中には悲しい事に、大人になる事さえ叶わなかった者もいる。

「カノン」

中学、高校、大学、プロ。かつてGKを務めた頑強な手は皺だらけになり、随分やせ衰えてしまった。それでも八十六歳にはとても見えないと驚かれるくらいには元気で、妻と隠居した後も頻繁に曾孫を連れて散歩に出かける。うっかり昔のようにサッカーに興じようととして転び、手首を捻挫した時は妻にこっぴどく叱られたものだ。幾つになっても自分はサッカーバカなまま。それは曾孫の代までしっかり受け継がれてしまっている。

「手、離すなよ。この道は車の通りが激しいからな」

「はい」

ボールをだっこして、六歳のカノンは良い子の返事をする。

七十二年前 - 平行世界の曾孫は、自分達の前に現れた。自分も十四、彼も十四。疑っていたわけではないがとても彼を曾孫とは思

えず、長く実感が沸かなかつたのも事実である。そう、孫夫婦が生まれた息子に“カノン”と名付けるまでは。

未来は確かに、現実になった。寿命を考えれば生きてるかどうかすら怪しい未来だった今に、自分はどうか生き延びて此処にいる時に仲間を失いながらも。

あと八年生きれば、カノンはきっと自分が出会った彼と同じ姿になるのだろう。無論、此処にいるカノンとあの彼は同じ魂を持った別の存在なのだけど。

- - 人生で八十六回目の春：か。

我ながらしぶといものだ、と苦笑する円堂。こんな風に思う時点で、年をとった証拠だ。思考までジジむさくなったら終わりだよ、と妻に呆れられたのを思い出す。

変わった事と、変わらなかつた事があるのだろう。

この世界では、日本という国が平和憲法を捨てる事はなかつた。少なくとも今日までは、日本が持つ軍隊は自衛隊だけである。その代わり彼らの世界と比べるとやや科学技術は遅れているかもしれない。ソーラーカーはまだ一般的には普及していない。

吉良事変。FFI。エイリアを模したテロ犯罪。フィフスセクターの支配体制。サッカーによる格差社会。それらを打ち破った、円堂の教え子達 - - 神童拓人率いる三代目イナズマイレブン。

様々な出来事があった。時に払われた犠牲もあつた。だがその果てに今築かれた新たなサッカー、エレメンタルサッカーはこの国の希望となり、人々に愛され続けている。サッカーが悪だと主張する人間は、少なくとも表だってはいない。

- - 何が正しいのかなんて、今でも分からないけれど。

目的地の公園を目指し、歩いていく途中。不意にボールを追いか

けて、歩道に走り出してきた子供がいた。円堂はその子を見て目を見開き――やがて静かに微笑んだ。

「でもきつと、間違ってなかった。

「どうぞ」

円堂はボールを拾い、少年に向けて差し出す。カノンと同じくらの年の、銀髪に褐色の肌の少年。人目見て、彼だと分かった。いつかきつと逢えるだろうと思っていたから、そこまで驚く事もなかった。

「ありがとうございます」

少年は礼儀正しく、お辞儀をした。この年からマナーがしっかりしており、生真面目なあたりが彼らしい。

「バダップ」

円堂が名を呼ぶと、少年はびっくりして目を丸くした。構わず、円堂は続ける。声が震えてしまう――静かで激しい、歓喜のせいで。

「久し振り。生まれてきてくれて、ありがとう」

向こうから少年を呼ぶ声がする。数人の友人達――その中には、緩くお下げを揺った女の子のように可愛い顔立ちの少年や、褐色肌に三白眼の少年もいた。

彼らは軍人としてじゃなく、こうして子供らしく――サッカーで遊べる場所に、生まれてきてくれた。きつと、未来は変わるだろう。彼らが戦場に行く事も、幼くして命を失う事もない未来へと。

「なあ、バダップ。君はサッカーが好きか？」

少年・・・バダップはその問いに、少しだけ戸惑って・・・やがて愛らしく笑った。

「はい。サッカー、大好きです！！」

「はは、俺もだ。・・・もしよかったらさ」

願わくば。

この笑顔がもう、奪われる事のないように。

「サッカー、やろうぜ。みんなで」

サッカーがいつまでも、幸せの魔法であり続けるように。

【終・ピース、メイカー】

西暦2098年。それは長い戦乱の時代に明け暮れたその国の朝が、漸く開けた年であった。

旧・憲法第九条の復活。戦争放棄と銃刀法の再制定。まだまだ全てが解決するには時間がかかるだろうが、漸く国は“日本”であった頃の誇りと平和を取り戻そうとしている。

その功労者として語るには、四代目イナズマイレブンの存在が欠かせないだろう。彼らは三代目までのように、自らその名を名乗ったわけでもなければ雷門中の卒業生でも無かったが。知る人ぞ知る者達は、たった十人しかないそのチームをそう呼んでいた。

彼らの試合が公式で行われた事は一度とてない。しかしたった一度、八年前に全国中継されたその試合は、多くのサッカーファン達にとって伝説だった。かつてサッカーの歴史を塗り替えた、イナズマイレブン達と同じくらいに。

そのリーダーシップをとった青年――ミストレーネ「カルス」。

彼は特に有名人である。重い障害を持つ身でありながら王牙学園を主席で卒業し、軍の通信士として活躍。その後衆議院議員となり、一年前には弱冠二十一歳にして過去最年少総理大臣となった（この国では二十歳から衆議院議員立候補が可能である）。

また、彼が少年期に出したCDも知らない者はないだろう。それは亡き彼の盟友が作った歌であり、絶望の時代に立ち向かう者の歌でもあった。総理になって尚ミストレーネは言ったという。今も昔も我々チーム・オーガのキャプテンは彼一人だ、と。

そのミストレーネは、今年の元旦。演説の席にて、テロリストの手により暗殺され、短い生涯を終えている。

どちらにせよ、重い病を患い、あと半年の命と宣告されていたらしい。だが彼は最期まで弱音を吐く事なく政治の世界に立ち続け、平和の為に尽くした。戦乱の時代、先に失った仲間達や、死んだ盟友の分まで命を燃やすかのように。

ここに、彼が遺した一枚の手紙がある。彼の人生を記録した長い長い手記の最終項に挟まっていたものだ。やや支離滅裂で乱れた字なのは、病で手の自由がきかなかつたせいだ。それでも何か胸に迫るものがある。

ミストレーネは己の死期を悟っていたに違いない。それは彼が天国にいる盟友と、これをいずれ読むであろう第三者に向けてあてたメッセージであった。

- - - - -

ねえバダップ。最期に君に、訊きたい事があるんだ。

何かは変わったかも、なんて。今更遅いのだとしても。

後悔だつて無意味じゃないって、君はきつとそう云うんだろう。

どんな小さな事も明日への糧になる、彼にそう、教えられたもんね。

未来を諦めなければ、どんなコトも力になる。あの日僕等はそう、学んだ。

この世界は絶望だらけかもしれない。美しいとは言えないかもし

れない。

それでもオレ達は、美しいモノもあると信じて今を生きていく。逃げる事や泣く事は弱さだと思ってた。だからずっと自分を殺してきたけど。

一生に一度も逃げないで、強くなれた人間なんかいない。当たり前だよ。

何度も転んで、もう一回、もう一回、次こそはって手を伸ばして傷だらけになった先で掴んだ未来にこそ、きっと価値はあるんだろ。

昔聞いた言葉がある。世界で一番貴いのは、負けない強さじゃないと。

何度負けても立ち上がる強さ。それに勝る力はないと。

数多の試練を乗り越えたと思っただ先、待っていたのがあまりに悲劇的な結末でも。

その上で今、君に問いたい。

君は、今日まで幸せでしたか？

後悔は、無いのですか？

未練は、ありませんか？

そして今、空の向こうで笑っていてくれますか？

あの頃見えなかった事が、漸く見えるようになった気がするのです。

オレ達の世界はとても狭いものだった。

まるで鳥籠のように閉じた世界だ。

何が正しいのかなんて分からず、ただ流されるままに生きてきた。大人の引いたレールの上を走り続けるのは楽な事だった、いつだって。

そんなつもりで生きてきたワケじゃないけど、きつとそう。

オレ達は無意識に自分で考える事を放棄してきたんだろう。信じてきたものが間違ってるかもしれない、なんて。そう仮定するのはとても、とても怖い事だったから。だけどそれって、とてもみつともなくて情けないこと。逃避は時に必要かもしれないけど、それは本当にただ逃げてるってこと。

円堂守。彼に出会ってオレ達の現実は崩れ落ちた。そして目の当たりにさせられたんだ。オレ達が逃げ続けてきた問題から。

今でも歴史の全てに責任が無かったとは思わなければ、でも。歴史に全ての責任を押し付けて、楽しよつたつて虫が良すぎるでしょう？

幸い、オレ達の世界はまだ終わっちゃいない。破滅の未来なんかじゃない。まだまだ取り返しがつく。

何より今、オレ達は生きている。君のいなくなった世界にも、また朝は来るから。自分の脚で歩いていく。たとえもう、この身体が動かなくなっても。

心までは折られはしない。オレ達はオレ達の誇りを忘れない。

大切なのは諦めない心。

そして戦う勇氣。”

それがあれば世界はいくらでも変えていける。今までも、これからも。

今、この手紙を読んでいる貴方へ。

これが僕等の物語。そして彼が生き抜いた、その歴史。
僕等の夜は未だ明けていない。もしかしたら、貴方の夜もそうか
もしれない。

ガンバレだなんて無責任なコトバは言わない。

だって生きてるってコトはそれだけで、頑張ってるって事だから。
そして諦めるなって言葉の代わりに、僕は言おう。

諦める必要は無いんだ、と。

どんな人だって、幸せになれる権利と力を持って生まれてきたん
だ。

綺麗なだけの言葉と言うかもしれないけれど、僕等は彼の言葉で
救われた。

どうか自分に、価値が無いだなんて思わないで。

僕等は自分を愛し、他人を愛し、そして誰かに愛される為に此処
にいる。

僕等の世界が僕等の為にあるように、貴方の世界は貴方の為にあ
る。

願い続ければ、望みは叶う可能性はゼロじゃない。確実に道は繋
がっていくから。

最期に一つだけ、お願いがあります。

あとどれだけ生きれるか分からない私の代わりに、どうか。

忘れないで下さい。彼が、彼らが生きた証を。その物語を。

勇者の心は、一人でも覚えていてくれる限り、受け継がれていく。
けして死ぬ事はないのです。だから、私は最期まで祈り続けます。

ブレイブ・ハート。戦士よ、誇り高くあれ。
世界もまた、誇りを持った戦士でありますように。

- チーム・オーガ副隊長 ミストレーネ Ⅱ カルス

後書き

まずはこの小説を読んで下さった全ての方にお礼申し上げます。
ブレイブ・ハート（戦士よ、誇り高くあれ）。ここまで長くなる事などまったく想定していませんでした。序話と終話を含めると六十二話。読んで下さったみなさま、本当にお疲れ様でした（滝汗）
いくらなんでも長すぎです（白翼シリーズと比較しちやいけません、あれはもはや論外）。何でこんな事になったのか。最大の原因はイービル・ダイスにあるでしょう。

最初はイービル・ダイスを登場させる気もなければ、サッカーの試合を組む気さえ全くありませんでした。イナズマイレブンという版權を元にはしてませんが、ある種軍事的な、全く別モノを書いてみようという魂胆だったので。しかしながら、どうやら私も円堂さんの「サッカーやろうぜ！」にあてられた一人だったようです。バダップを救済するのに、他に良策はなく、また、オリジナルの敵チームは絶対に出したくなかったため、別ネタでとっておいた「異世界の闇堕ち雷門」に登場頂く流れてなりました。

正直、イービル・ダイスの設定には賛否両論あると思います。しかし結果的に彼らを登場させて良かったのかなと。円堂さんの力を分かりやすい形で示す事ができたので（笑）

今回テーマにしたのは三つ。“誰でも幸せになる権利がある”。“時として言葉の力は魔法にも匹敵するほど絶対である”。そして、言葉一つで変わる世界がある反面、“時にはどんなに頑張っても変えられない結末もある”ということ。

バダップの死は執筆前から決めていた事でした。諦めない事でもんな困難も打ち破ってきた円堂ですが、たった一つだけ、バダップの命だけは救えなかった。救えないものもあると知った。これもまた今後の彼にとって意味のある経験である筈です。作中でも語りましたが、越えられない絶望を経験する事で、人は絶望の乗り越え方

を学ぶものなのですから。

と、何やら偉そうに語ってすみません。他にも数多くのイナズマイレブンの神作品が並ぶ『小説家になろう』にて、悲惨極まりない文章力でジャンルを汚さないかと心配だったのですが。予想を遙かに超えるたくさんの方々に読んで頂けて、本当喜ばしく思います。感謝の言葉もありません。当初続編を書く予定はありませんでしたが、希望して下さる方もいるとの事で、現在検討中です。

長々とすみません。それではこのへんで失礼を。

この小説から、貴方の心に何か残るものがあれば幸いです。

煌はじめ 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3353q/>

ブレイブ・ハート～戦士よ、誇り高くあれ～

2011年10月17日01時57分発行